



* 0047971000 *

0047971-000

特238-361

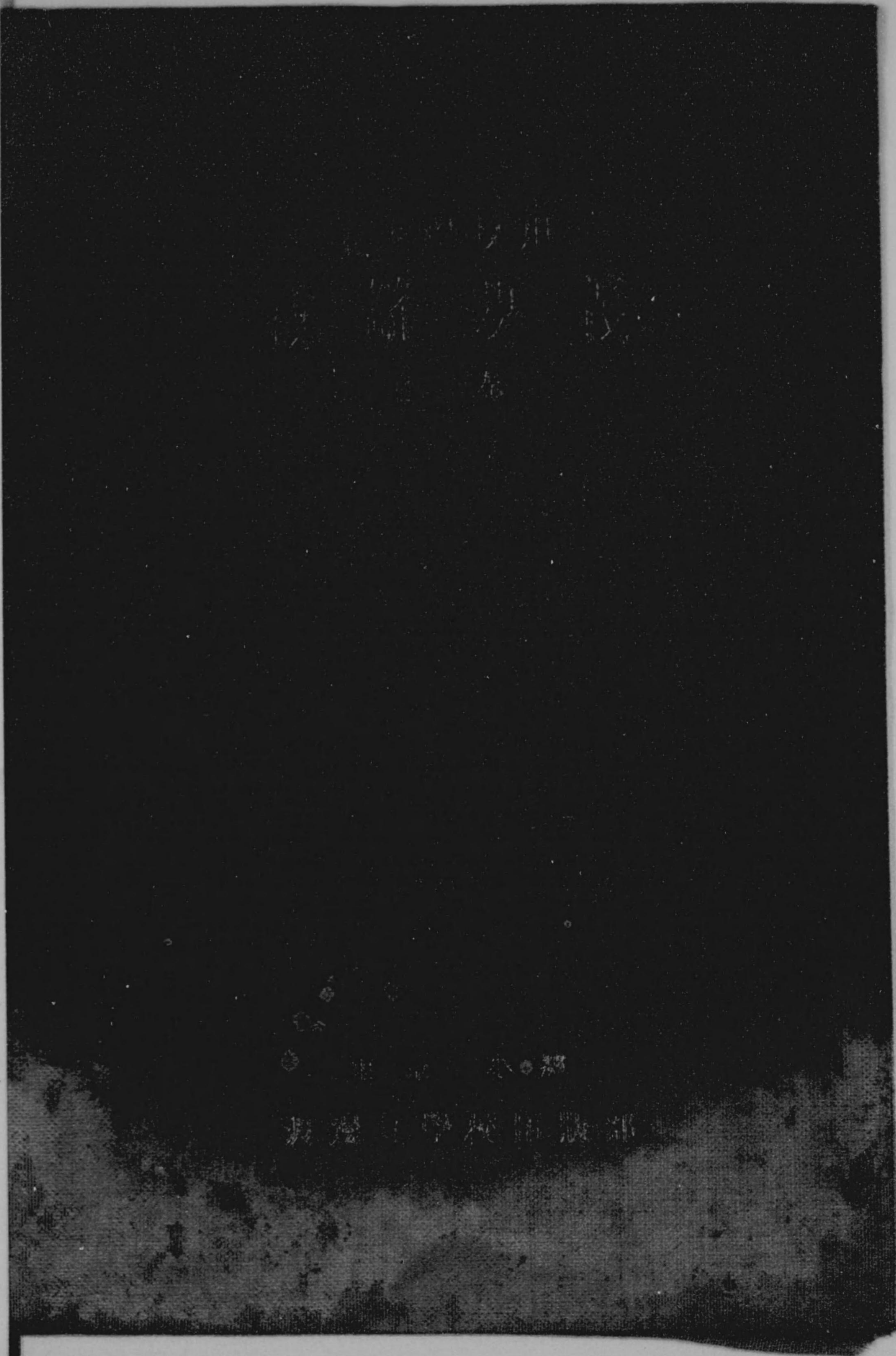
裁縫要義

渡辺女学校・東京女子専門学校裁縫研究会・
著
渡辺女学校出版部

上巻

昭和12

AHH



新編
漢學要義

第一卷

漢學要義

373
427

特238
361



東京 本郷
渡邊女學校出版部



緒 言

中等教育新裁縫教科書は大正十二年の大震災直後に大急ぎで編纂したもので自ら甚不満足であつた。それ故に爾來研究に研究を續け特に二年前からは編纂委員會を設けて慎重に審議し、此程漸く脱稿したのである。

特に意を用ひたのは用語用字の正確な事である。あて字や國語教授と矛盾するやうな文字用語は全然用ひてない。本書は四ヶ年制の實業學校用として編纂したものであるが同時に高等女學校生徒の参考書としても適當と信ずる。

昭和十二年六月一日

渡 邊 滋

中等學校用

裁縫要義

上卷目次

第一章	裁縫用具	(1)
第二章	基礎技術	(4)
第三章	大裁女物單衣	(18)
第四章	大裁男物單衣	(40)
第五章	單衣上仕立	(47)
第六章	大裁女物袷長着	(54)
第七章	大裁男物袷長着	(70)
第八章	中裁單衣	(76)
第九章	小裁單衣	(88)
第十章	中裁袷	(96)
第十一章	小裁綿入	(101)
第十二章	女物袷長襦袢	(111)
第十三章	男物袷長襦袢	(126)
第十四章	腹合帶	(128)
第十五章	名古屋帶	(135)
第十六章	丸帶	(141)
第十七章	補綴	(144)

第一章

裁縫用具

針・針指・鋏・箆・針箱・物指・裁板・霧吹き・鋲・アイロン・鋲板
仕上臺・紵臺等がある。

針に就て

針の種類。標針・上針(唐針とも云ふ)メリケン針
等があり、縫ふ材料に依つて木綿針・紬針・絹針等
異る、又用途に依つて縫針・紵針・繼針・躰針・衿ノ針・
夜着針・待針等がある。

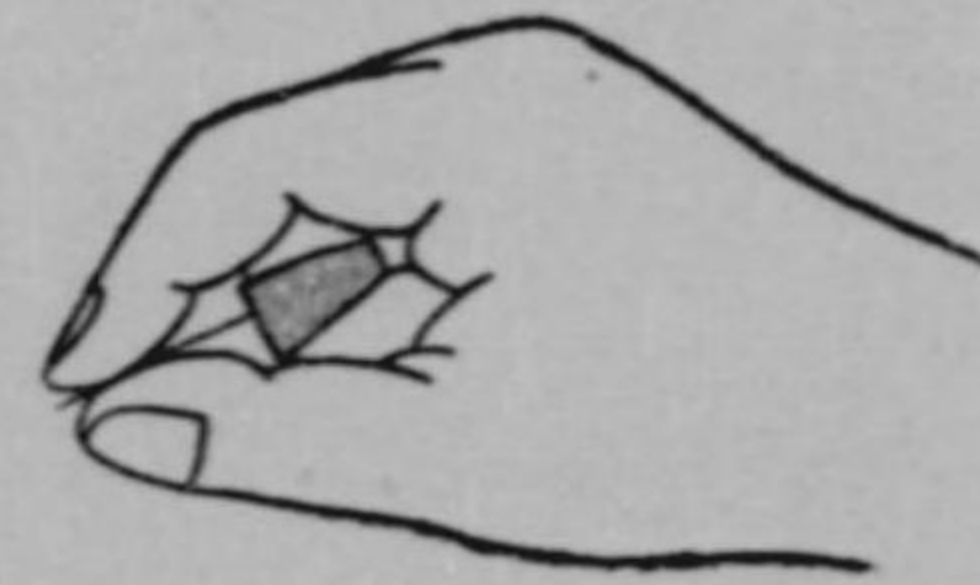
標針は針の太さと長さを番號で定めたもの
で三の三、三の四、四の三、四の四等と呼ぶ様にな
つてゐる。番號の前の數字は針金の太さを表
はし、後の數字は針の長さを表はす。例へば三
の四の針は三番の太さの針金で長さは曲尺の
一寸四分(4.24cm)といふ事である。

針と布及び糸。針の太さは次表の様に地質に
よつて適當な物を選ばなければならない。但

長さは各自の指に適當する事が大切である。
糸は地質に適當なもの即綿布には木綿糸、絹布には絹糸を用ひるのは勿論であるが、同じ地質でも厚薄によつて太さを異にするべきで、地厚物には太い糸、薄物には細い糸を用ひなければならぬ。

綿布	三の二・三の三・木綿針等
絹布	四の二・四の三・絹針・袖針等

針の長さ。各自の針の長さを定めるには、指貫を嵌めて、圖の様に拇指と食指とを揃へて針を持ち、針が指先より0.3cm位出る程度がよい。



針刺

布はモスリンが最もよく、中には脱脂綿を入れると針が錆ない。

指貫

皮製のものがよい。

鋏

西洋鋏と日本鋏とあるが、西洋鋏にて双渡10cm位のものが適當である。

篋

角製と金屬製とがあり。又車仕掛になつたものもある。

第二章 基礎技術

運針 (串縫)

針及び布の持ち方

指貫を右中指の中節に嵌め、針を用布に一針指し、左右中指以下三指を握り針の頭を指貫に當て、針の先の方を布と共に拇指と食指とで持つ。左手は15cm位隔つた處を拇指と食指で布を確と掴み他の三指は軽く屈して布を持ち、左右に布を充分引き張る。



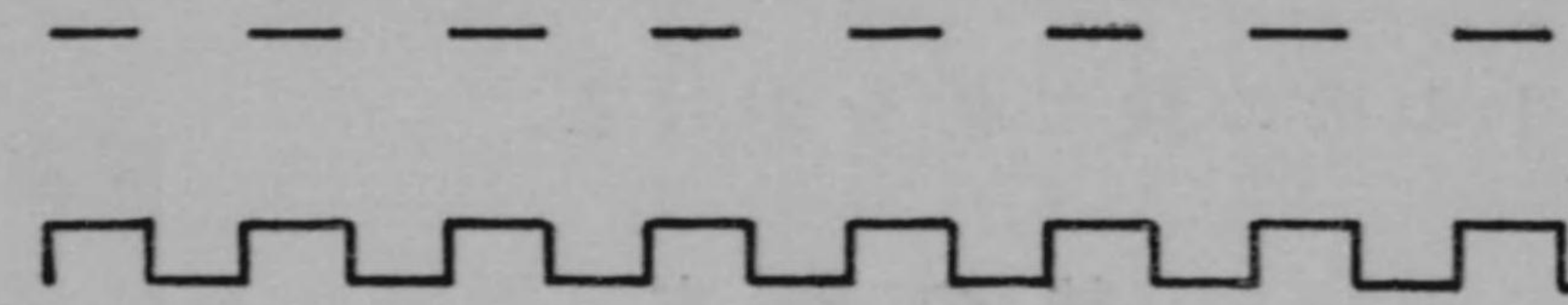
運針

腰を伸して肩を下げ、頭を軽く前に曲げ、布は眼

より30cm位離して正しい姿勢をとる。

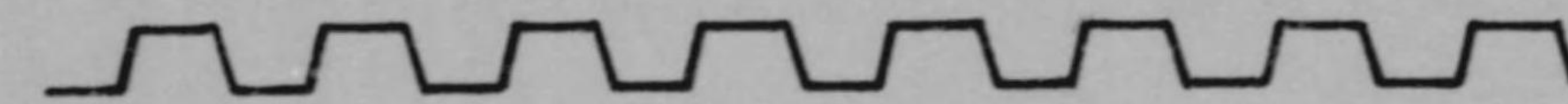
左右の手を交互に動かして針を進め、右手に一杯になつた時、糸こきをする。針目は眞直に且大

正しい針目

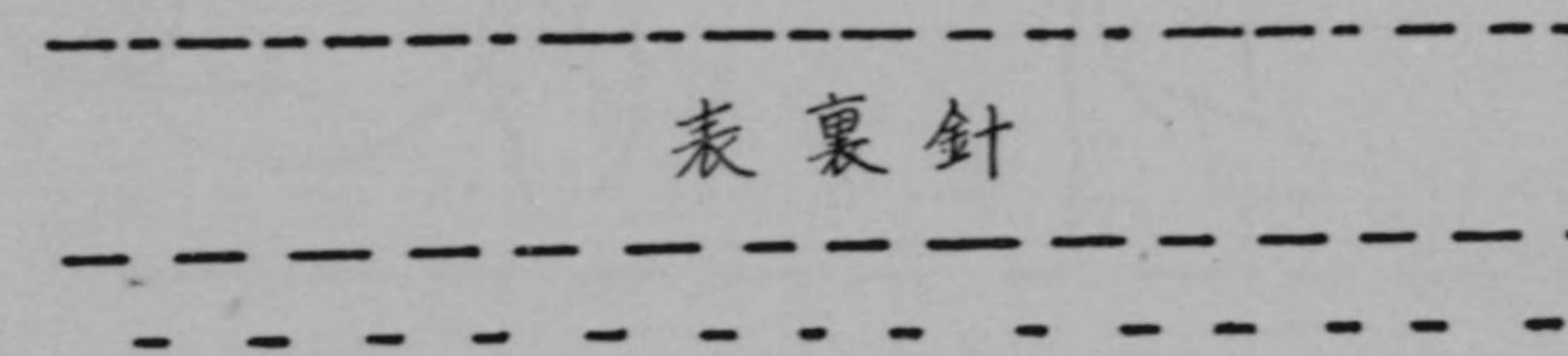


正しくない針目

流れ針



不同針

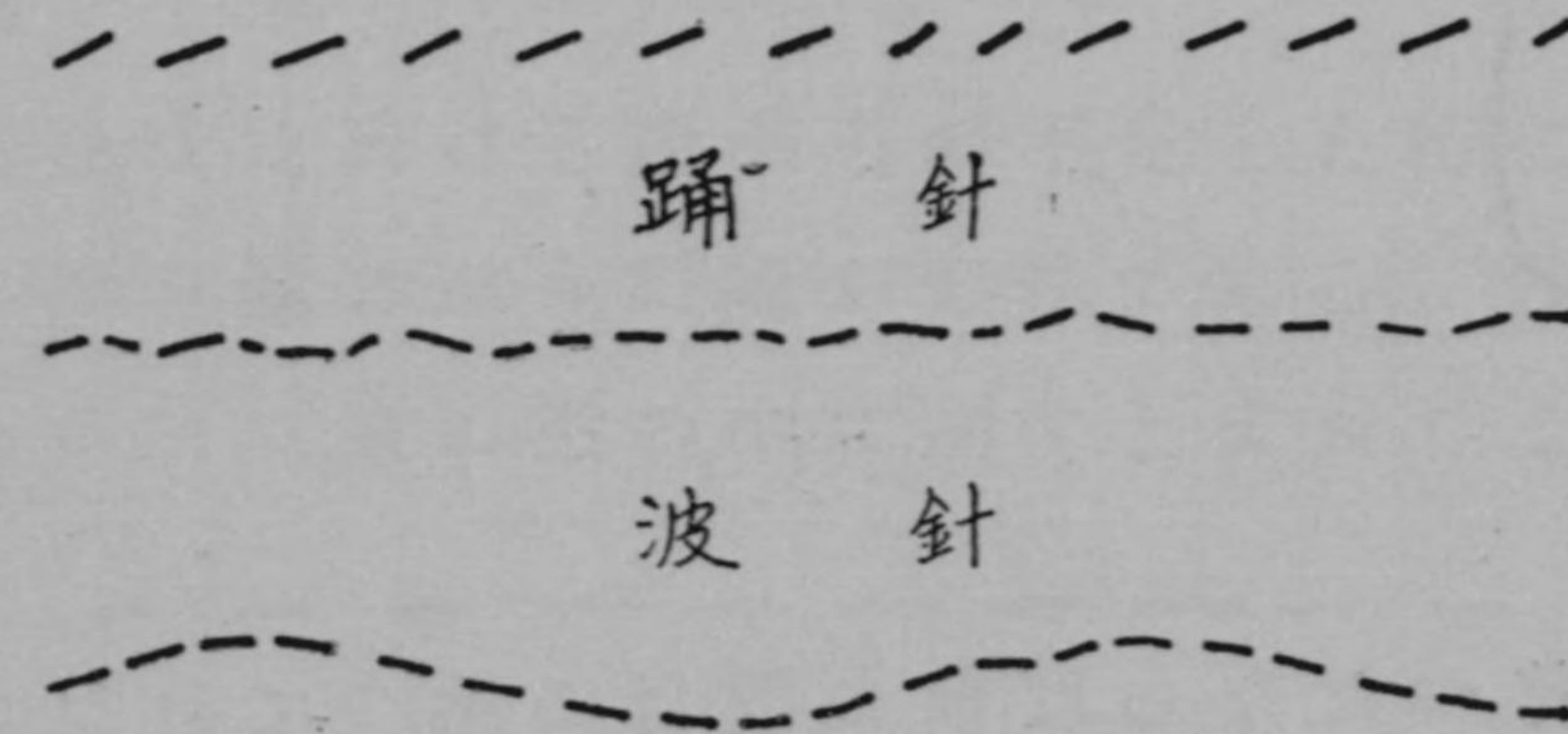


表裏針

繩針

踊針

波針



小の不同のないやうにすると同時に布に直角に刺して流れ針にならぬやうにしなければならぬ。

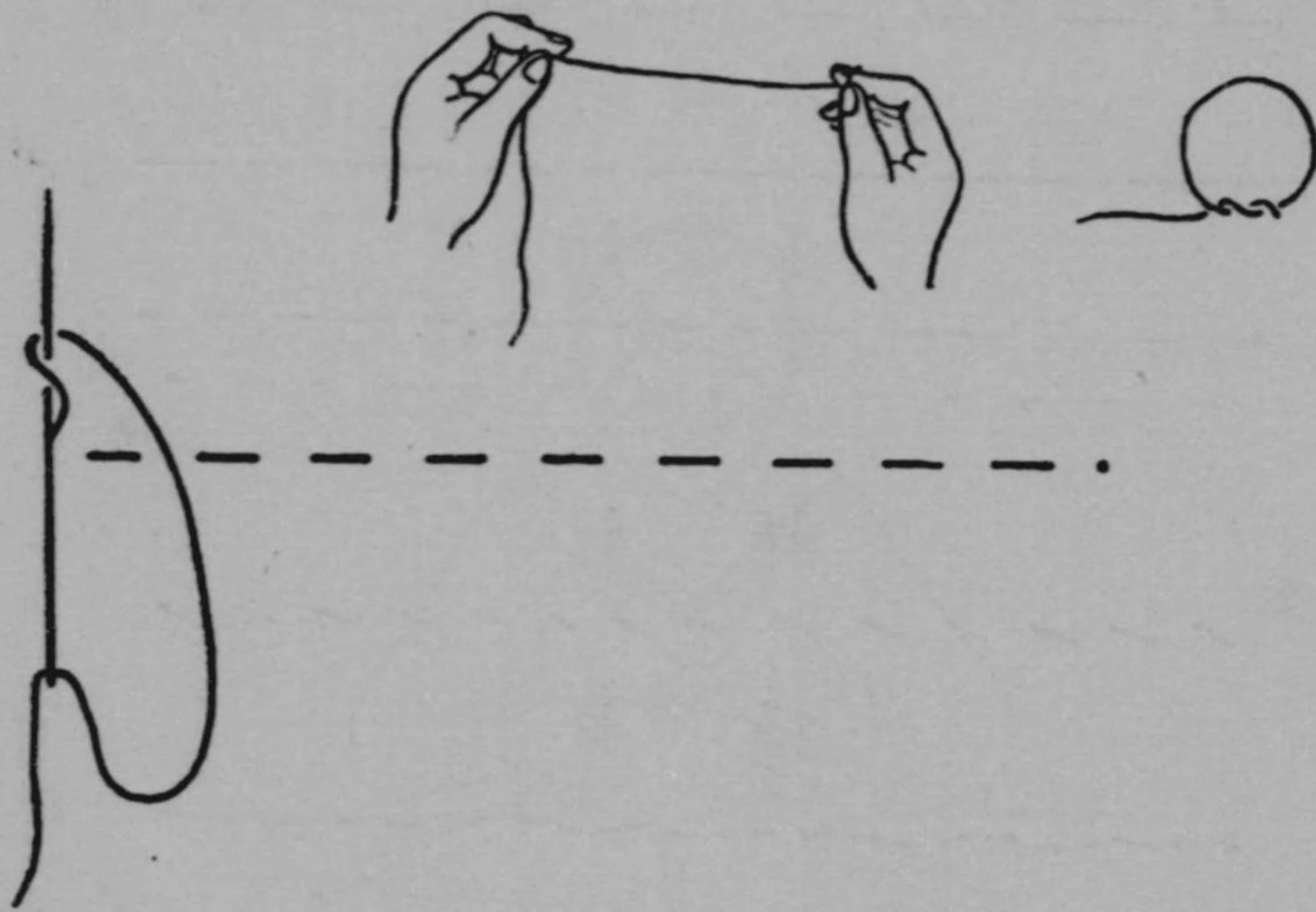
折の付け方

紵臺に掛け20cm位離れた所を左手で整へて布を張り右手の指の腹で折を付ける。

糸の留方

玉留

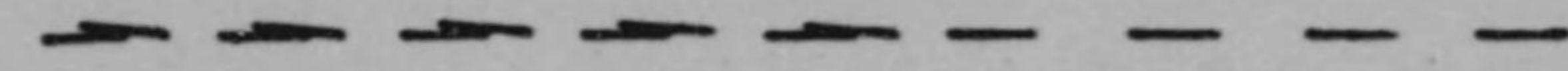
縫ひ始めと縫ひ終りとを軽く留る場合に用ふ。



返留

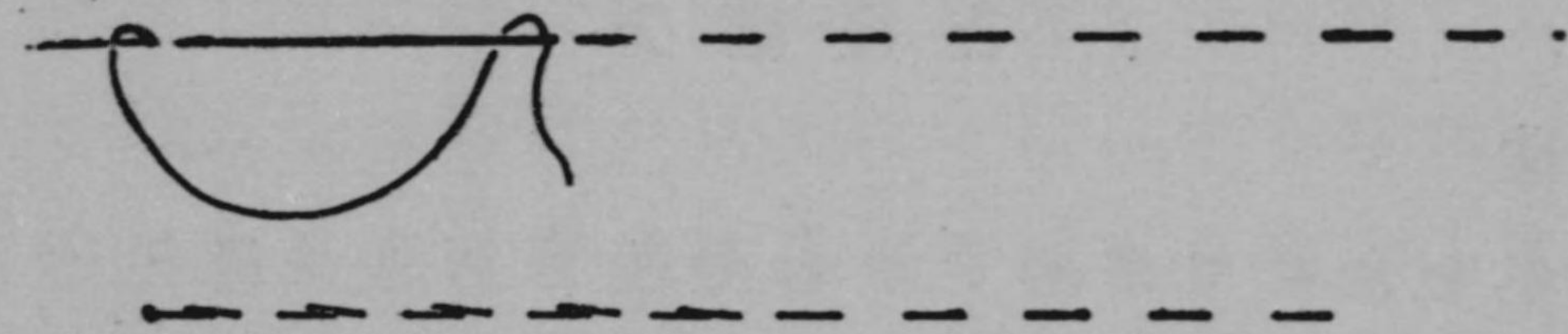
縫ひ終つたならば前の縫目に添つて針目を半

分重ねながら逆に5cm位縫ひ戻るのである。瘤が高くなつてはいけない所例へば衿附上部等に用ひる。



抄返留

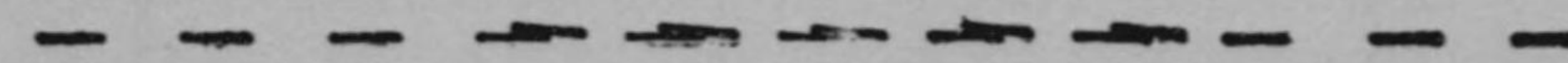
縫ひ終りを縦又は横に極小針に抄針に糸を掛けて引き締め更に返留をする。この方法は最も丈夫に留めたい場合例へば脇縫上部のやうな所に用ひる。



糸の繼方

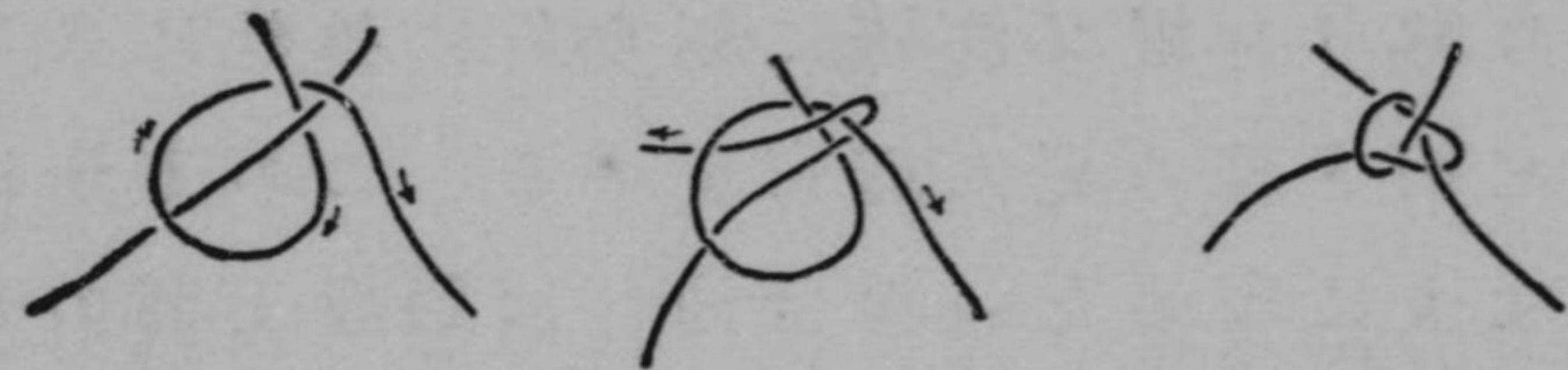
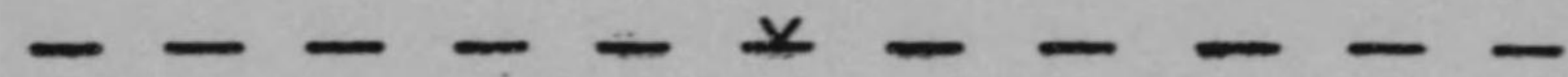
重繼

縫ひ或は紵ける途中糸の不足した時に、5cm位の間を圖のやうに縫ふ方法である。針目の重なる所で糸の燃の中に刺すと丈夫でよい。



結繼

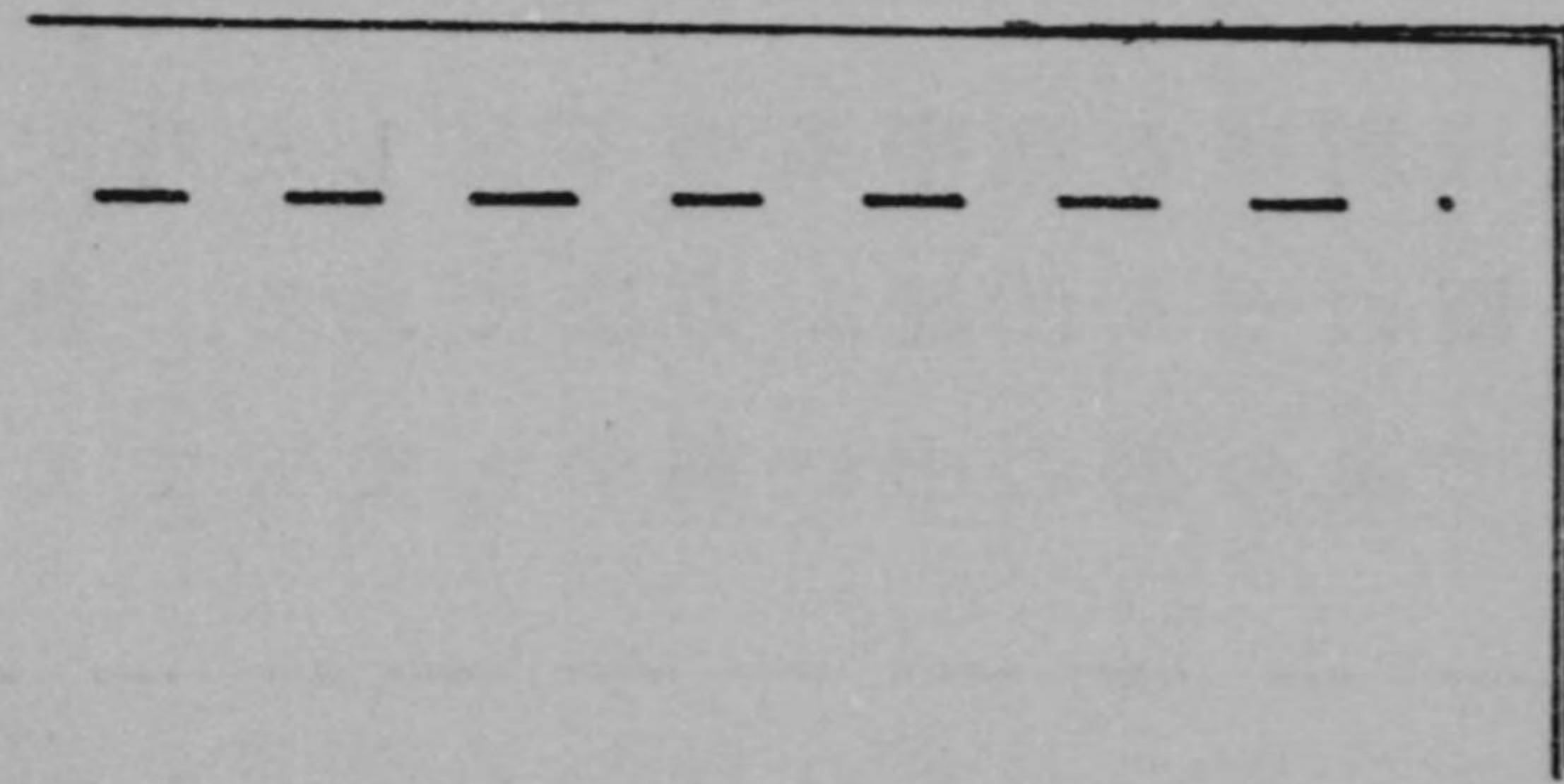
重繼と同じ様に糸が不足した時に用ひる方法である。糸の終りと足し糸とを機結びをして繼ぎ一針返して縫ひ續ける。絹糸の時には解ける恐れがあるから用ひない方がよい。



各種縫方

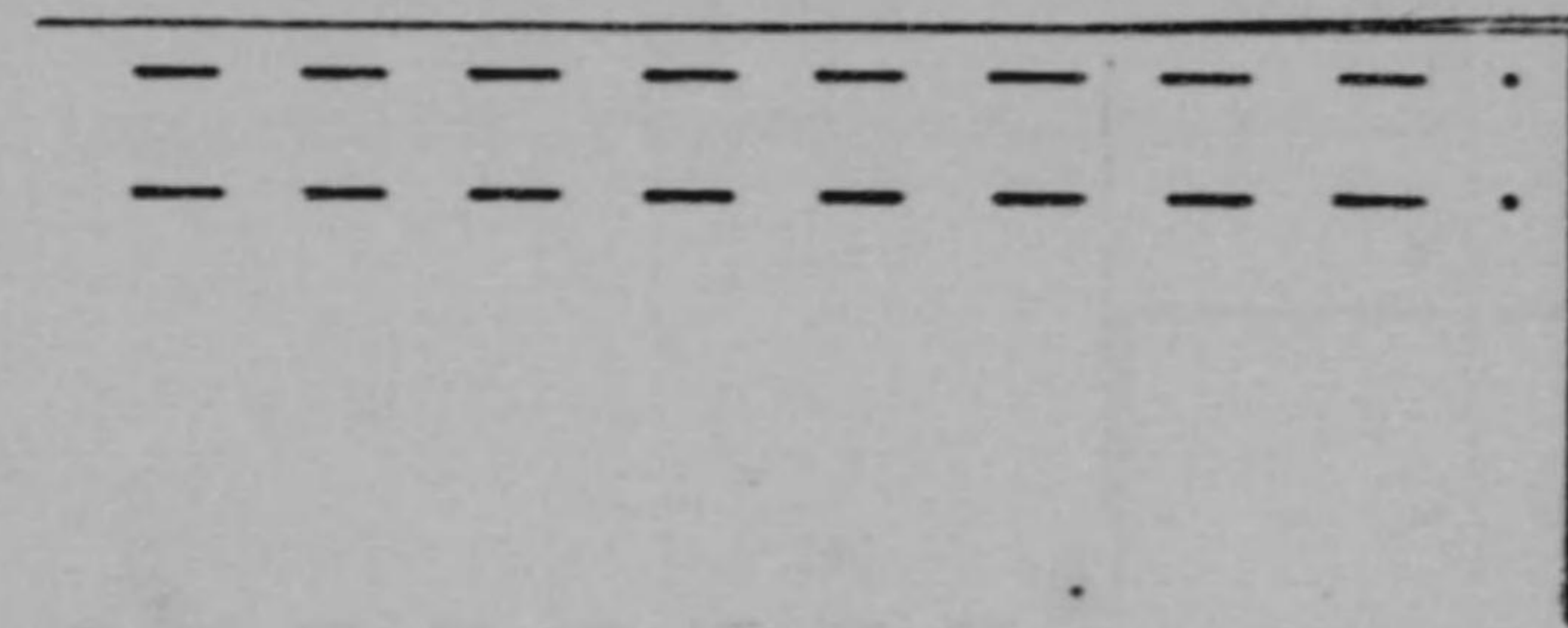
合縫

布を合せて串縫をする方法である。縫代は普通1cmで多い時には縫込といふ。針目は綿布は0.4cm絹布は0.3cm位とする。



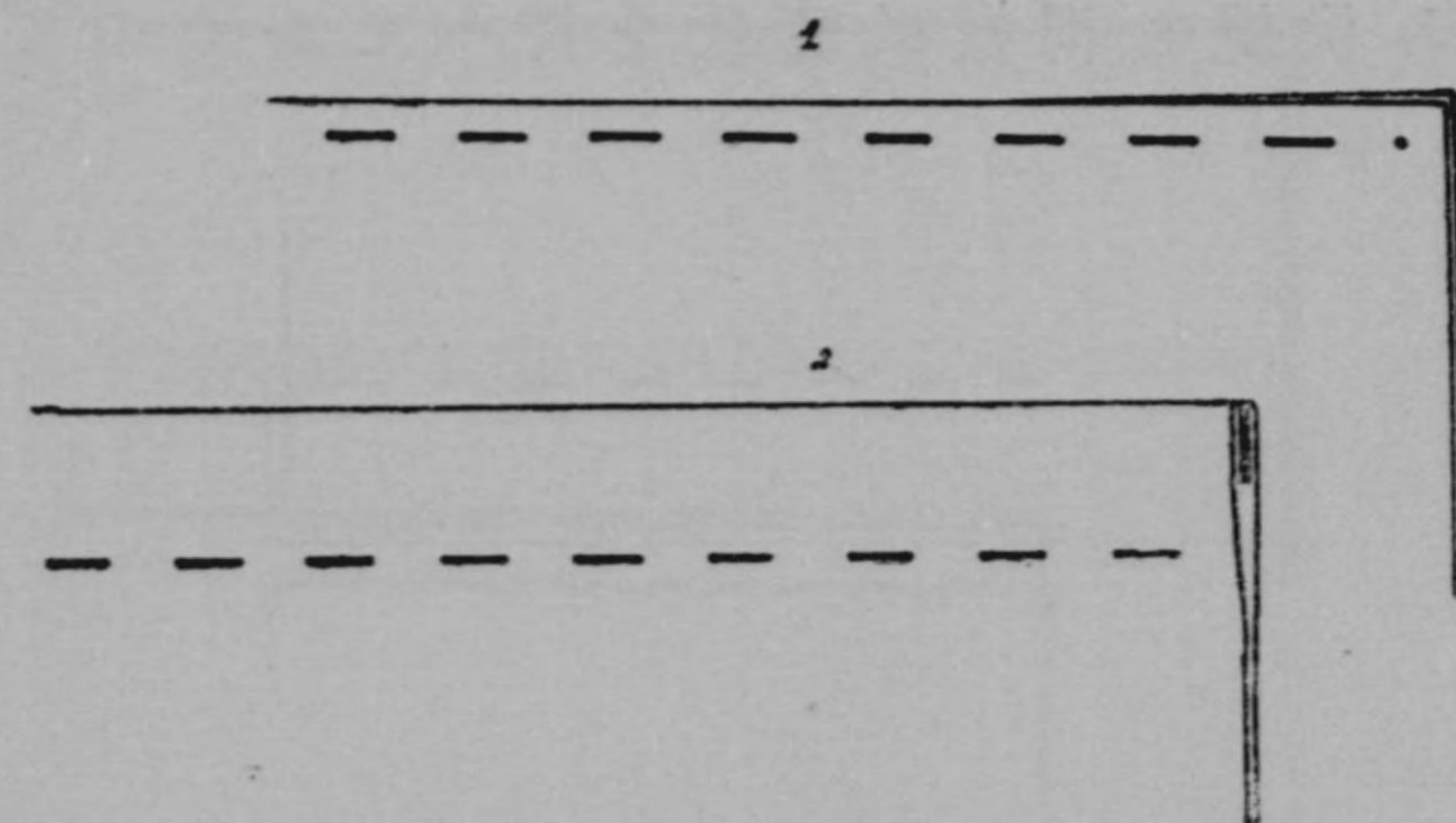
二重縫

合縫をした後に更に布の端を浅く縫ひ、縫代の開かぬやうにするのである。例へば單衣の脊縫等に用ひる。



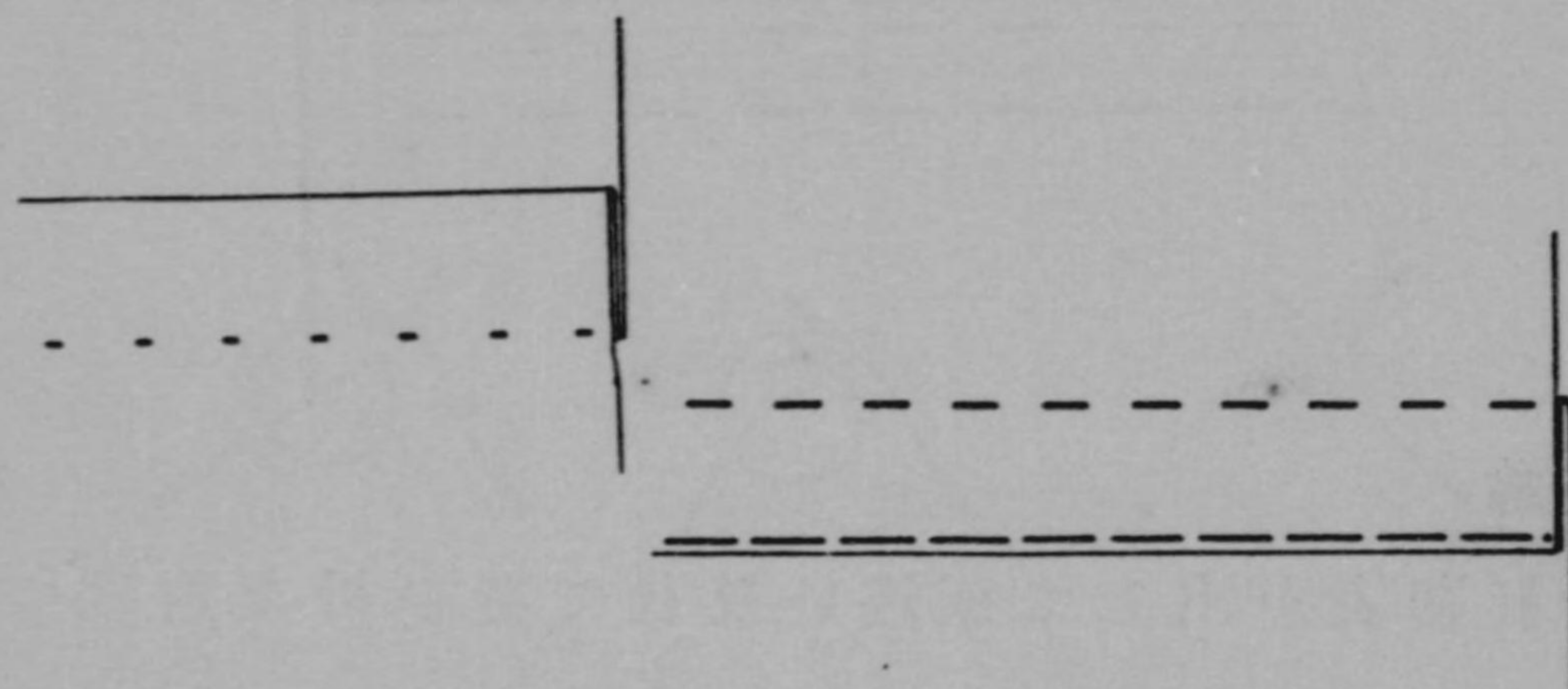
袋縫

最初表を出して極浅い縫代で縫ひ、折を付けて裏返し、更に縫代を定めて串縫をするのである。この方法は裁目が見えない様にする時、例へば四つ身單衣の脊又は單衣の袖下等を縫ふに用ひる。



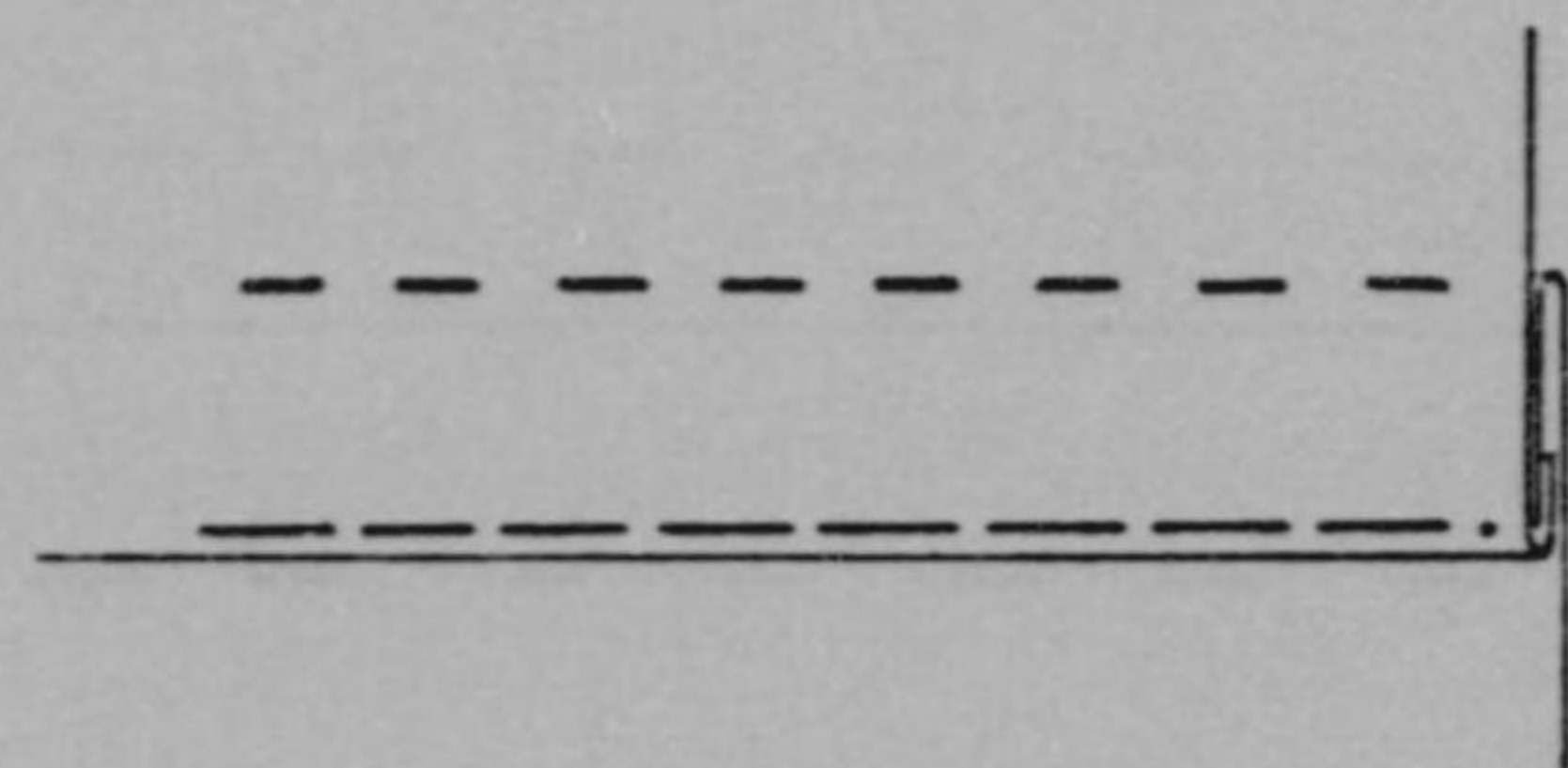
伏縫

合縫をして着せを掛け、表に極小針、裏に1cm位の針目を出して裏から縫代の端を押へておくのである。



折伏縫

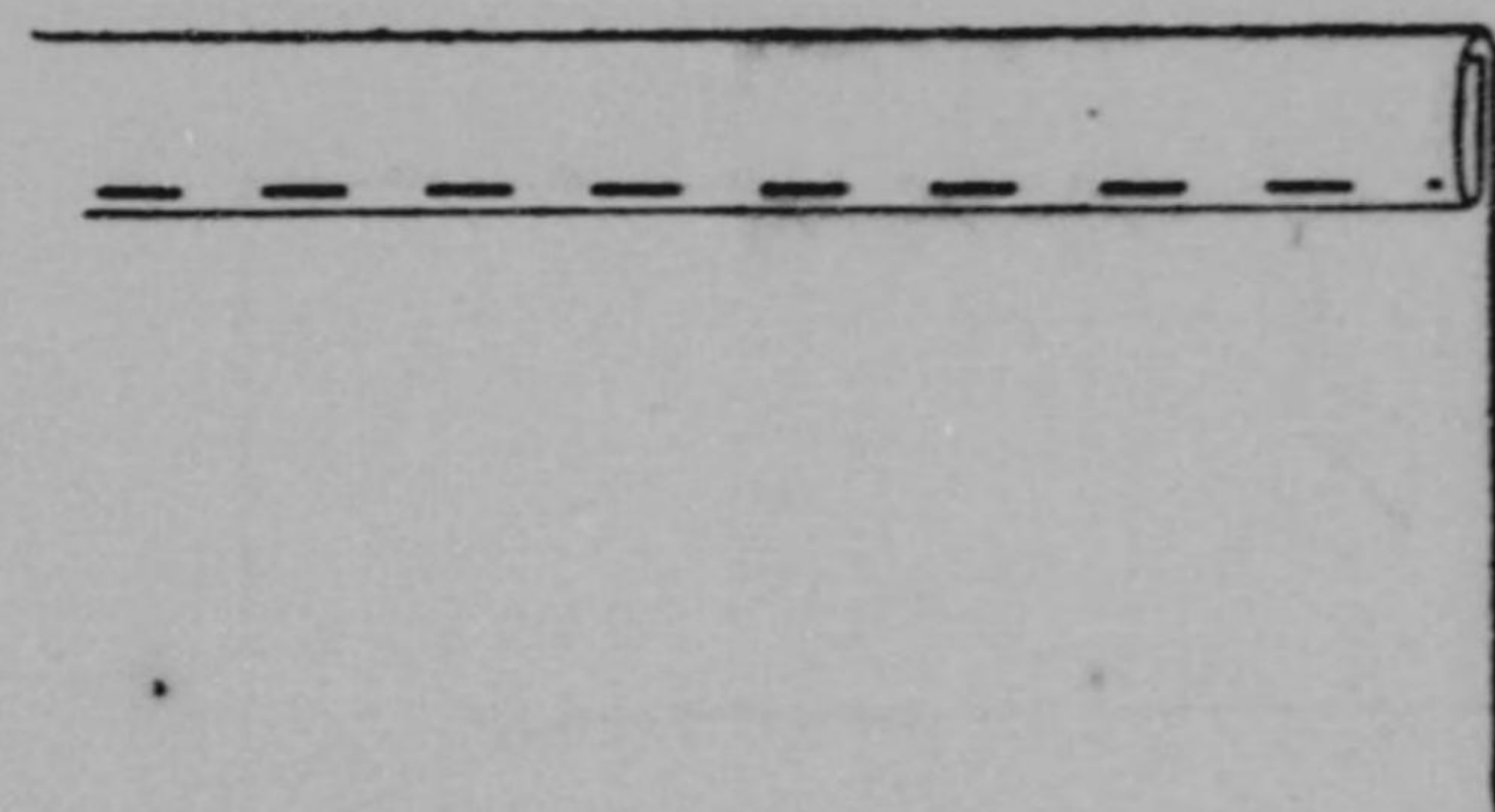
二枚共に裁目の布を合せる場合に一枚を0.5cm位ずらして合縫をなし、縫代の多い方で裁目を包み伏縫と同様に縫代を押へておくのである。



三折縫

布の端を三折にして折山の際を串縫にする方法である。

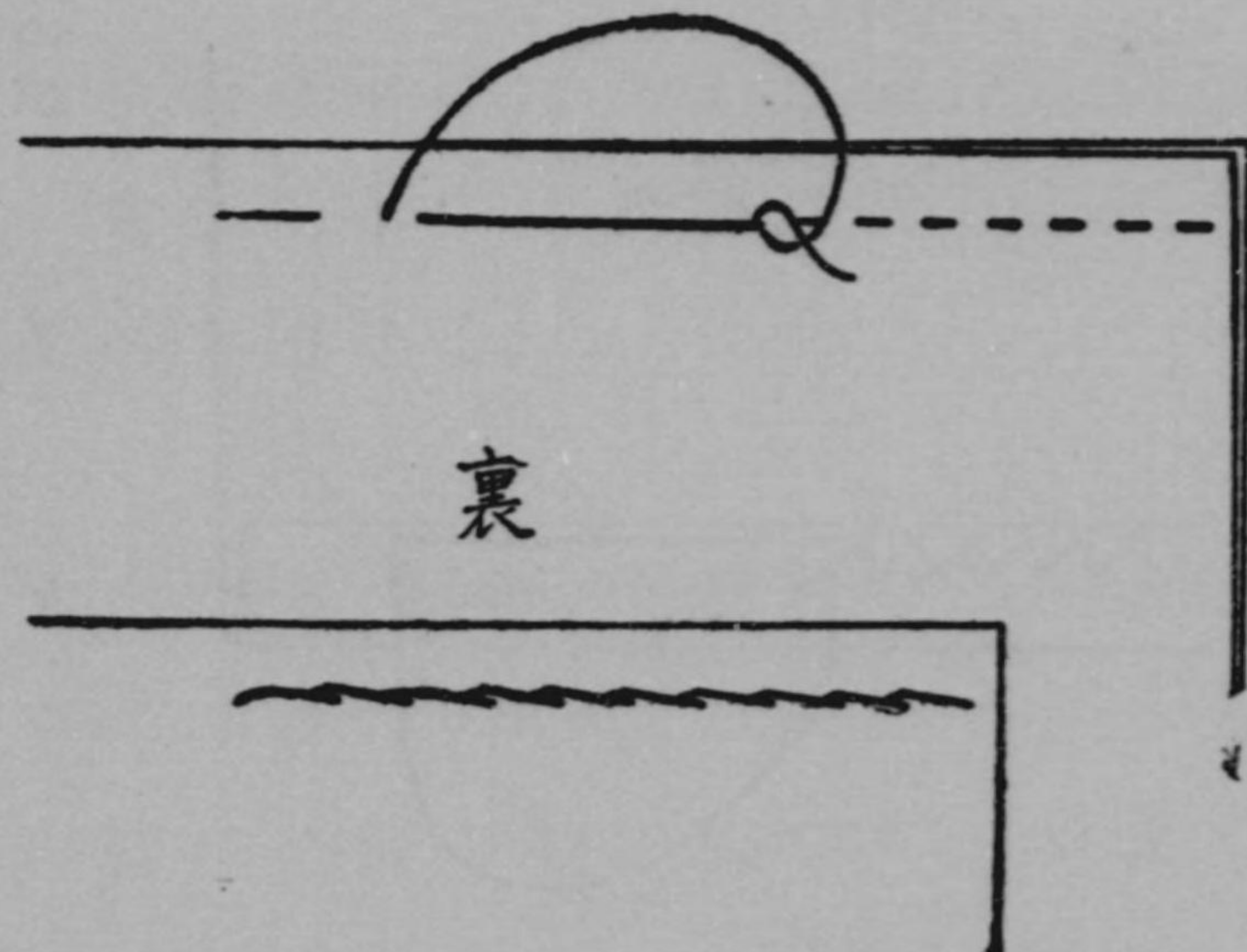
裏



半返縫

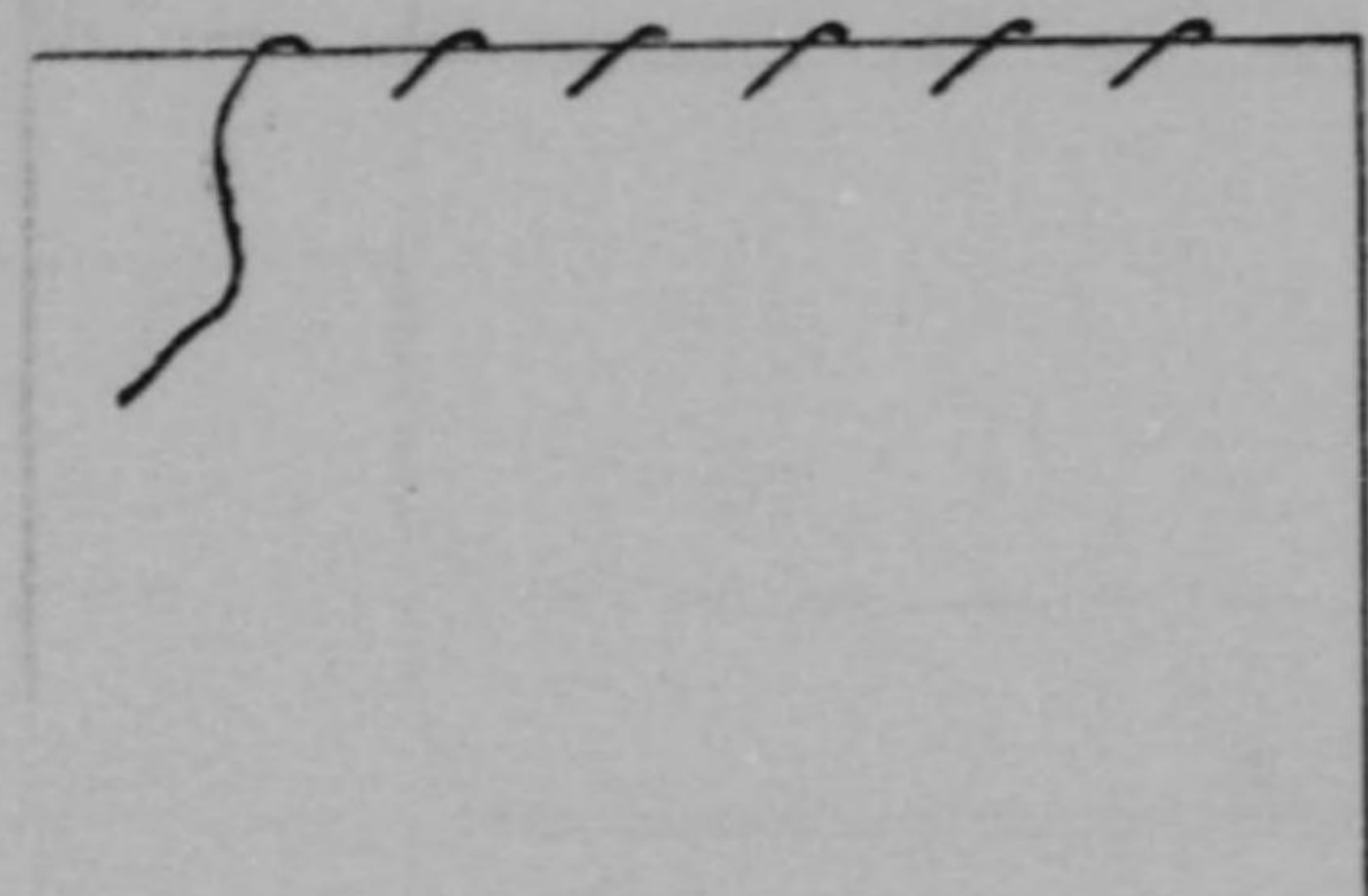
一針抄つて糸を引き、半分返しては一針進め、之を繰り返して行くのである。縫目を割る時又は丈夫に縫ふ必要のある時に用ひる。

表



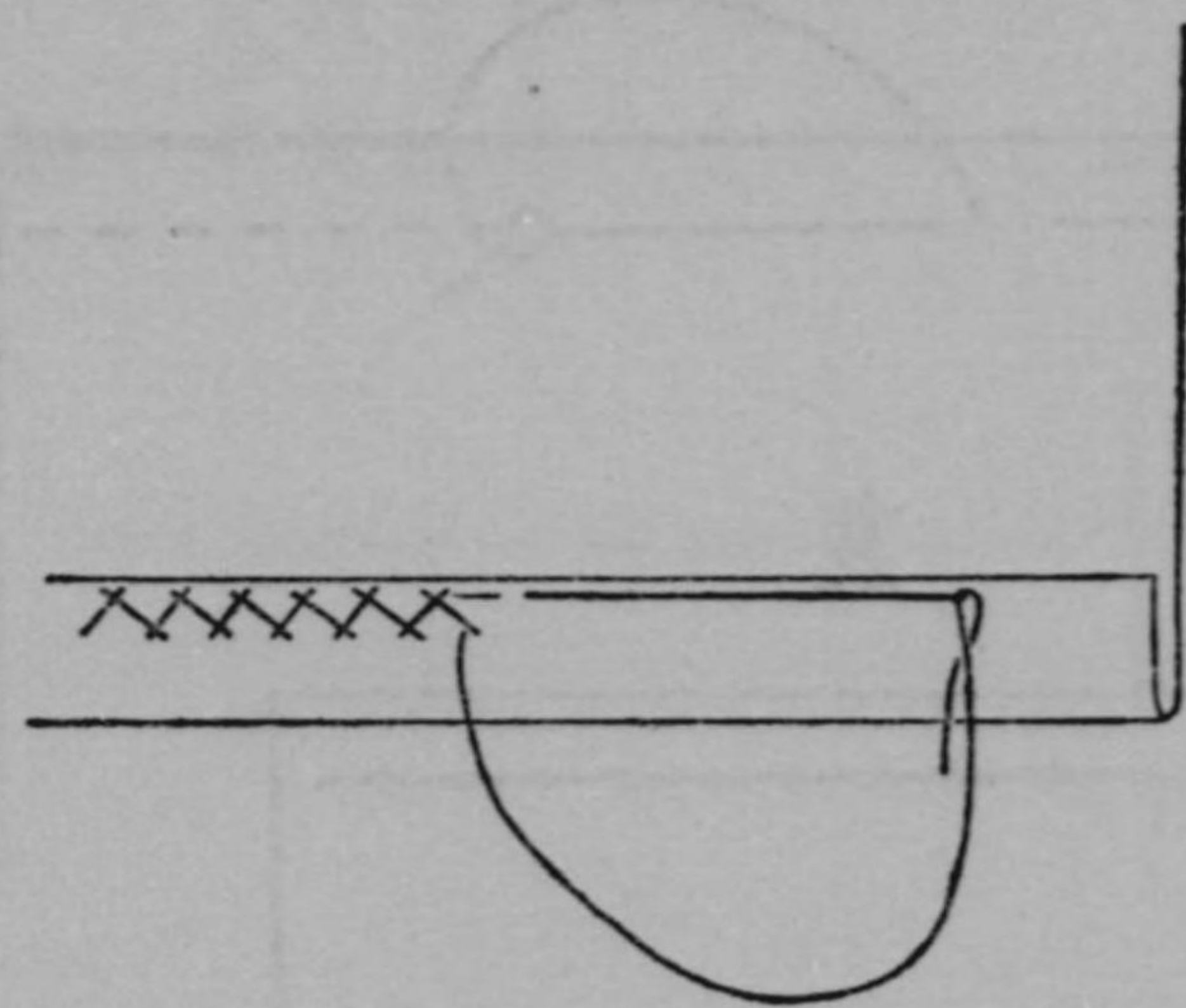
膝縫

裁目の端を圖の様に浅く糸を巻いて行く方法で、之は裁目のほつれを防ぐ爲にするのである。糸は縫ひ糸よりも細いものを用ひなければならない。



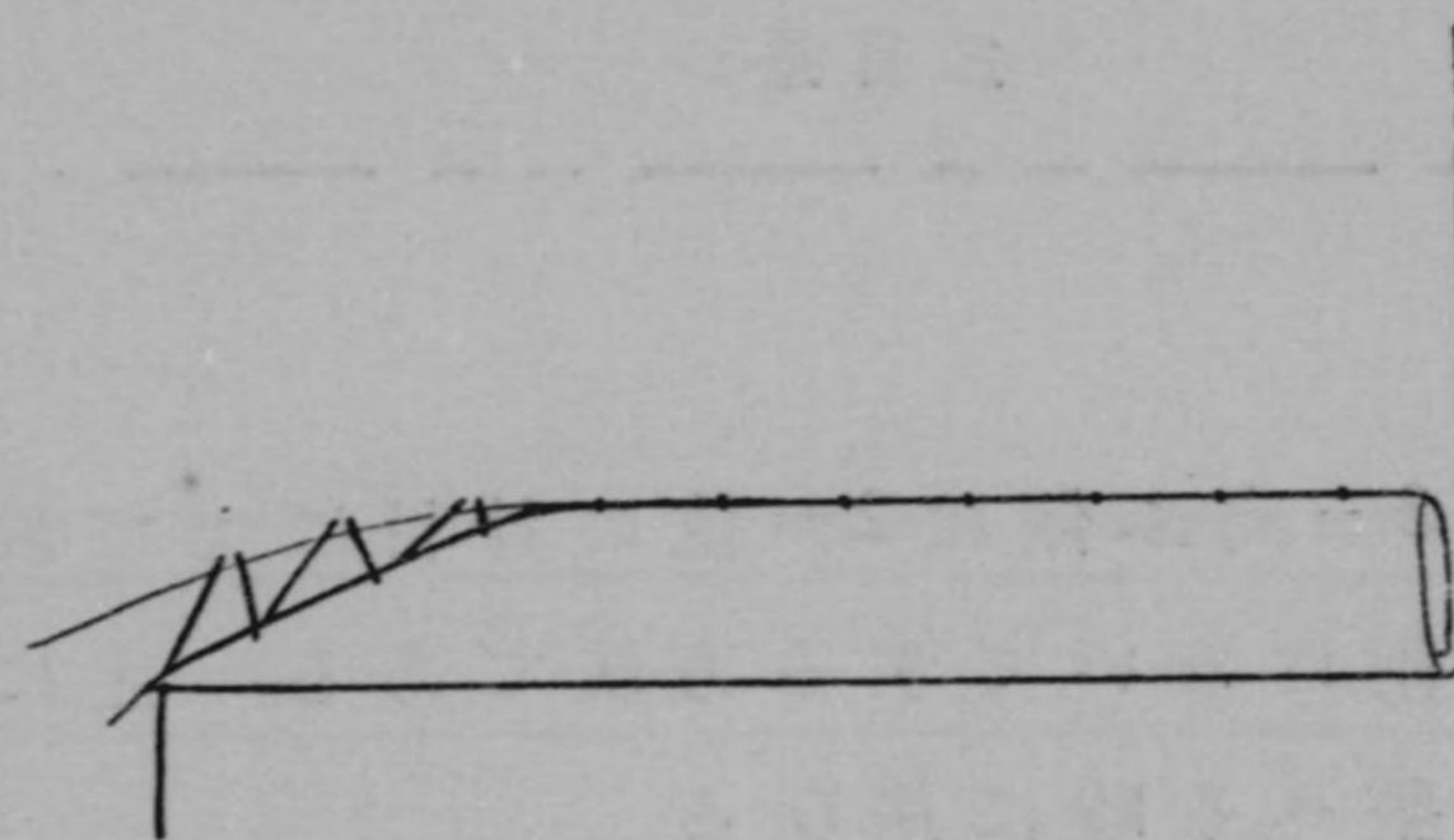
千鳥縫

針の運びは普通は右より左へ進めるが、千鳥縫は其の反対である。表には小針を出し、裏には山形を出して行くのである。



纏縫

縫代を三つ折となし、圖のやうに折山に針目を出し、表には極小針を出して06cm位の針目で縫ふ方法である。



襷の掛け方

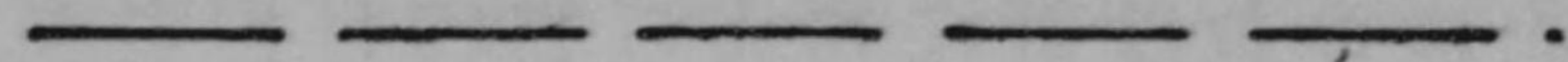
襷は着せや縫代を正しく整へる際、又は布を縫ひ合せたり、縮け附けたりする場合に用ひるものである。糸は綿布には木綿の襷糸を、絹布には絹の襷糸(ぞべ)を用ひる。

並襷

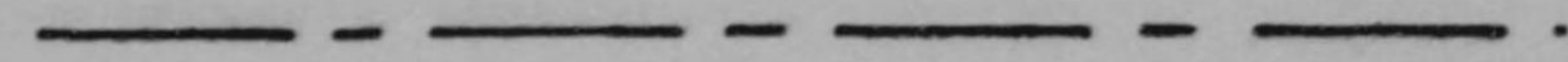
着せ山から0.5cm位這入つた所を表から大針は3cm、小針は0.5cm位の針目でする方法である。圖の様に小針の數に依つて、一日落し、二日落し

三目落とし等の名稱がある。

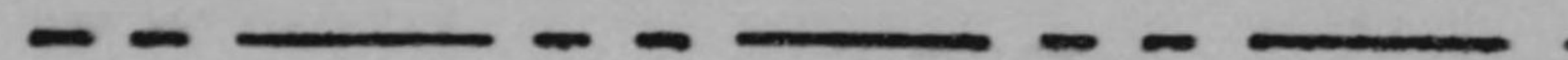
一目落とし



二目落とし



三目落とし



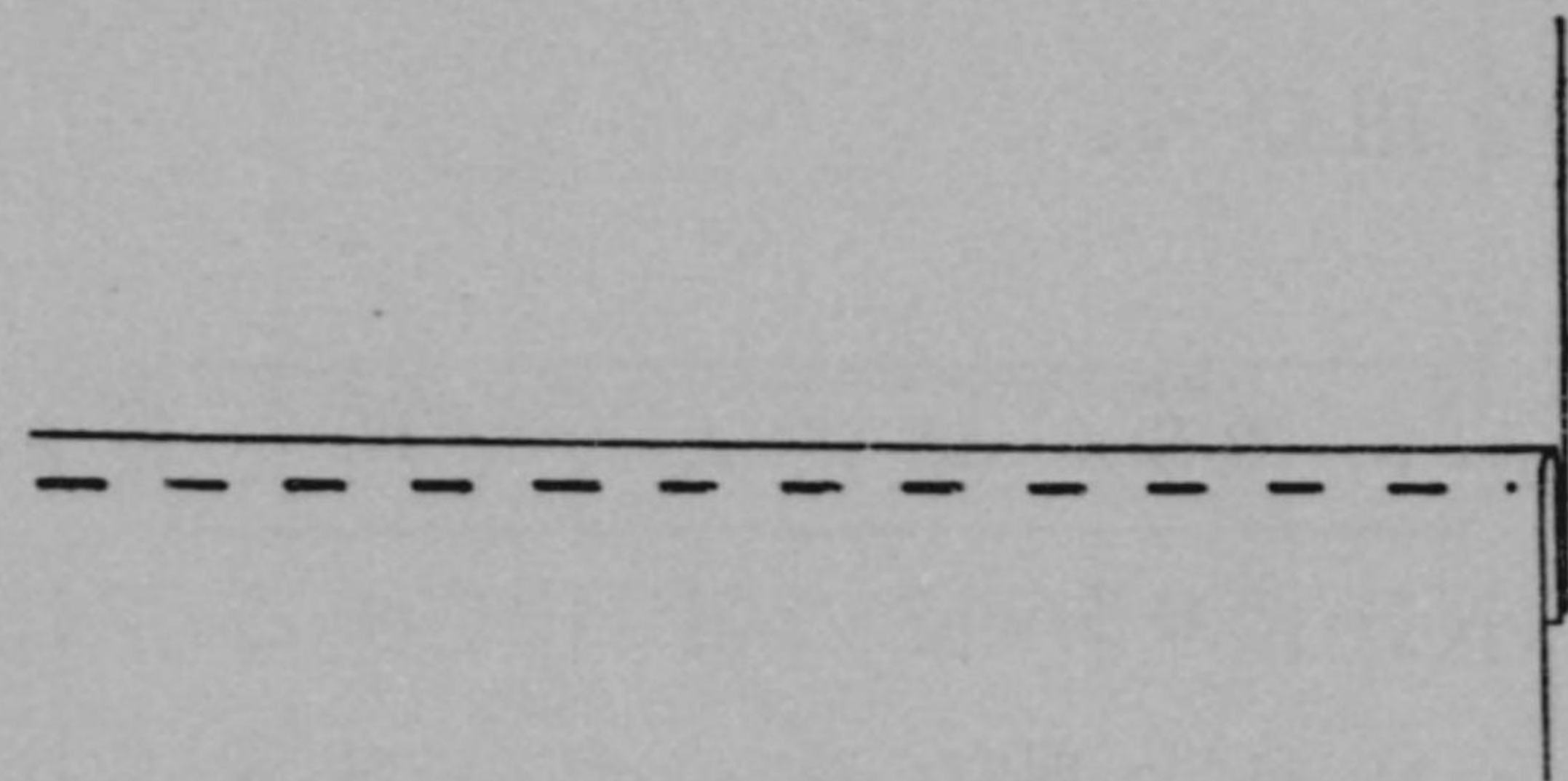
両面罫

手前は3cm向ふ側は2cm位の針目にして表裏の區別を附けないでする方法である。主に帯の着せを整へる時に用ひる。



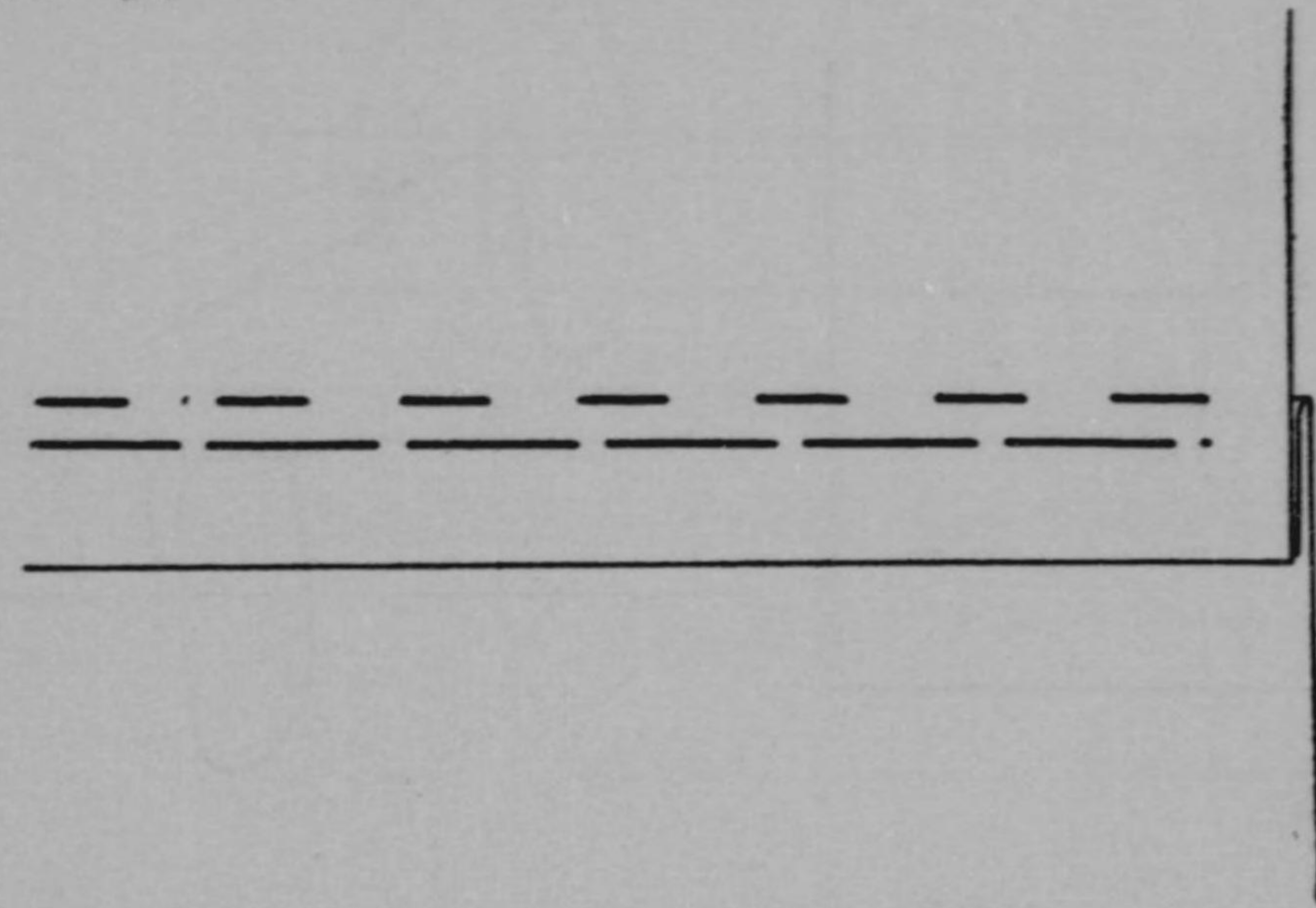
串罫

主に縮緬類に用ひるもので、着せ山から0.3cm位這入つた所を小針で串縫するのである。



隠罫

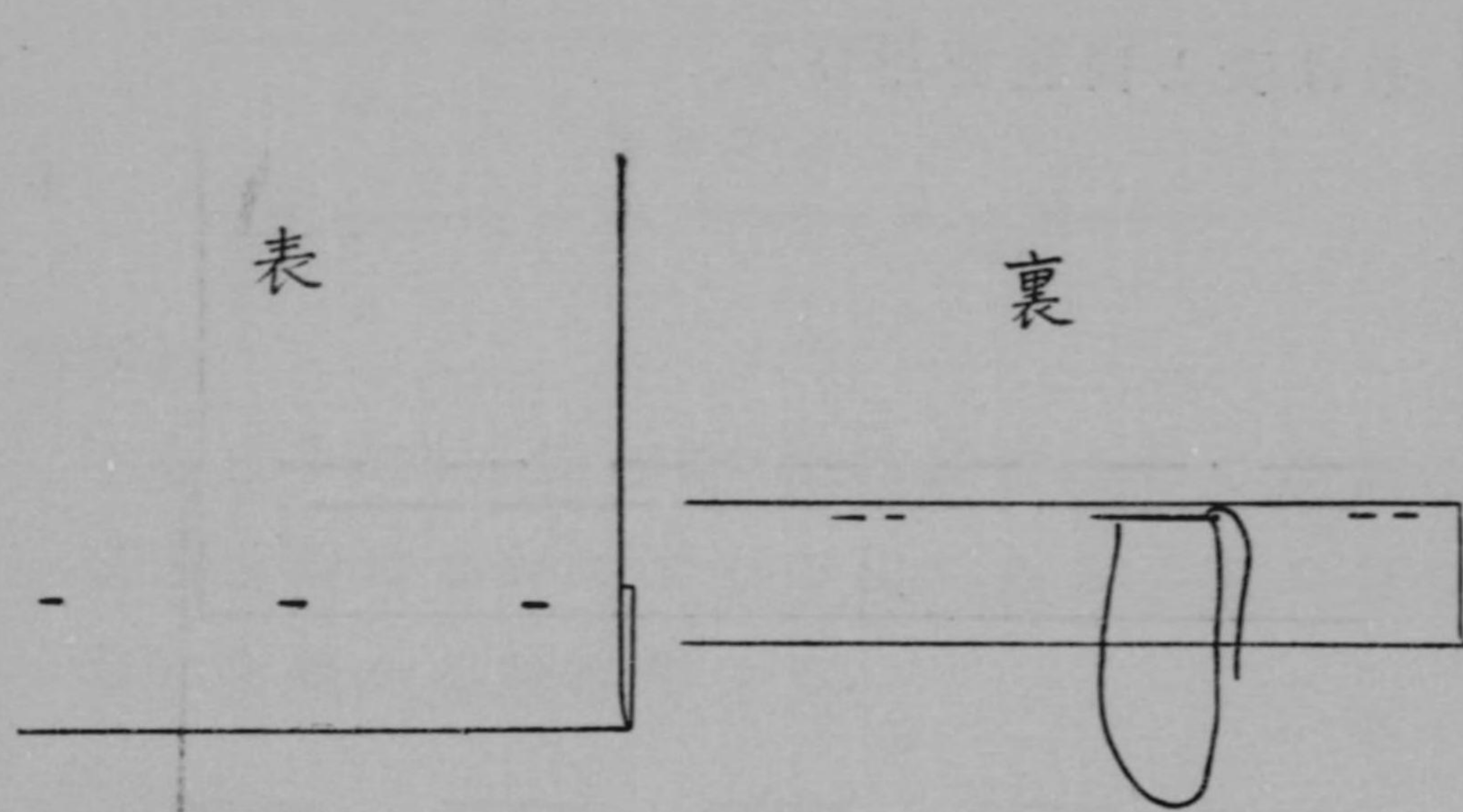
着せ山から0.5cm位這入つた所を表に極小針裏に1cm位の針目を出して着せ山を押へる方法である。この罫は出来上つても取らないから糸は表と同色を用ひる。



縮 け 方

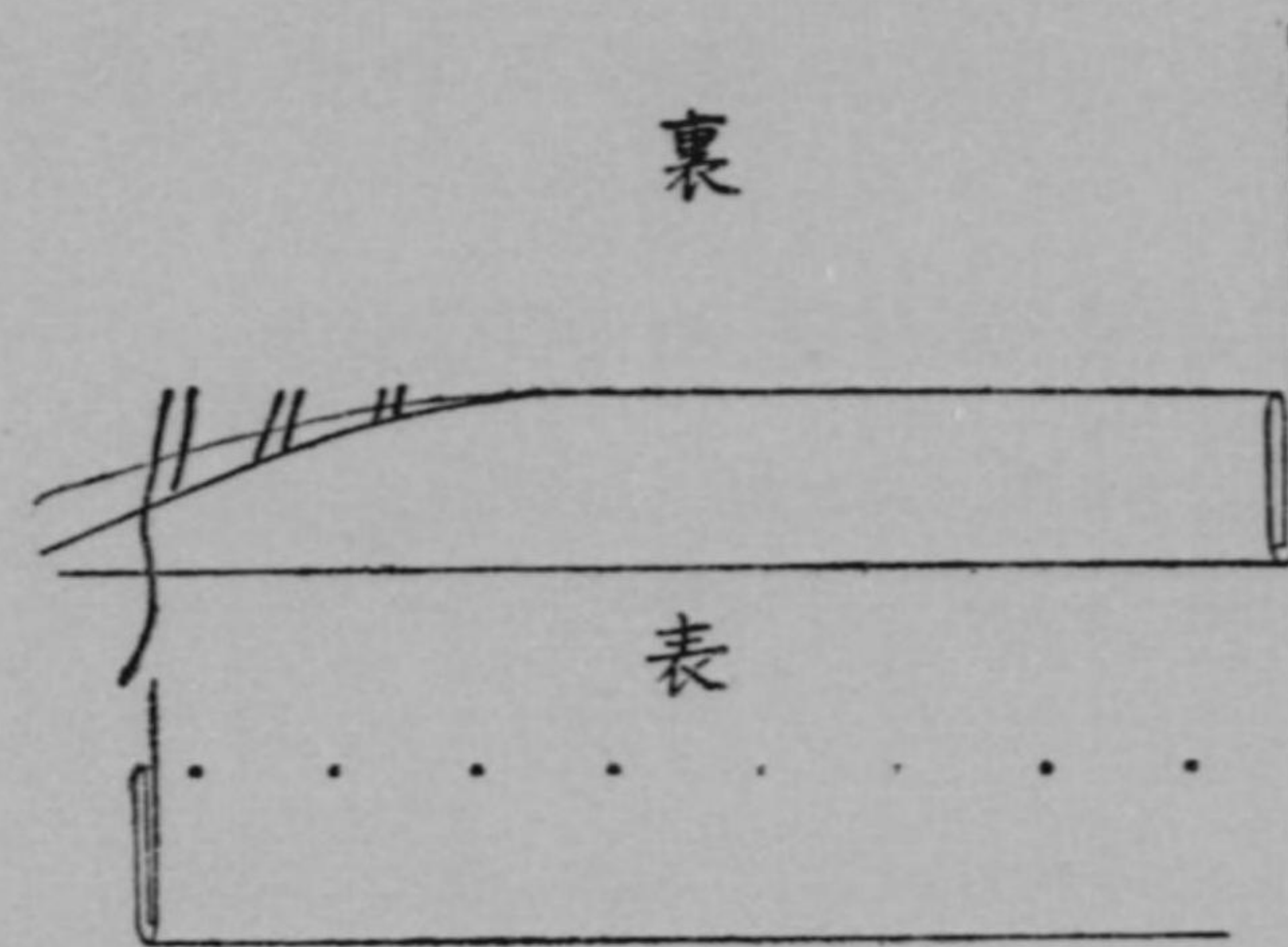
耳縮

布の耳を其のまま縮ける方法で圖の如く、表に一針、裏に躰針出して縮けて行く方法である。



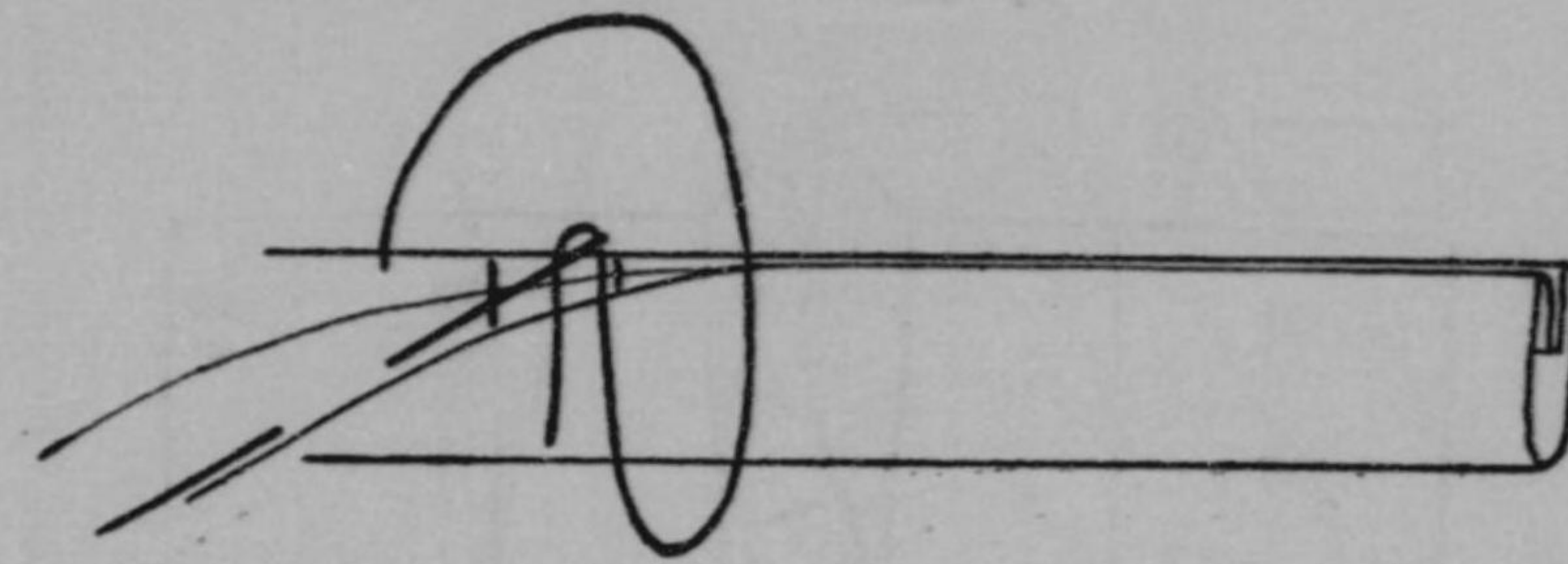
三折縮

縫代を三つ折りになし、圖のやうに表に極小針を出して縮ける方法である。



本縮

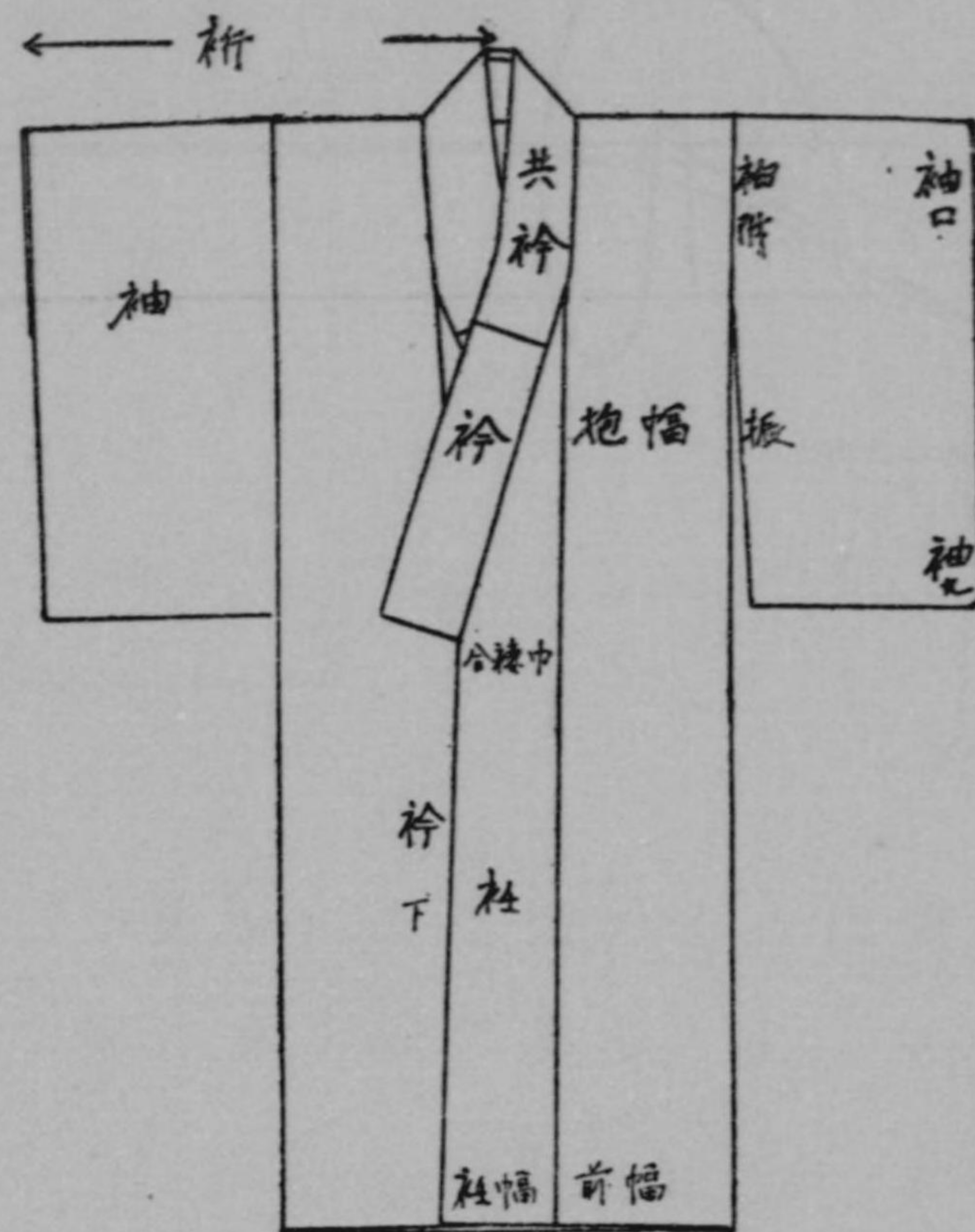
縮代を折り、折山から這入つた所を、手前は1cm向ふ側は0.8cm位の針目で流針にならない様に縮けるのである。



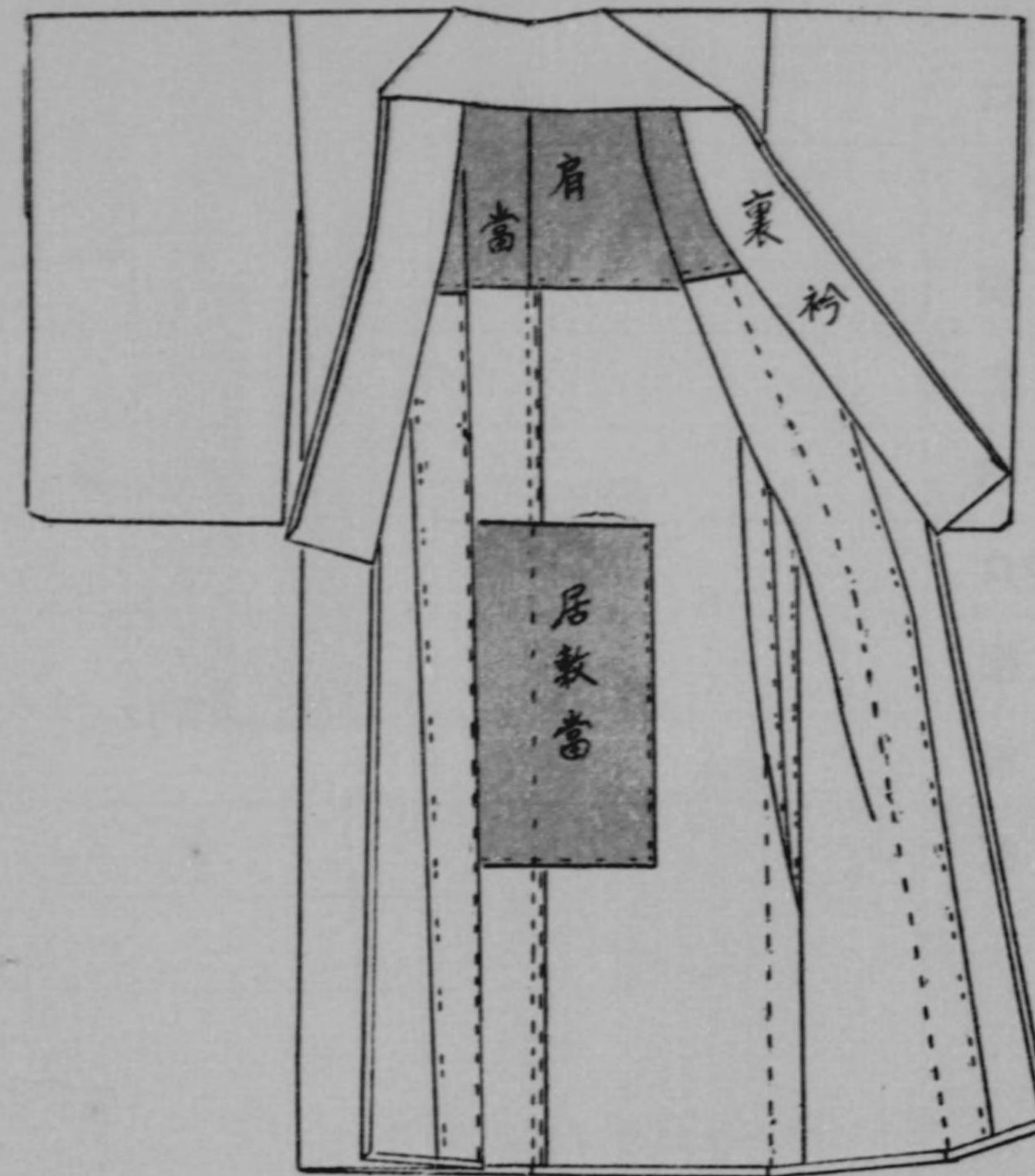
第三章

大裁女物單衣

各部の名稱



裏

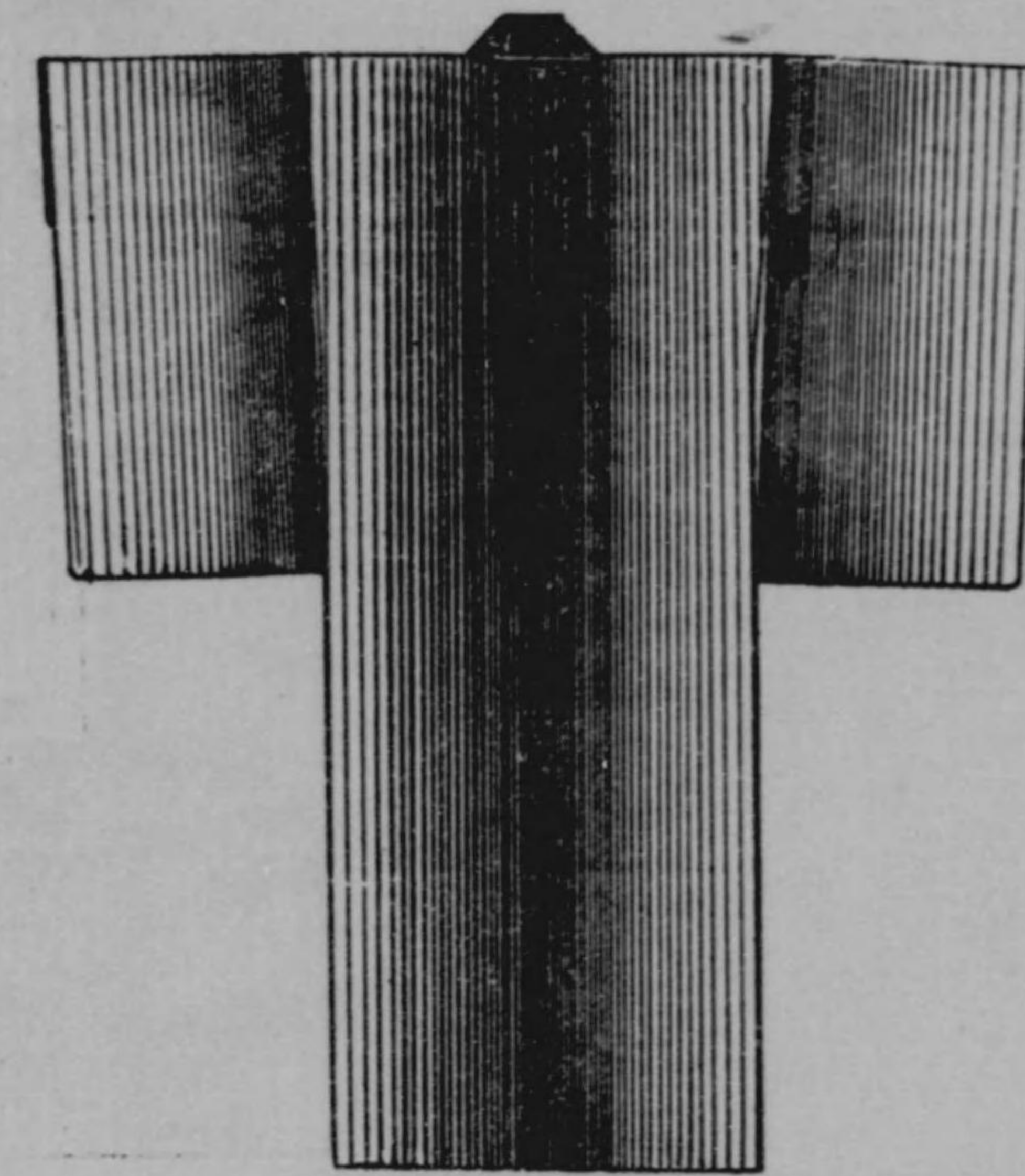
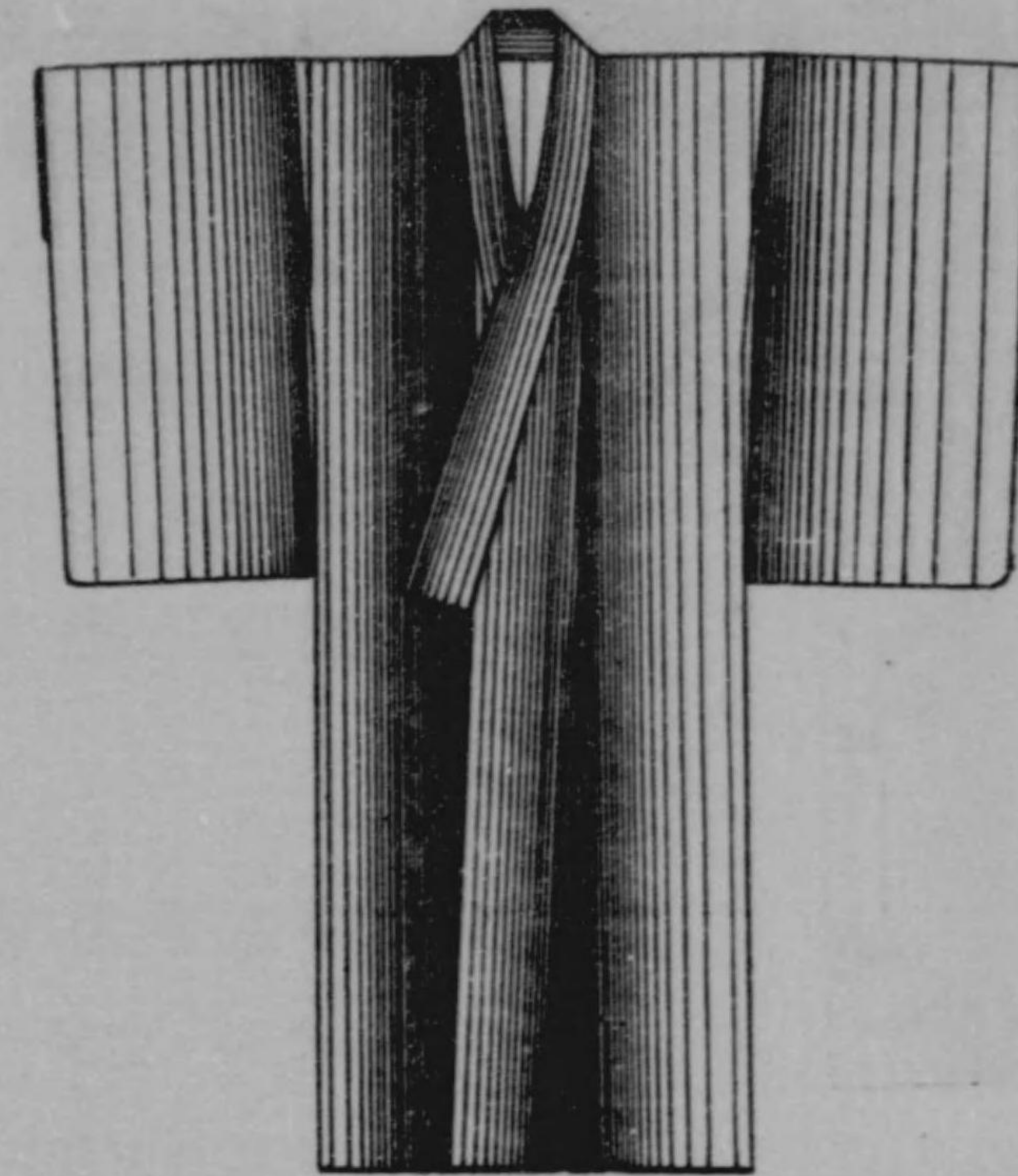


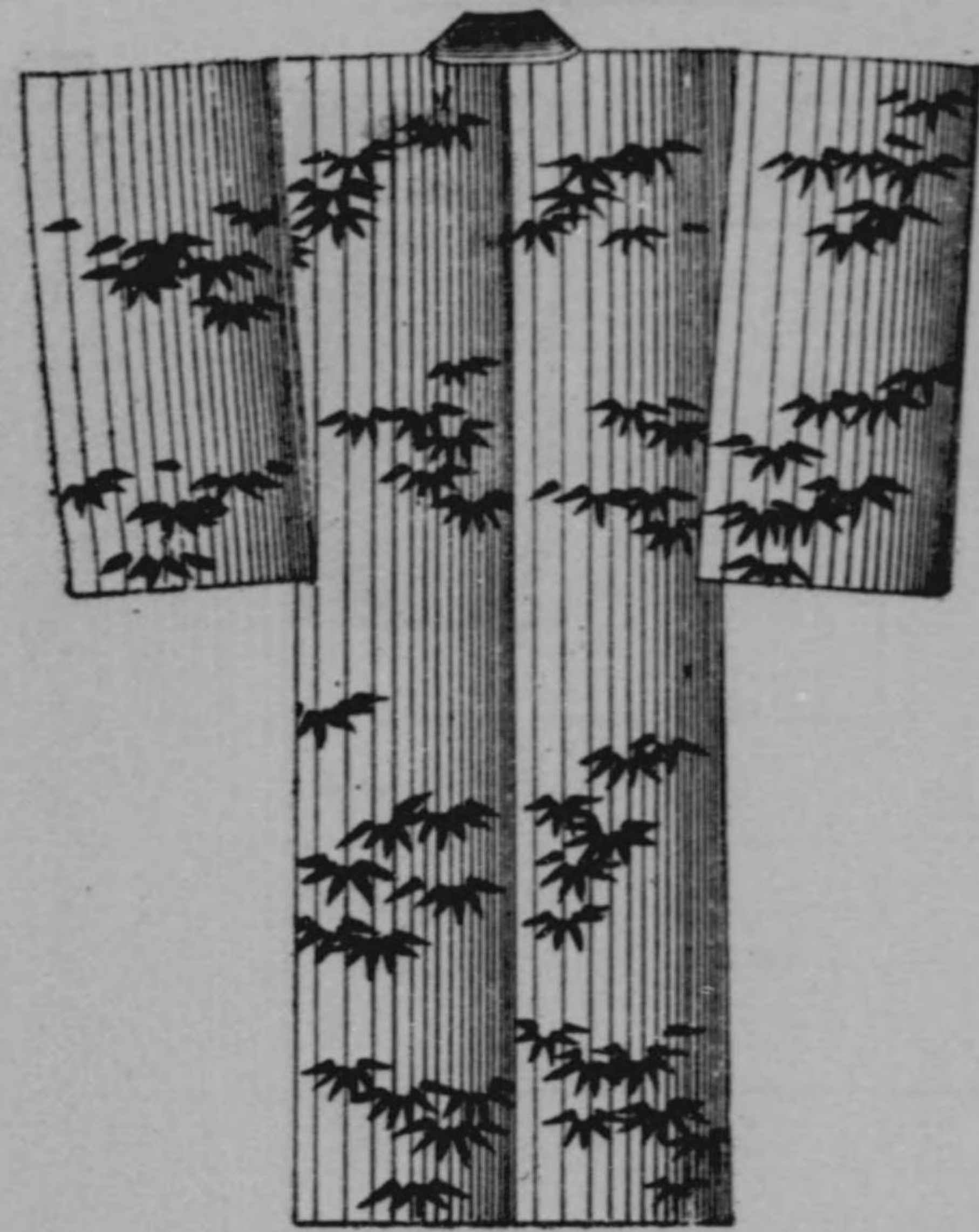
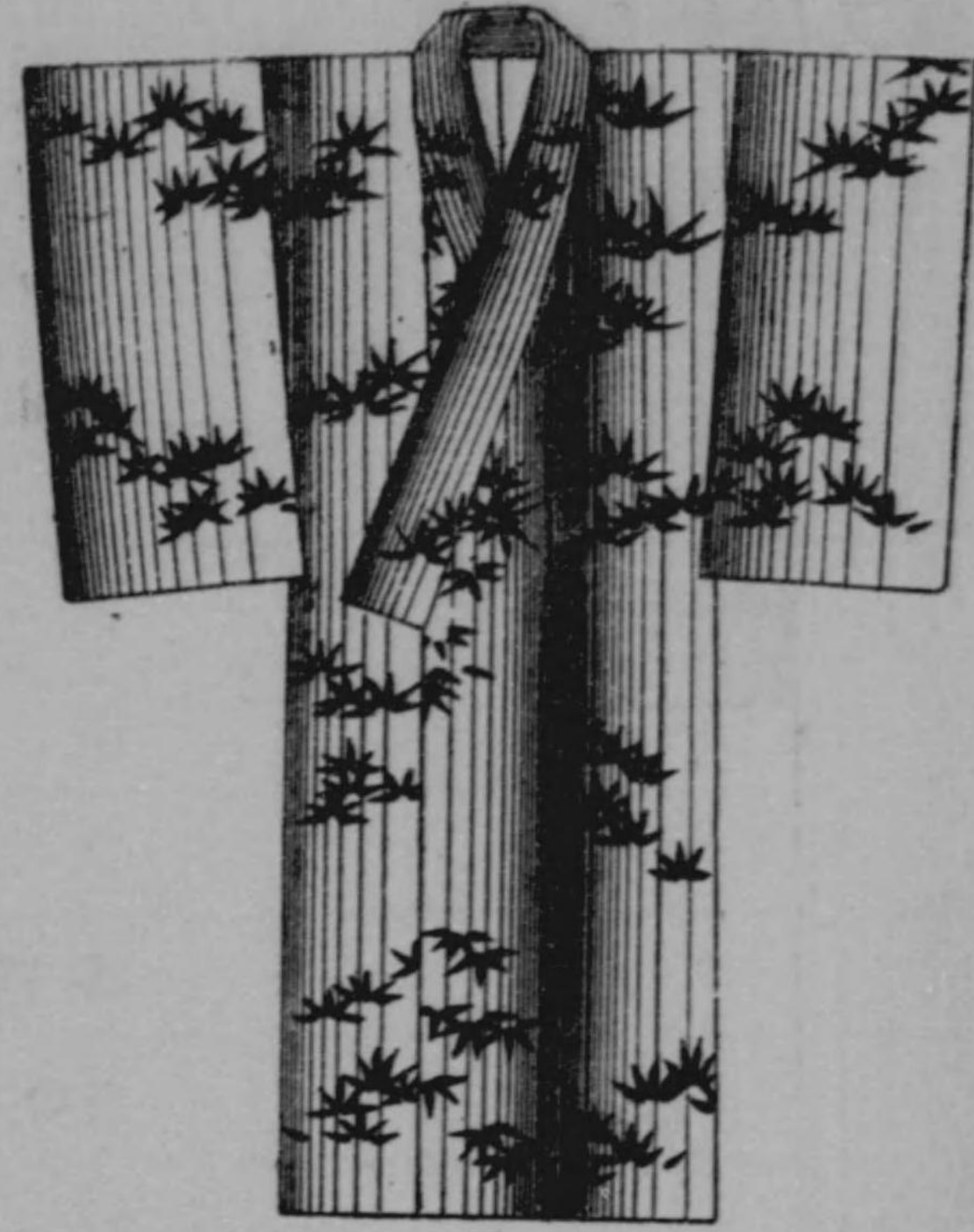
仕立上寸法

單位 cm

年齢 名稱	老年	中年	二十歳前後	十三・四歳
袖丈	53	60	70	70
袖口	23	23	23	21
袖附	26	23	17~20	—
袖幅	32.5			32
身丈	150 内外			—
衿肩明	9.5			9
身八つ口	13			11
後幅	28			27
肩幅	30			30
前幅	23			21
衿下	23			21
衿下	76			68
衿幅	15			15
相袷幅	13.5			13
衿幅	11~5.5 強			5.5強
衿	62.5			62
繰越	2			

縞又は柄の裁方





地質

綿布 木綿, 縮, 綿ネル等

絹布 銘仙, 縮緬, 紹縮緬, 御召, 上布, ジョーゼット

毛織物 モスリン, セル, ネ十等,

麻布 越後上布 薩摩上布

其他 絹麻

裁方

裁切寸法の定め方

袖丈 = 仕立上袖丈 + 3cm

身丈 = 着丈 + 25cm 乃至 30cm

裁切衿下 = 仕立上衿下 - 3cm

衿丈 = 身丈 - 裁切衿下

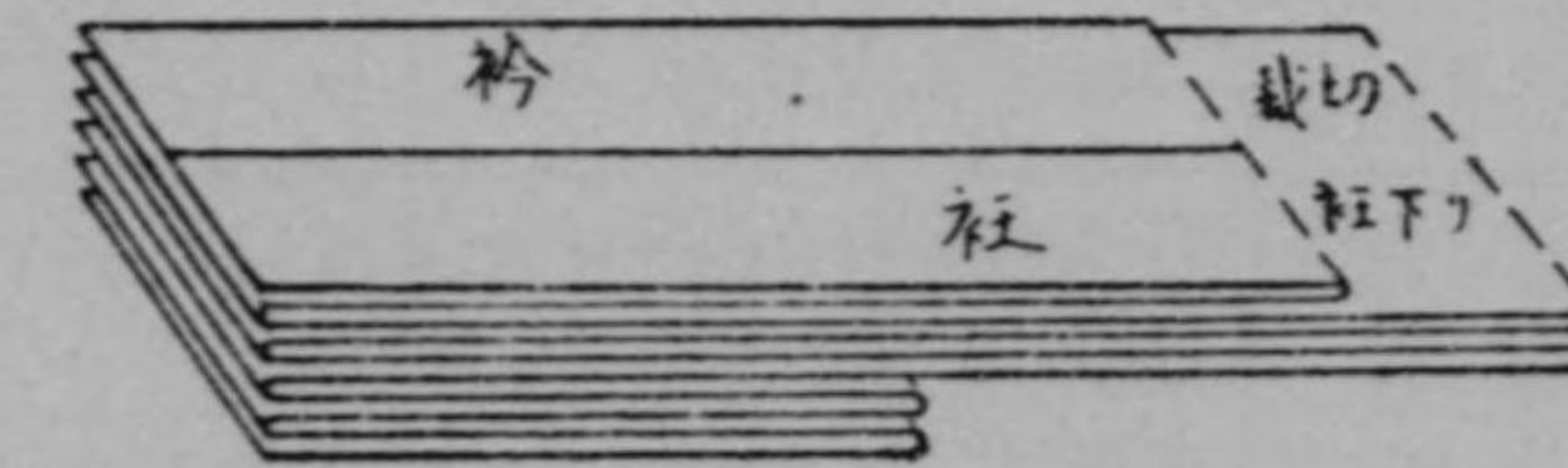
衿丈 = (身丈 - 衿下 + 13cm) × 2

(13cm = 衿肩廻 + 衿先縫代)

共衿丈 = 衿布 - 衿丈 (75cm 内外)

裁方

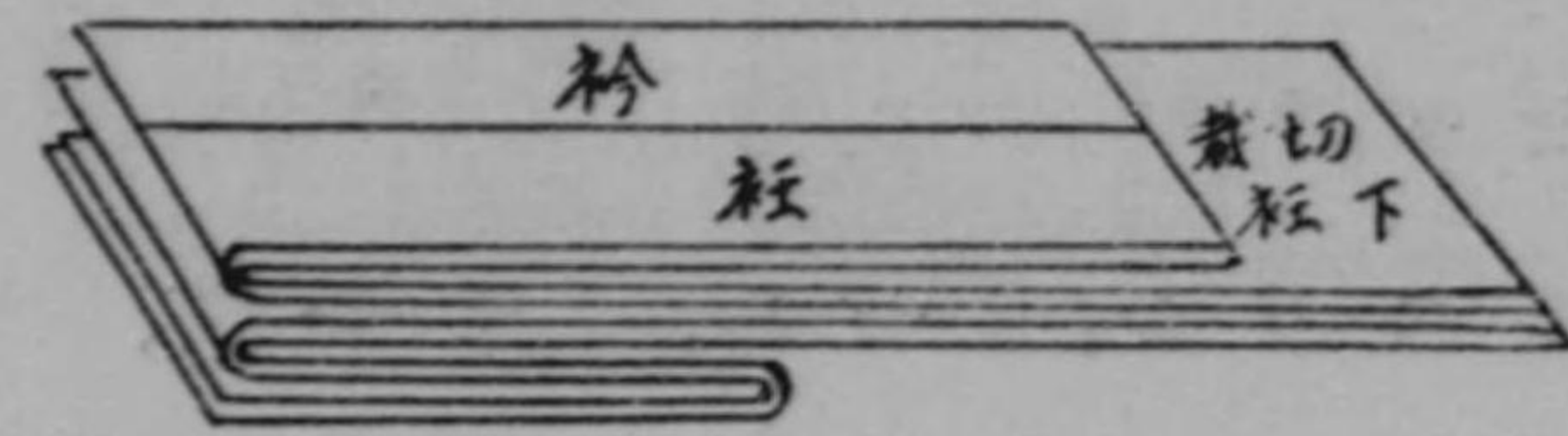
棒衿裁 (附圖第一圖参照)



棒 衿 裁 早 積 方

反物の丈を二つに折りて裁つ。

折 り 方



附圖第二圖参照

積方 (例 總用布 1140cm)

$$\frac{\text{總用布} - \text{袖丈} \times 4 + \text{裁切衿下} \times 2}{1140 - 60 \times 4 + 20 \times 2} = \text{身丈} \quad 150$$

$$\frac{\text{裁切袖丈} \times 4}{60 \times 4} = \text{袖用布} \quad 240$$

$$\frac{\text{身丈} \times 4}{150 \times 4} = \text{衿用布} \quad 600$$

$$\frac{(\text{身丈} - \text{裁切衿下}) \times 2}{(150 - 20) \times 2} = \text{衿用布} \quad 260$$

$$\text{袖用布} + \text{衿用布} + \text{衿用布} = \text{總用布} \quad 240 + 600 + 260 = 1100$$

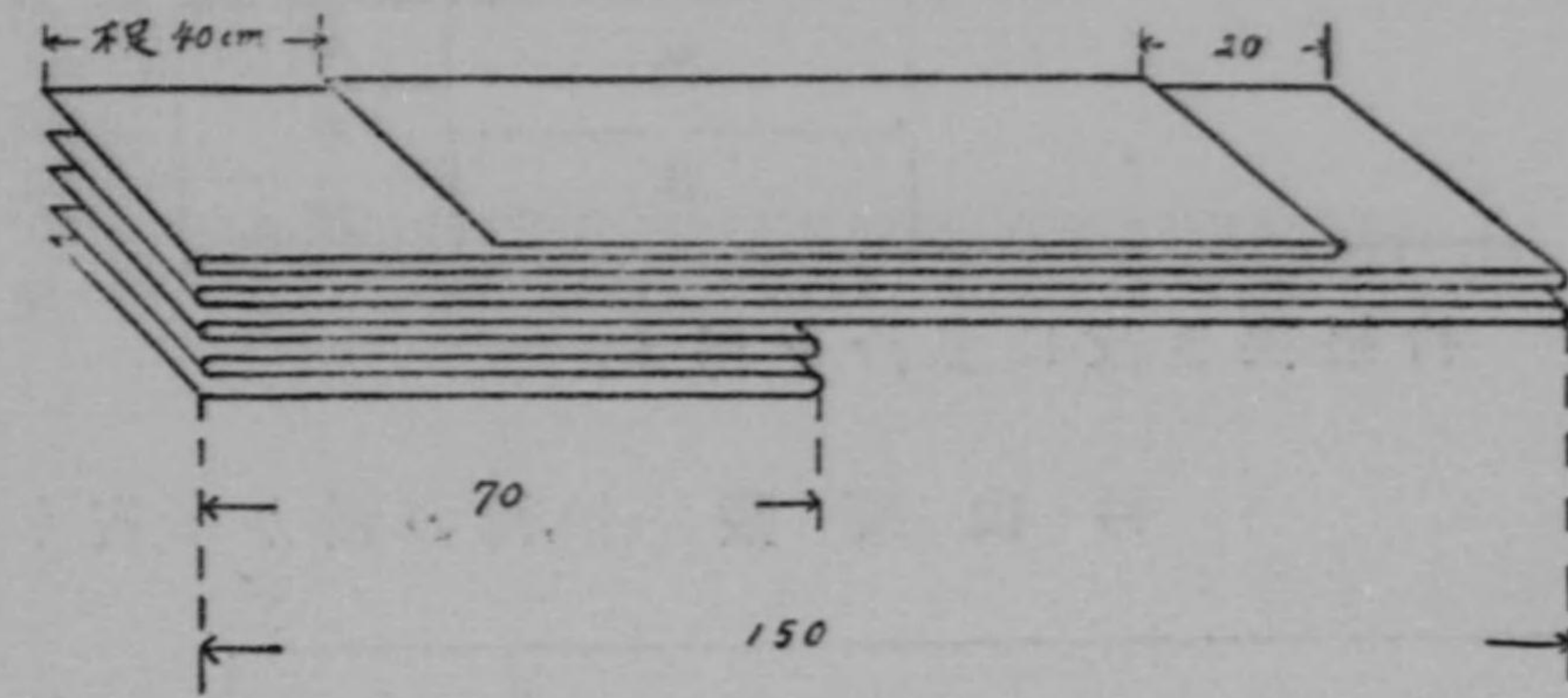
各種の裁方

總用布の長短と所定の寸法により、或は場合によりて裁方を異にする。即ち、鉤衿裁、下前衿先接ぎ裁、衿三つ割接ぎ裁、衿山接ぎ裁の種類あり。

鉤 衿 裁 總用布 1100cm

附圖第三圖参照

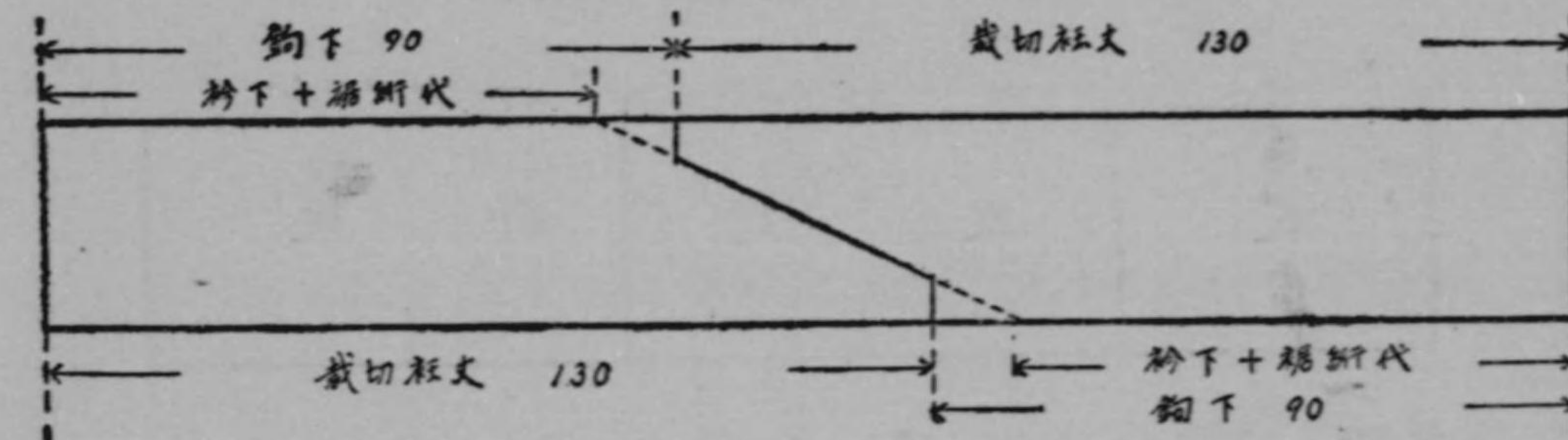
折 疊 方



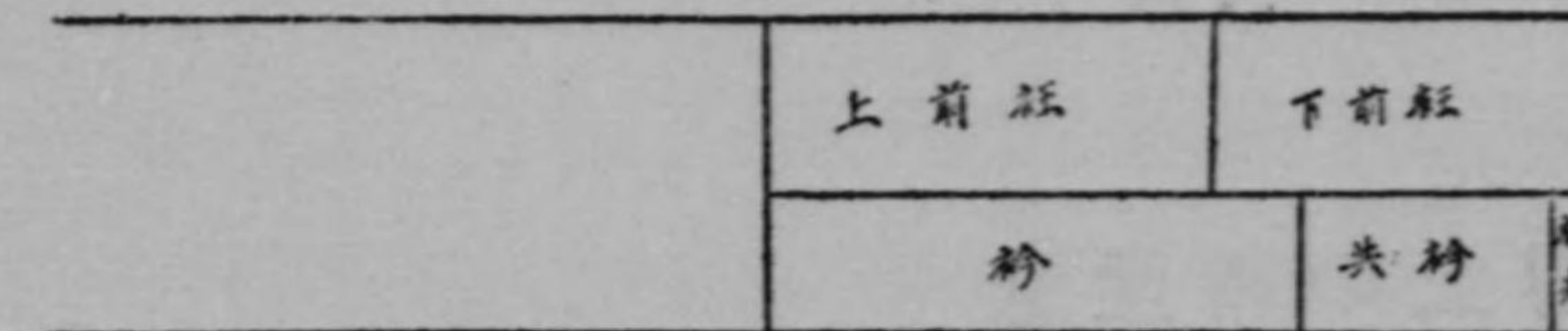
積方 (例 總用布 1100cm)

$$\frac{\text{總用布} - \text{袖丈} \times 4 - \text{鉤下} + \text{裁切衿下}}{1100 - 60 \times 4 - 90 + 20} = \text{身丈} \quad 150$$

鉤 衿



下前衿先接代



衿丈の不足は別布と下前衿先に接ぐ

衿丈の不足は別布を下前衿先に接ぐ。

衿三つ割接裁 (袖,衿の裁方は省く)

	衿	衿
	衿	衿
	衿	衿

衿幅狭き故に裏衿を用ふ。

衿山接裁 (袖,衿の裁方は省く)

	衿	衿
	衿	衿

男物長着の裏地に用ひられる。

肩當と居敷當の裁方

	40	30	29	29	30
居敷當		後	前	前	後

並幅 120cm乃至140cmを要す。

肩當丈 25cm内外前後の差を附けてもよろし。

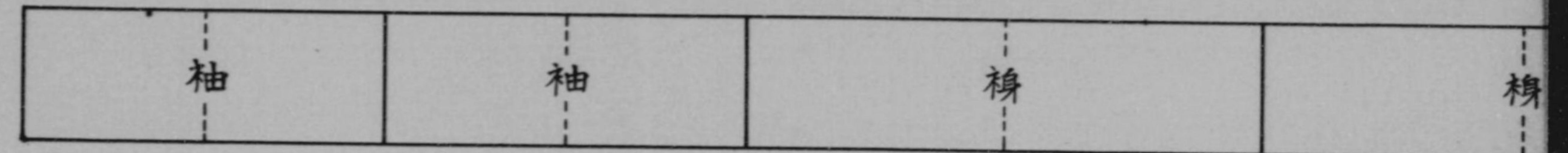
居敷當 35cm内外

備考

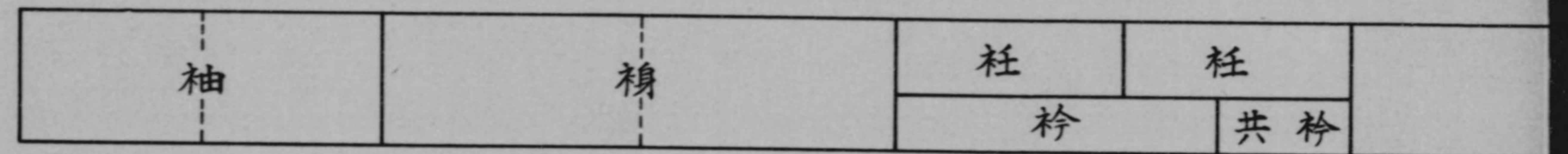
裁方實習上の諸注意

- 1 裁つ前に地直しをして布目を正しく直すこと。

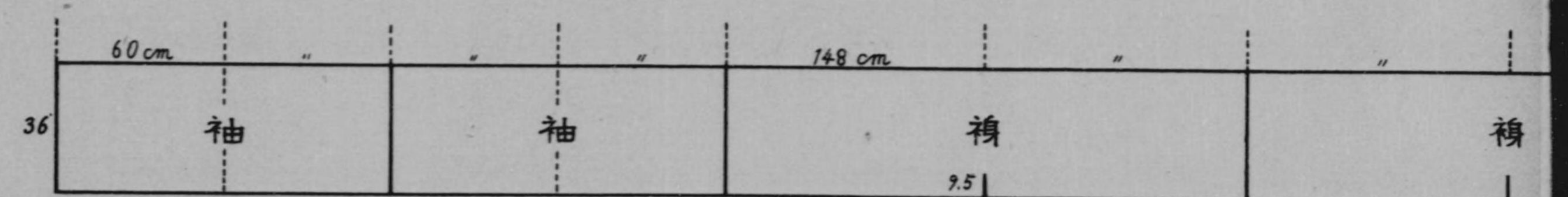
第一圖 棒衿裁方 (總用布 1140cm)



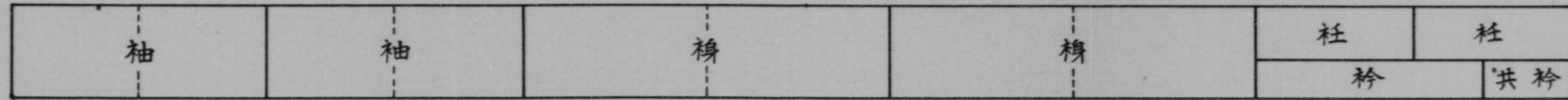
第二圖 棒衿早積り裁方 (總用布 1140cm)



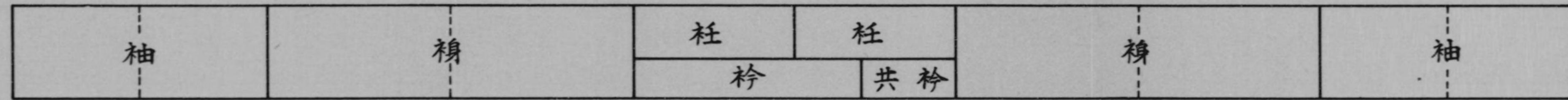
第三圖 鉤衿裁方 (總用布 1100cm)



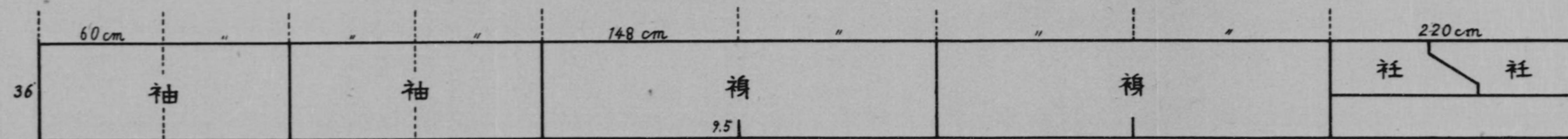
第一圖 棒衤裁方 (總用布 1140cm)



第二圖 棒衤早積り裁方 (總用布 1140cm)



第三圖 鉤衤裁方 (總用布 1100cm)



- 2 織きず、染むらを調べ、若しきずを見出したならば目立たないところへ使ふこと。
- 3 總用布を度つて必要な寸法になるかどうか積つて見ること。
- 4 大柄模様又は大柄縞物を裁つときは模様又は縞の配置を考へて裁ち合すこと。
- 5 袂を入れる前に再三調べて見ること。

仕立直し物の取扱

- 1 布數を調べること。
- 2 損所を繕つて置くこと。
- 3 定つた寸法に仕立上げ得るか否かを調べること。
- 4 標附のとき、綺麗な所を出すやうに注意すること。
- 5 切替へて丈夫なところを出すやうにする場合もある。

標 附 方

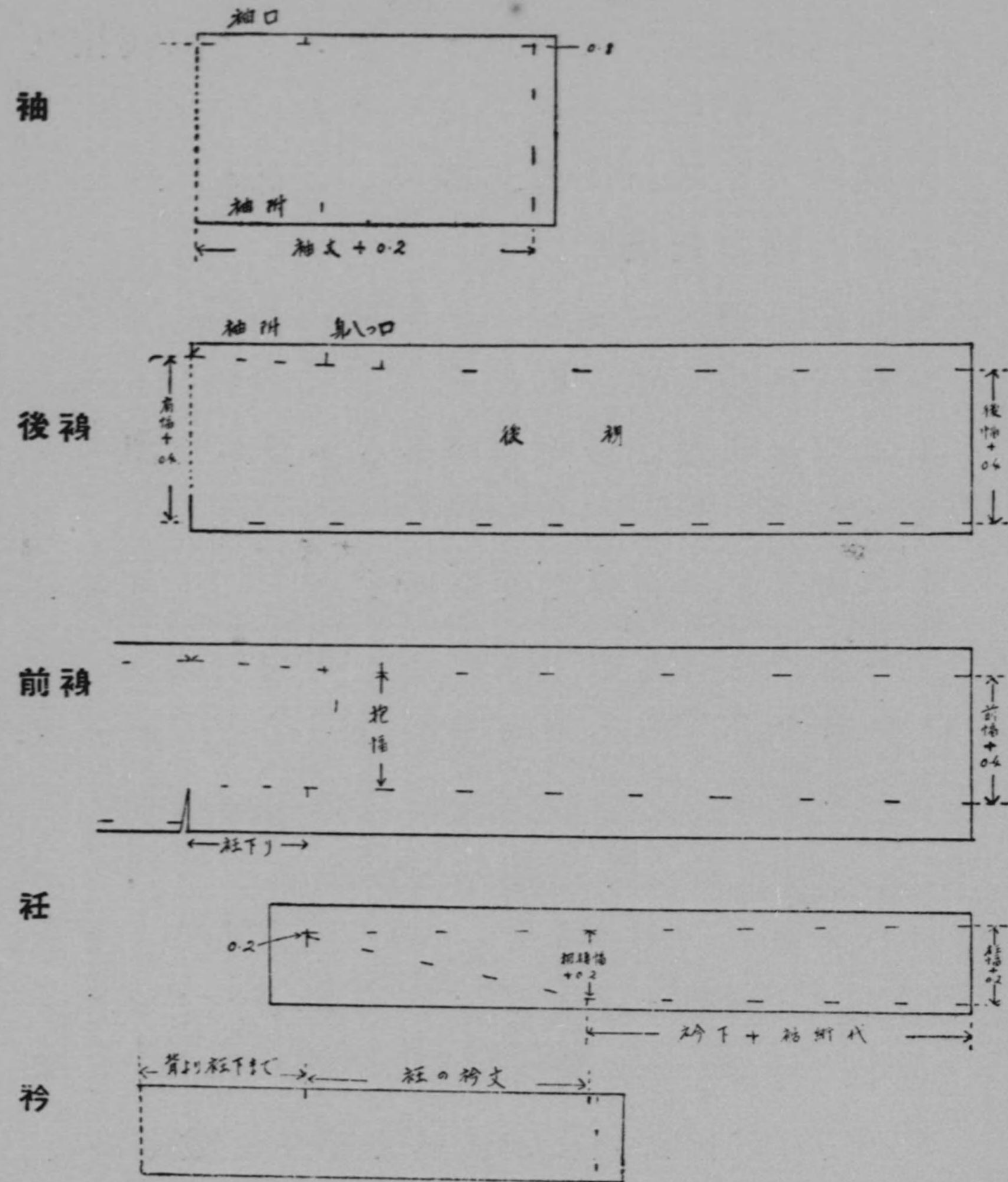
標附の注意

- 1 標附に際しては布を正しく揃へて置き、標を附け終る迄決して布を動かしてはいけない。
- 2 寸法を正確に標はなるべく小さく、數も必要

以上に多く附けないこと。

- 3 通籠や大きな十字標を附けぬこと。
- 4 標附は布を損じない程度に明瞭に附ける事。

標 附 方



繰越の附方

婦人の着物は多少衣紋をつくつて着附をする、故に衿肩に繰越を附けて仕立てる。

- 1 三つ衿を縫ひ込むて附ける方法。
- 2 繰越の寸法を袖附止りより 3cm 位下つて後襟に内揚をする方法。
- 3 衿肩明を裁ち落す方法。

縫 方

順序

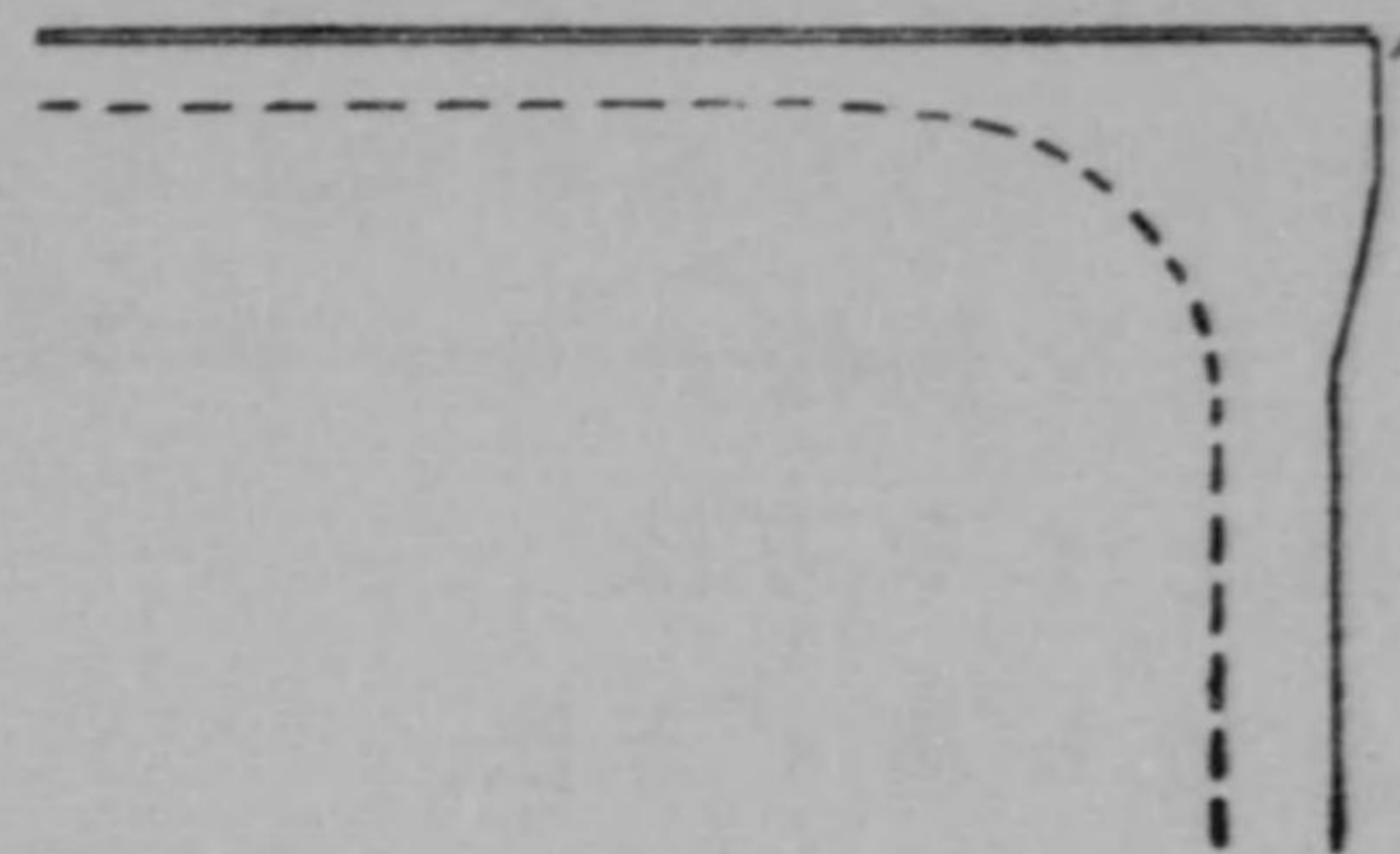
- | | |
|---------|-----------|
| 1 袖 | 2 背縫 |
| 3 肩當居敷當 | 4 脇縫 |
| 5 衿下紵 | 6 衿附 |
| 7 裾紵 | 8 衿附 |
| 9 共衿掛 | 10 袖附及び振紵 |
| 11 肩當紵附 | 12 仕上 |

方法

袖

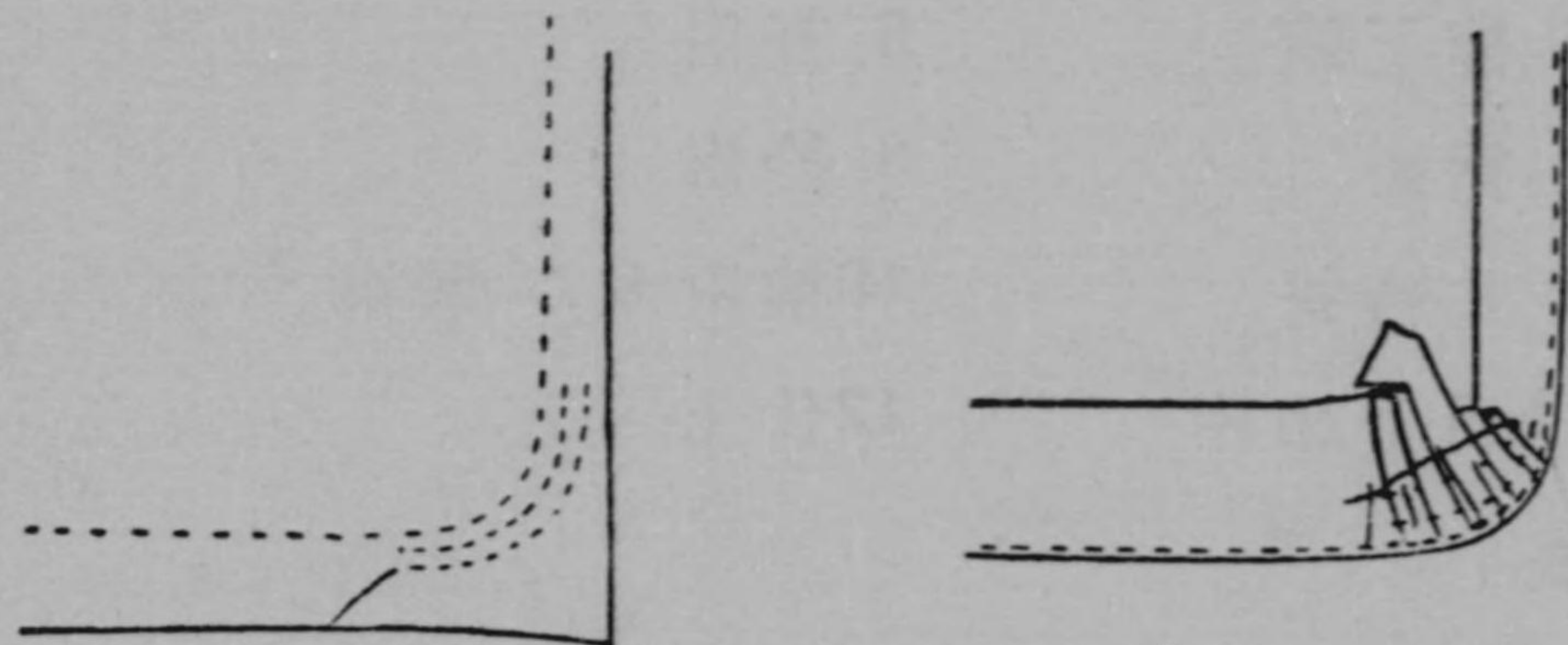
袖下袋縫、下縫は0.4cmの縫代にて両端を縫ひ残して置く、袖振口の方より縫ひ初め袖下及び袖口下を縫ひ、袖口止りの所にて抄留をなし、返縫にする、袖口の三つ折紵は袖口留り迄する。

袖形を作る時は、袂の角を廻る時に丸の標を付け、其の間は小針にて縫ふ。



袖形の仕方

圖のやうに縫ひ糸を引き締めて細かい襞を正しく整へ、落附きをよくして留める。



背縫 (二度縫)

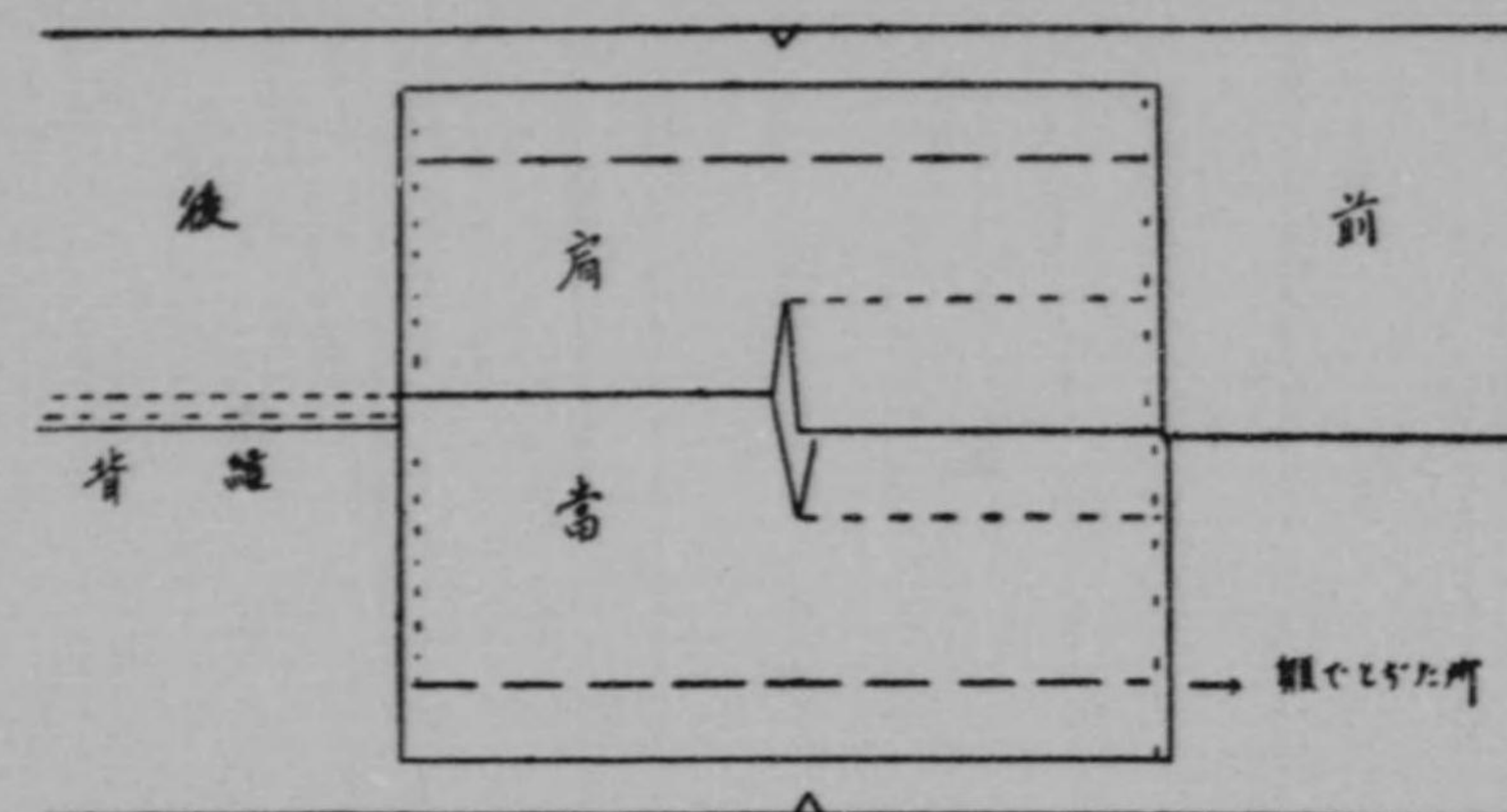
本縫をなし、二度縫は布の端を縫ふ。

肩當・居敷當

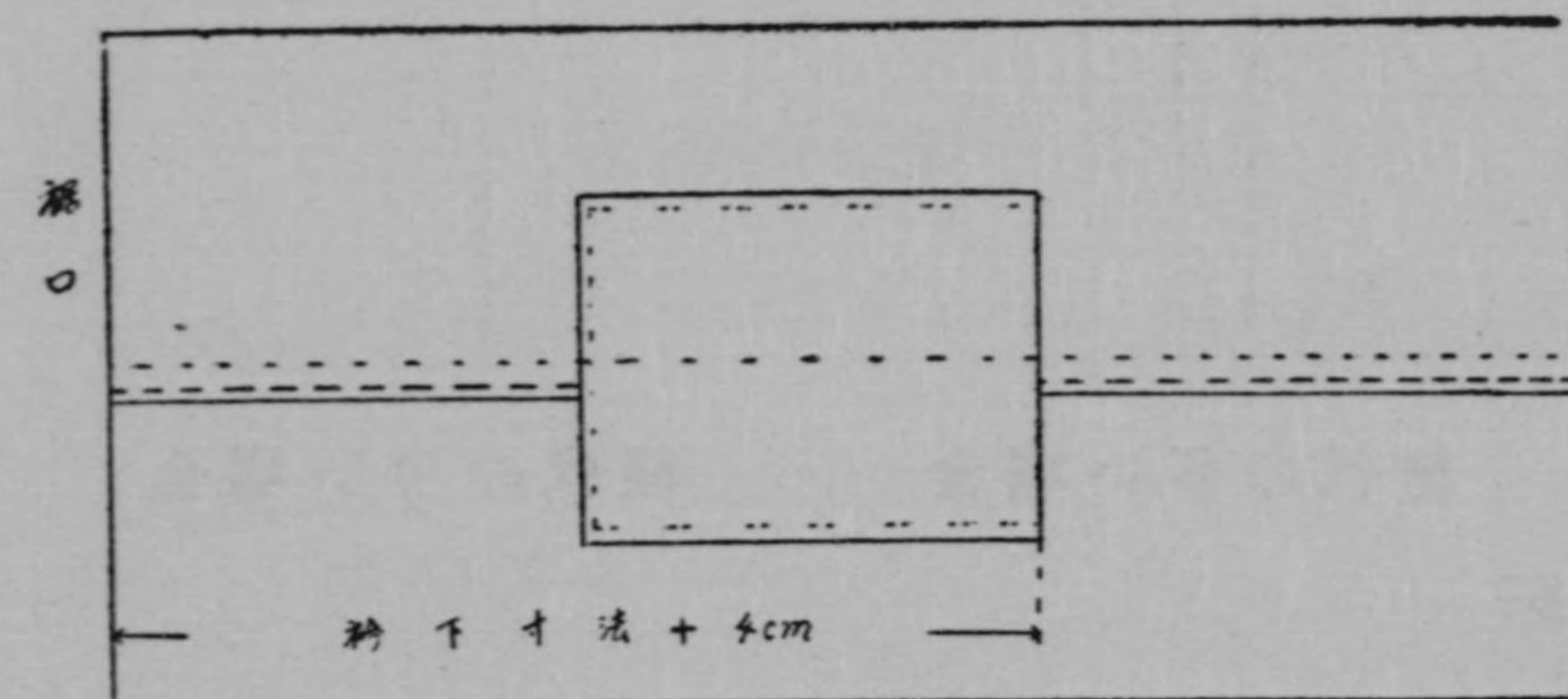
肩當の背縫をなし、丈の端を折つて伏縫をする。

附方

袖と肩當の背縫を綴ち付け、圖のやうに敷て押へて置く。



居敷當の附方

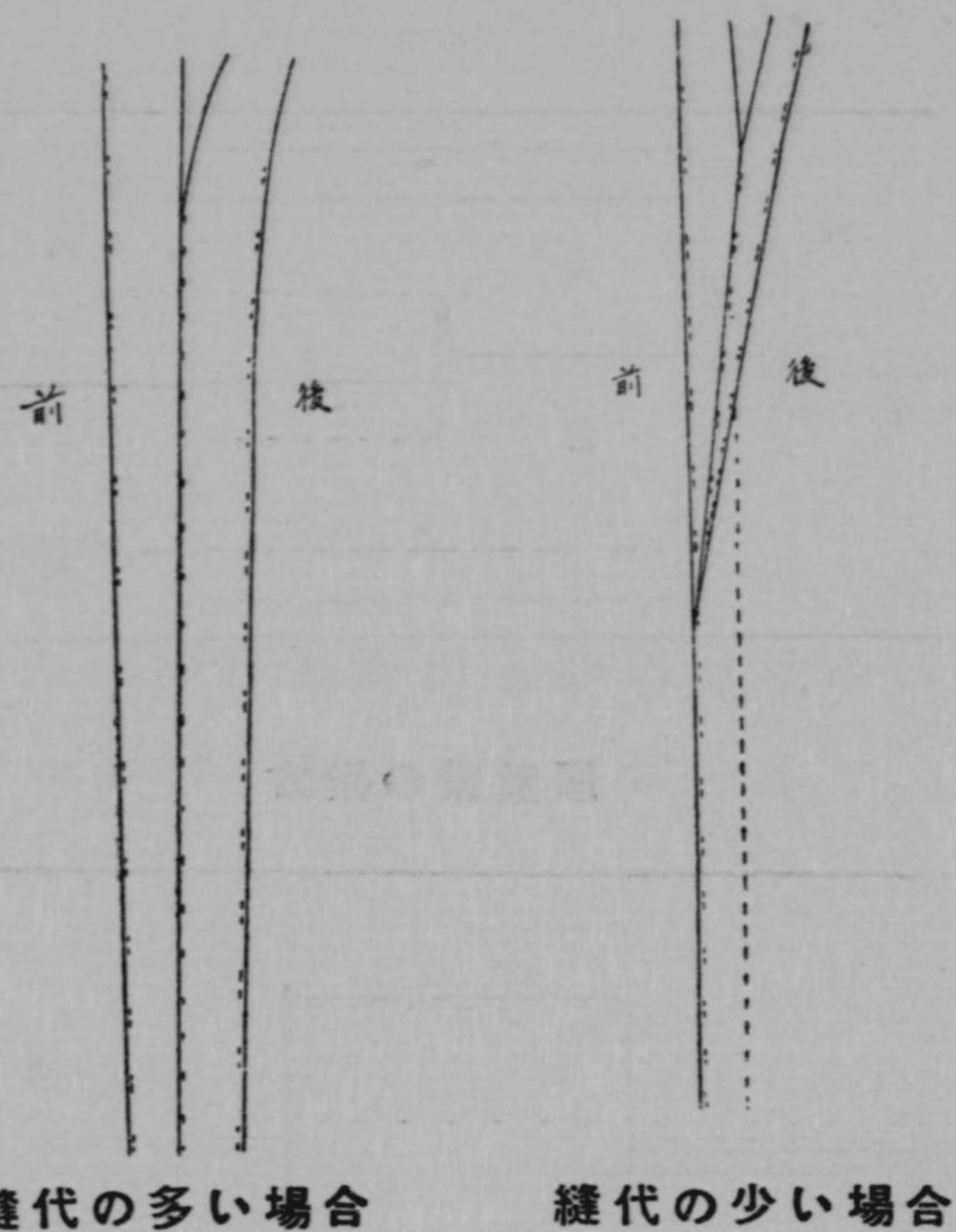


居敷當の下部を伏縫とし、背縫に綴ち付け、両端は耳衿になし、上部を衿け付ける。

脇縫

裾の方10cm位は小針に縫ひ、身八つ口止りは抄

留とし、糸こきをよくして着せを前衿に掛け、縫代は圖のやうに始末する。



衿下紵

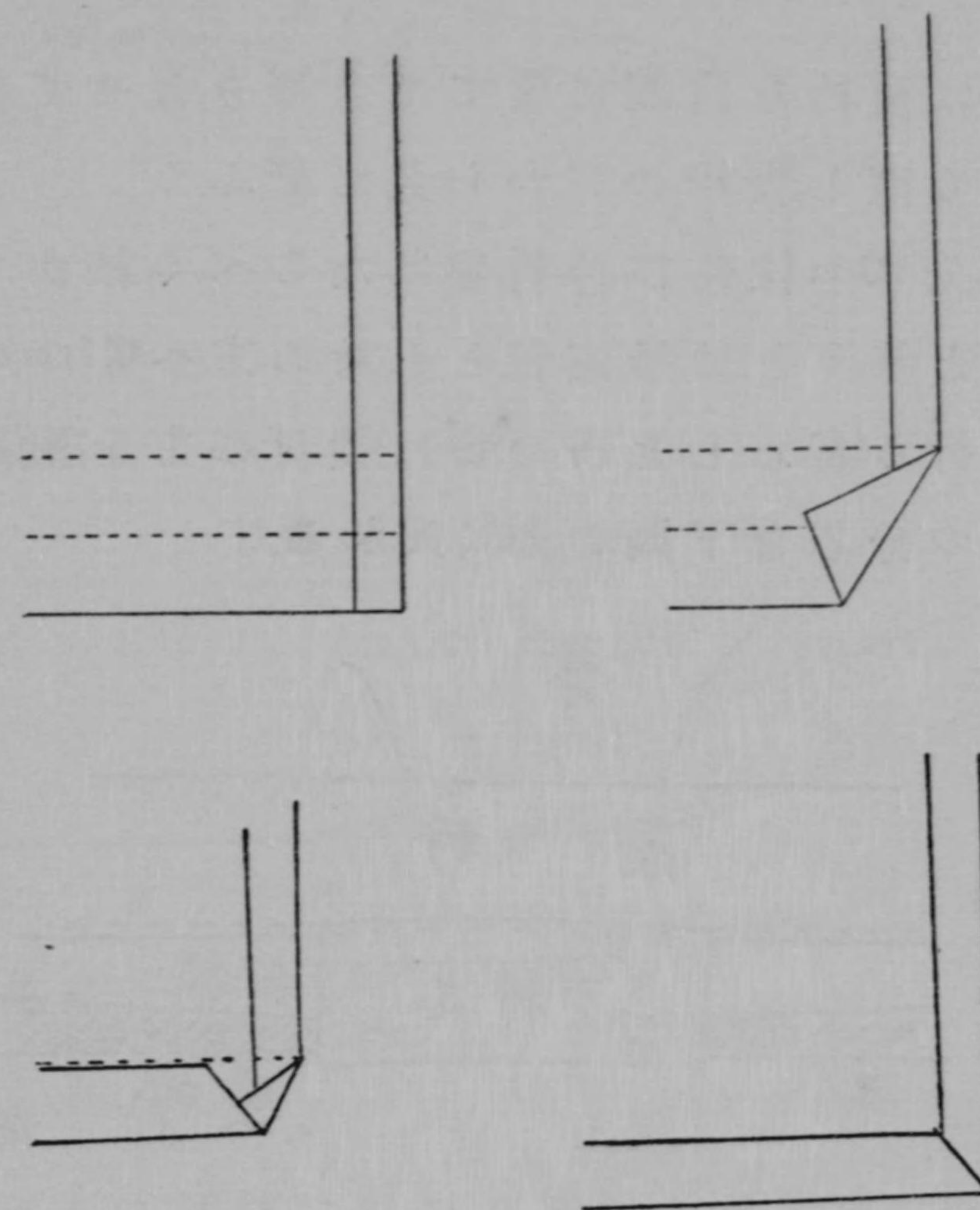
衿下の標より 5cm 位上まで三折紵になし、裾の方 3cm 紵け残す。

衿附

衿附をなし、折は衿の方へ返し、縫代の端を耳紵又は折紵となす。

裾紵

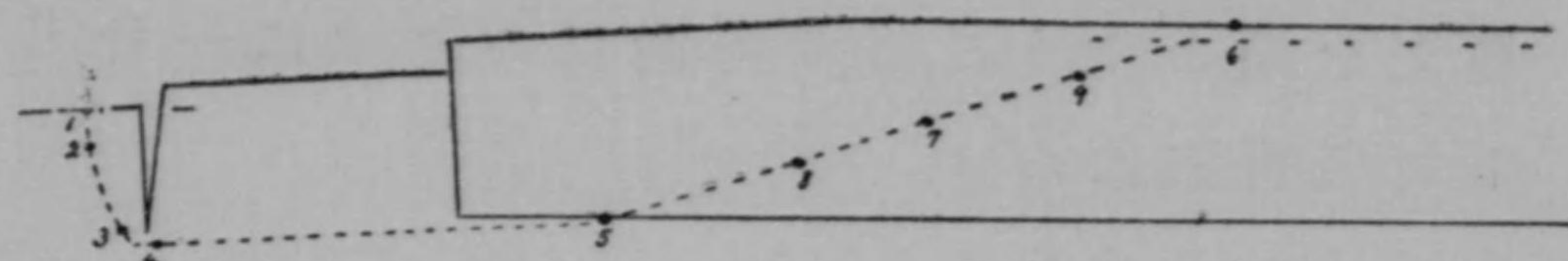
裾先を圖のやうに折り、各縫目のきはに一針出して三折紵になす。



衿附

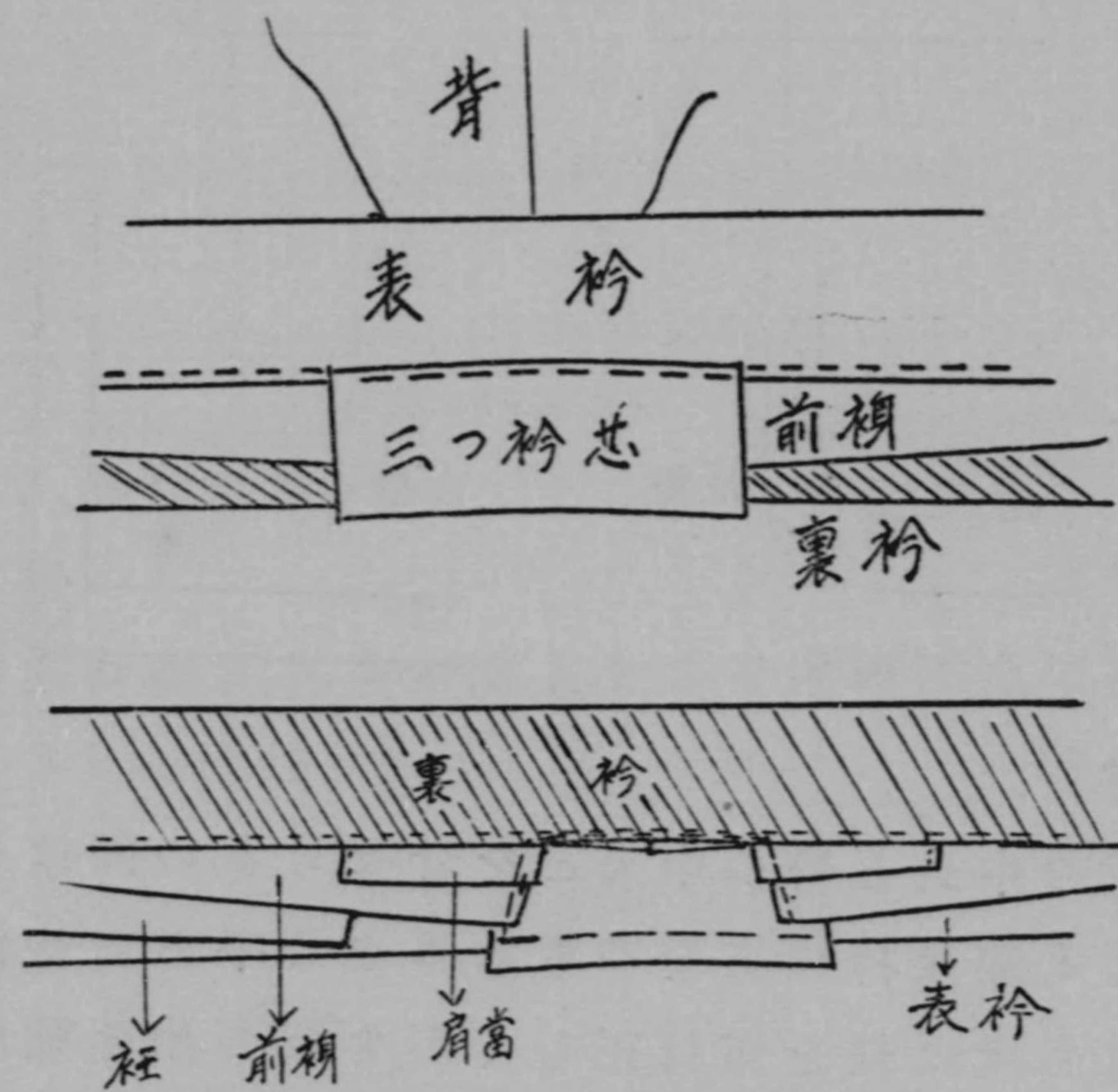
背の中央と衿の中央とを合せ 1, 2, の間は平に、3, 4, 間は衿の方をゆるめ、5 まで平らに待針を打ち次に衿を布目正しく置き、圖の如き順序に

待針を打つ。

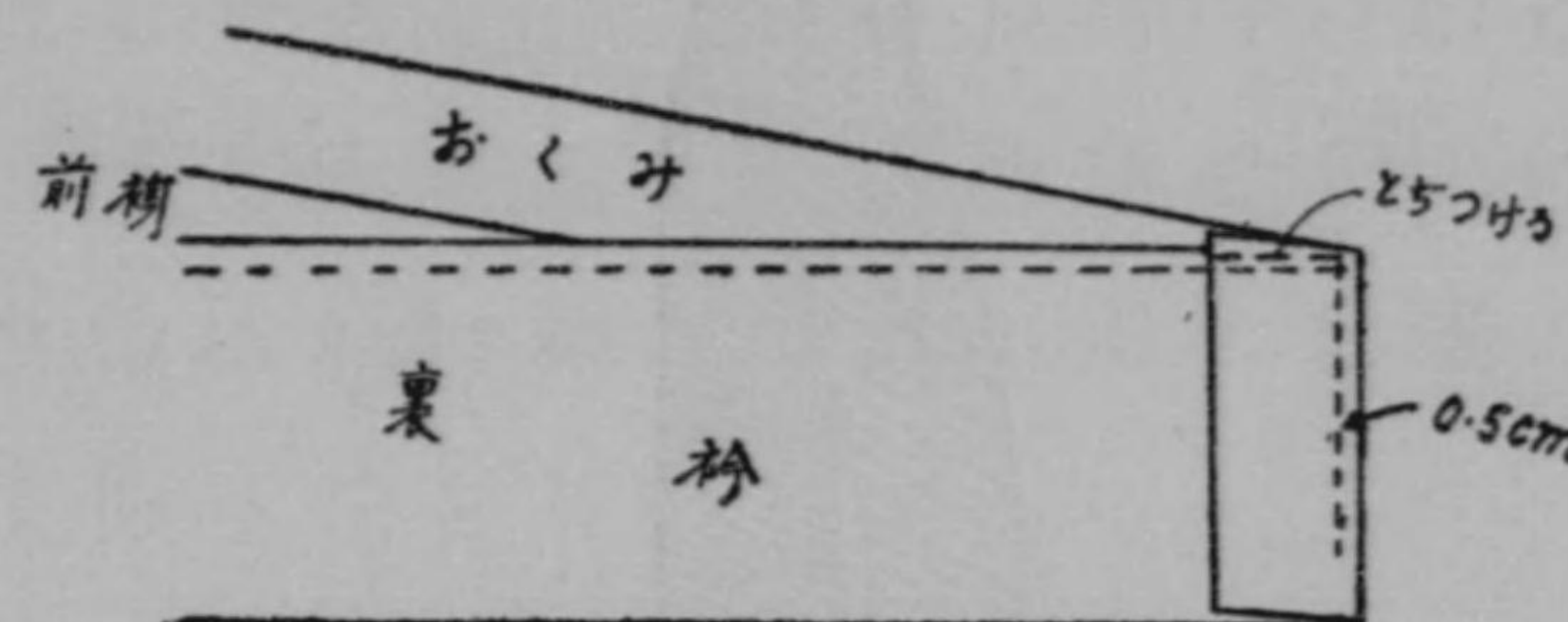


次に裏衿を向側に當てて合標を合せて待針を打ち直し、表衿の方から見て縫ふ。

衿先10cm位及び衿肩廻はなるべく細かく縫ひ、始と終りとは、抄返留とし、衿の方へ0.1cmの着せで折る(新らしき布の時は裁目の方を付ける) 三つ衿芯を下圖の如く入れる。

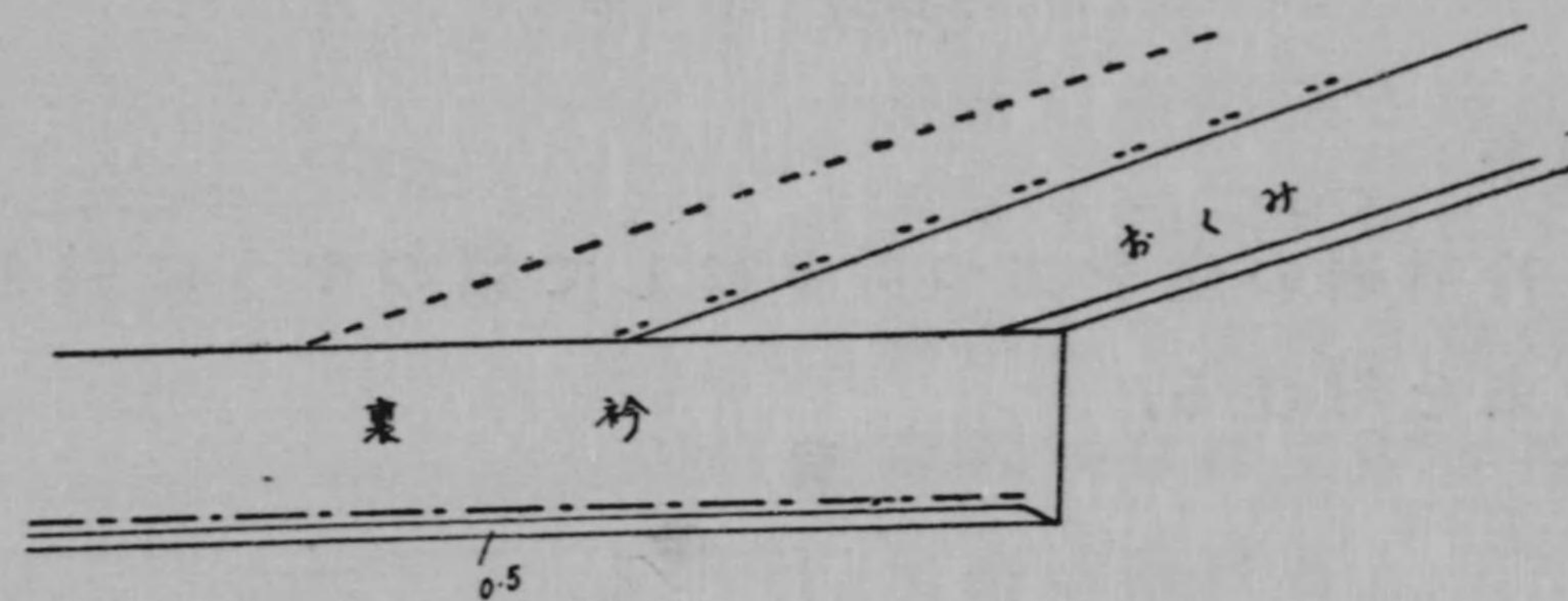


衿先を縫ひ、縫込を裏衿の方へ折つて縫目に綴ち付け、表に返す。



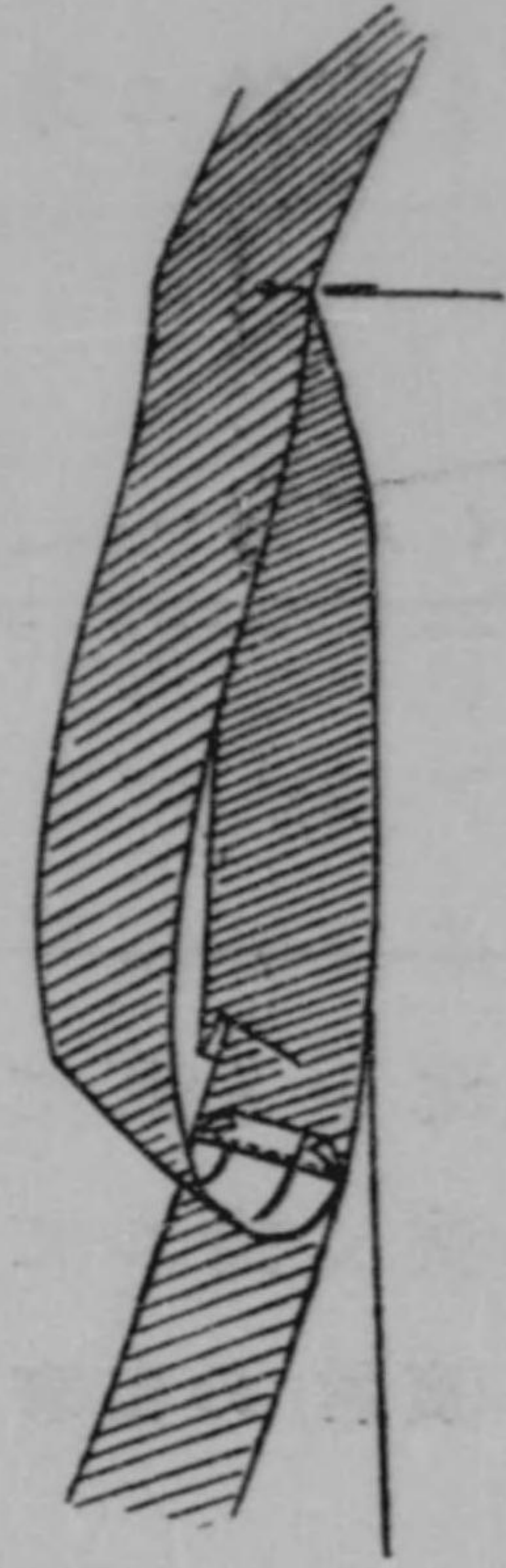
表衿に縫込の總てを入れて標通りに折り、裏衿は表幅より0.5cm狭く折つて衿け付ける。

衿先(廣衿)の出来上り圖



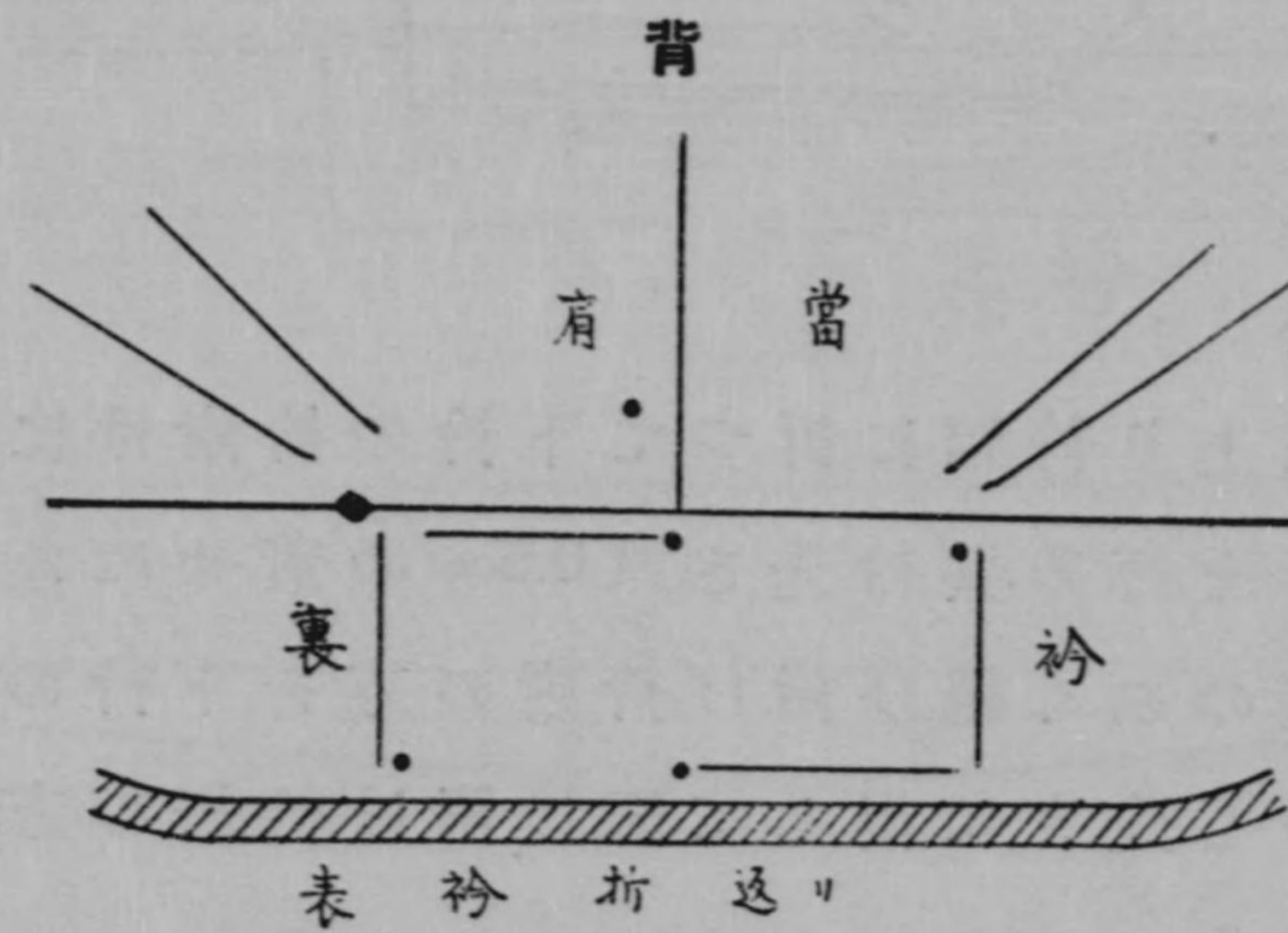
共衿掛

出来上り衿幅に折つて下衿の衿付けに揃へて待針を打ち、共衿先きは0.5cmの着せになるやうに圖の如く縫ひ付け、衿附の方を下衿の着せより少し先きに出して衿け付け、衿衿の方も衿け付ける。



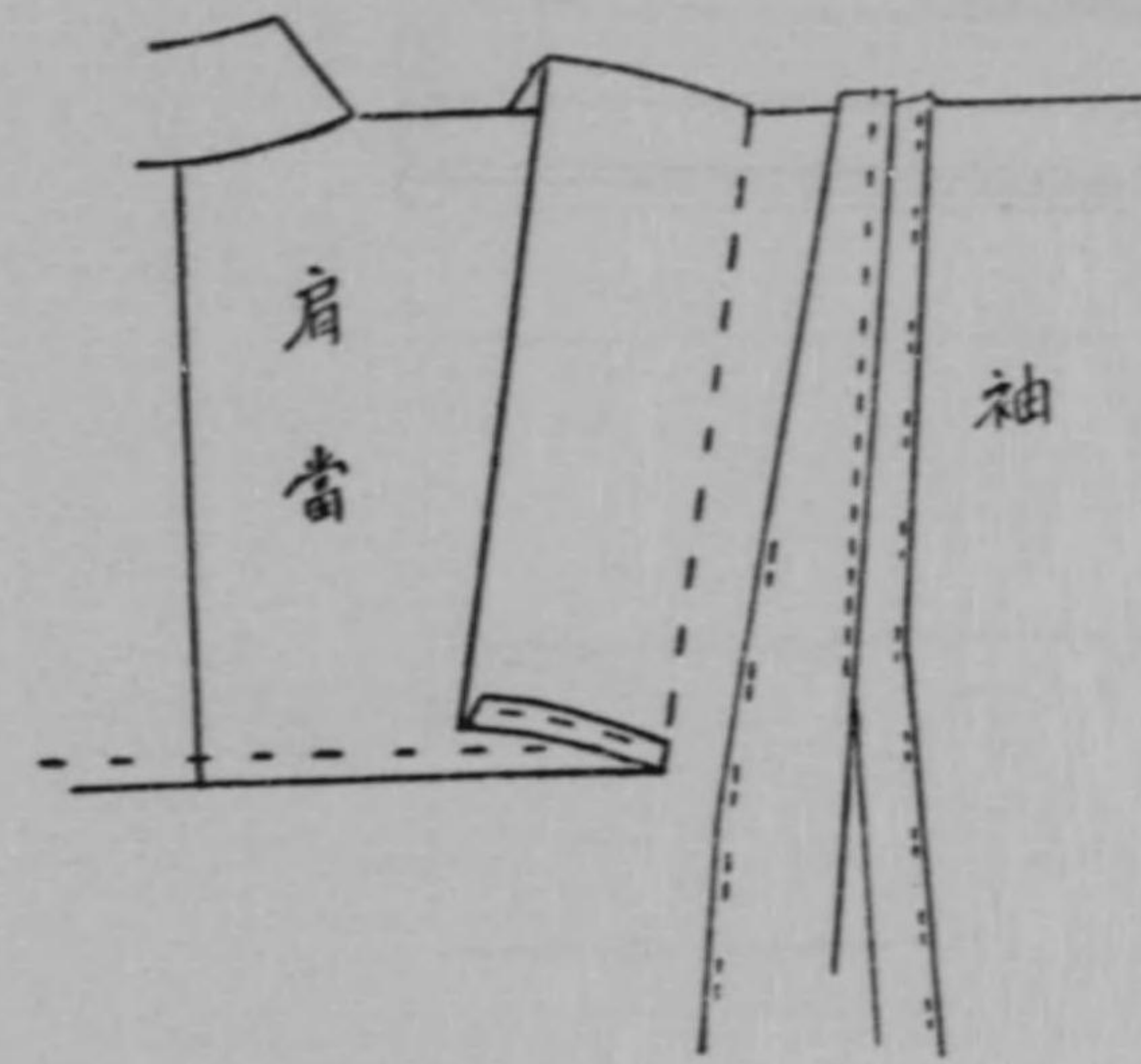
引糸

衿肩廻の處を二つ折りにして圖のやうに引き糸を付ける。



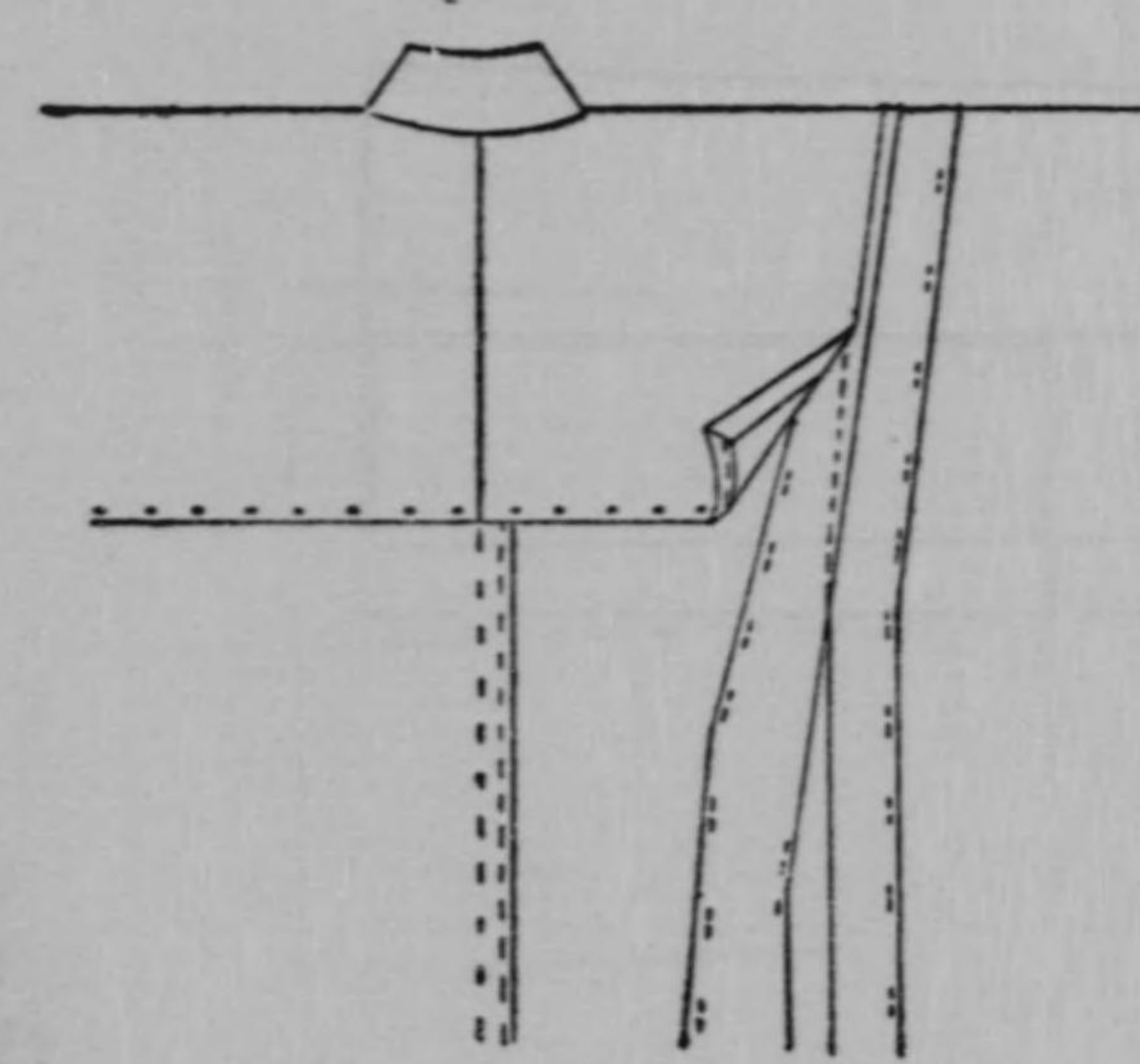
袖附及び振紵

肩當を除き衿の肩山にて0.4cmの縫代として袖の山標と合せて待針を打ち、袖附の始と終りは衿の方、折り山を極く浅く抄ひて2cm位半返しに縫ひ、他は針目細かく縫ふ、着せを浅く袖の方へ返し、振八つを耳紵とする。



衿を裏返して裏を上に出し、肩幅の幅を衿の袖附の折山に揃へて、裏へ折りて紵け付ける。

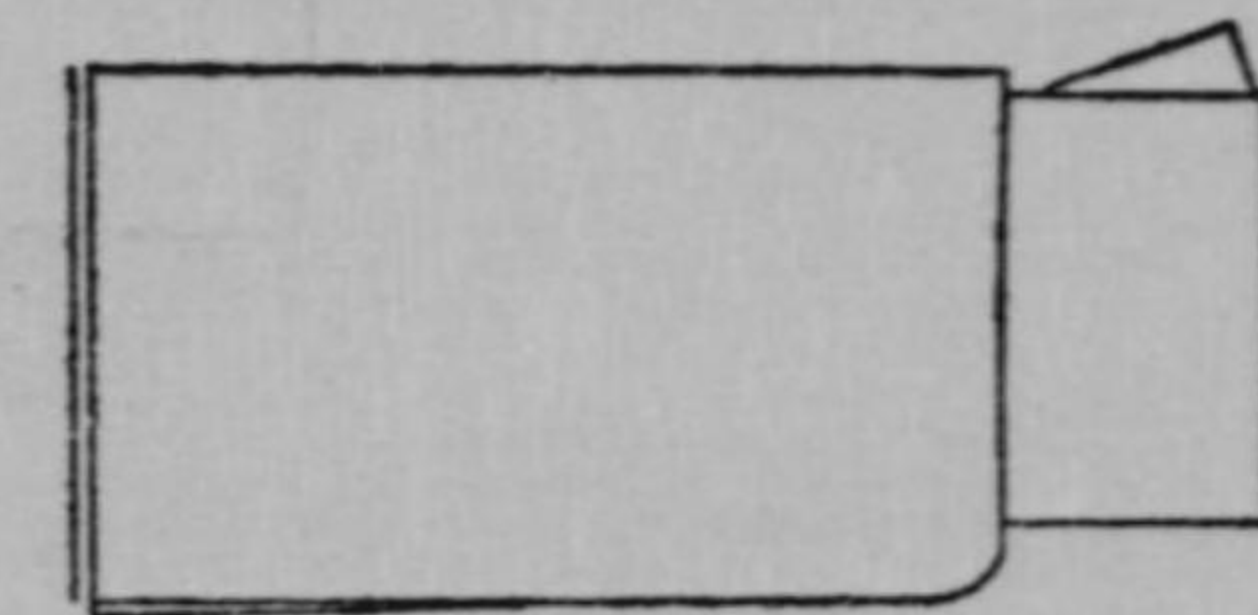
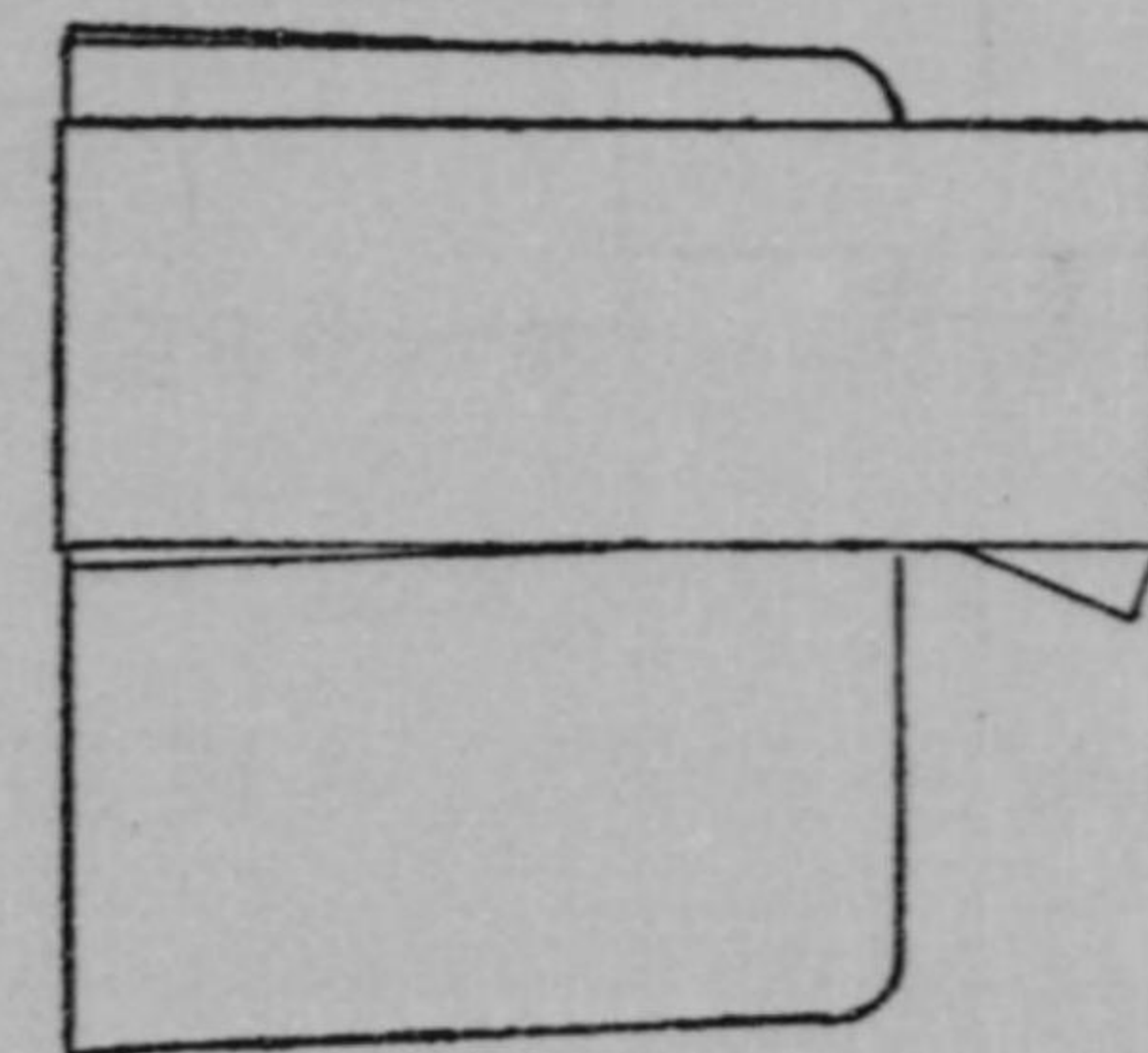
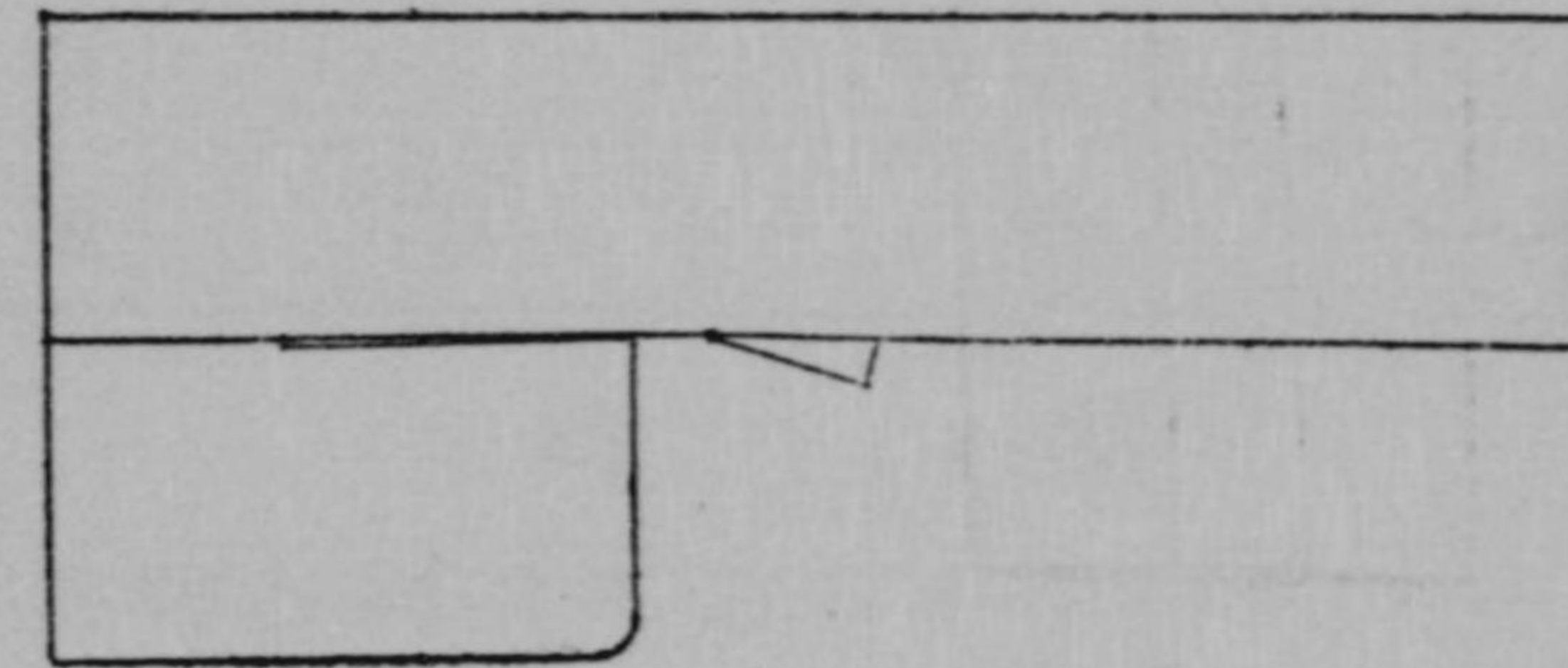
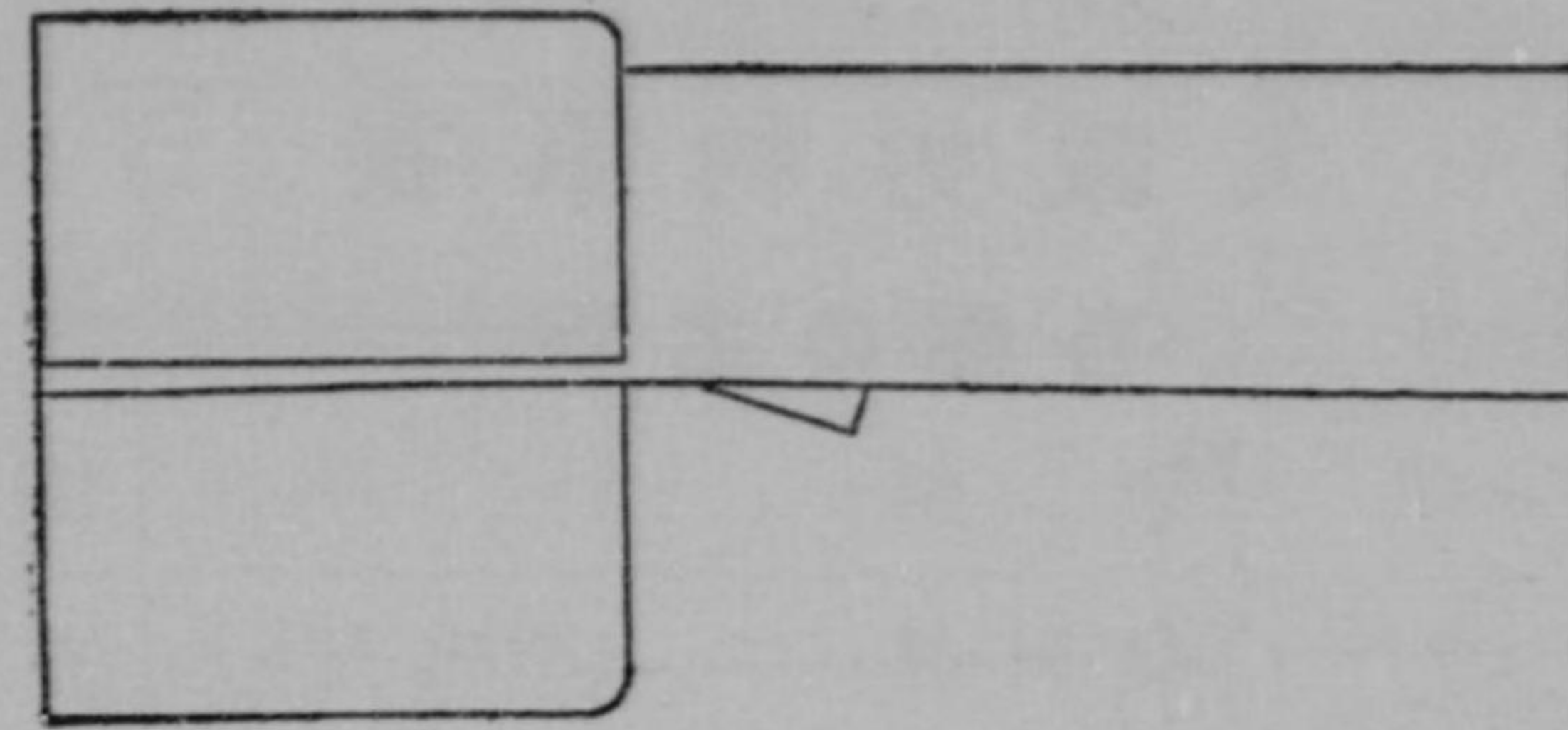
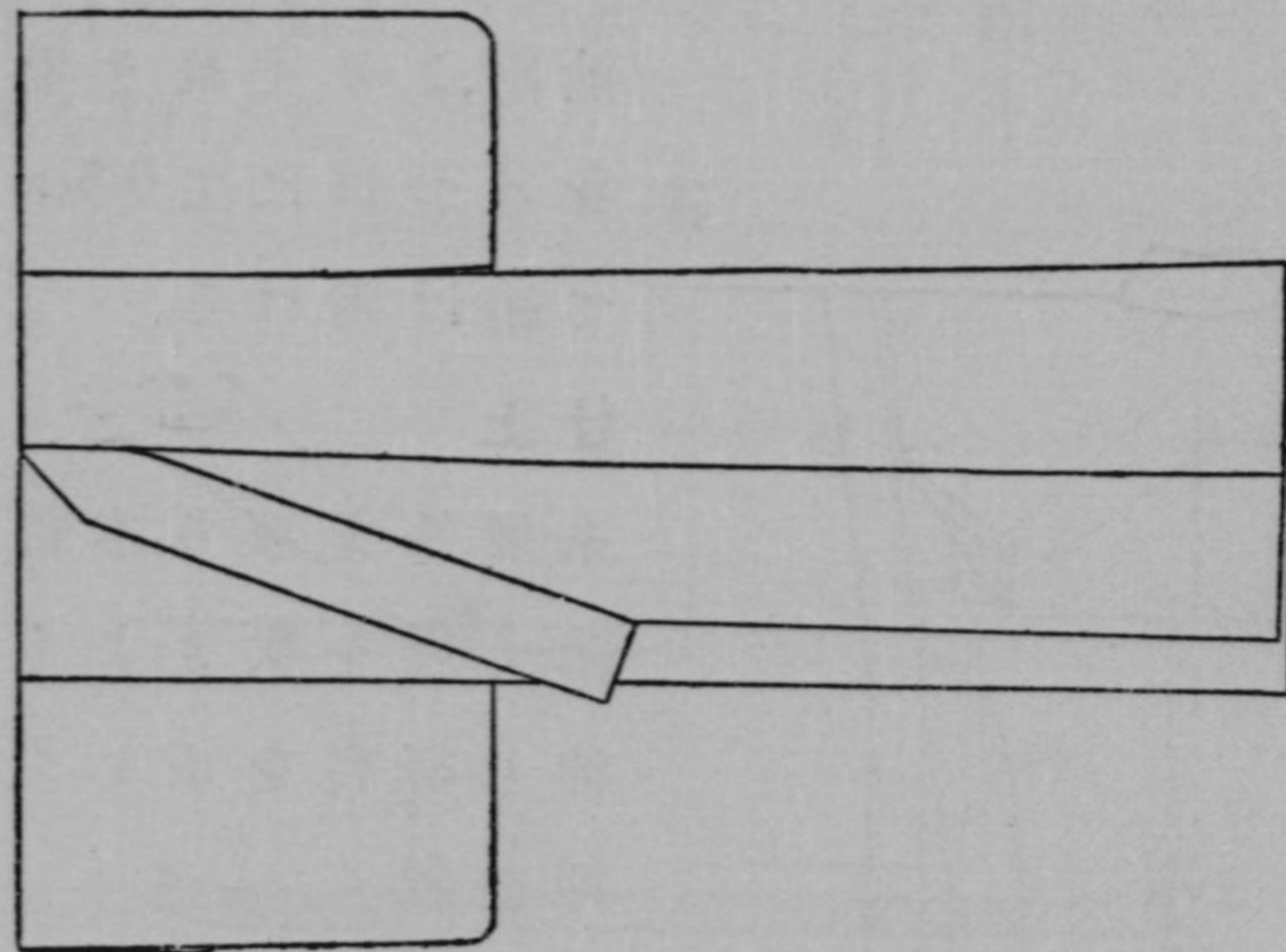
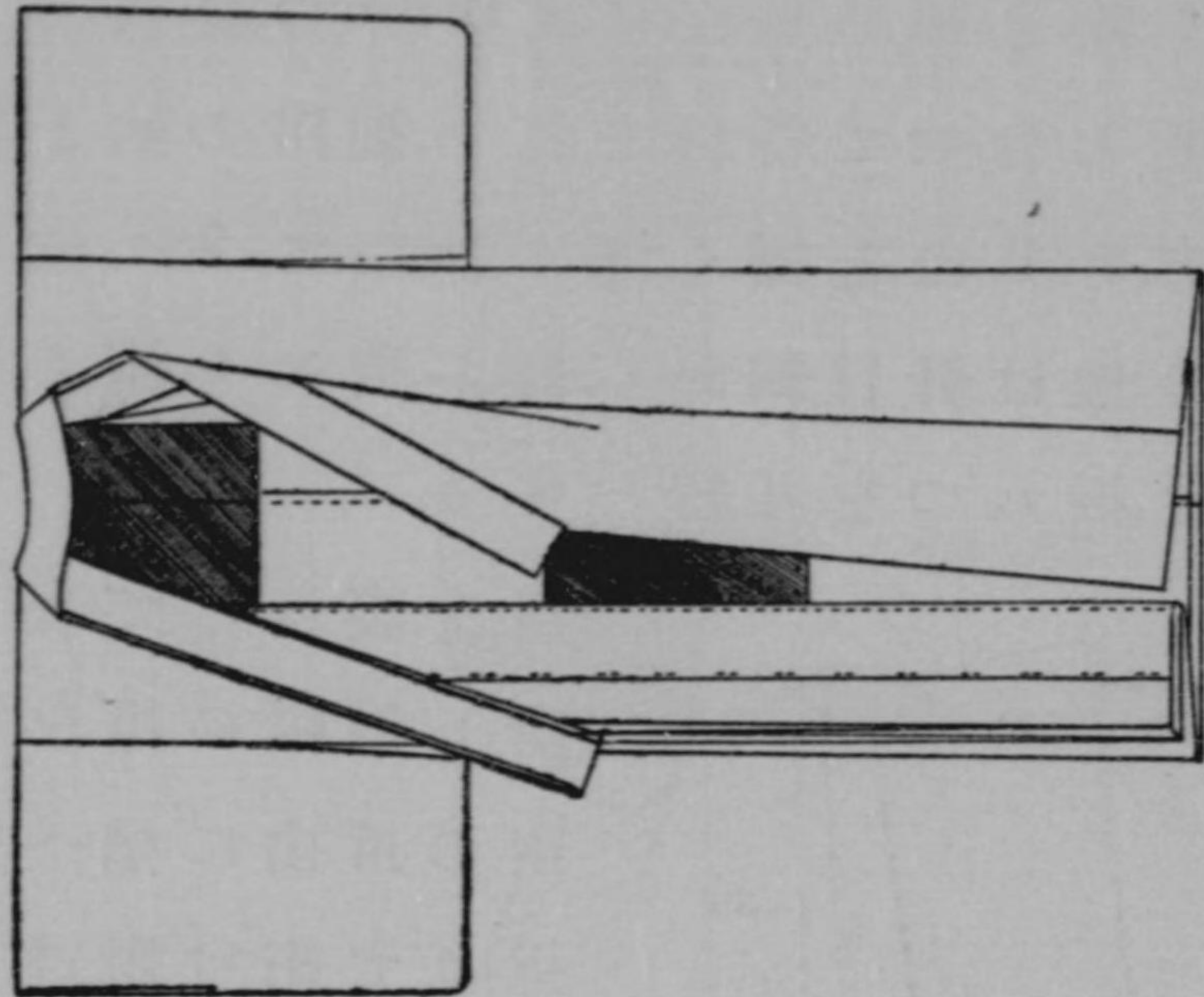
肩當の布幅狭き時は其のまま衿へ耳紵にする、袖附より丈長き場合は身八つ口にて0.5cm控えて紵け付ける。



仕上

糸屑等を取り、木綿物は薄く霧を吹き、よく皺を伸し縫目を正しく疊み押を置く。

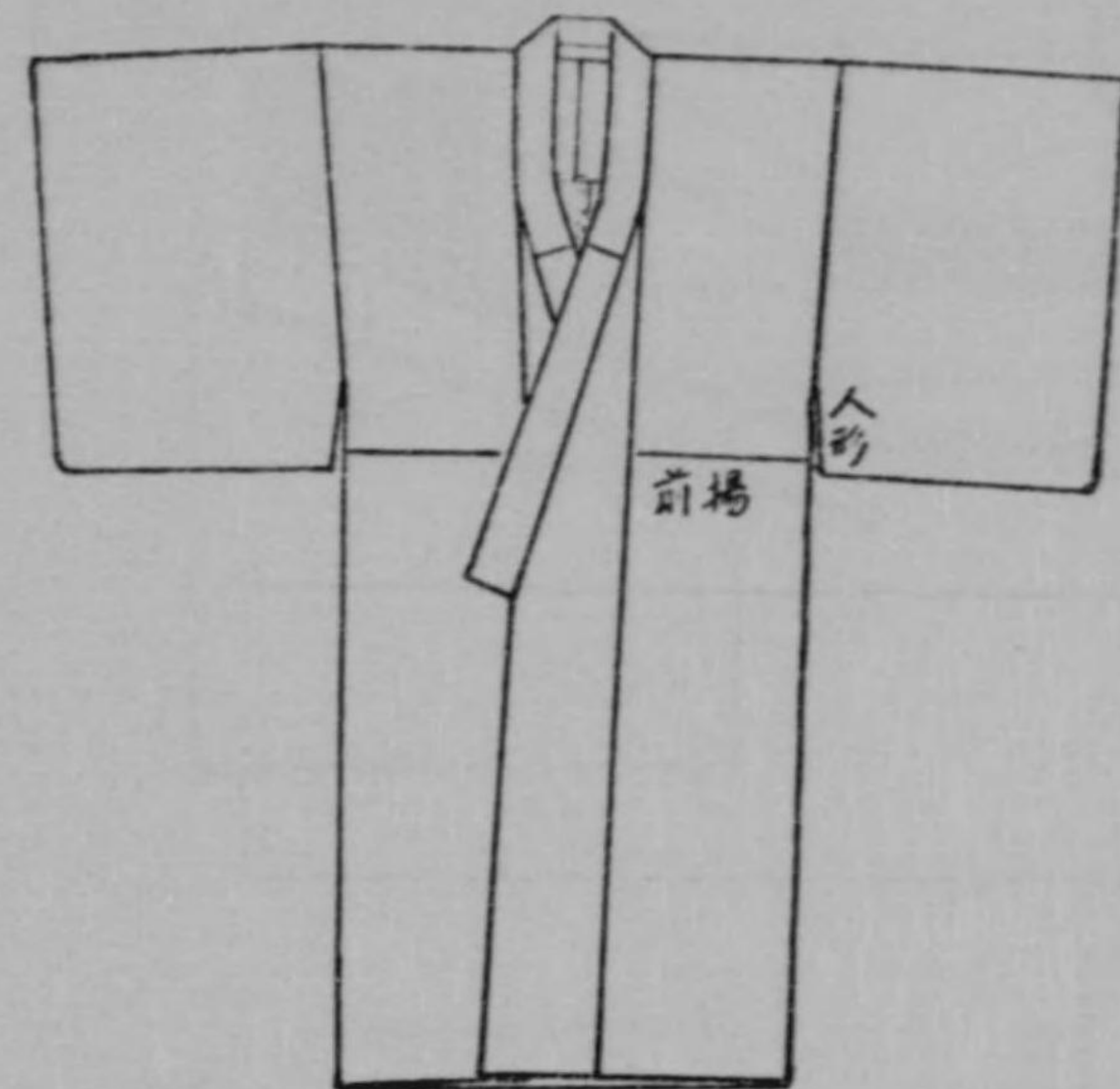
疊 方



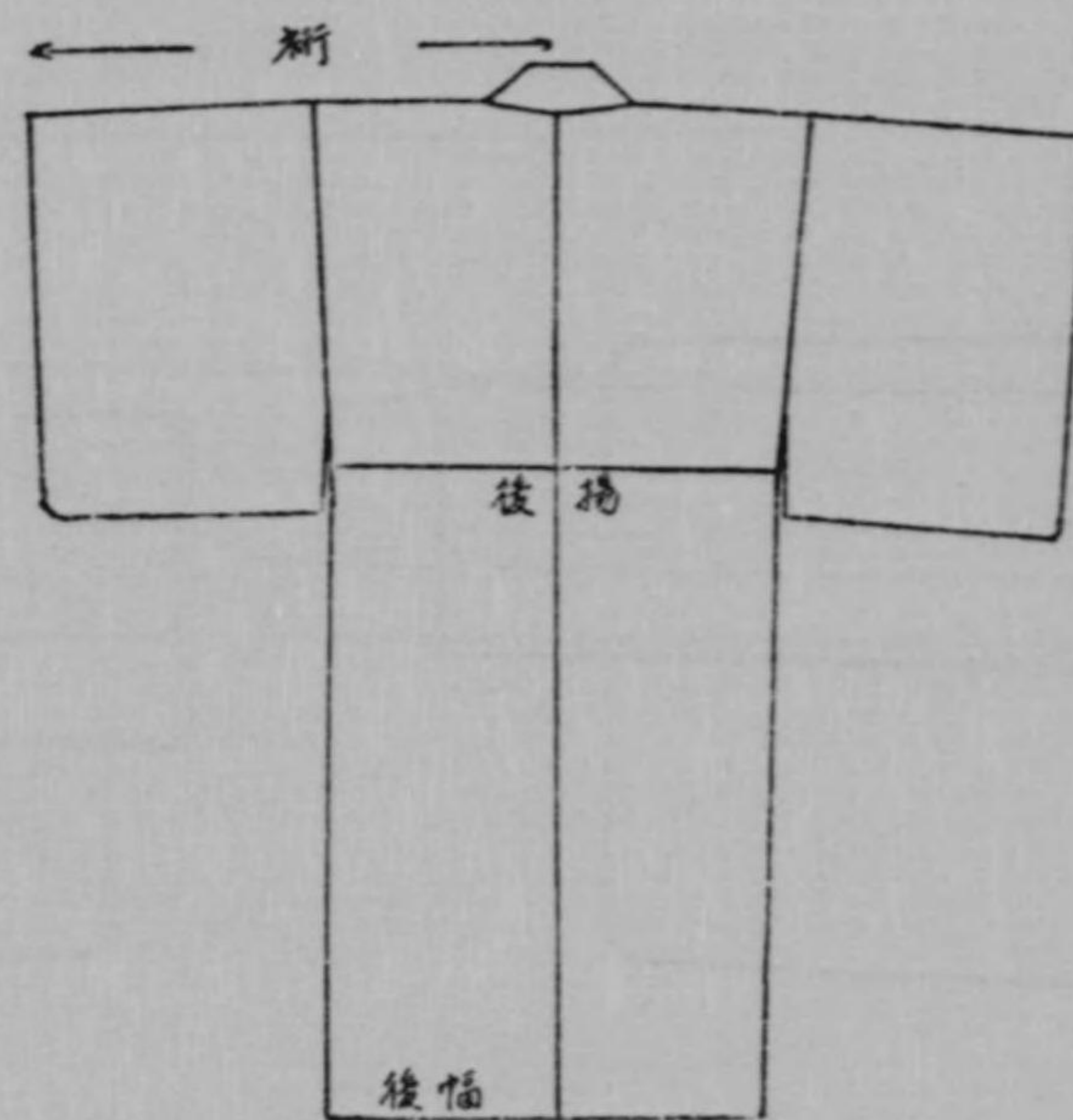
第四章 大裁男物單衣

各部の名稱

前



後



仕立上寸法

單位 cm

名稱	寸法	名稱	寸法
袖丈	53 内外	袖口	28~30
袖附	43	袖幅	33~34
身丈	137 内外	衿肩明	9.5 (裁切)
人形	10	後幅	30
肩幅	32~33	前幅	25
衿下	21	衿下	65
衿幅	15	相裊幅	13.5
衿幅	6 弱	衿	65~67

地質

大體女物と同じであるが縮緬類は一般に用ひられない。

裁方

大裁女單衣に同じ。

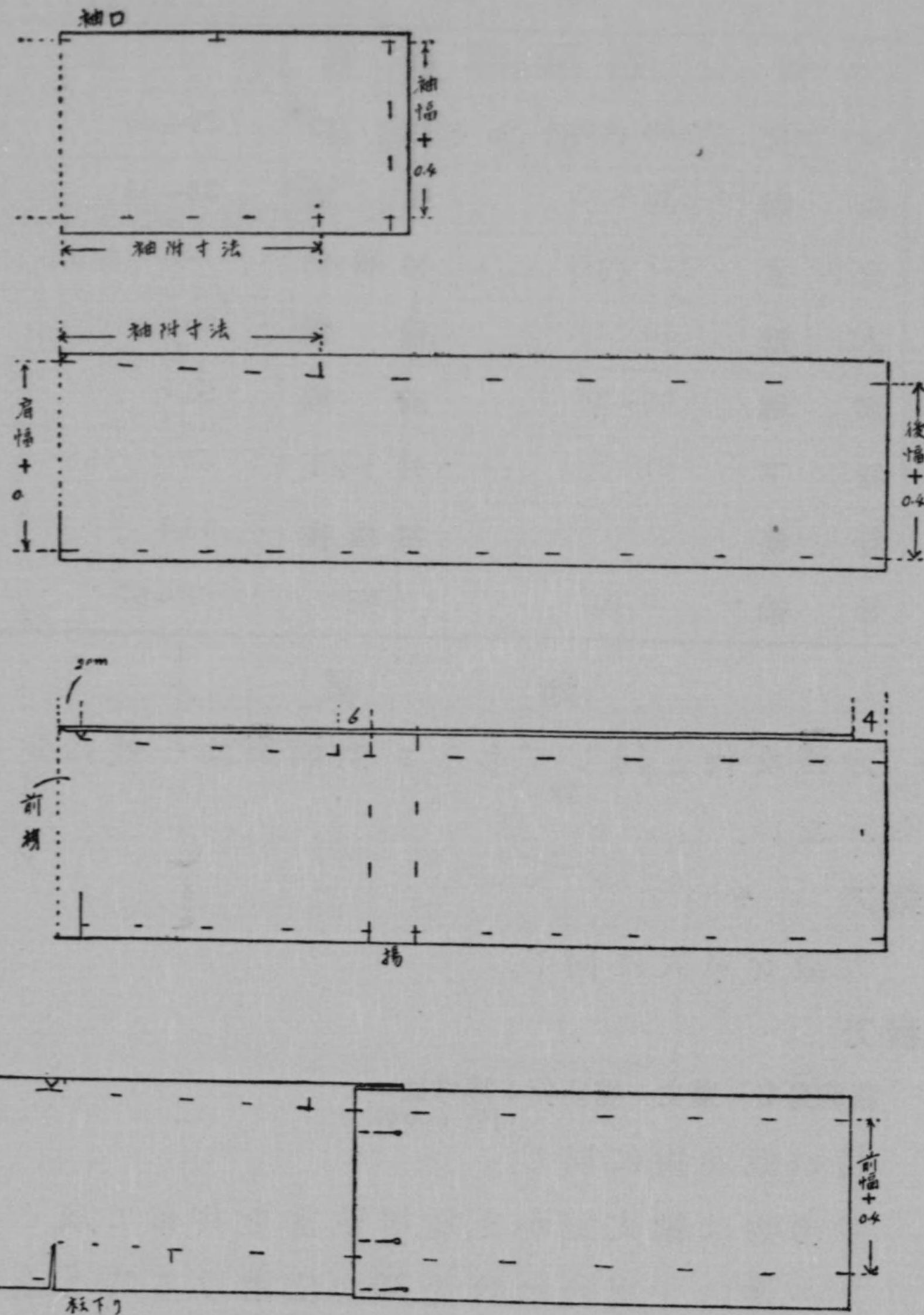
積方

裁切身丈 = 着丈 + 裾紵代 + 揚寸法
(12cm内外)

其の他女物に同じ。

但男物は袖丈短かき爲居敷當を共布で取る場合が多い。裏衿は衿先30cm位附ける時と全部附ける時とがある。

標 附 方



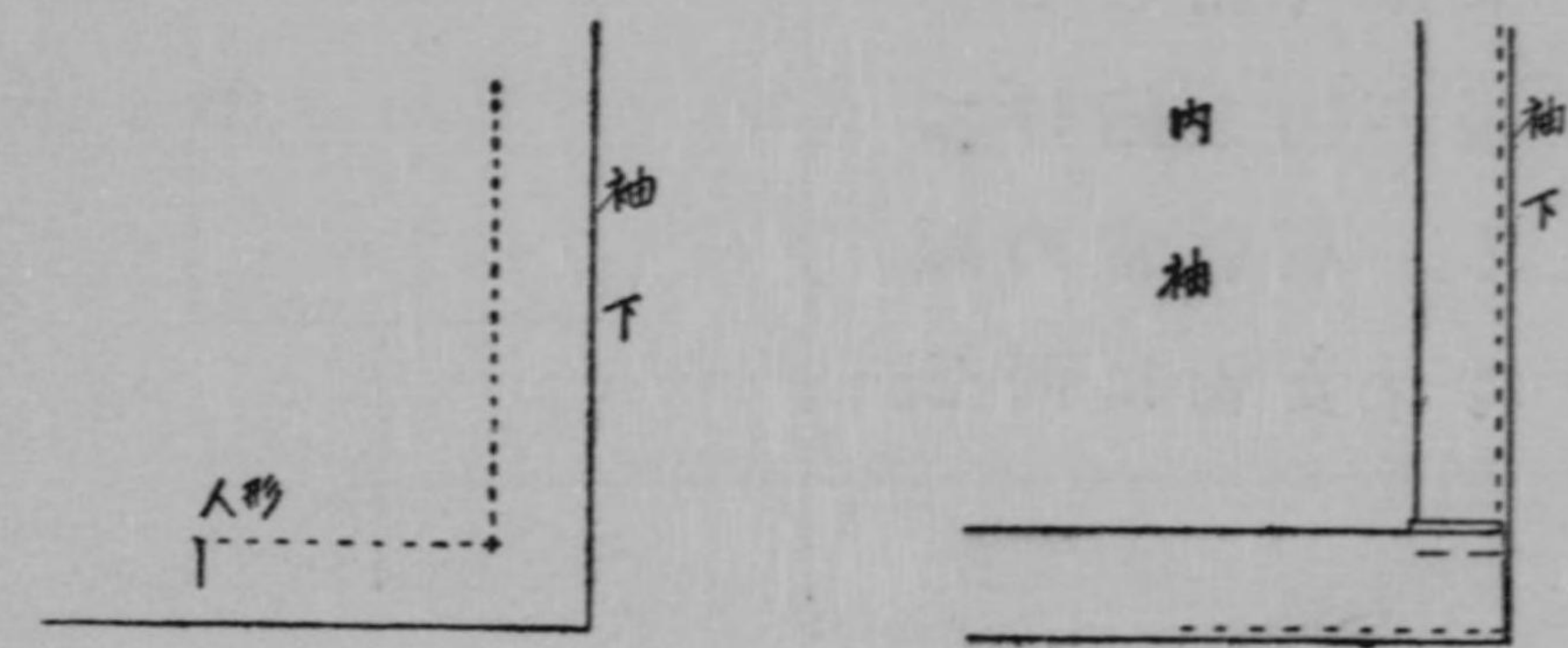
衿及び袷 女物單衣に同じ。

縫 方

縫方は女物と相違する点のみを記す。

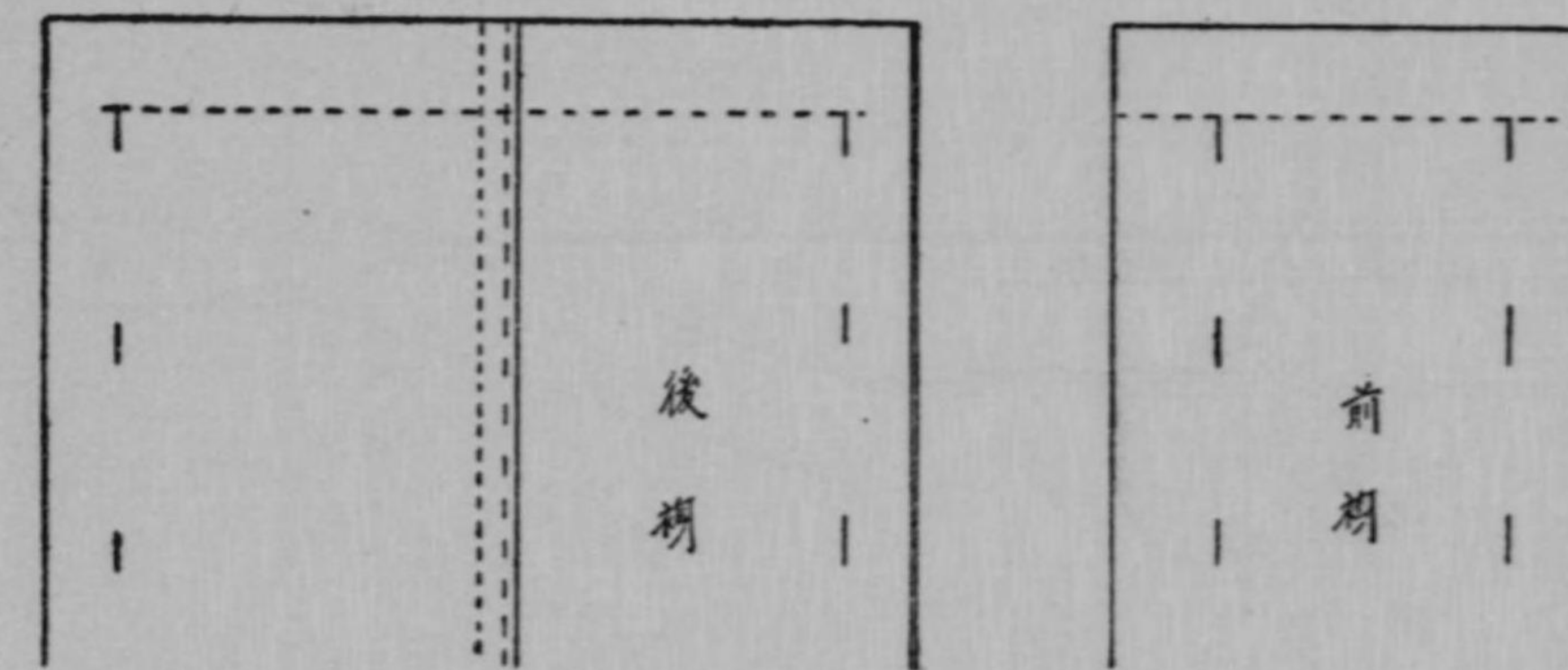
袖 (人形の作方)

袖下を人形まで縫ひ、圖の如く折りて綴ち附ける。



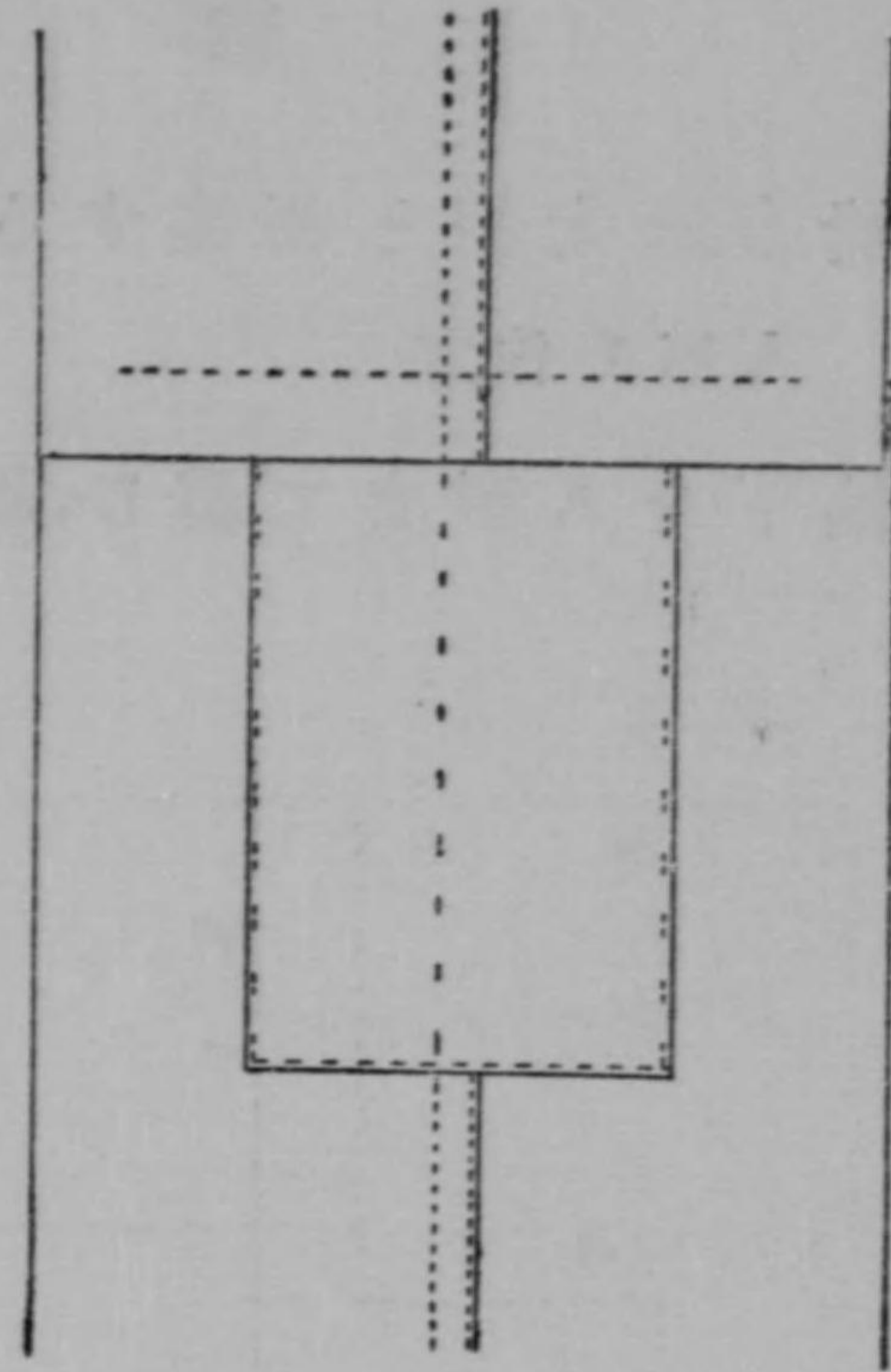
内揚

後は背の着せ山を揃へて後幅標の間を、前は布幅全體共に針目細かく縫ひ、折りは下に返す。



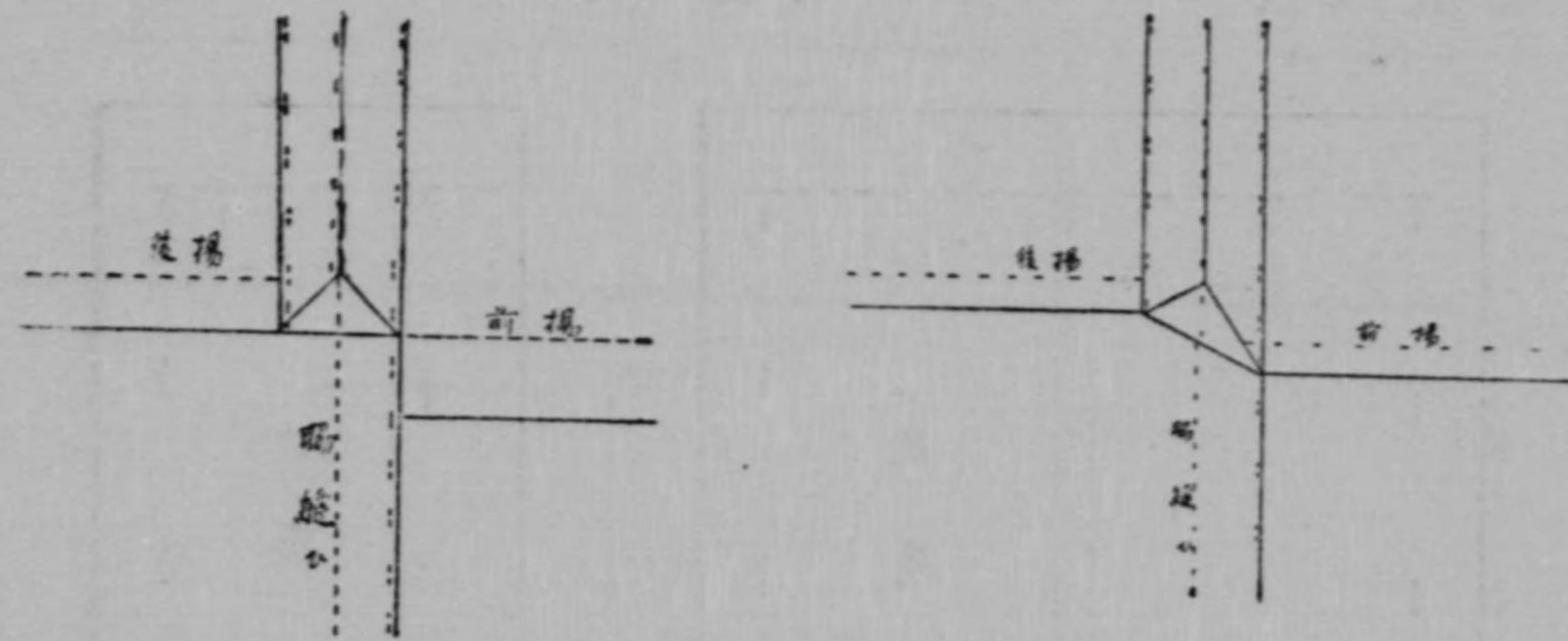
居敷當

居敷當上部が揚の下に1cm位這入るやう位置を定めて背縫に綴ち付け、兩耳を折り、伏拵、又は耳拵とし、上部は揚の山を拵けて押える。居敷當の短かき時は女物に同じ。



脇縫の始末

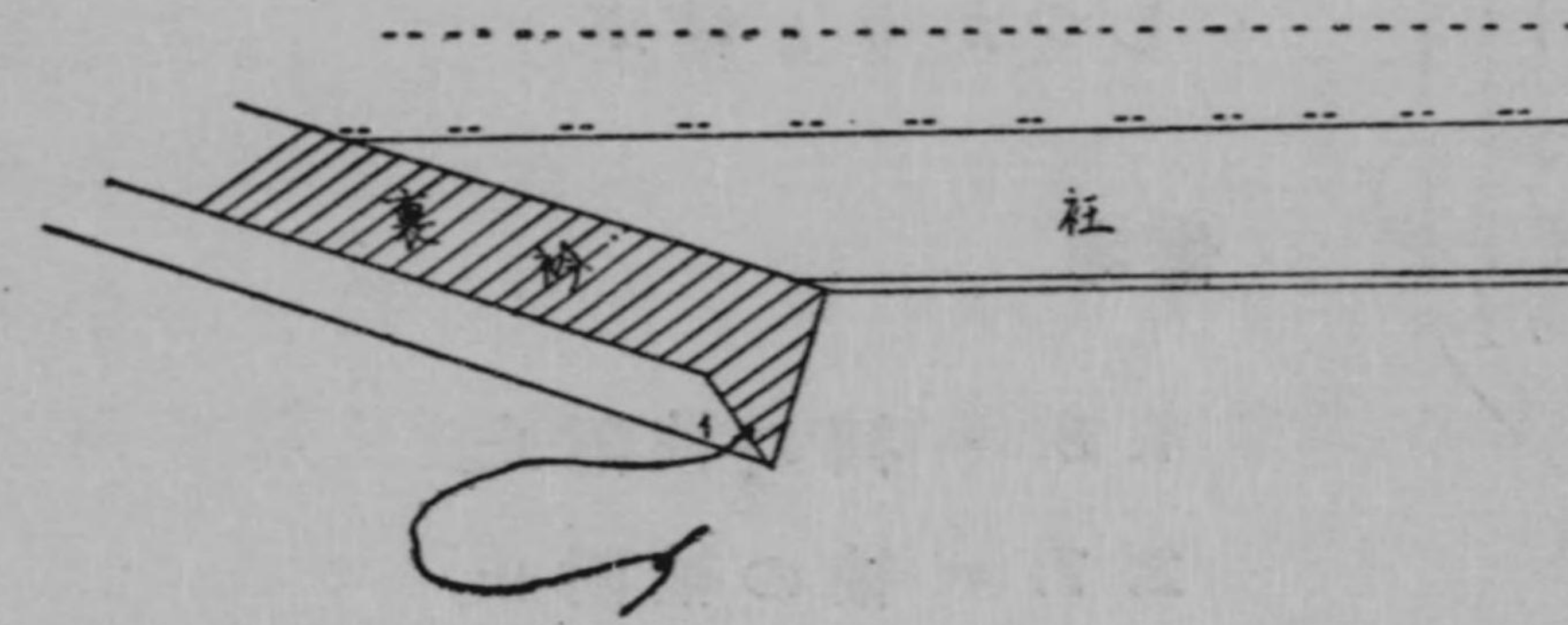
縫ひ残してある後揚を圖のやうに折つて始末をする。



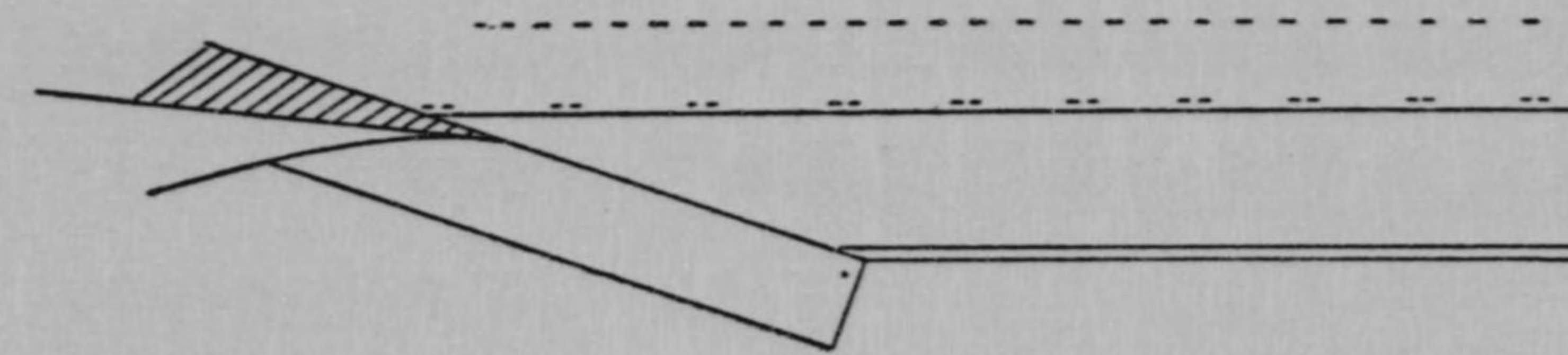
衿先

衿附は女物と同様に衿を付け、衿幅を定めて裏表一緒に折り、圖のやうに縫代を三角に折りて拵け付け、極く小さく裏表に十字に糸を掛けて止める。(二圖)

拵け始めは0.8cm入りたる所より拵ける。



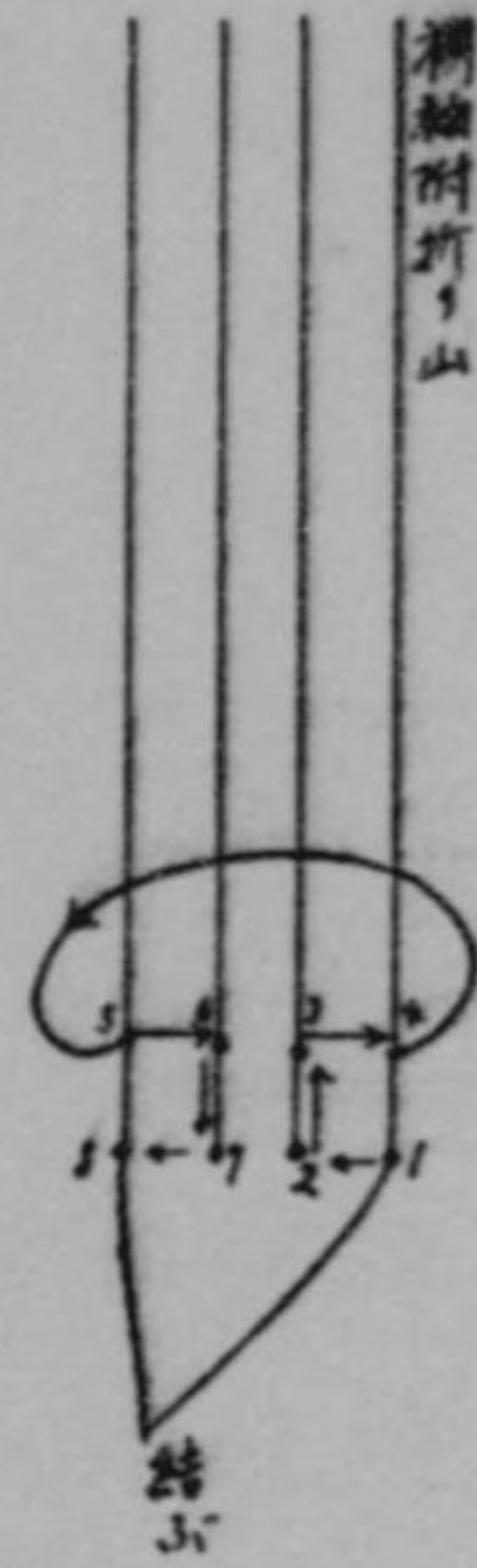
(二圖)



袖附

袖附の待針を打ち四つ留をして袖附を縫ふ。
待針の打ち方は女物と同じ要領にてなす。

四つ留の仕方



圖の如き順序にて袖の裏の袖附止りの折山より針を出して順次針を掛け、最初の針1と最後の針8とをしつかりと結ぶ。

備考

1. 8. = 袖の袖附止。
2. 7. = 袖の袖附止。

其の他女物に同じ。

第五章 單衣上仕立

地直

衣服を仕立てるには裁つ前に布を充分調べ、緯糸の歪み、幅の不揃又は耳のつれてあるものなどがあつて取扱ひ難いものである。それ故にそれ等の點を適當な方法で整理してから裁縫しなければならぬ。之を地直と云ふ。

地直の不完分なものは、仕立難いばかりでなく、出来榮えを損じ、又着くづれのするものである。特に絹布類を仕立てるには最も大切な事である。

方法

絹布

耳のつれてあるものは耳を伸して、布の裏から全體にアイロンを掛けて布目を正しながらしつかりと巻棒に巻き、數時間其のままにして置いて後仕立る。

毛織物

毛織物は濕氣に合へば多少收縮するものであ

るから、薄く霧を吹いて地づめをして後アイロンを掛けて地直をする。

但メリンス・絹毛交織等の如き地薄のものは地直をして、無理に布目を通さず、其のまま折皺等を伸して仕立てる。

麻布及び木綿

薄く霧を吹き、経緯の布目を成るべく正して巻棒に巻く。

仕立方

絹布仕立

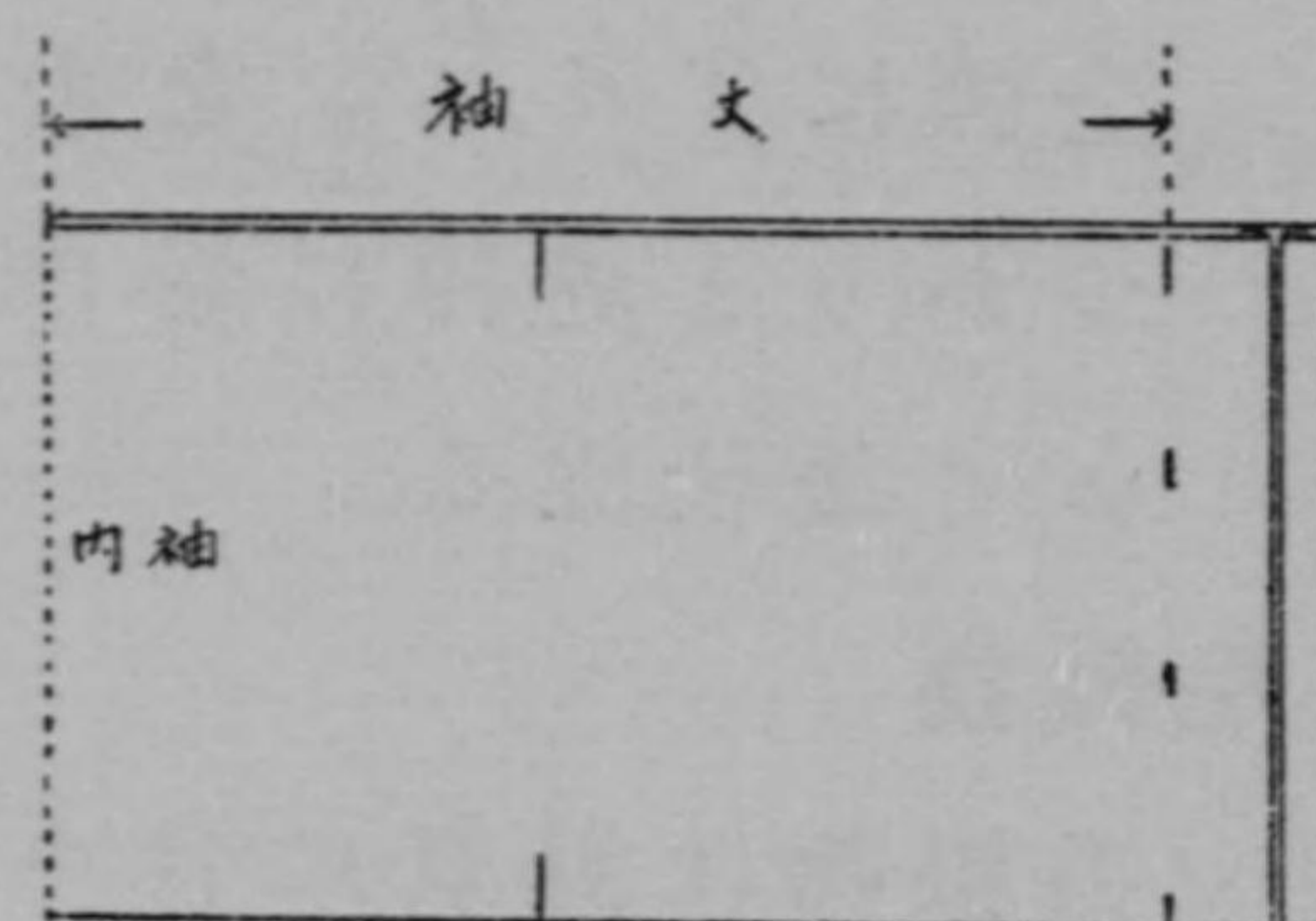
大體普通仕立方と同じであるが、特に絹布仕立として異なる點のみを擧げる。

袖

袖下は表から浅く下縫して縫目を割り、圖の如く内袖の方へ縫代だけぞらして袖丈の標を附ける。

袖口は撚紵、又は細く三つ折或は四つ折紵にする。

袖下の縫代は紵け附ける。



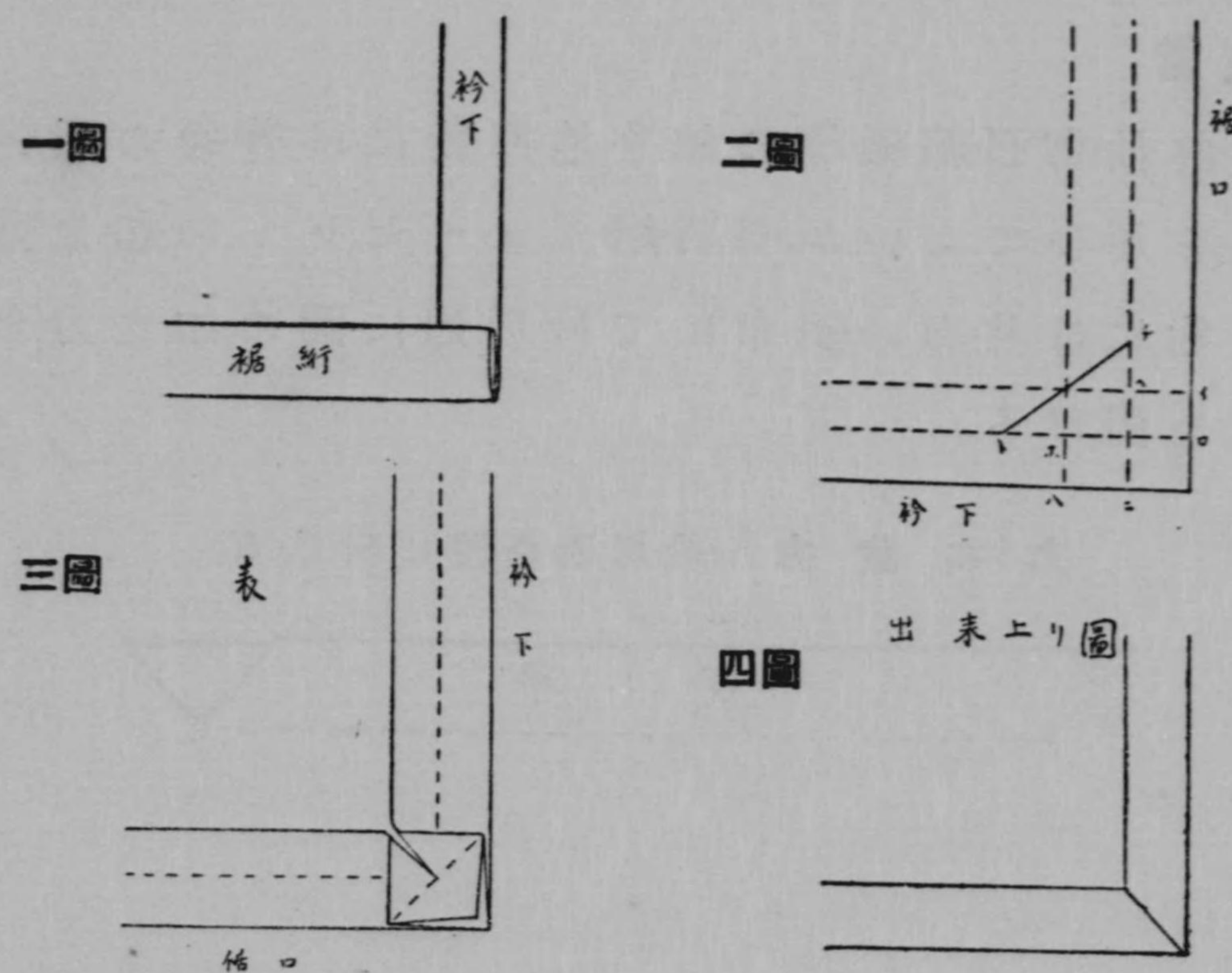
縫代の仕末

脇、衿、振等の縫代の端は折つて紵け附ける、特に薄物は表から透けて見えるものであるから折方、紵目等に注意す。

袷先額縁

袷先は衿下と裾口とを三つ折にして一圖の如く(イ)(ロ)の標を附け、角を(ハ)とす。

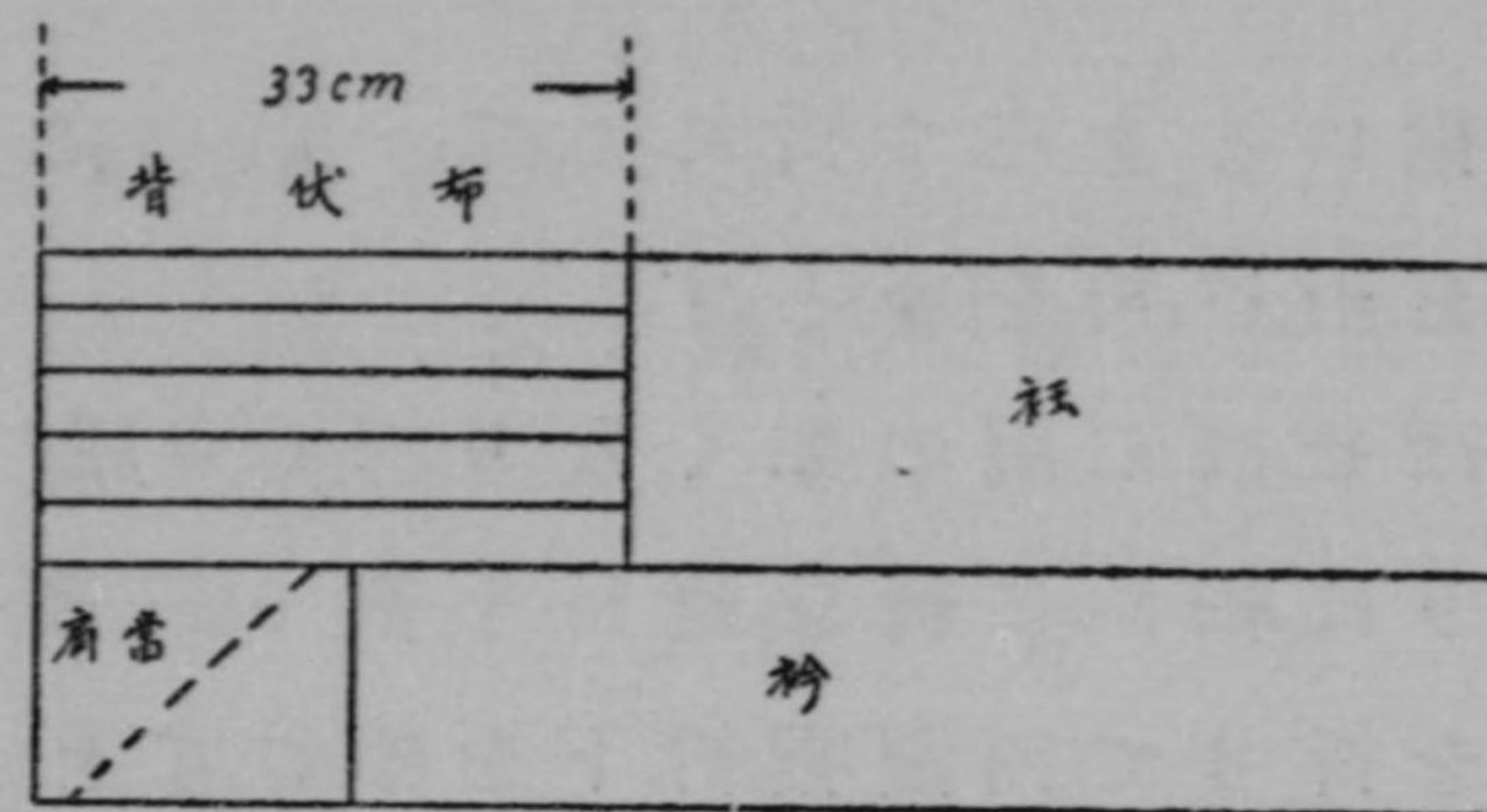
各の折目を伸ばせば二圖の如くなり、(イ)(ロ)點を合せて標通りに細かに縫ひ、縫目を割り(三圖)角を整へ、縫代を折りて(四圖)裾、衿下を續けて紵ける。



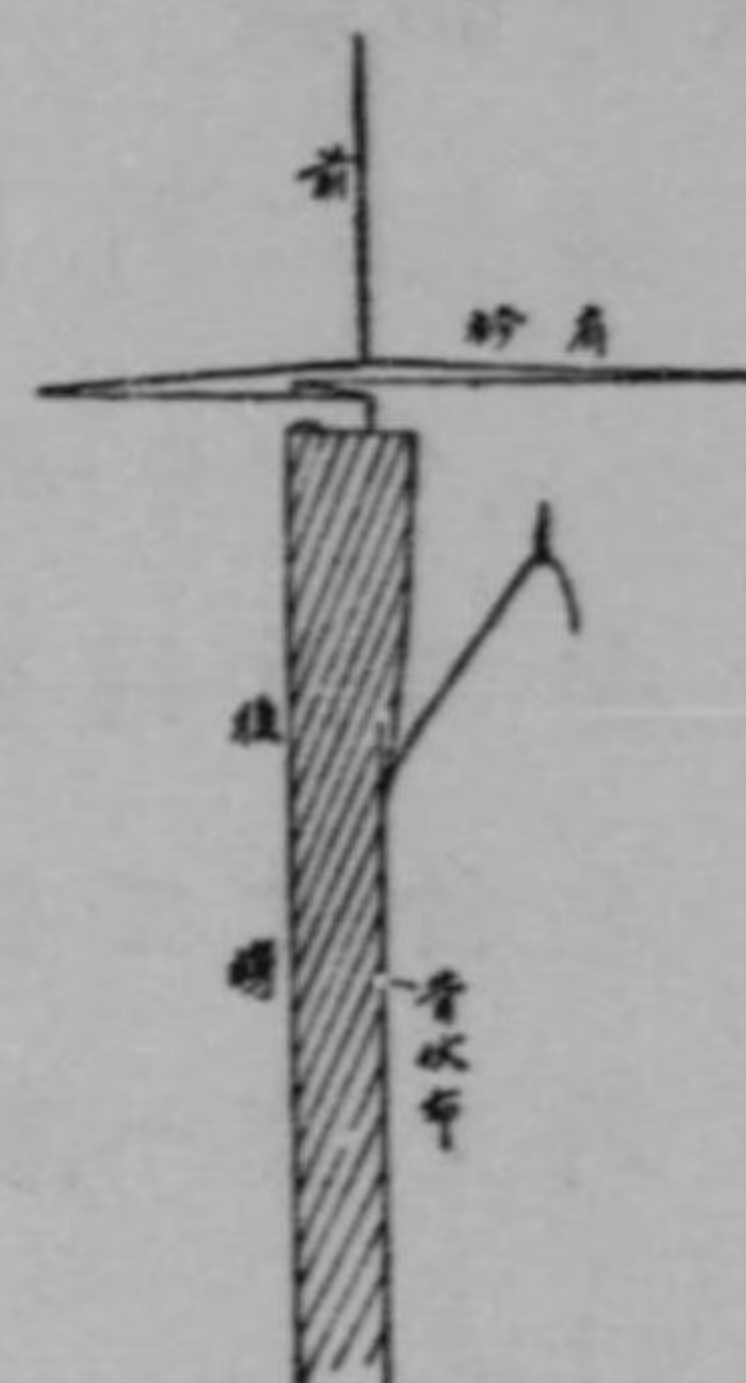
背縫

共布又は同色の薄地絹を以て縫代を包むか、又は袋縫或は折伏衿にする。

背伏布及び衿肩當の裁方



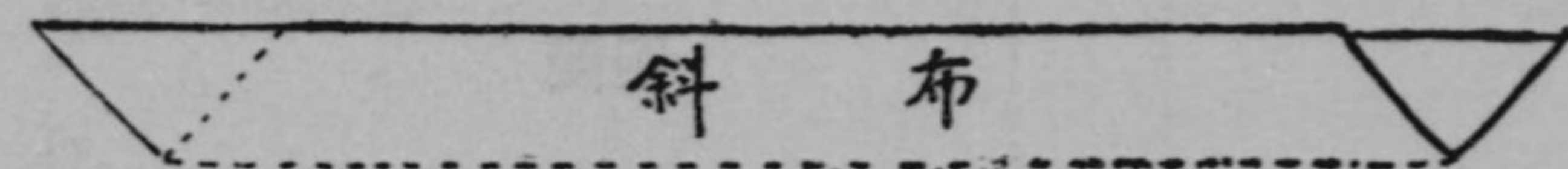
背伏布の付け方



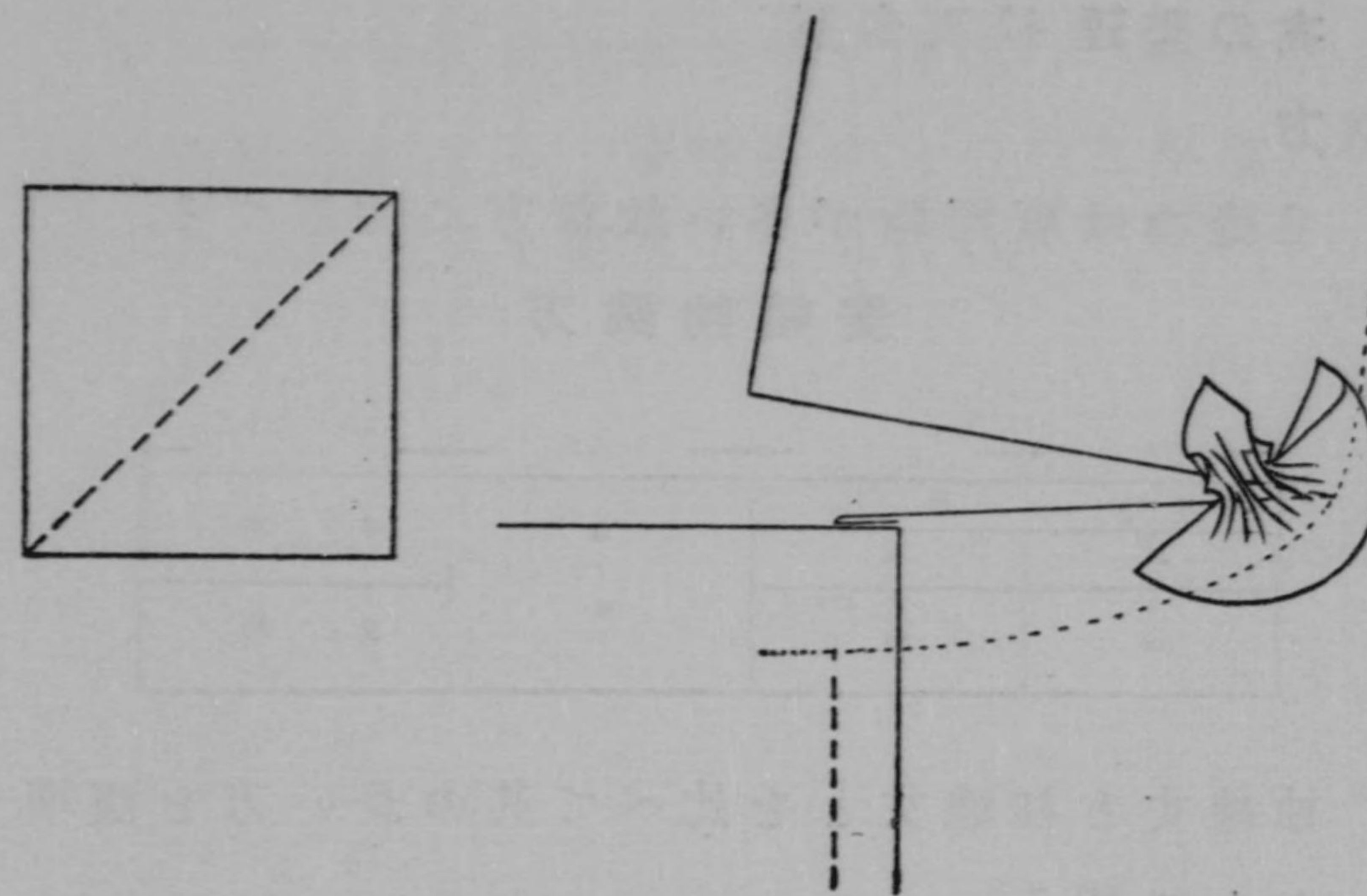
肩當

銘仙・御召・縮緬等の如き地厚物には普通の肩當を用ひてよいが、明石・絹・ジョーゼットの如き薄物には共布の斜布にて衿肩廻に圖の如き力布を附ける。

力布裁方 (衿肩明全體に附ける)



衿肩廻にのみ附ける。



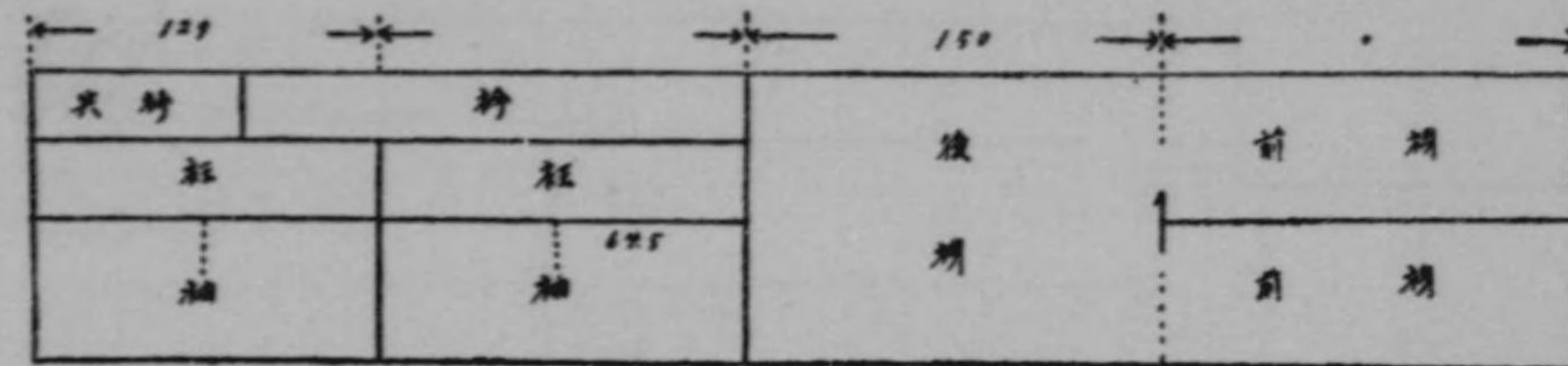
毛織物仕立

布の整理(47頁参照)

裁方

毛織物は廣幅物が多い故、裁方に注意する。

廣幅物裁方



袖總丈と衿總丈とを比べて其の長い方を標準として積る。

仕立方

- 1 毛織物は標が付き難い故、チョークを用ひて標附をして切簇をすると良い。
- 2 袖口には必ず裁目の方をするが、耳の方を用ふる場合には袖口の間だけ耳を裁ち落す。
- 3 背縫は輪であるから空縫ひして衿け附ける。
- 4 脇縫及び袖附は小針に縫ひ、縫目に濕氣を與へて割饅を掛ける。
- 5 縫代の始末 地薄物は折つて衿け附けるか又はまつり附ける。特に地厚物は其のまま

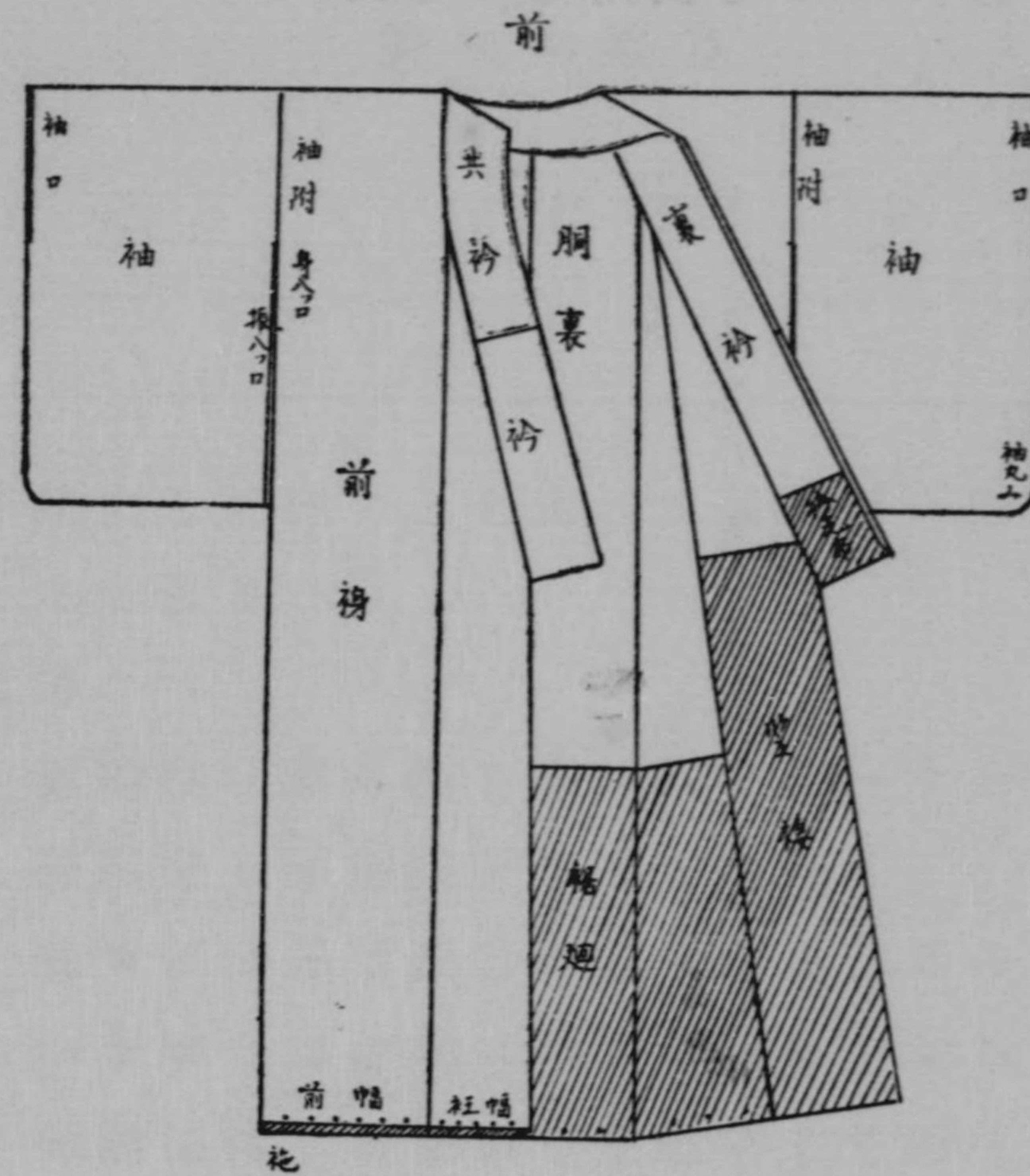
千鳥掛にする事もある、また斜布にて玉縁を取りまつり付けてもよい。

- 6 メリンス・交織物等の如き薄地の毛織物は絹布仕立にする。羅紗・本ネルの如き厚地のものはミシンを使用しても良い。

第六章

大裁女物裕長着

各部の名稱



仕立上寸法

大裁女單衣長着と同じ。

但裾出衦 0.4cm

袖口衦 0.2cm

地質

表

綿布 木綿, 瓦斯, ナフトール等

絹布 銘仙, 御召, 紬, 大島, 縮緬, 錦紗
羽二重等

毛織 メリンス等

其他 人絹, 交織物

裏

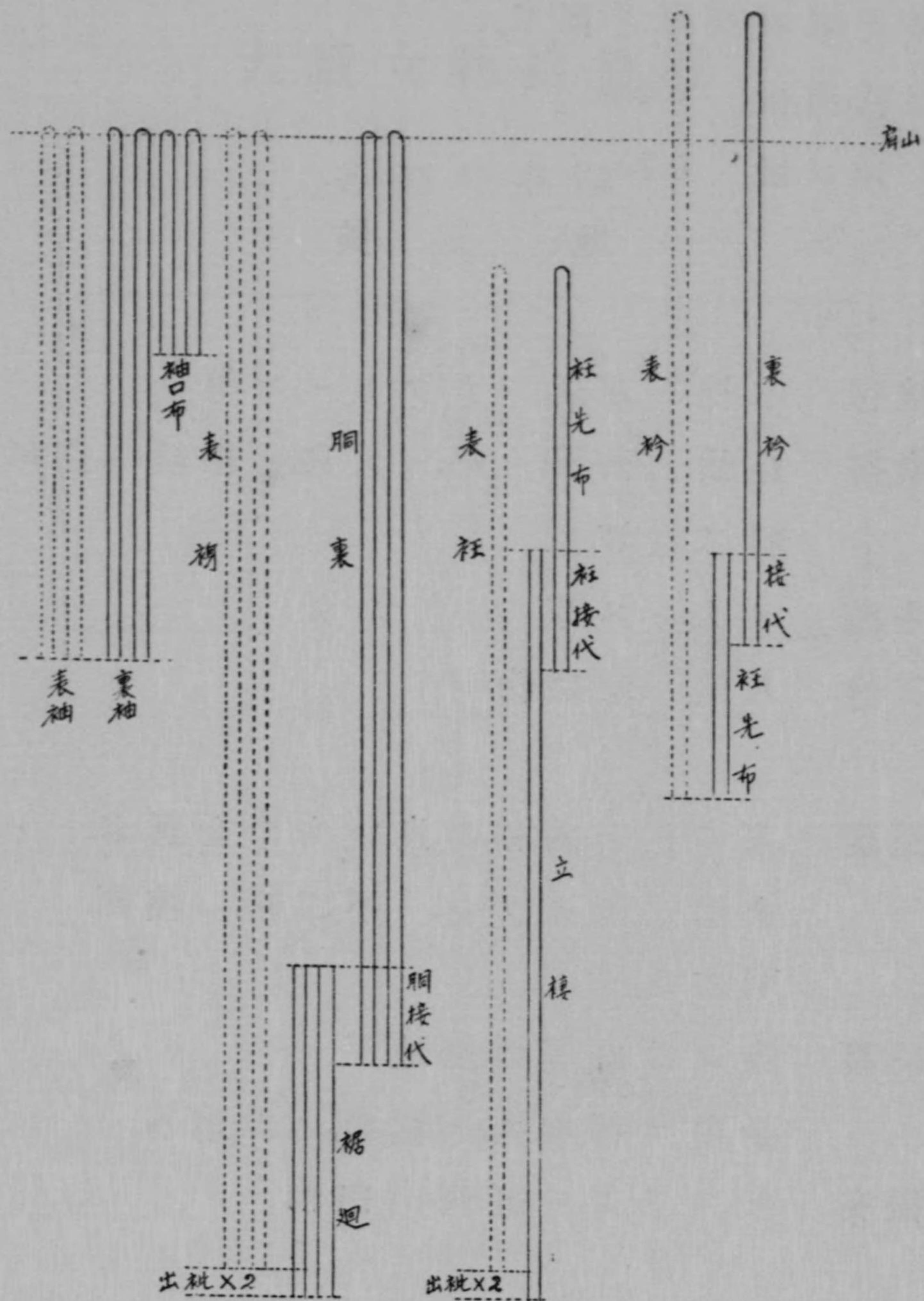
裾廻 表の色と調和の良いものを選ぶ。
金巾, モスリン, 不二絹, 縮緬,
羽二重等

胴裏 赤又は白等の無地

金巾, 新モス, 紅絹, 白絹等

振布 モスリン, 紅絹, 白絹

裁方



表布 大裁單衣に同じ。

普通裁切寸法

裏

裾廻布

- 袴の裾 並幅 四枚 55cm 内外
- 豎 袴 半幅 二枚 90cm 内外
- 衿 先 半幅 二枚 20cm 乃至 28cm
- 袖口布 四つ割幅 二枚 56cm

裾廻裁方

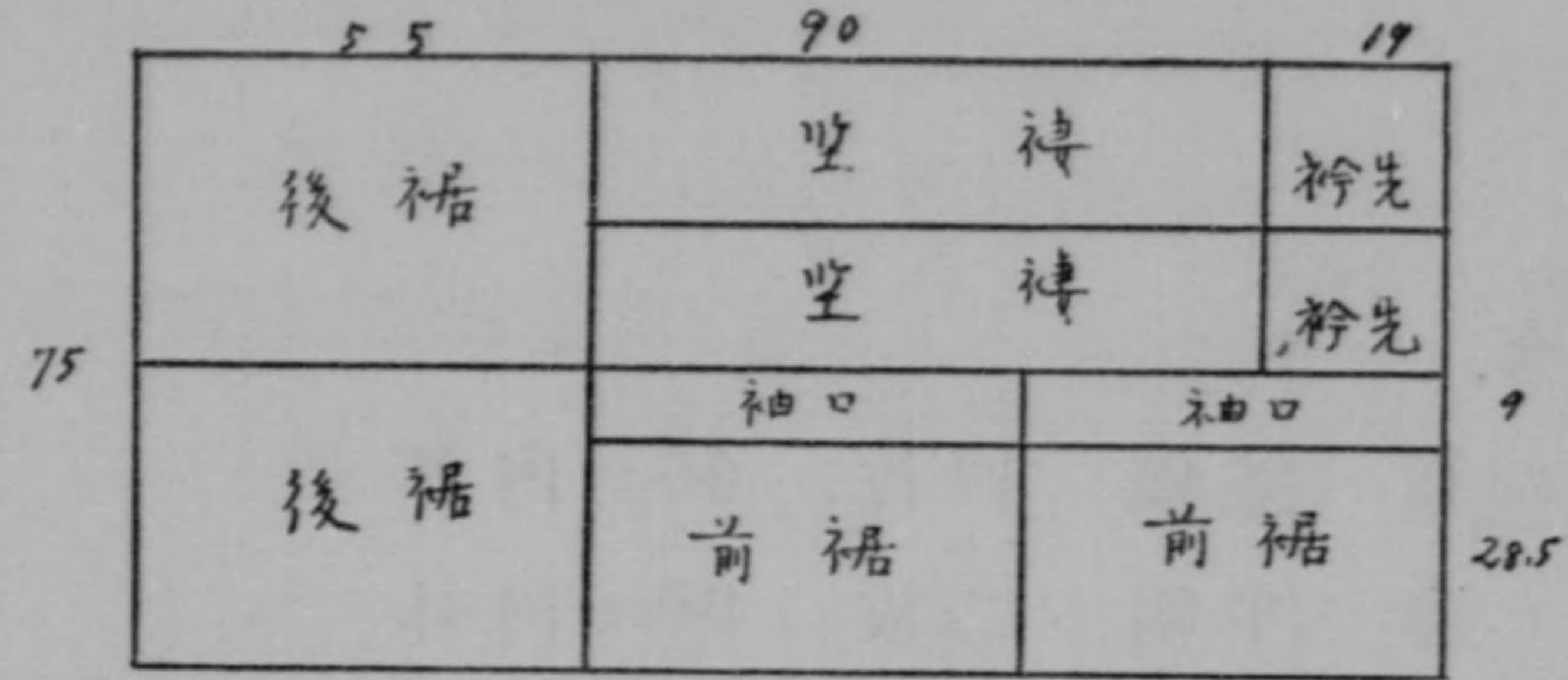
總用布 380cm (並幅)

57				95		57	
36	裾	裾	裾	裾	豎 袴		袖口
					豎 袴		袖口
							衿先 衿先

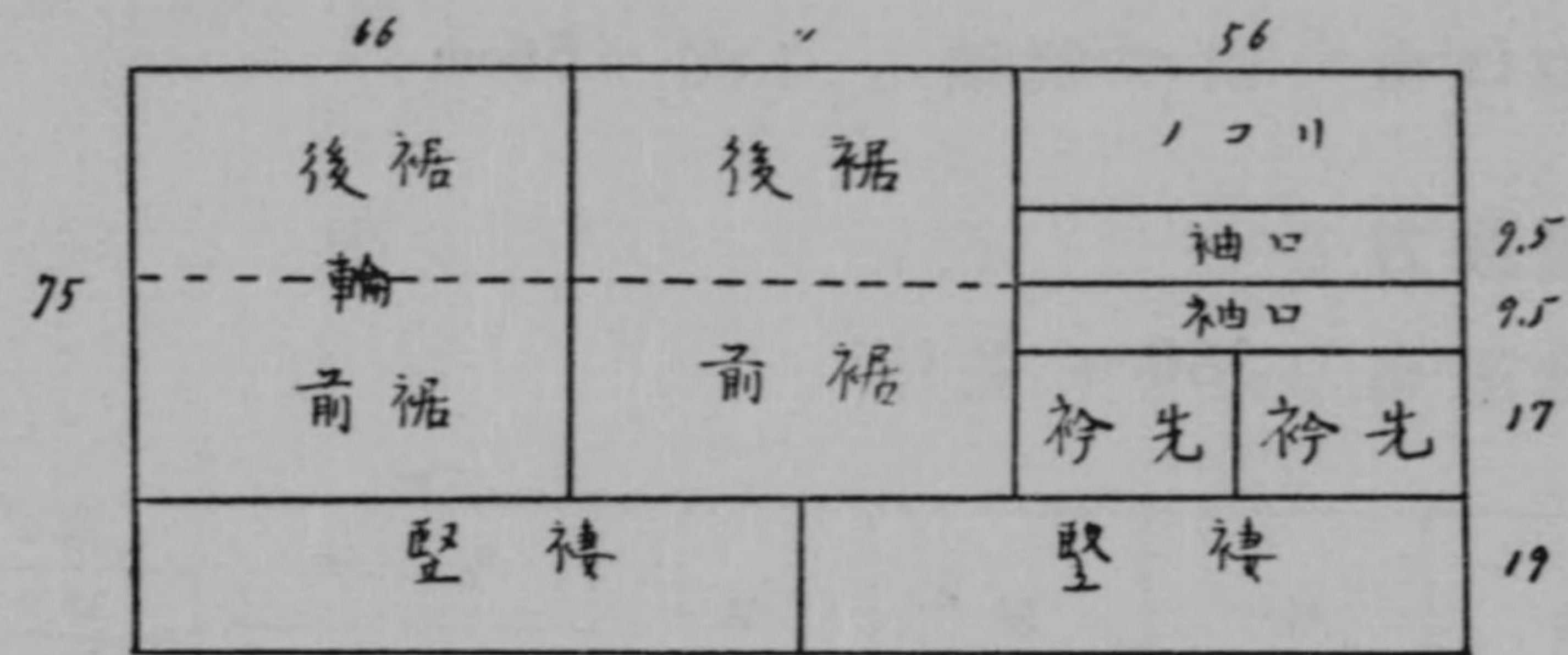
總用布 340cm (並幅)

21		95		56		-		-	
衿先	豎 袴	前		前		後		後	
衿先	豎 袴	袖口布		袖口布		9		26	

總用布 164cm (廣幅)

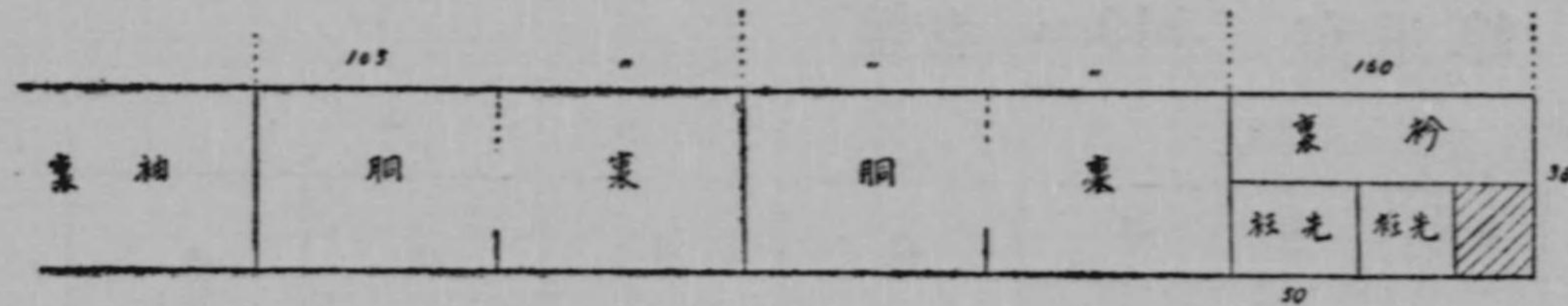


總用布 188cm (廣幅)

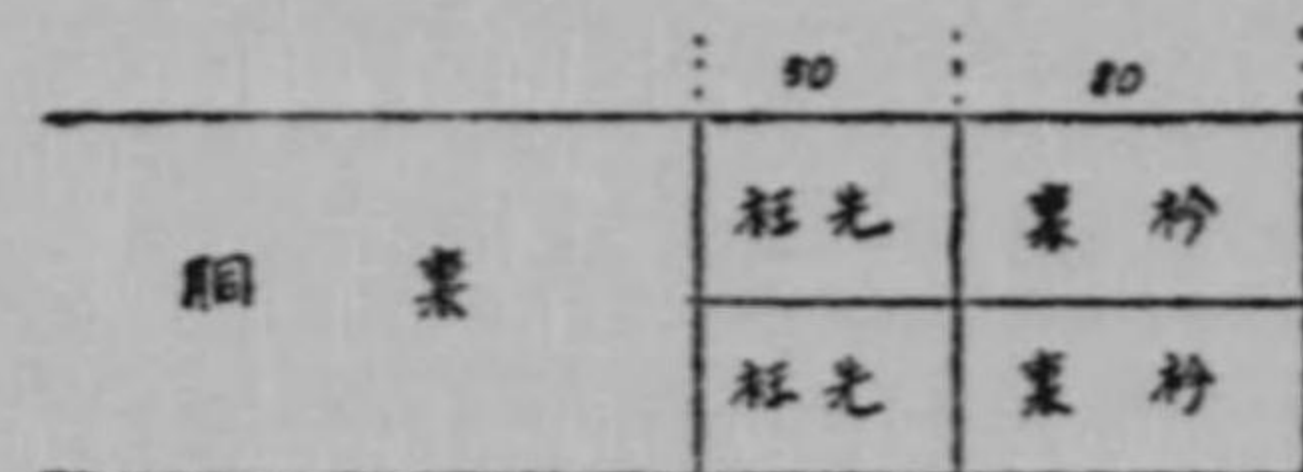


胴裏裁方

總用布 850cm (袖を省く)



總用布 820cm (袖及び胴を省く)



裏布の積方

$$\text{胴裏丈} = \text{表身丈} - \text{裾廻丈} + \text{縫代}$$

$$105 \quad 152 \quad 57 \quad 10$$

$$(\text{縫代} 10\text{cm} = \text{胴接代} + \text{出衿} \times 2)$$

$$\text{衿丈} = \left(\frac{\text{表衿丈}}{2} - \text{衿先} + \text{縫代}\right) \times 2$$

$$80 \quad \left(\frac{190}{2} \quad 25 \quad 10\right)$$

$$\text{衿先} = \text{表衿丈} - \text{空裄} + \text{縫代}$$

$$50 \quad 132 \quad 95 \quad 13$$

$$\text{胴裏總丈} = (\text{袖丈} + \text{胴裏丈}) \times 4 + \text{裏衿丈}$$

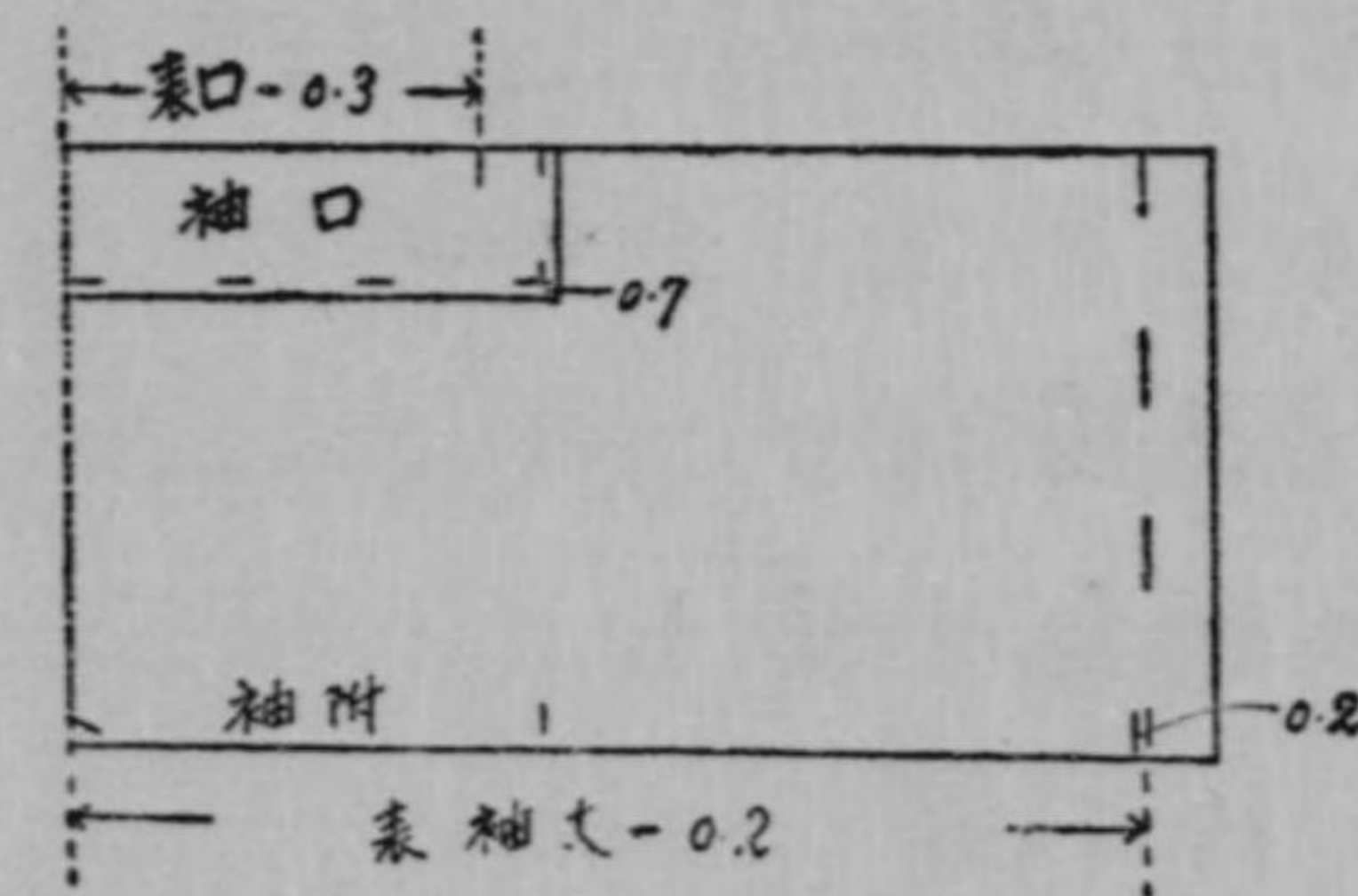
$$380 \quad 67.5 \quad 105 \quad 160$$

胴裏は表布及び裾廻しを裁つてから之に合せて裁つ。

標附方

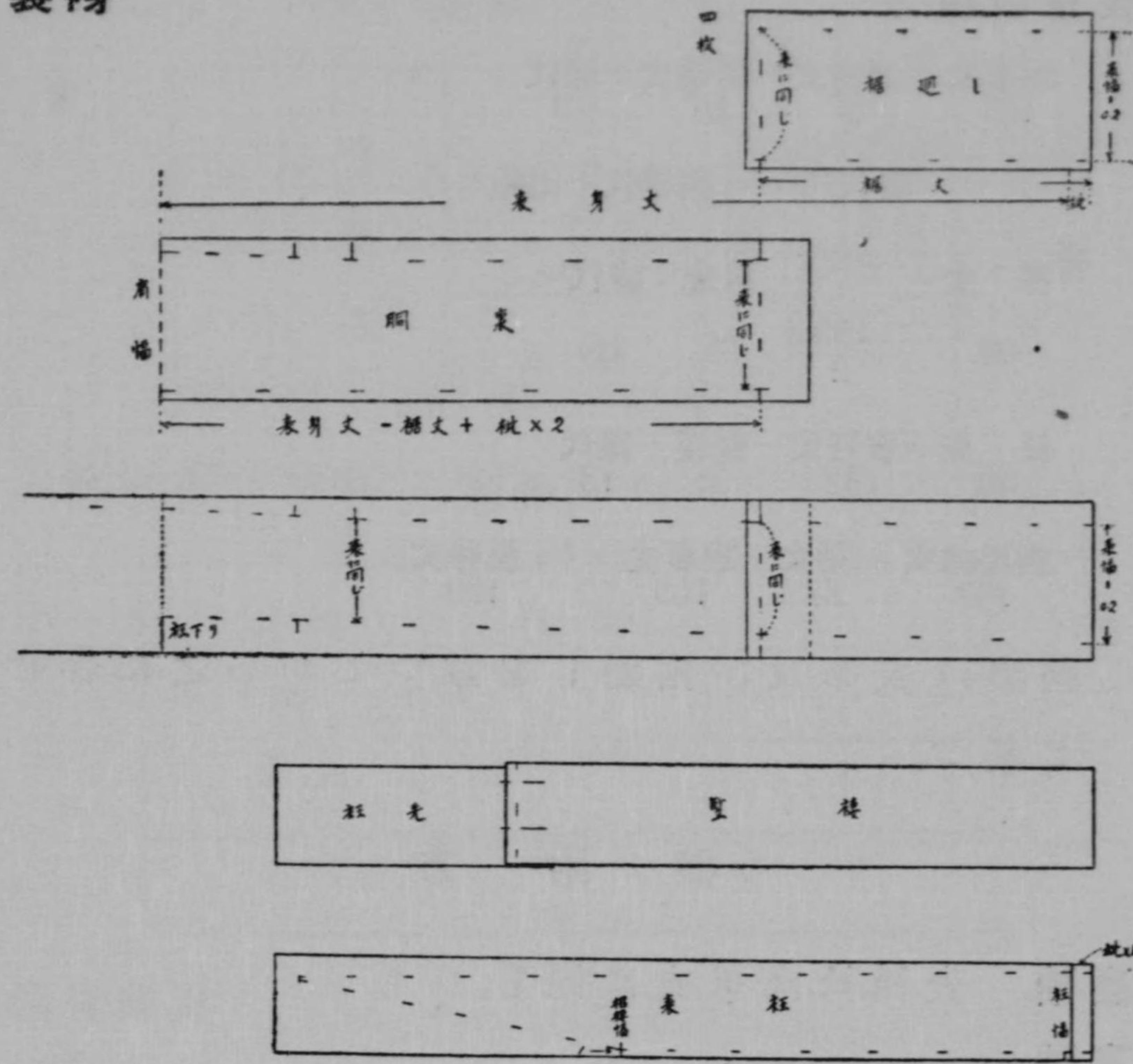
裏袖 表袖,衿は單衣に同じ。

裏袖



袖口布を中表に四枚重ね、圖の如く裏袖布の上に重ねて標附けをなす。幅標は後にする。

裏袖



縫方

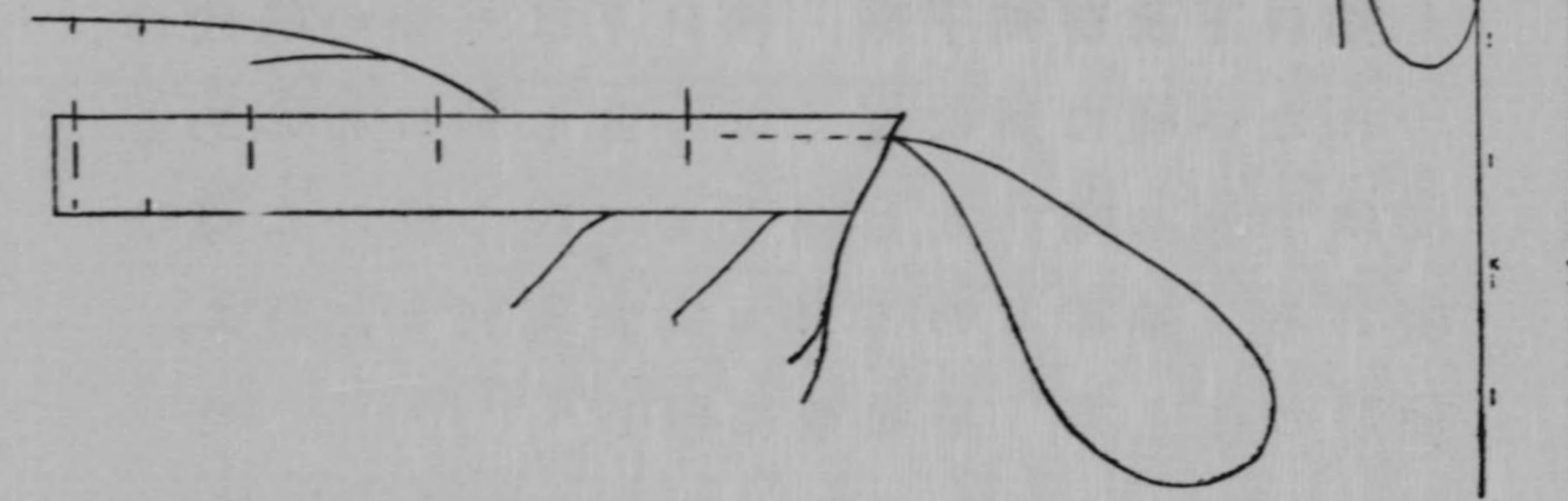
順序

- | | |
|------------|------------|
| 1 袖 | 2 表袖 |
| 3 裏袖 | 4 裾合せ裄上 |
| 5 中綴及び身八つ口 | 6 衿下縫 |
| 7 袖附 | 8 衿附及び共衿かけ |
| 9 裾綴 | 10 仕上 |

方法

袖

1 袖口掛 標通りに待針を打ち、着せの分だけ浅く縫ひ、両端は折りにて拵け付けるか、又は地厚ものならば其のまま千鳥がけにする。又まわし付けにするときは、袖口布の端を圖の如く縫ひ、角をそのまま續けて縫ひまわし、両角を整へて表返す。

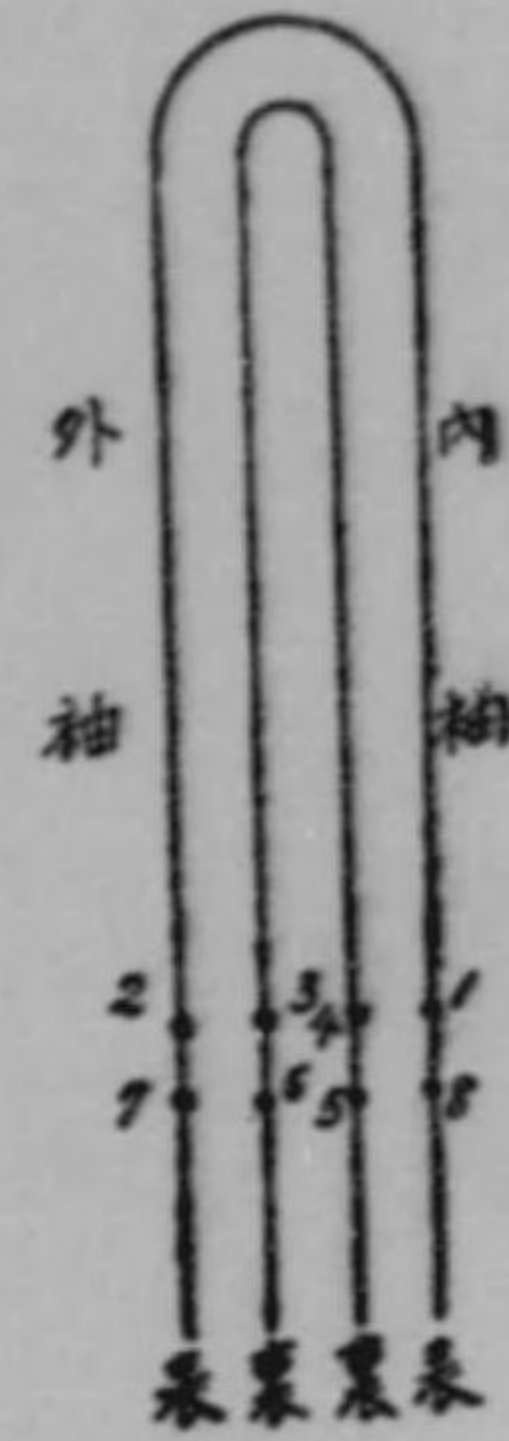


2 袖口合 表裏の山標と袖口標とを合せて圖の如き釣合ひにて待針を打ち、両端を一針残して縫ひ、手にて軽く0.2cmの着せをかける。

待針の打方

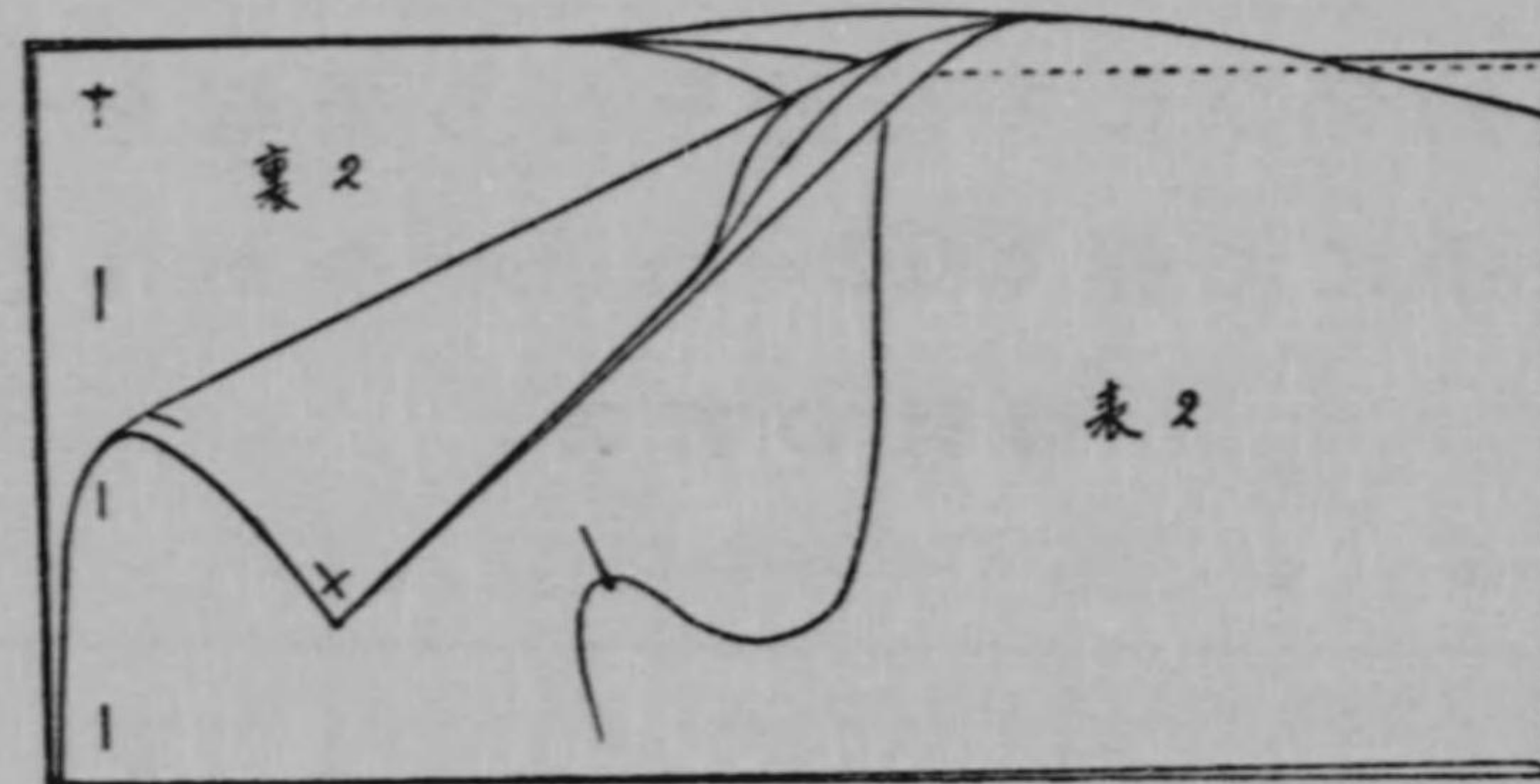


3 四つ留 袖口を圖の如き順序にて内袖の表折り山に針を出て内袖(2, 3)の折り山を浅く刺し、裏内袖の折山(4, 5)を小針に抄ひ、6, 7, 8, の順序に針を出して1, 8, の裏にて糸を結ぶ。



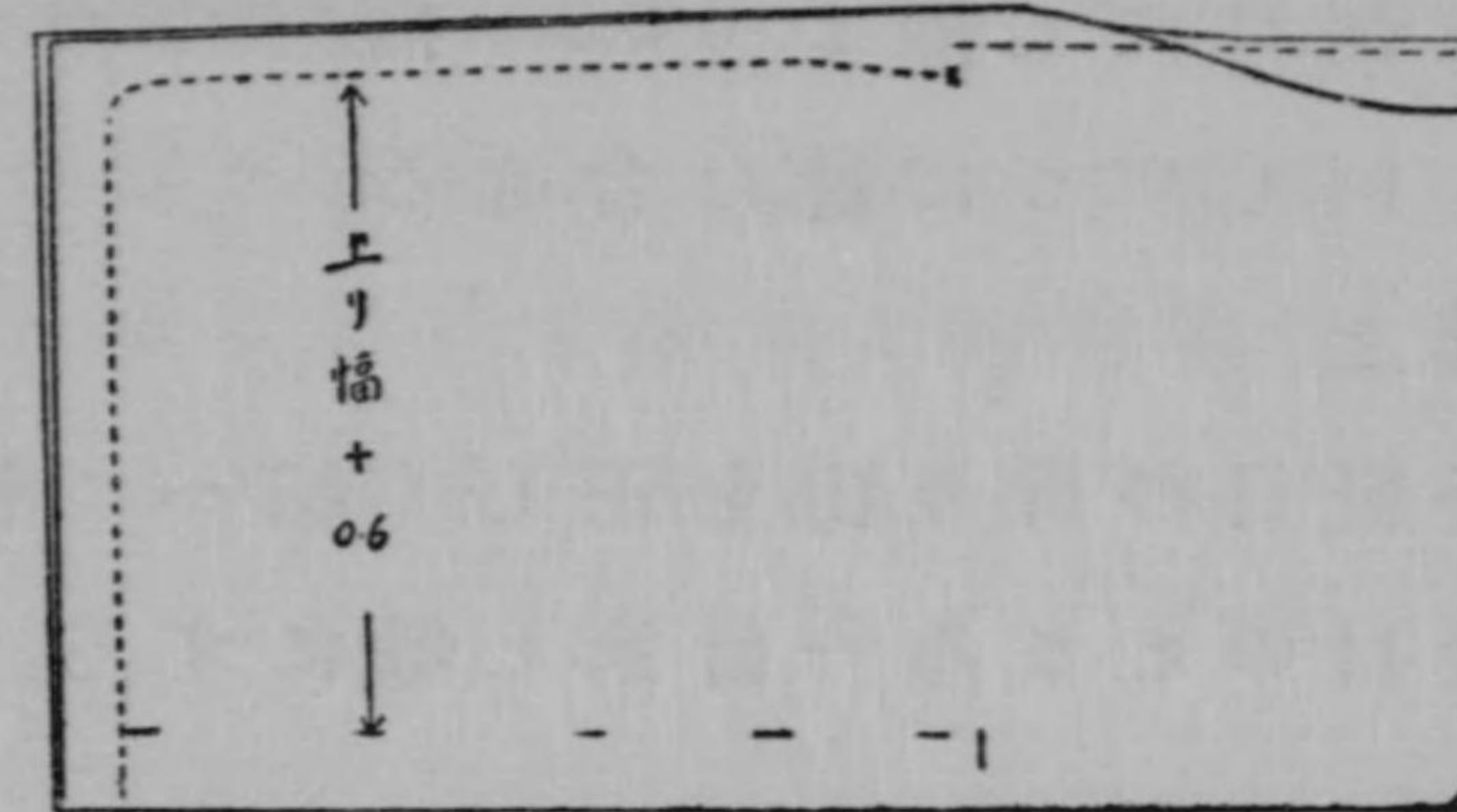
4 袖口下及び袖下縫 袖口下は外袖の縫代のつれない様に斜に浅く折り返し、袖口布のある間は半返し縫ひとし、袖下まで四つ縫ひに縫ひ続ける。袖振りの方10cm位表裏別々に縫ふ。袖形の作り方 単衣袖に同じ。

袖口下縫方



5 袖幅標 圖の如く出来上り幅に0.6cm加へて幅標を振りの間に付ける。

袖幅標附け方



6 振縫 袖下の縫目を中表に正しく合せ、裏は幅標より0.4cm控へて表布の方から待針を打つ袖下から7cm位の間に表をゆるめ、其他は裏を張り加減に釣合ひをとりて裏と同色の糸にて袖下の縫目のところを一針返して縫ふ、表返して布を整へて躰をかける、袖附の間に幅標をなす、躰は一目落としとす。

表袖

背縫、脇縫、衿附方 女物単衣に同じ。但脇の縫代は開きて躰を押えて置く。

裏袖

胴接 標通りに待針を打ち、後は幅標より1cm

位先まで、前は端から端まで縫ひ、着せを浅く掛けて胴裏の方へ返し、縫代10cm以上もある時は平にして両端を綴ぢ附けて置く。

裏脇縫は裾口にて標より0.2cm幅をつめて縫ふ。

其他表と同じやうに縫ひ合せる。

裾合及び襷上

表裏の各縫目の折り山を正しく揃へて裾合せをなす、縫目のところ一針返し縫にする。

襷先縫方

縫終つたならば縫目には平鋏を當てて、手にて軽く0.4cmの着せを掛け、表から襷を掛ける。

裾芯に薄き布又は綿を入れて出衤を整へて一束に襷にて綴ぢる。

中綴及び身八つ口

背及び脇の中綴をなし身八つ口留に四つ留をして前後の身八つ口を縫ひ、次に衤の中綴をなす。

衤下縫 (68頁参照)

袖附

表 単衣と同じやうに待針を打ち、袖附の四つ留をして縫ふ、四つ留は順次に表衤、裏袖、裏衤を

抄ひ再び元に戻つて結び留める。

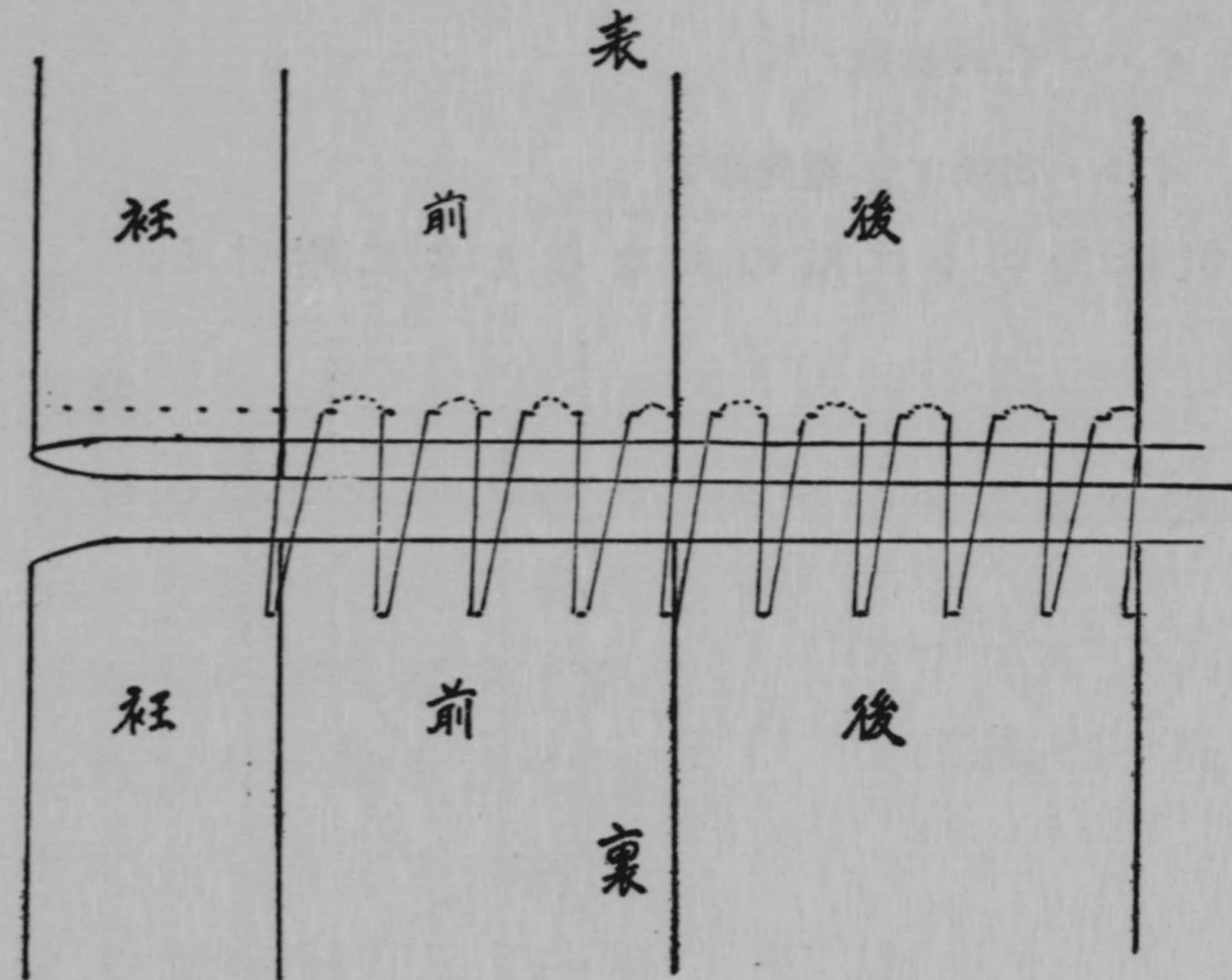
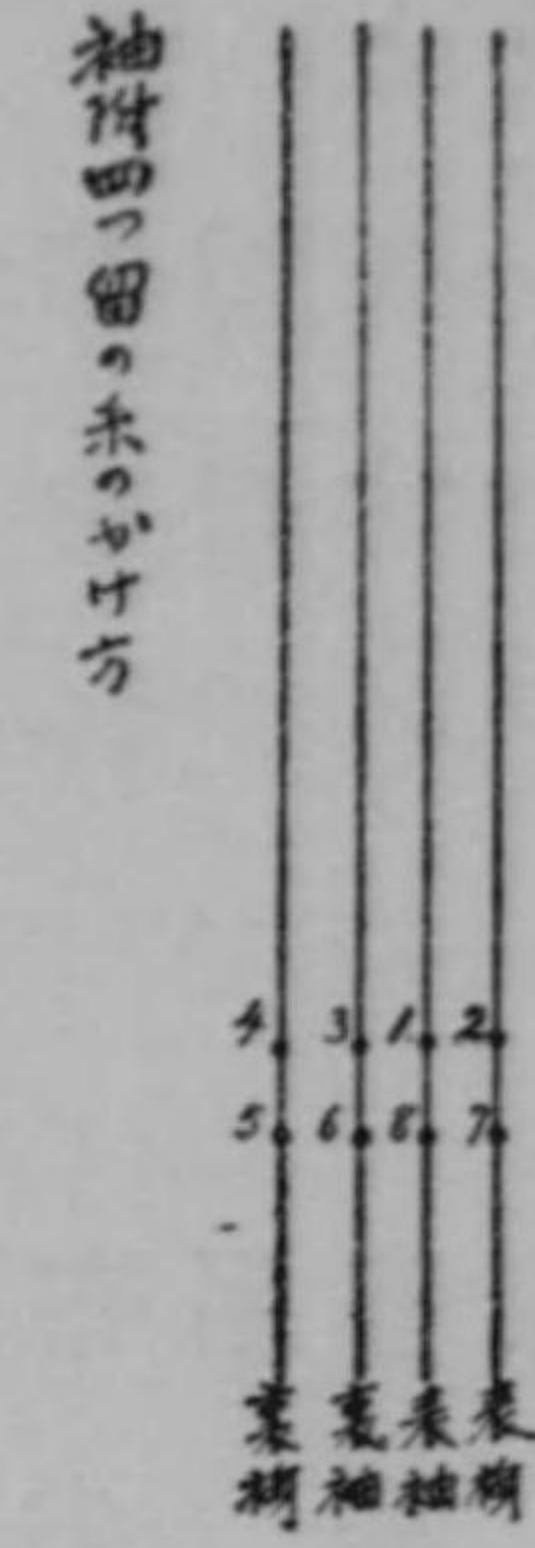
裏 折は衤に戻すから衤の縫代は伸ばして標通りに縫ふ

衤附及び共衤掛

衤附の處を、表裏正しく整へて假綴をなし、單衣と同じ要領で衤を付ける。衤方、共衤掛方も同じ。

裾綴

各縫目の際に逆針を出し、圖の如く裾綴をなす。



仕上

糸屑等を取り,手落ち無きかを調べて各縫目に當布の上からアイロンを掛け,疊みて押しを置く。衿締糸の掛方單衣に同じ。

襦 の 作 方

練習用布

表 半幅丈 20cm 裏 半幅丈 22cm

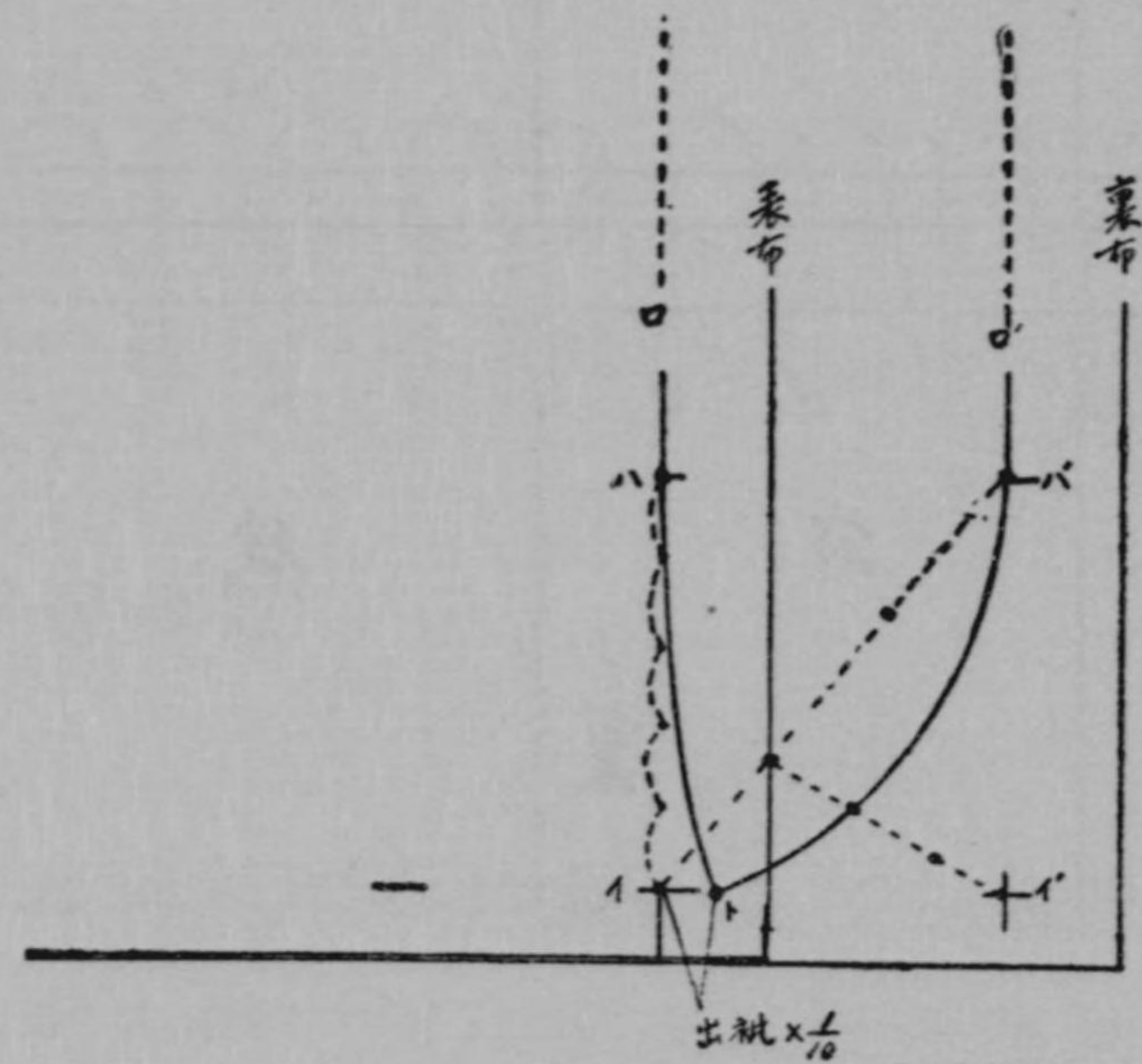
襦形標附

$$イ,イ = 〇,〇(出衿 \times 2)$$

$$イ,ハ = イ,ハ(出衿 \times 2\frac{1}{2})$$

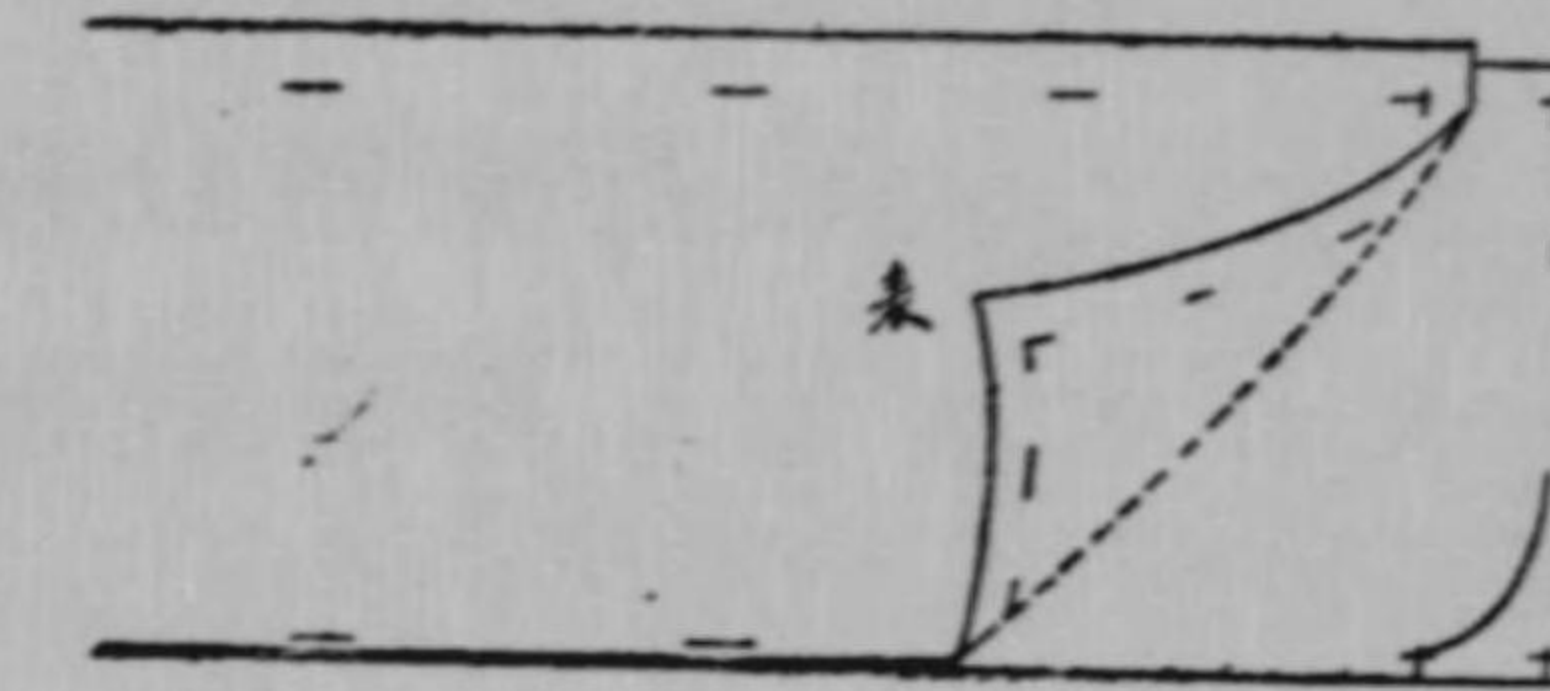
$$イ,ト = 出衿 \times \frac{1}{5} (襦先切下)$$

但襦先切下は衿の大なるときに附ける。



標附

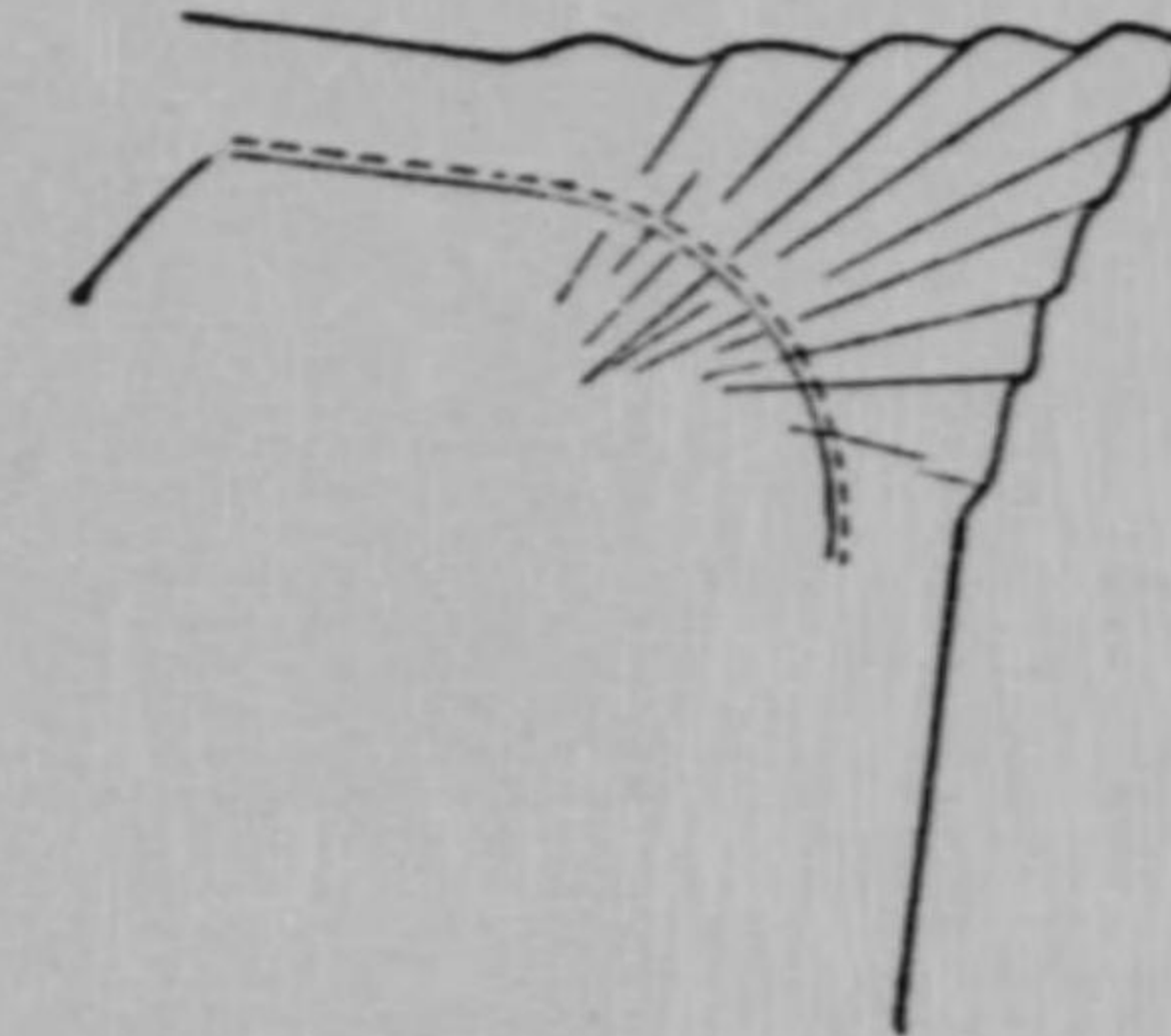
裏布を出衿の2倍長く出して,岡の如く重ねて襦先及び衿幅の標をなす。表衿を除き裏衿に襦形の標をなす。



縫方

襦縫

襦形の標の外を木綿の躰糸で小針に縫ひ,表のイ,ハと同寸に糸を引き締め,形の中央に多くいせ,角を引き皺を消す。但出衿小なるときは襦縫を要せず。

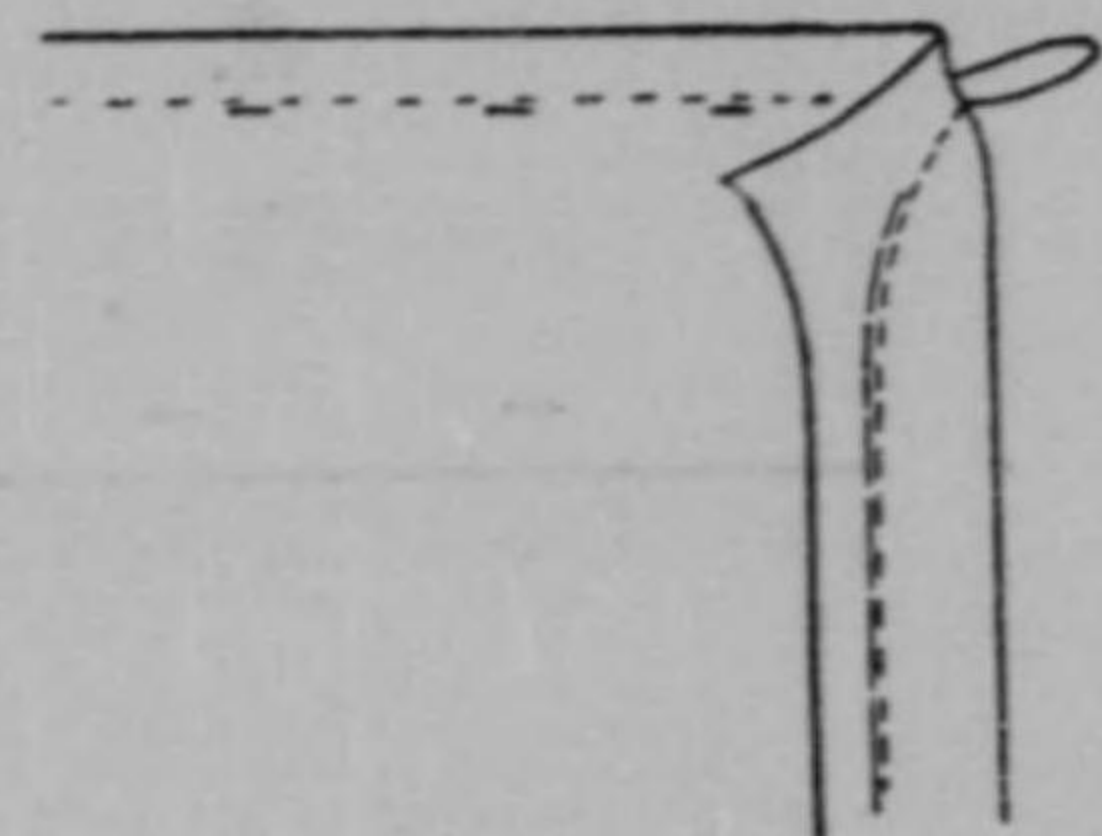


裾合

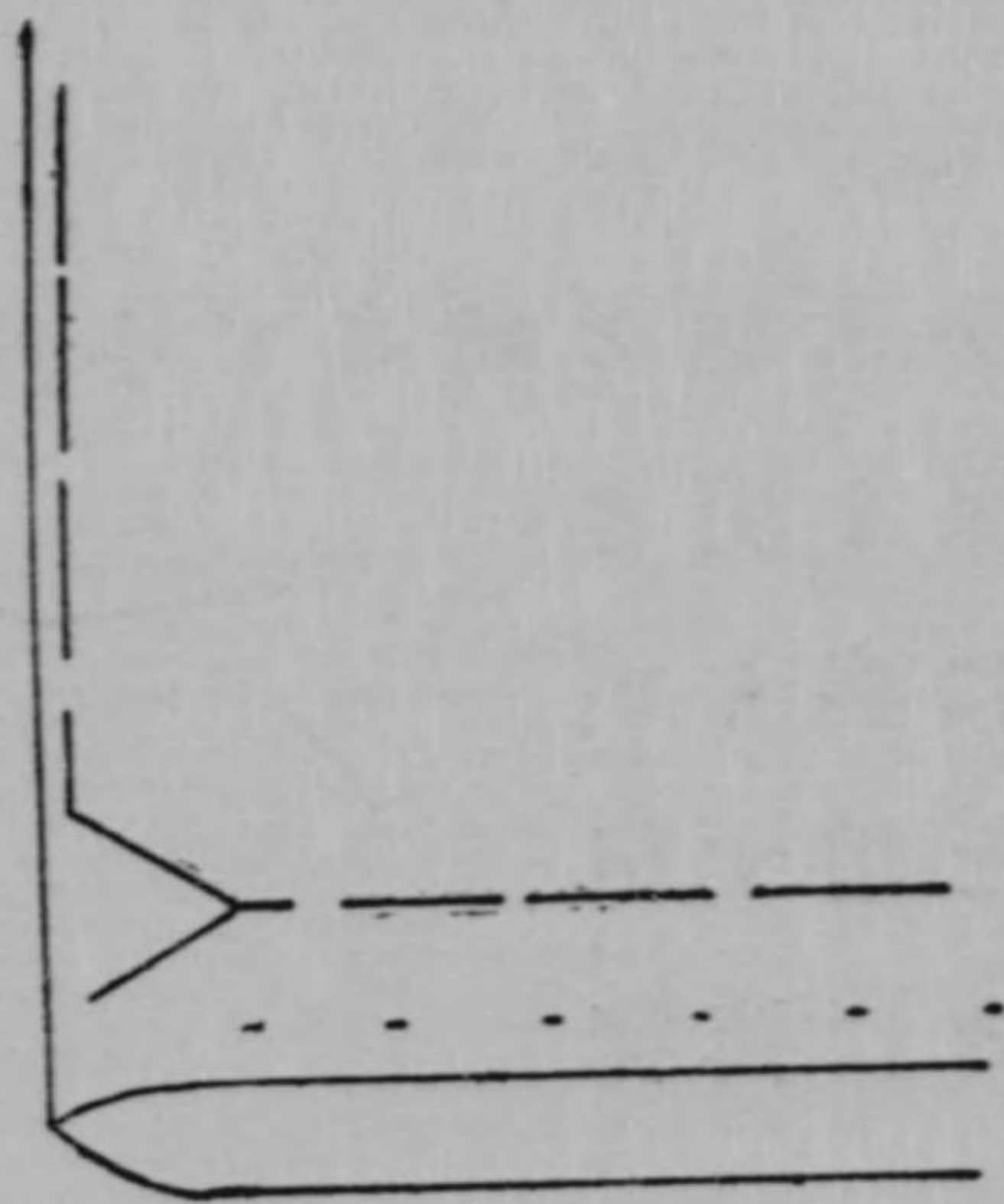
裏衿幅を詰め加減にして、表に合わせて標の通り待針を打ち、表の標を見ながら縫つて表の方へ0.4cmの着せを軽く掛けて表返し、表折山から0.5cmの深さに裾先を残してかくし襷を掛ける。

衿下縫

圖の如く裾先の縫込を離して表は標より0.2cm出し裏は標通りに縫ひ、裾の縫代を平らに整へて表に折を付け、裾綿を入れて表返し形を整へて襷を掛ける。



出来上り圖

**衾綿の作方**

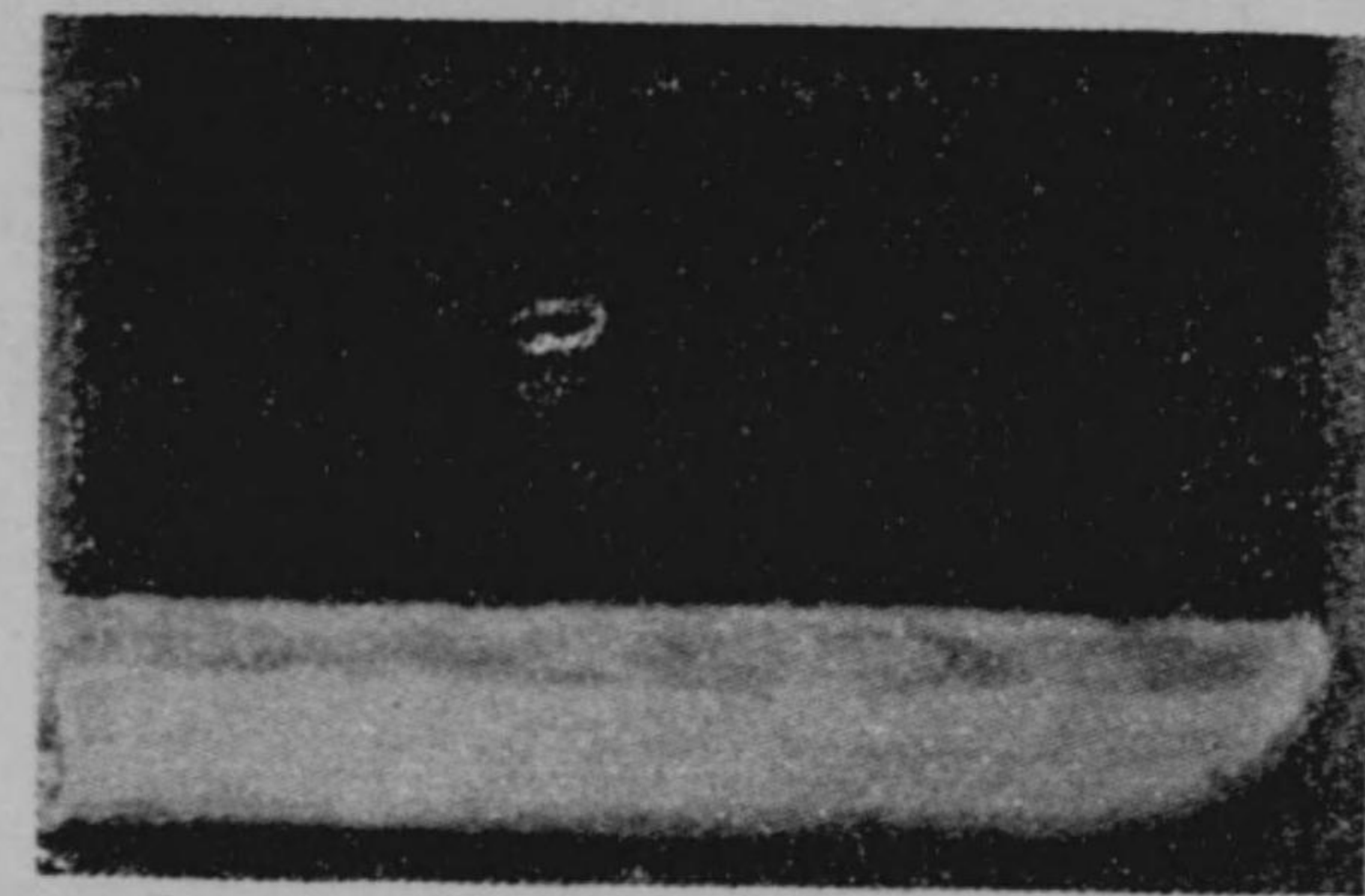
青梅綿 幅出衾の5倍位に切り、鋸臺の上にて軟く巻きて作る。出衾0.5cm以下の時は軟き布を用ひても良い。

巻綿の作方

出衾の多い時は、くるみ綿を用ふ。くるみ綿の幅は出衾の5倍位とす。

衾綿の入方

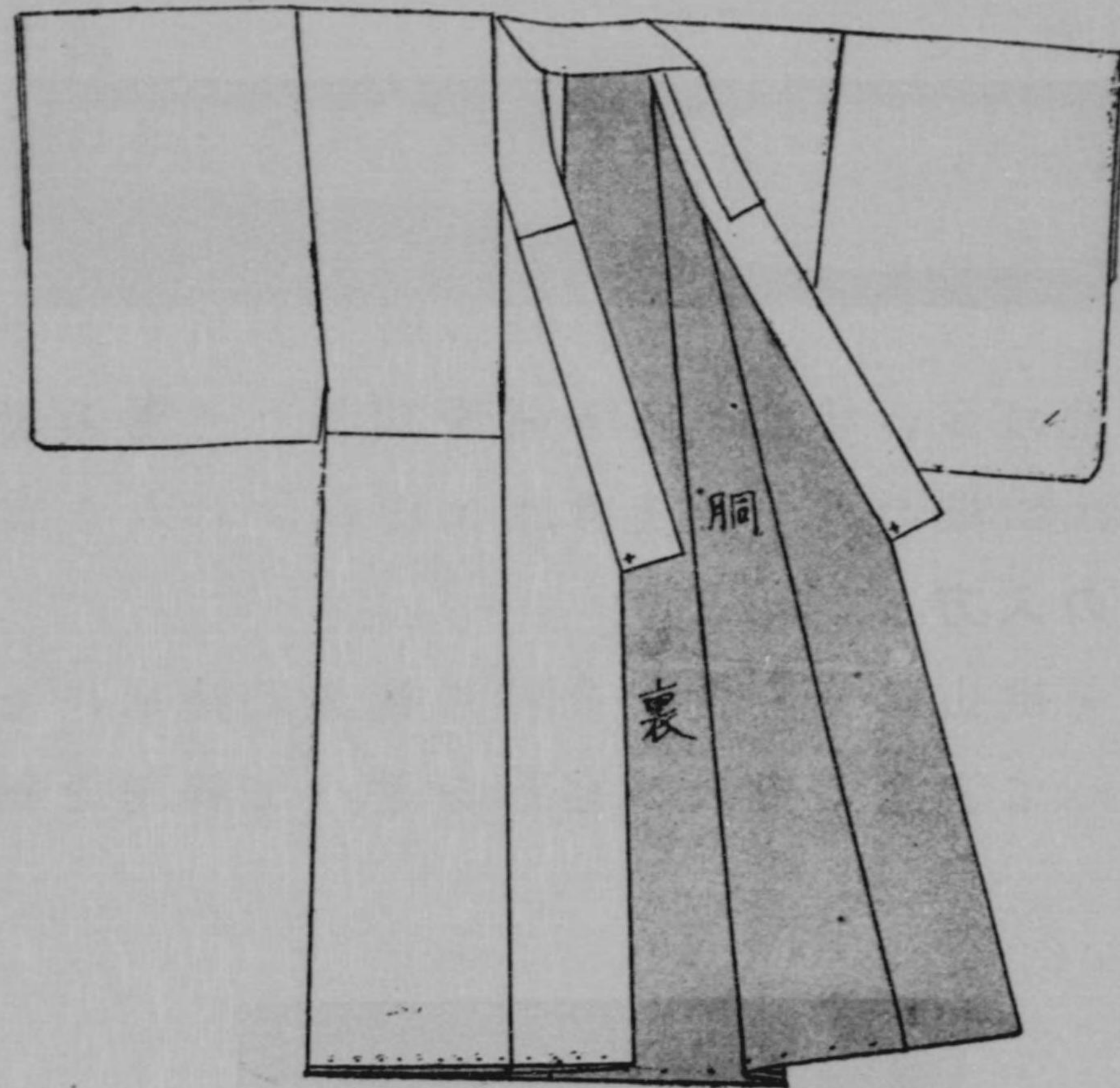
綿を衾山に良く含ませ、特に裾先は裾形になぞらへて表返し、衾及び裾形を整へて襷をを掛ける。



第七章

大裁男物袷長着

各部の名稱



地質

表

綿布 木綿, 瓦斯

絹布 銘仙, 紬, 大島, 結城, 高貴織,
羽二重

裏

木綿, 金巾, 羽二重金巾, モスリン, 平絹
紬, 羽二重

袖口布

毛襦子, 瓦斯八丈, 洋八丈, 絹八丈

裁方

表

大裁男物單衣に同じ。

裏布 (裁切寸法)

1 通裏の場合

裁切身丈 = 着丈 + 10cm (内外 衽と揚の寸法)

2 裾廻附の場合

衽裾廻し丈 = 身丈の約二分の一とす

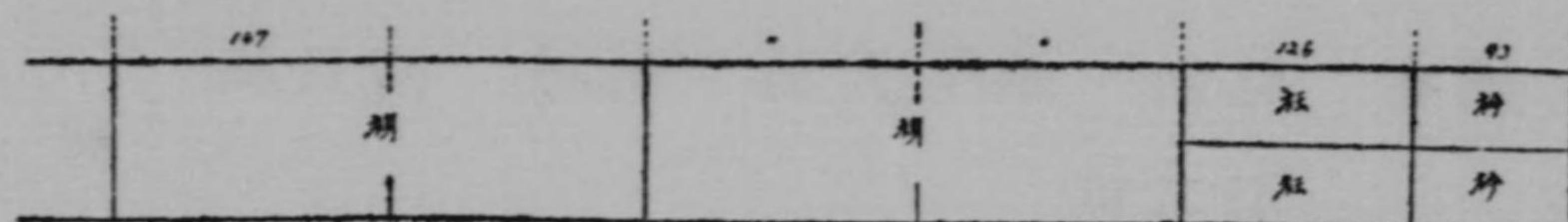
〃 70cm 乃至 90cm

衽裾廻し丈 = 85cm 乃至 90cm

3 通裏裁方

衿山接裁 (袖は省く)

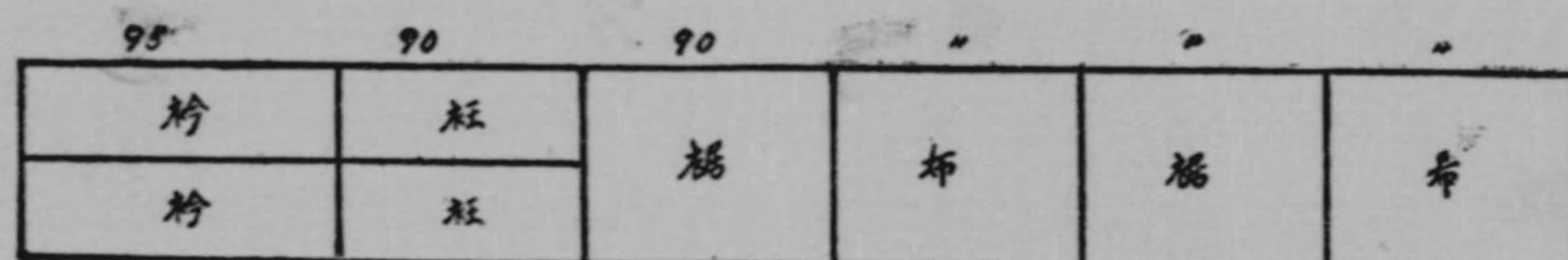
總用布 1031cm



用布短かき時は衿三つ割接裁又は衿先にのみ裏衿を用ふ。

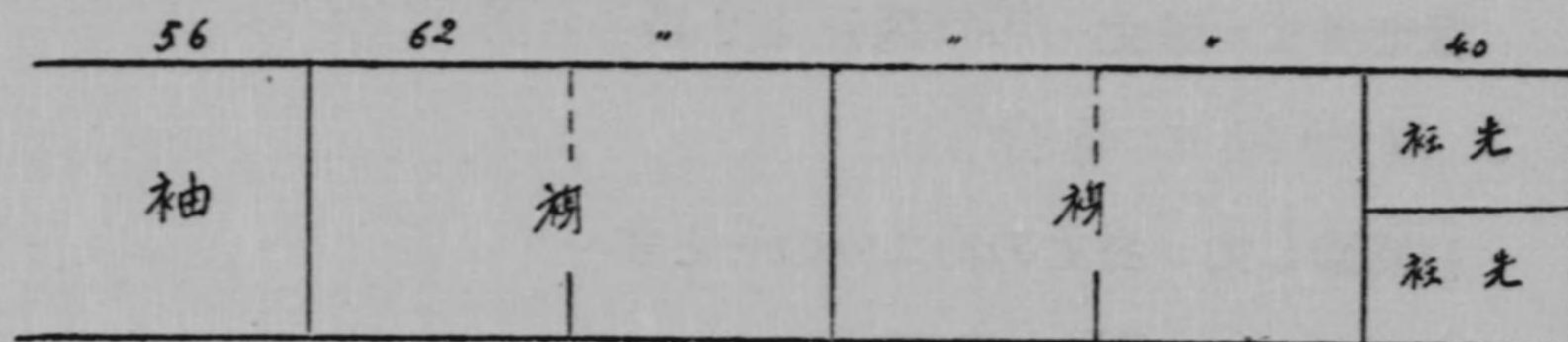
4 裾廻附の裁方(額裏)

總用布 550cm(半反)



5 胴裏裁方 (袖は省く)

總用布 512cm



標附方

袖

女物衿に準ず。

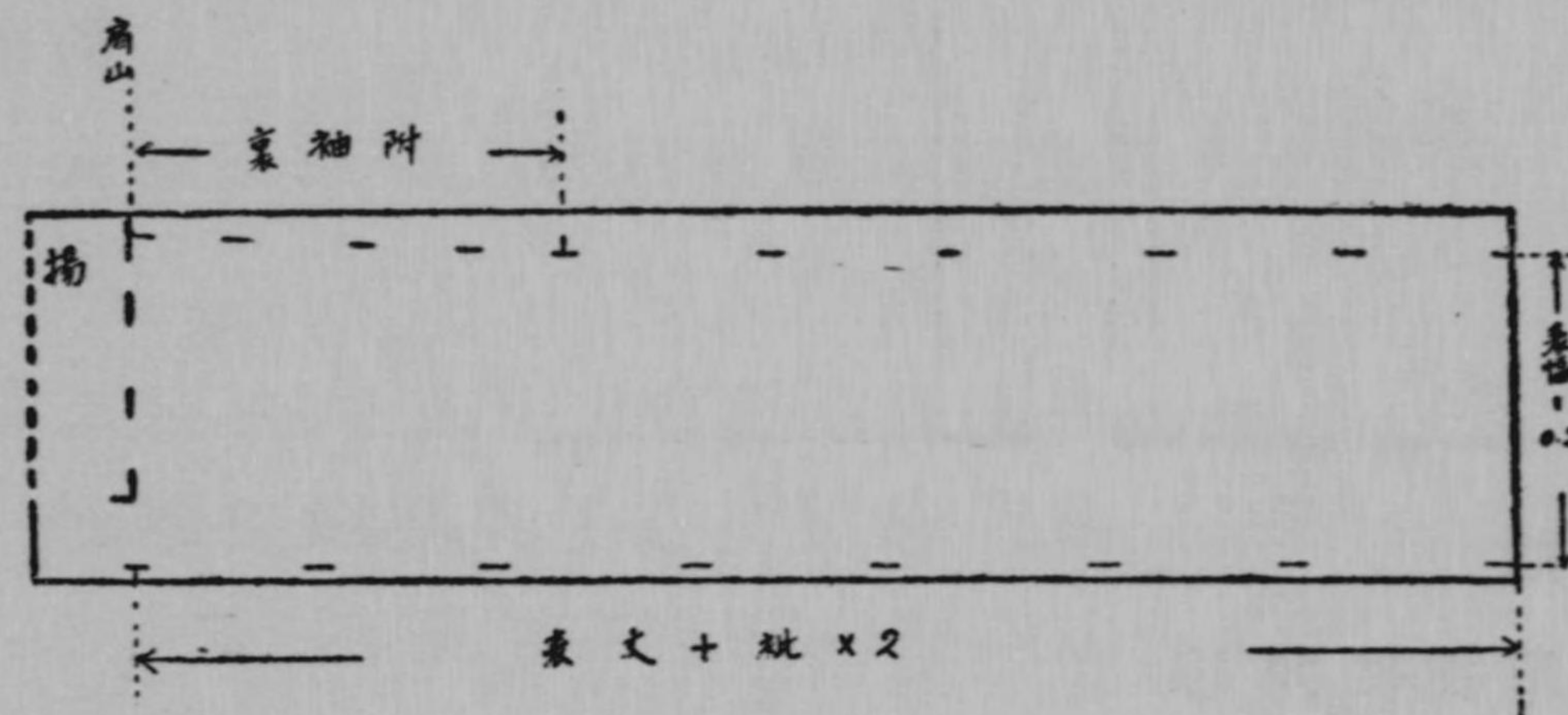
表衿

男物單衣に同じ。但着丈の定め方は次の如し。

上身丈+着せ代+裾縫代=標附身丈

裏衿

身丈長きときは肩にて揚をなす。



衿及び衿

女物衿に同じ。

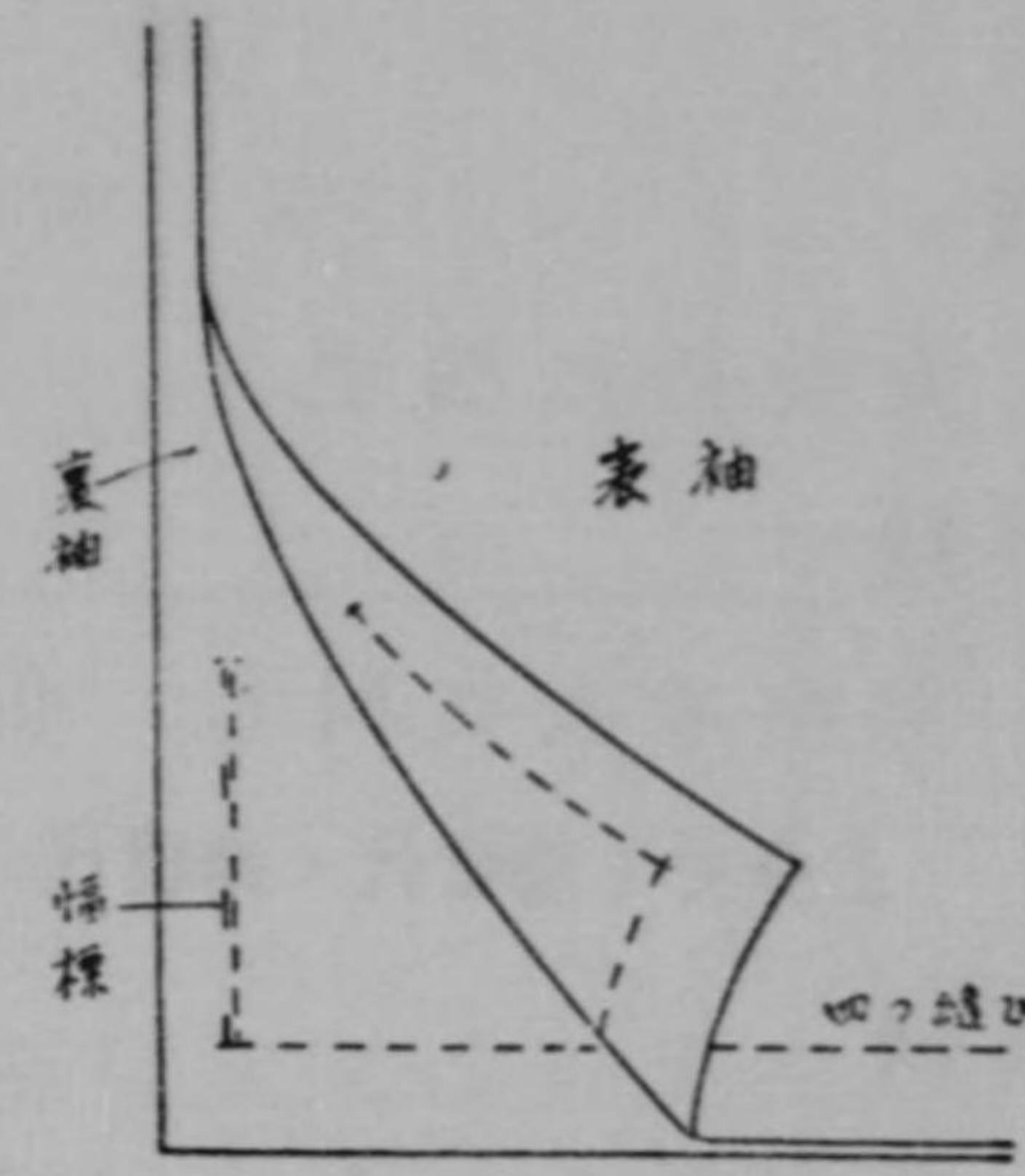
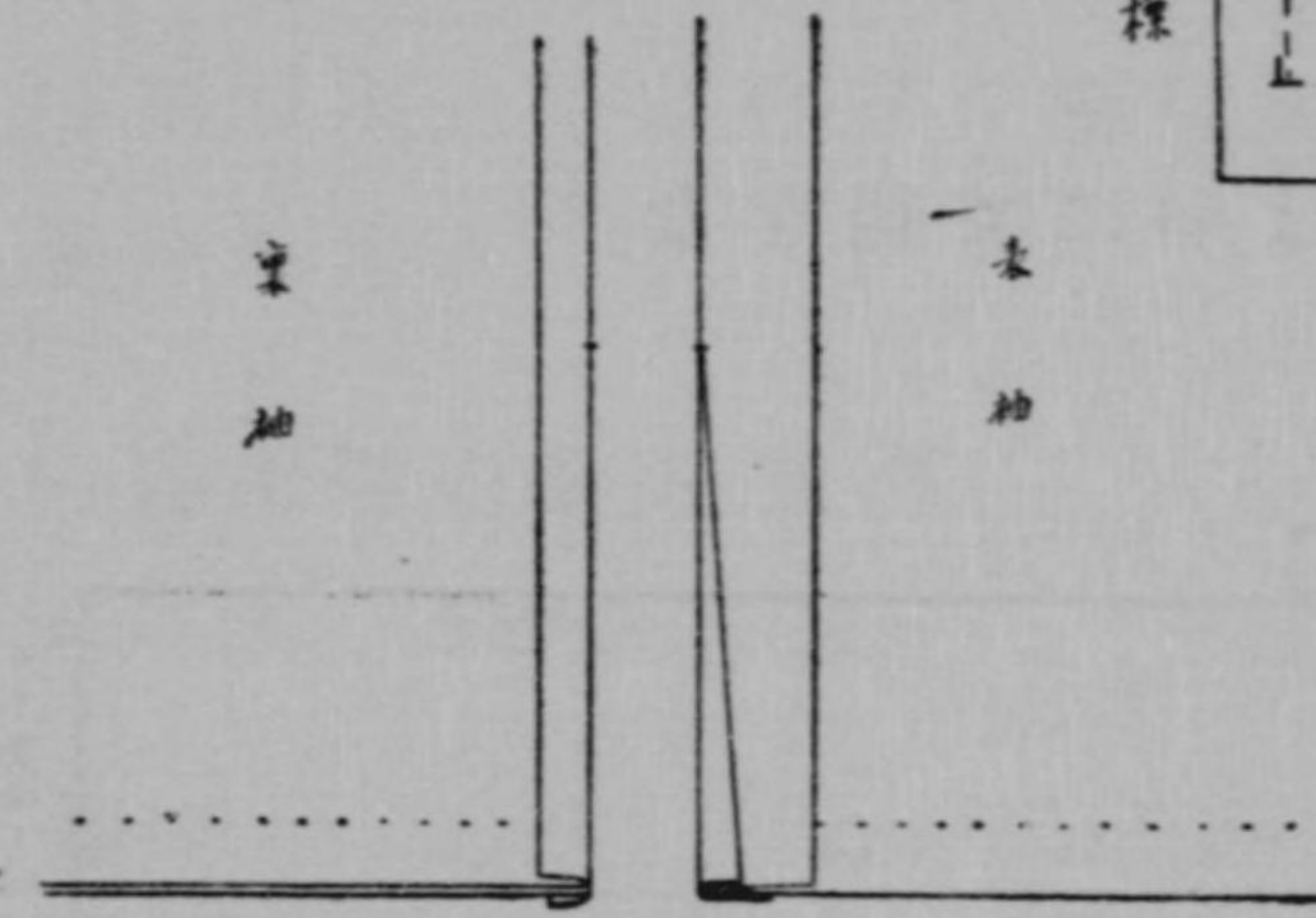
縫方

袖

縫方は殆ど女物に同じ。

人形の作方 人形及び袖下0.8cm位表裏別々に

縫ひ、(裏は表より0.2cm幅を詰める)裏袖は縫目を割り、表袖は片返しにして縫込を開きて圖の如く折り、表裏の角を合せて引糸を附けて返す。

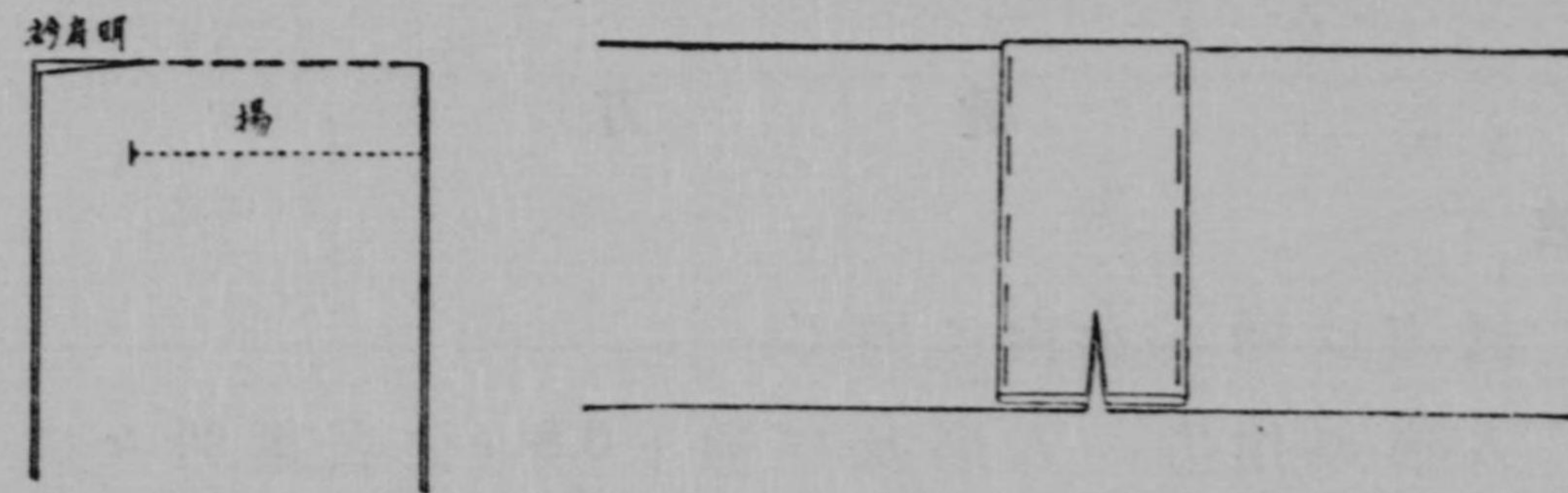


表袖

單衣に同じ。

裏袖

圖の様に肩に揚をなし、背・脇・衿附は女物に同じ。



裾合及び中綴

女物に同じ。

袖附

表單衣に同じ。裏袖附は袖附止りにて、四つ留をなし、袖の縫込を伸して縫ひ、折は袖の方に返す。

衿附

男物單衣に同じ。

裾綴

女物に同じ。(針目の數は女物より一針つつ多い)

仕上

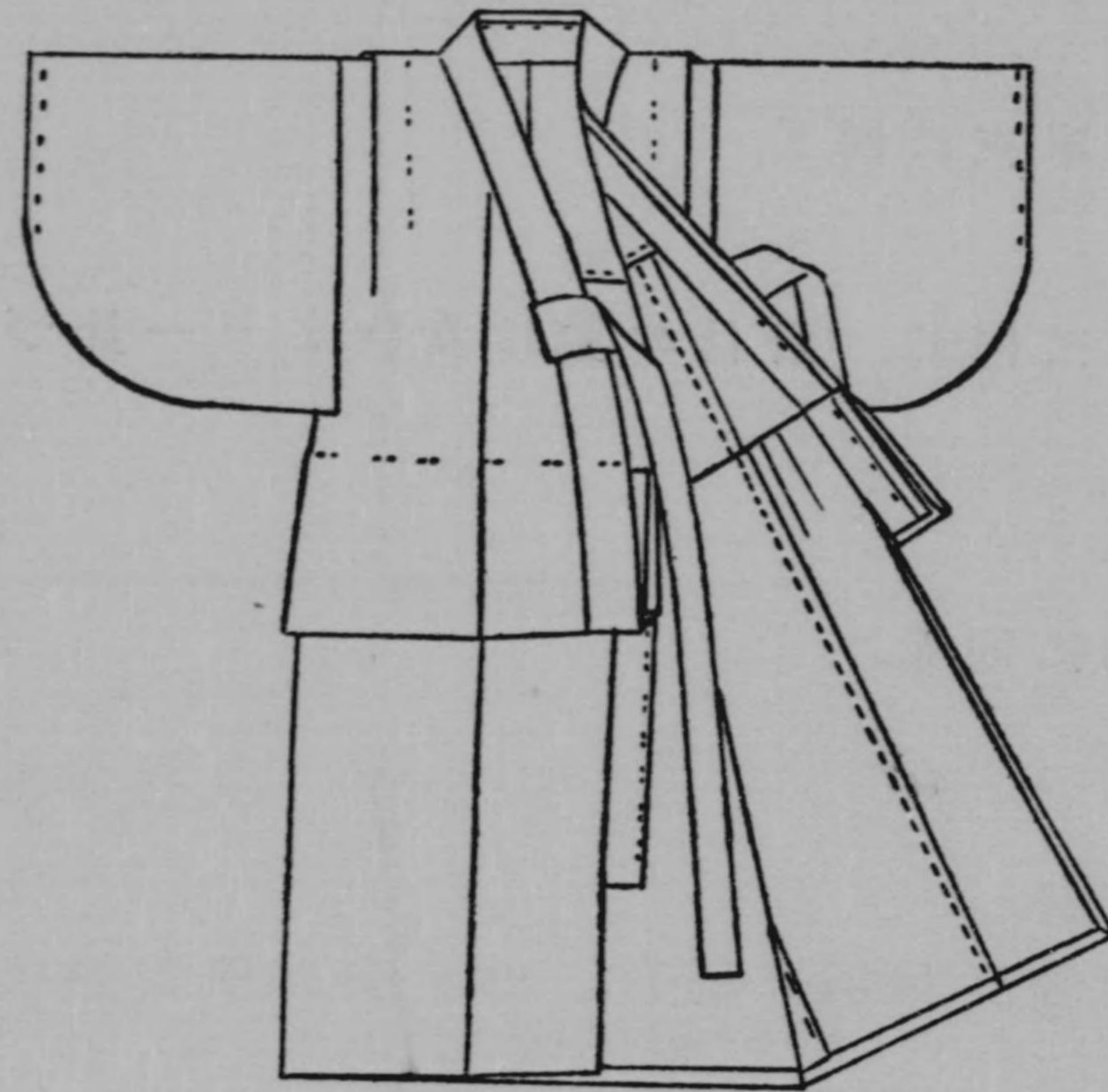
女物に同じ。

第八章

中裁單衣

五・六歳より十一・二歳迄用ふ。

出來上圖



仕立上寸法

單位 cm

年齢 名稱	五・六歳	七・八歳	九・十歳	十一・二歳	備考	
袖 丈	筒袖	24	26	28	28	
	元祿袖	28	30	32	34	
	長袖	60	63	65	68	
袖口	13	15	15	16	筒袖の場合は2cm多く 長袖の場合は1-2cm多く	
袖附	15	15	17	17		
袖幅	24	26	30	30	肩幅寸法 十歳以下8cm内外 十歳以上6cm内外	
身丈(裁切)	100	110	115	120	着丈+30cm内外	
衿肩明(上り)	5	5.5	6	6.5		
身八つ口	10	10	10	10		
後幅	22	24	26	いつばい		
肩幅	同上	同上	同上	同上		
前幅	いつばい	いつばい	いつばい	いつばい		
衿下	11	12	13	15		
衿下	26	30	34	40		
衿幅	いつばい	いつばい	いつばい	いつばい		
衿幅	4	4.2	4.5	4.8		
着丈	70	80	90	100		
衿	37	42	47	52	着丈 × $\frac{1}{2}$ + 2cm	

裁方

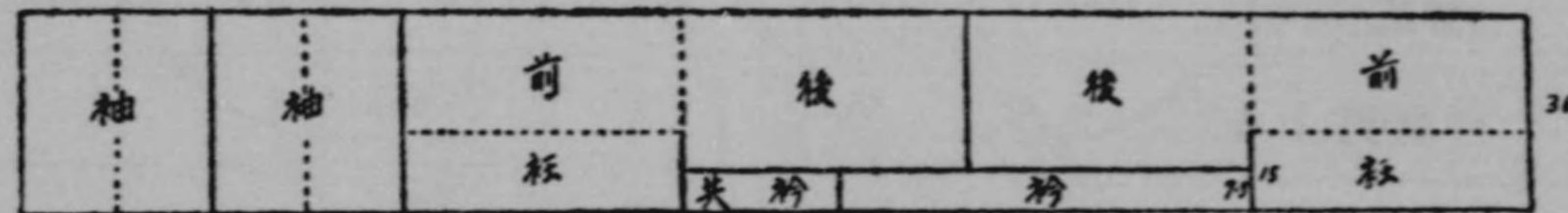
裁方の種類

普通四つ身裁、逆衿裁、前衿裁、車裁がある。

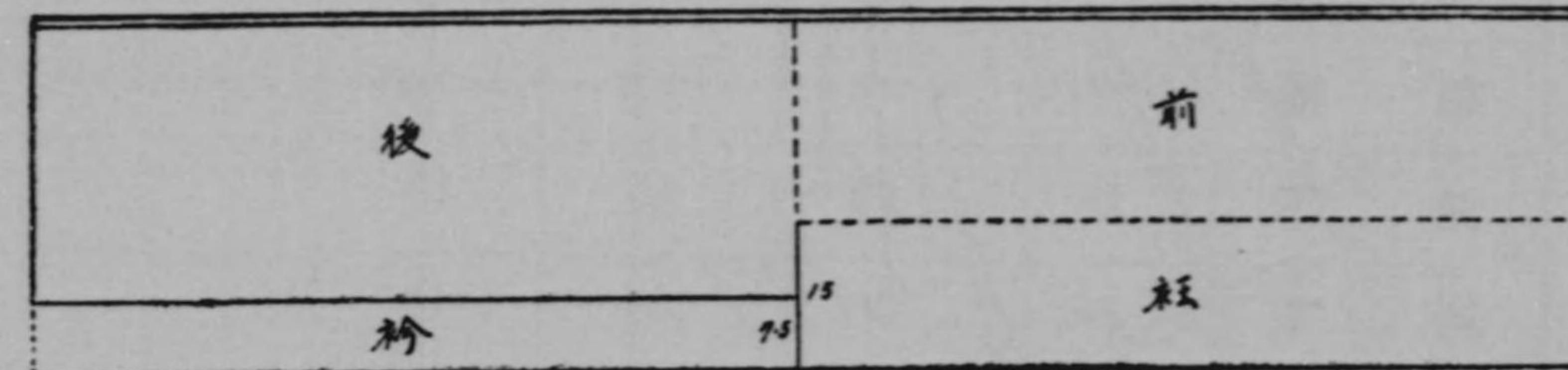
1 普通四つ身裁方

布数と幅 用布は並幅にて裁切袖丈の4倍と裁切身丈の4倍とを要し、後衿から幅7.5cm取りて衿とし、前衿を續けて衿とする。

裁方



衿の裁方



衿幅を広くするため、年齢の大小に拘らず、衿幅及び衿肩明を各7.5cmとし、背縫代にて衿肩明の寸法を加減する。

積方

$$(イ) \text{ (袖丈} + \text{身丈)} \times 4 = \text{總用布}$$

$$(ロ) \text{ (總用布} - \text{袖丈} \times 4) \div 4 = \text{身丈}$$

$$\text{(身丈} - \text{衿下} + 10\text{cm)} \times 2 = \text{衿丈}$$

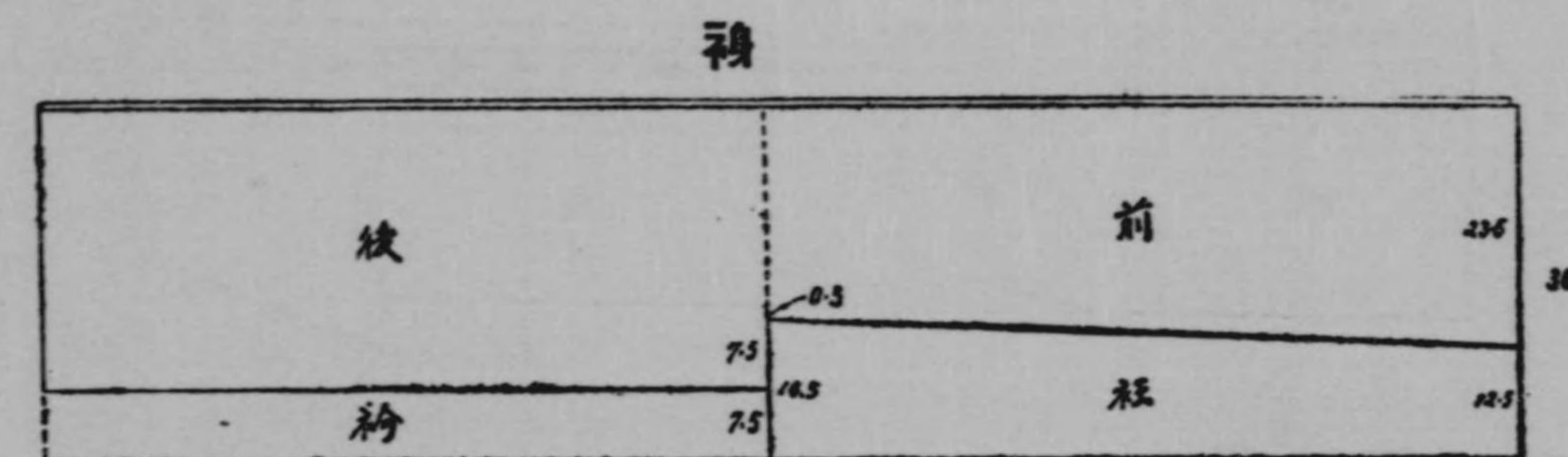
用布 (七・八歳用)

長袖の場合 700cm内外

短袖の場合 560cm内外

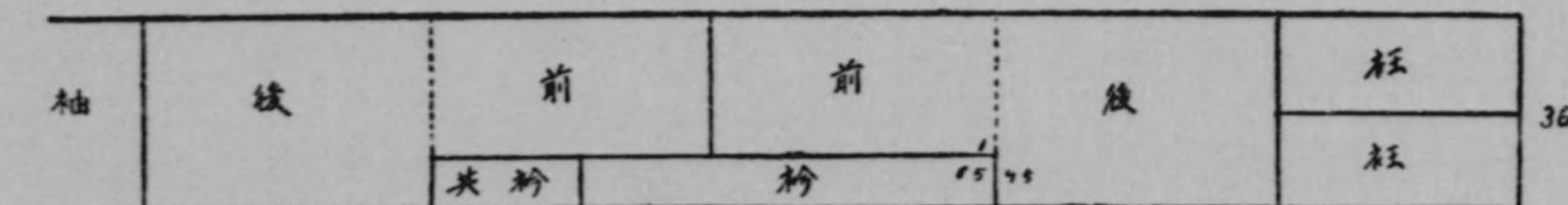
一反で短袖は四つ身二枚、長袖は四つ身と一つ身とを裁ち合せられる。

2 逆衿裁



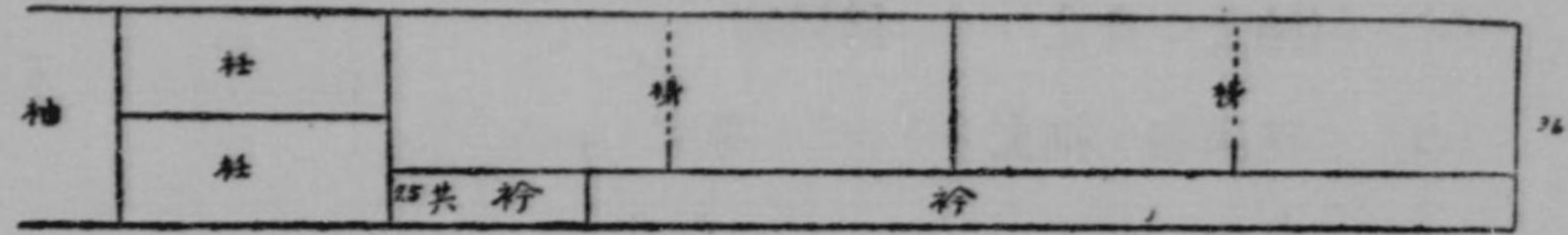
此裁方は布の損じた時に用ひられ、普通四つ身裁よりも前幅、衿幅を通じて1cm広く仕立てられる。

3 前衿裁



中裁の中、最大きい裁方で十四・五歳位迄着用する事が出来る。

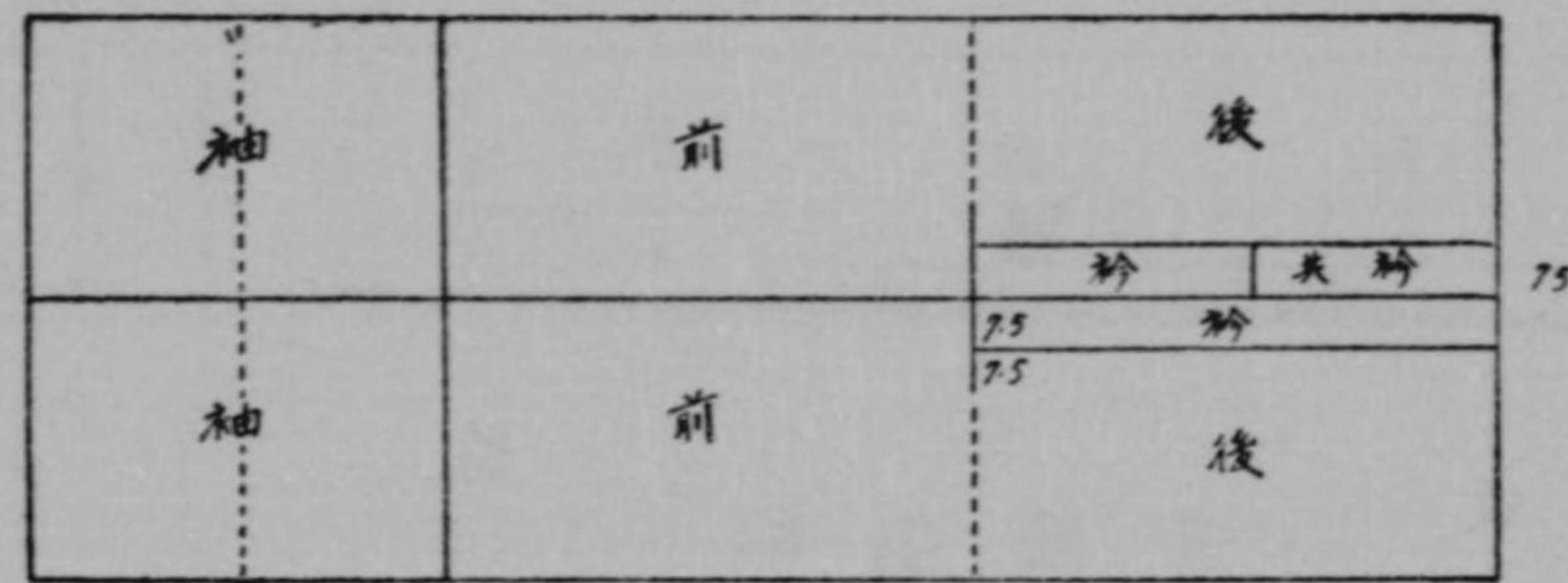
4 車裁



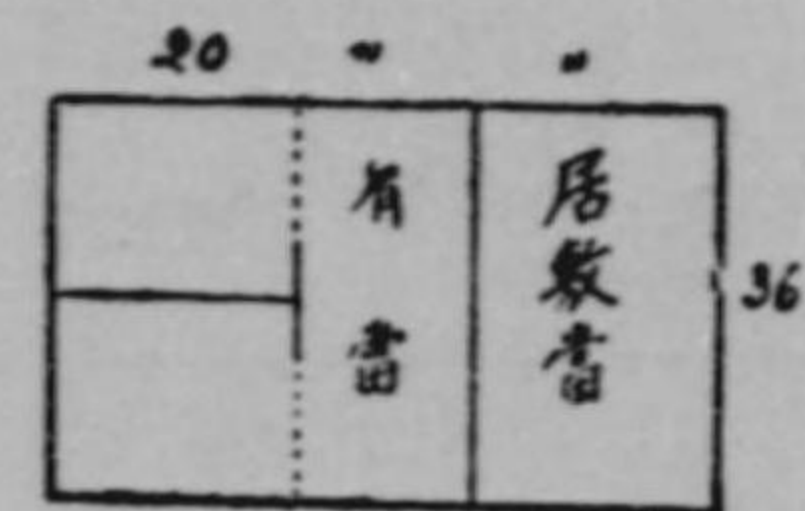
此裁方は前後の身幅が同寸で且別衿であるから仕立替には都合が良いが前衿裁の様に身幅を広く作ることが出来ぬ。

廣幅の裁方

普通四つ身裁



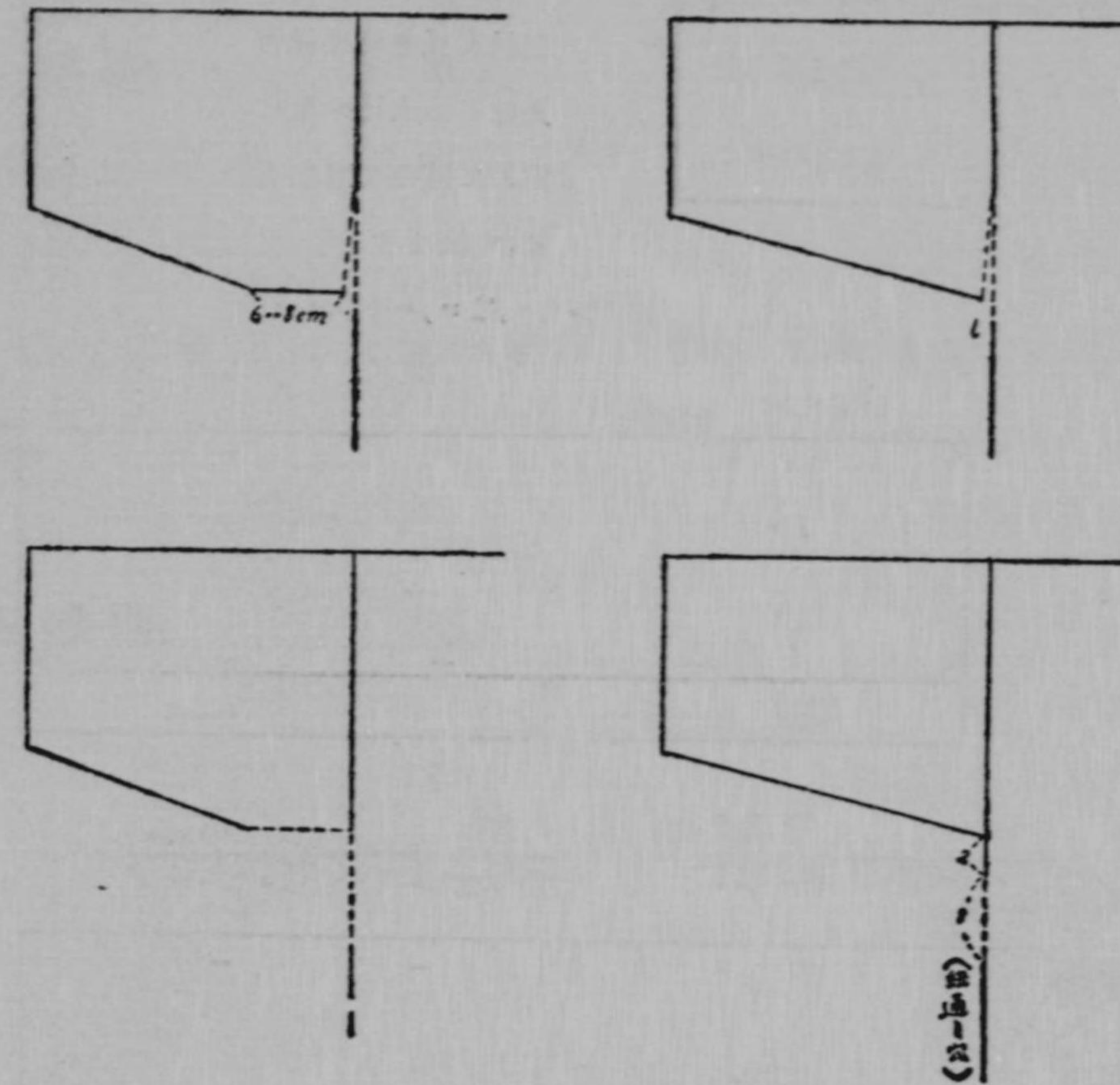
肩當居敷當



附紐

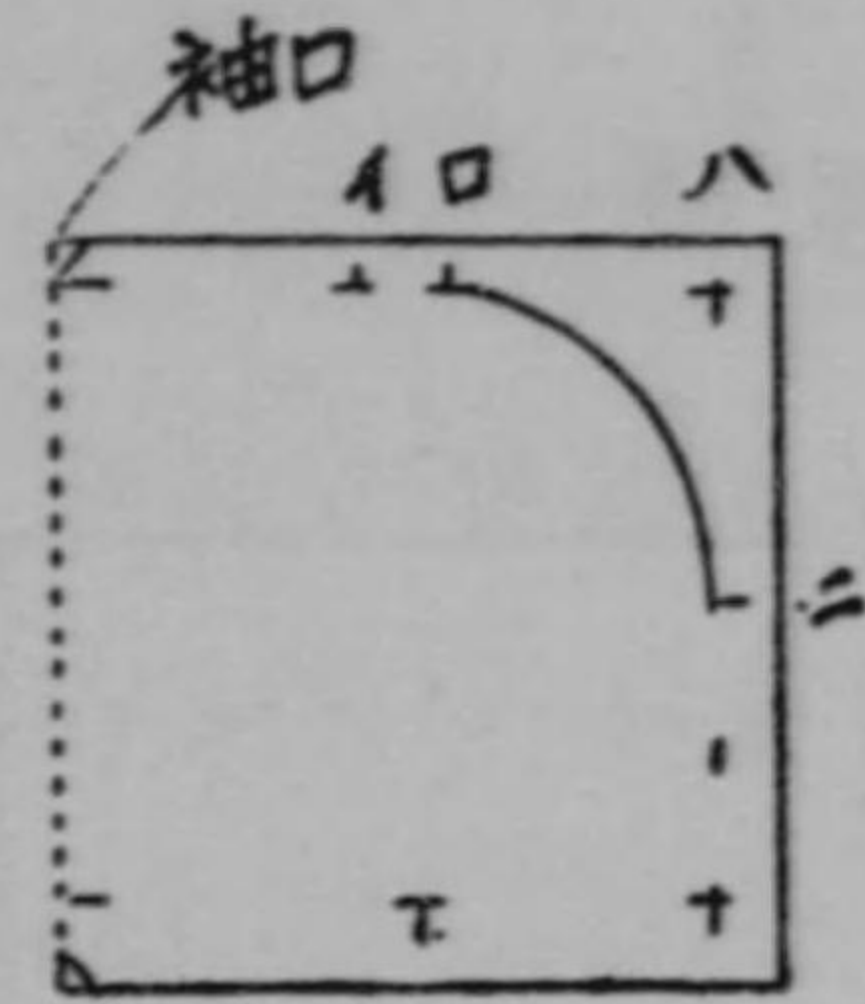
四つ割幅にて、長さ70cm~80cmのもの二枚。

筒袖の種標

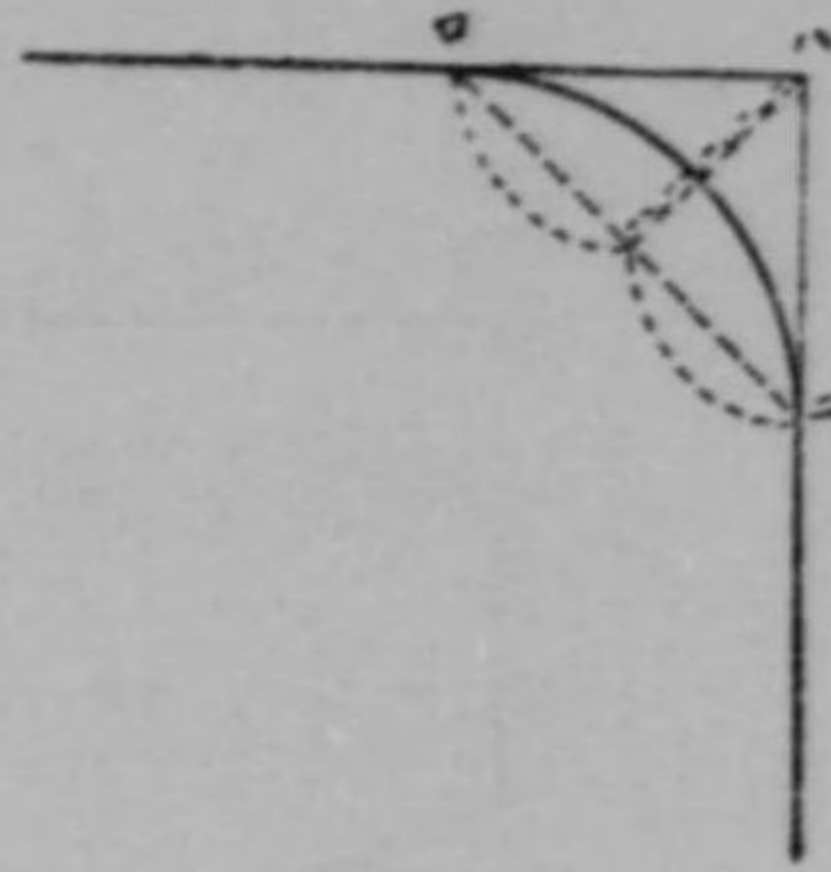


標 附 方

袖 (元祿袖)

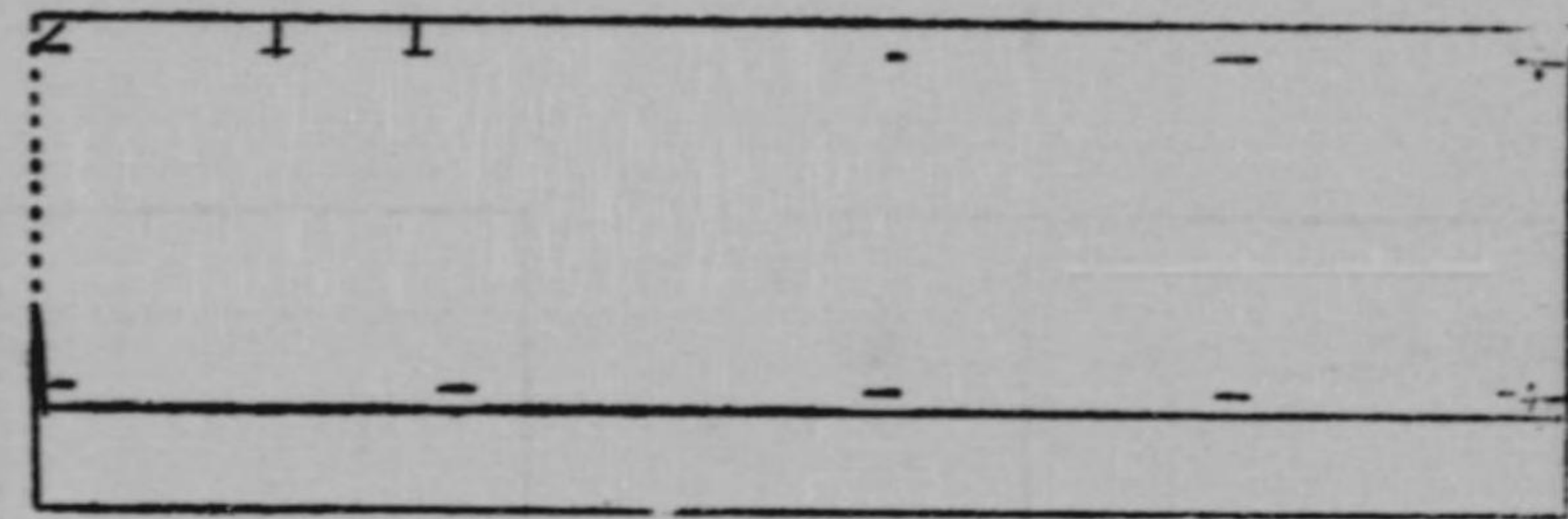


丸味の作り方

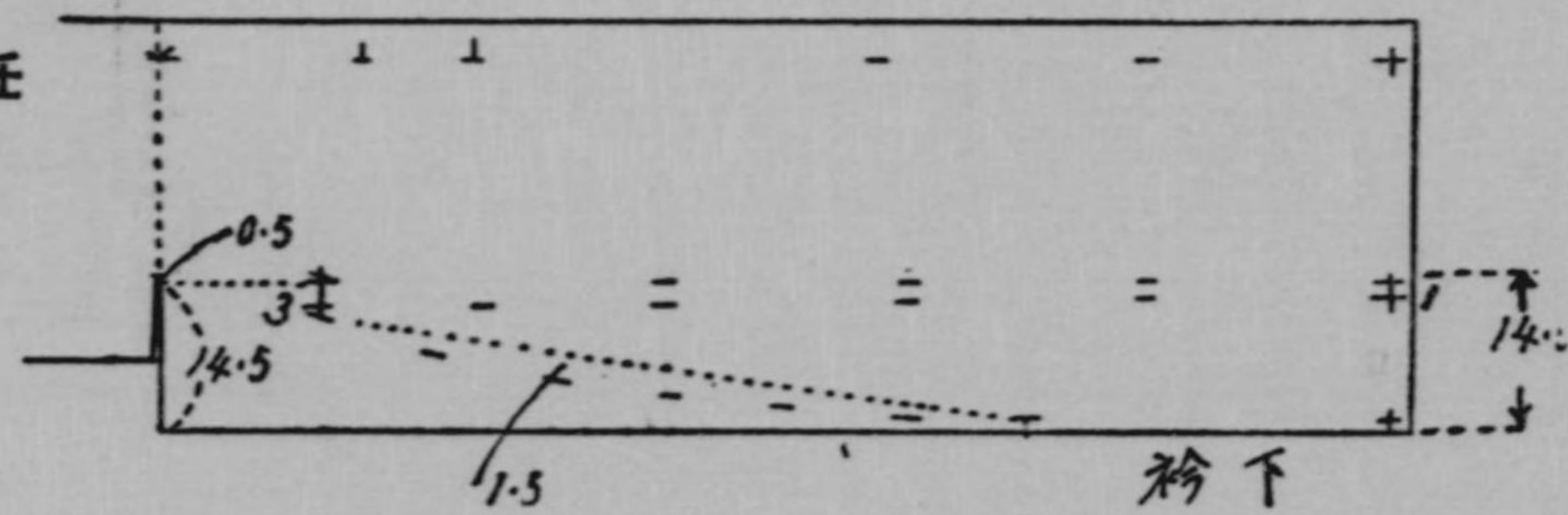


イ,ロ間は2.....4cm
 但袖丈長き時は袖の丸味を最大15cm位に定めて残りの寸法をイ,ロ間とする。
 ハ,ニはロ,ハ+2cm

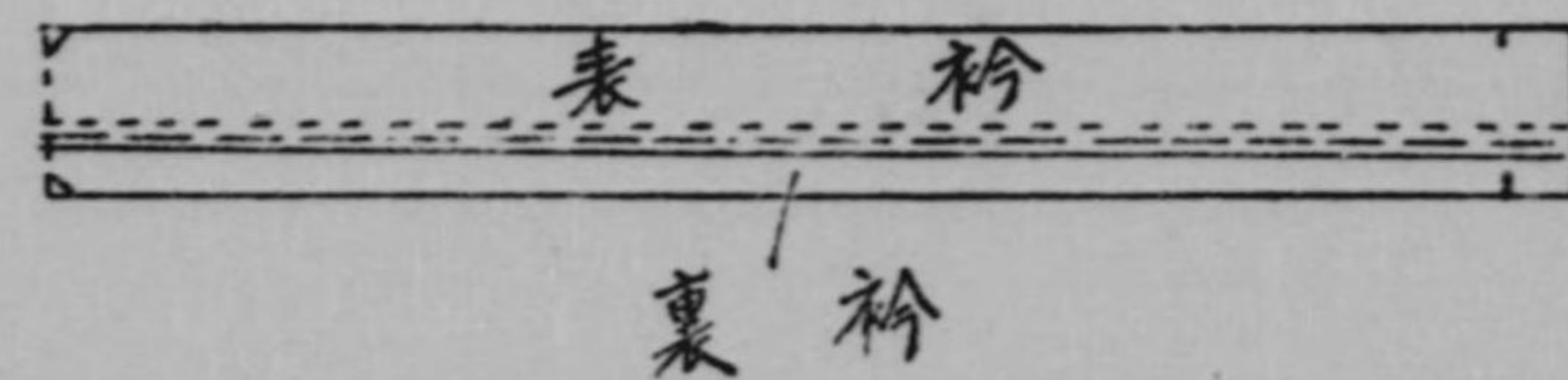
裨



前及び衿



衿



縫 方

縫方順序

- | | | |
|----------|--------|---------|
| 1 袖 | 2 背縫 | 3 衿附 |
| 4 衿下衿 | 5 肩當 | 6 衿附,共衿 |
| 7 脇縫 | 8 裾衿 | 9 袖附 |
| 10 肩揚,腰場 | 11 居敷當 | 12 附紐 |
| 13 仕上 | | |

縫方の順序は大裁の順序に依つてもよい。

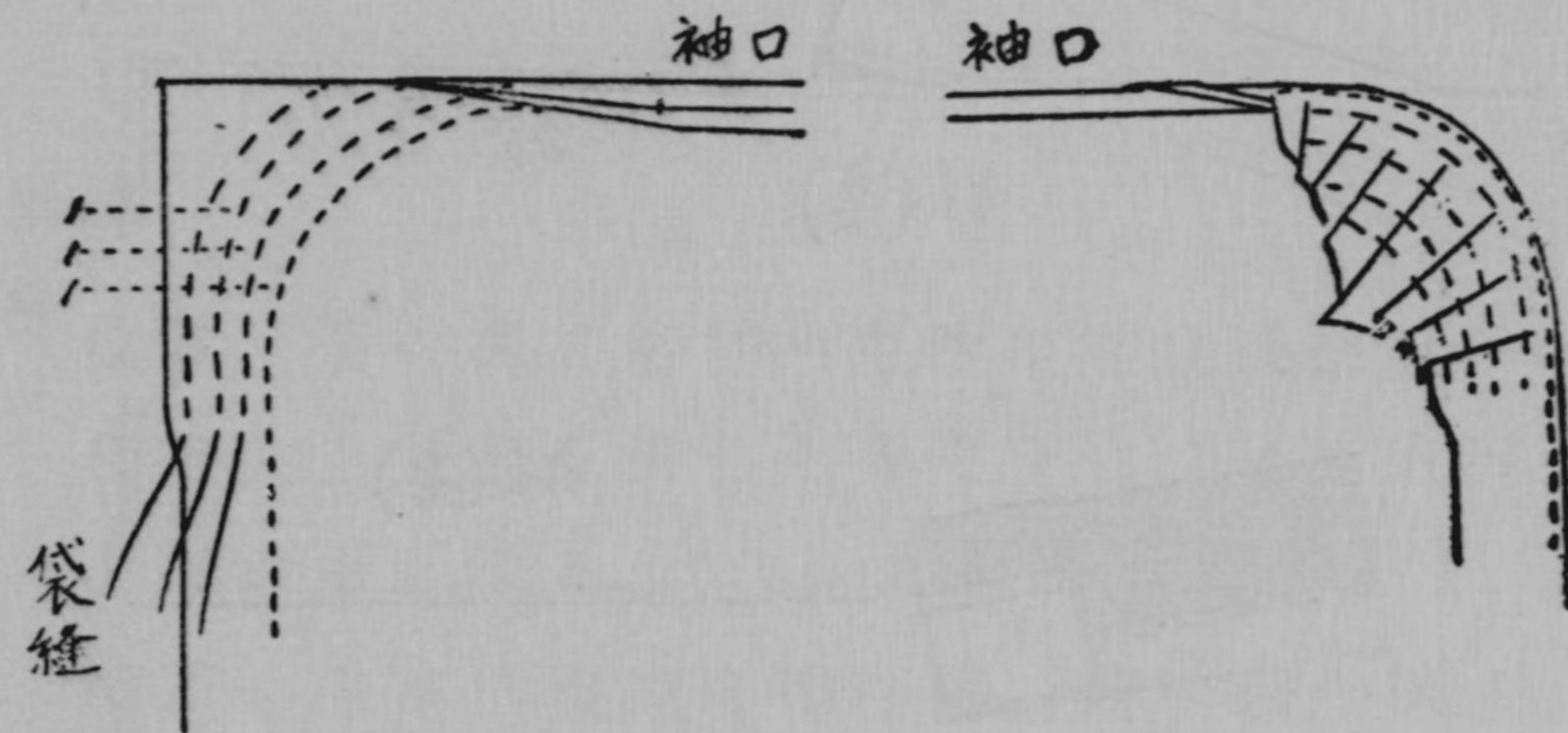
方法

袖

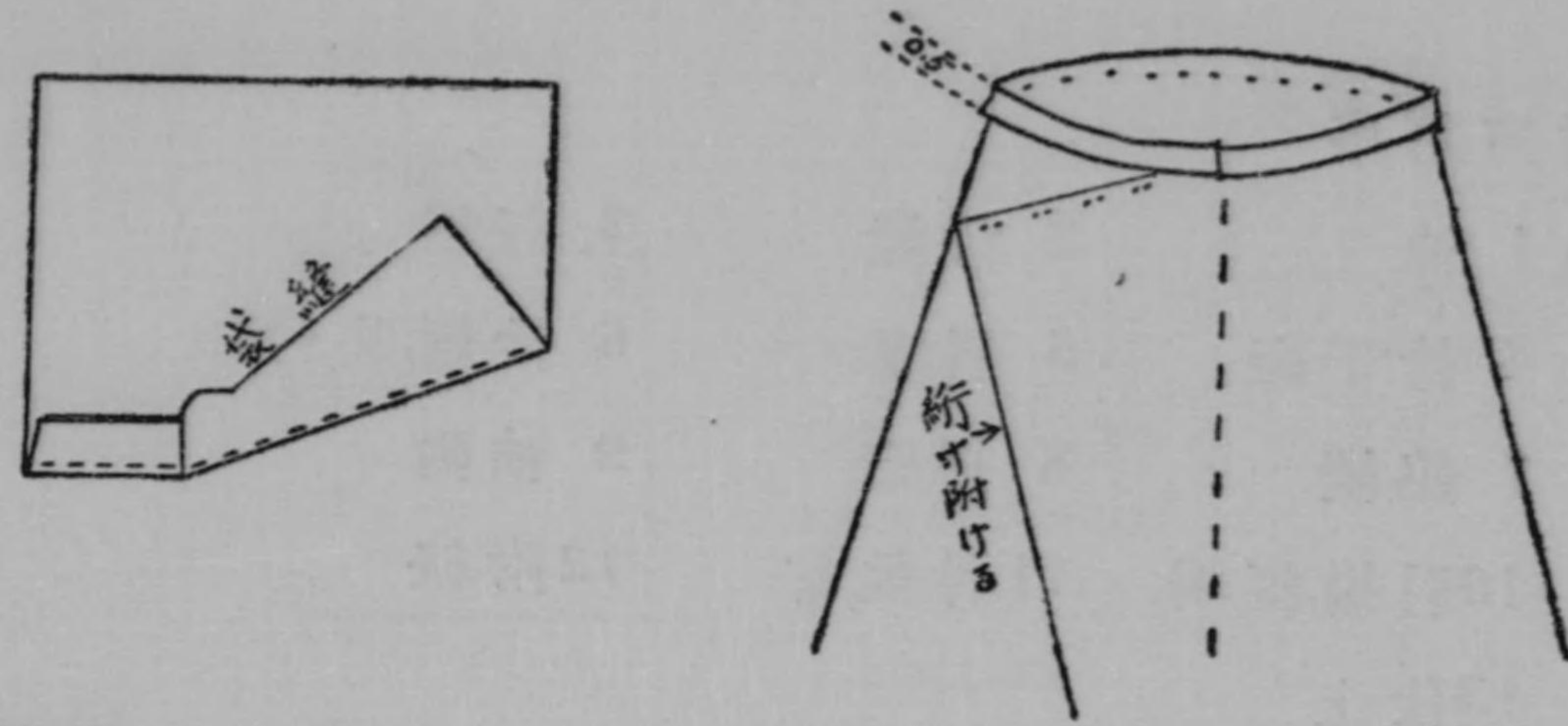
元祿袖

(一)

(二)



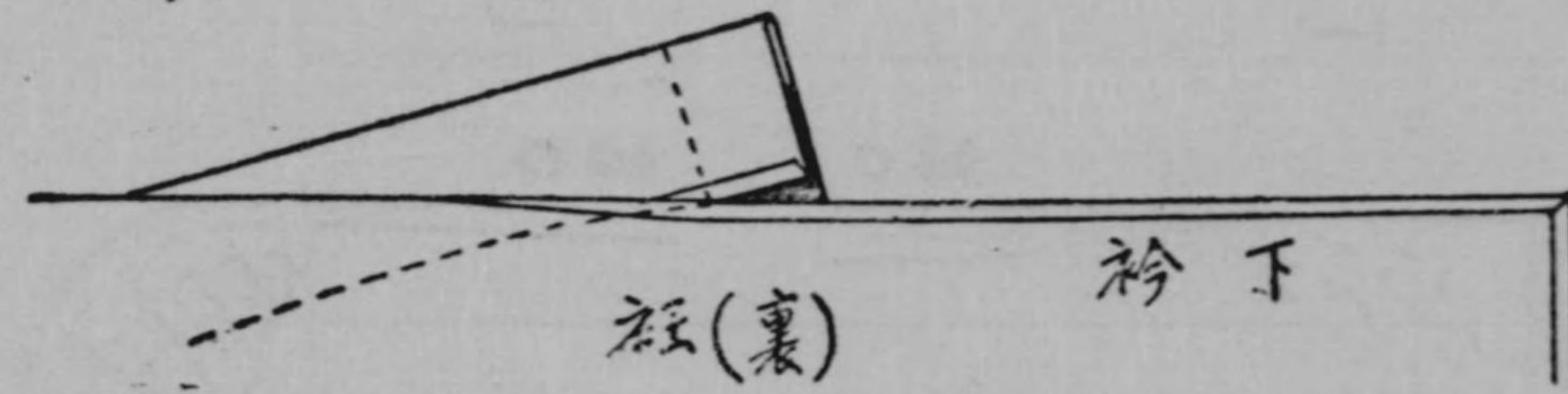
筒袖



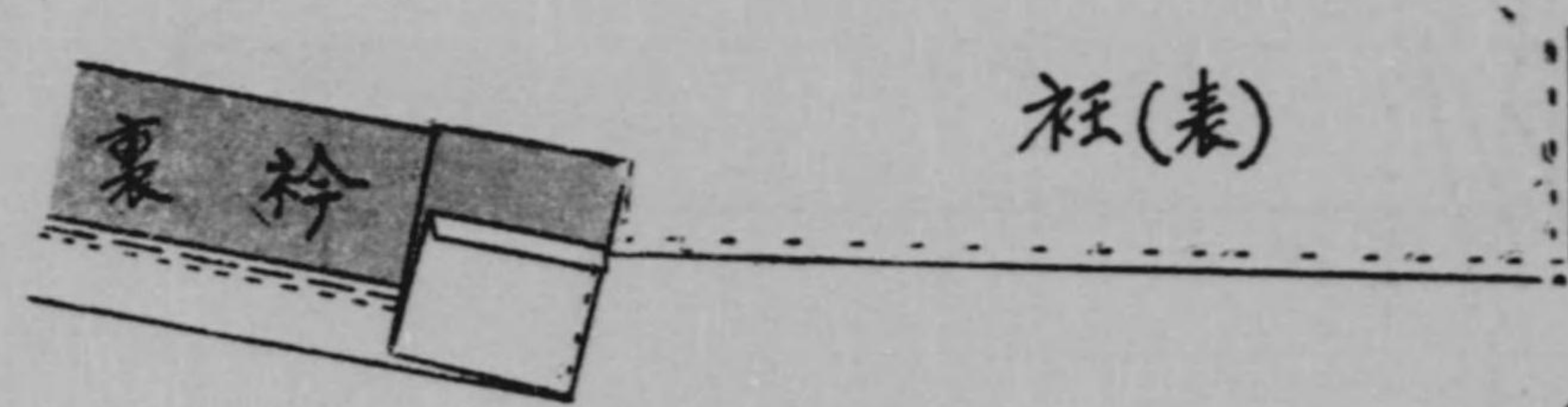
衿先

衿先留は裏衿、表衿山、衿の順に布を一針抄つて留め、衿先を是より0.4cm浅く縫ひ、縫代を綴ちて表に返す。

(一)



(二)



(三)



肩揚

位置 肩幅の中央を揚山とし、後は真直に、前は1cm程袖附の方に曲げて折る。但一つ身及び縞物は曲げぬ。

長さ 後は袖附止まで、前は袖附止より一針上まで。

深さ 後は肩山と同じ深さとし、前は止りで揚の深さの二分の一だけ浅くし、揚の深さが4.5cm以上ある場合は三分の一だけ浅く縫ふ。

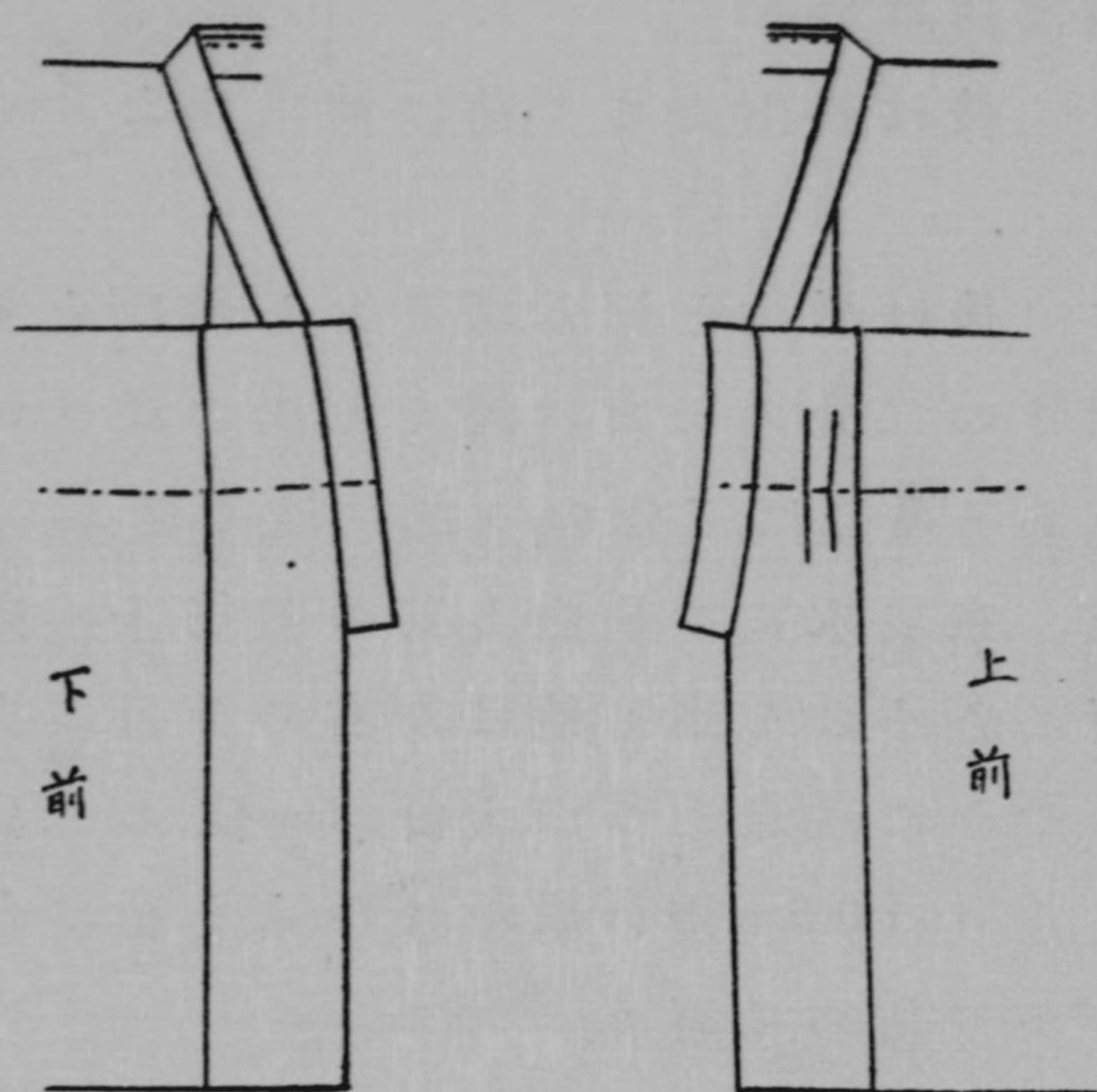
縫方 糸二本にて、肩山と其の前後1cm宛離れた所に各小針を出し、他は左右の針目の位置が揃ふやうに注意しつつ、大針2cm位の二目落となし、止りは0.5cm浅い處を抄ひ、糸を結び合せてしつかり留めて置く。

腰揚

位置 揚の深さが10cm内外の場合は裾を4cm程衿山より長く出して身丈を二つに折り、折山を揚の山とする。

縫方 上前は衿山を揃へ、廣い分は衿の間で一つ又は二つ襞山を衿附の方に倒して襞を取り、下前は襞を取らずに二目落にて縫ふ。此の時

五・六歳以上の場合には前衿の端にて0.5cm程深くなる様に脇縫目より次第に斜に縫ふ場合もある。

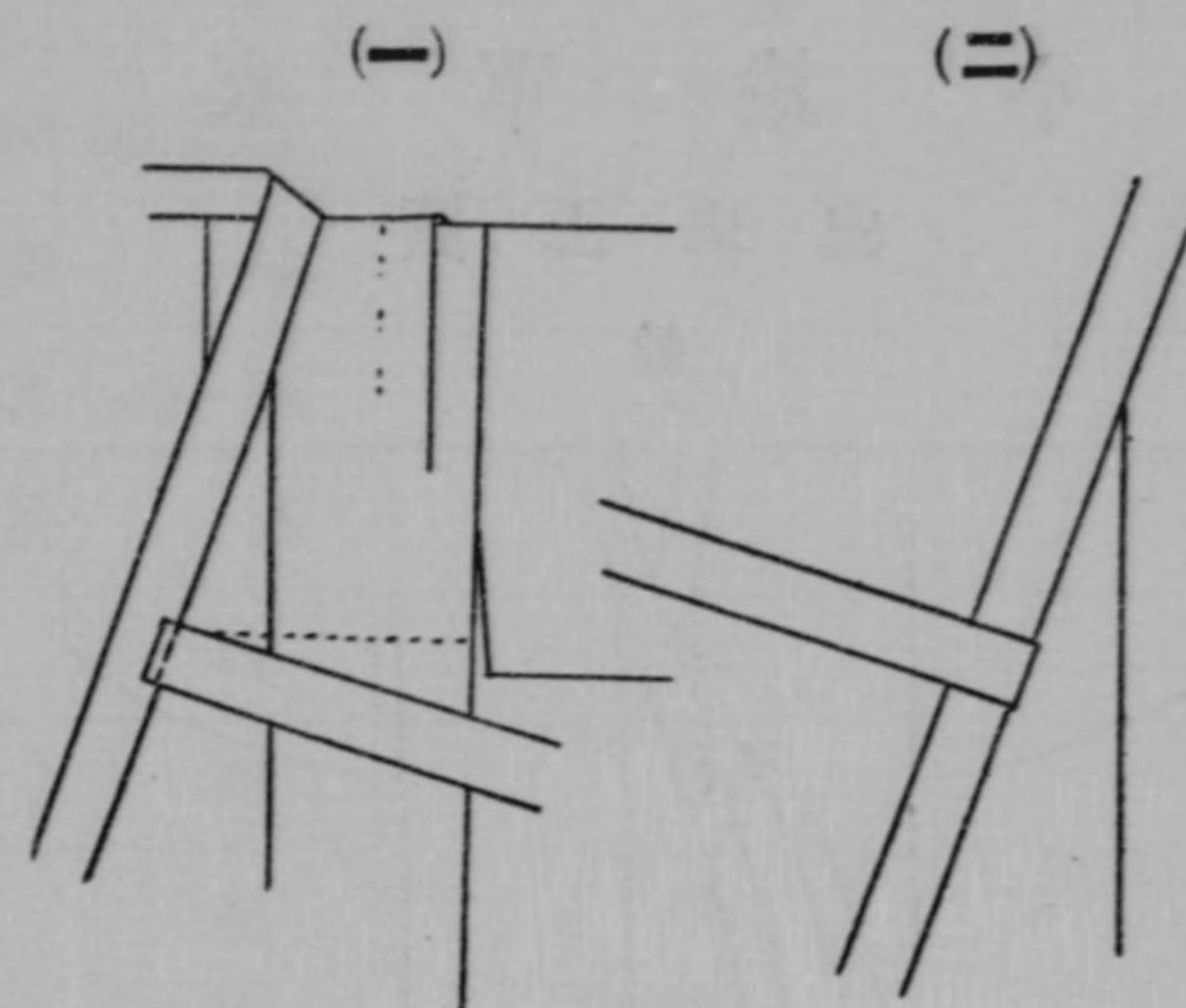


肩揚及び腰揚の位置は、揚の多少又は體格等に依り格好良き所に定める。

居敷當

腰揚の縫目より2cm程下から附ける。

附紐



位置 紐幅の上部を身八つ口止に合せる。
紐幅廣き場合は紐幅の中央を身八つ口止に合せる。附紐の縫目は男兒は下、女兒は上に向けて附ける。

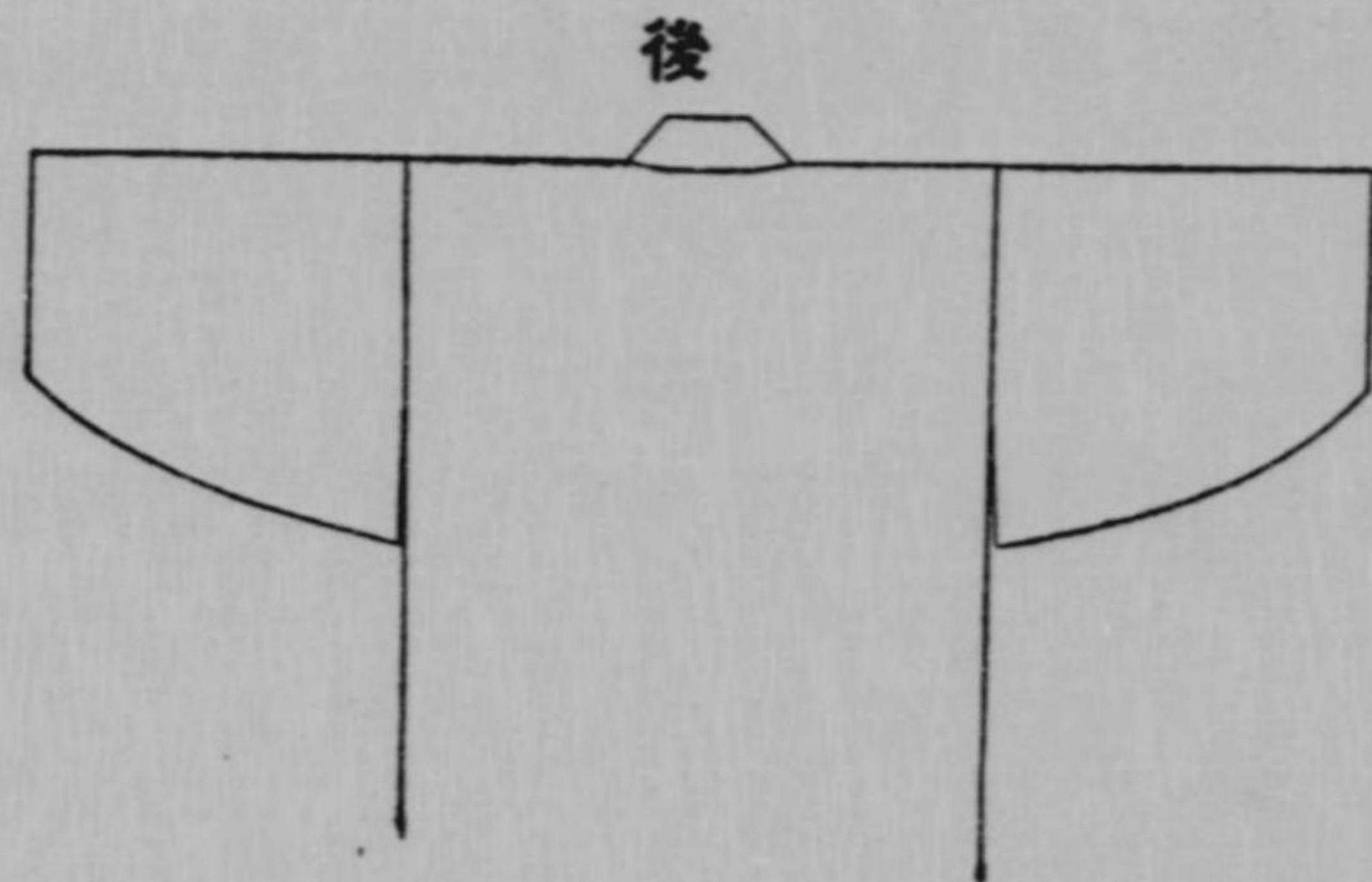
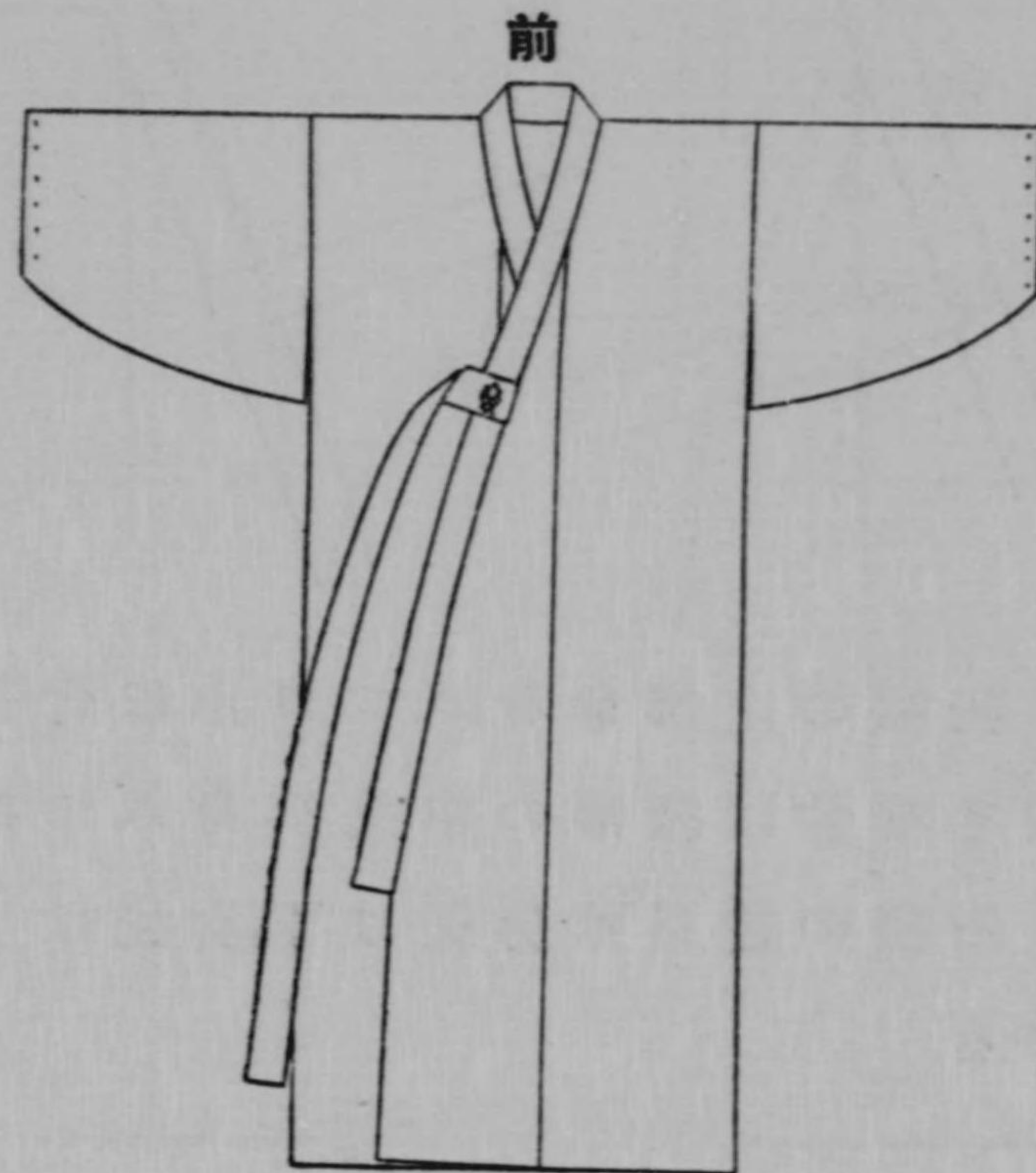
疊方

子供物は總て夜着疊とする。

第九章

小裁單衣

出來上圖



仕立上寸法

單位 cm

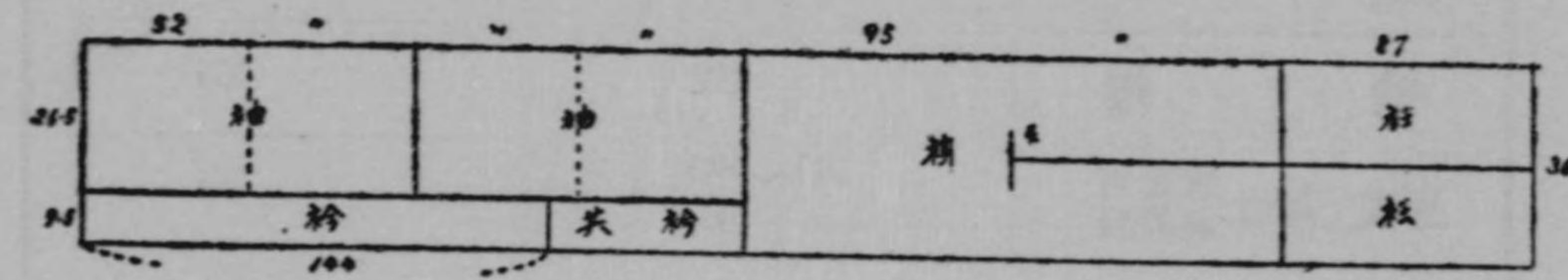
名稱		年 齡	一・二 歲	三・四 歲
袖	潤 袖	常着用	17~20	—
		視着用	57	—
	筒 袖		21	22
丈	元 祿 袖		24	26
	長 袖		—	57
袖	口		12	13
袖	附		14	15
袖	幅		22	23
身丈	(裁切) 常着用	視着用	70~80	95
			95	
衿肩明 (裁切)			3.5~4	4~4.5
身八つ口			10	10
後	幅		いつばい	いつばい
肩	幅		いつばい	いつばい
前	幅		いつばい	いつばい
衿	下		8	10
衿	下		20	24
衿	幅		13~15	いつばい
衿	幅		3	4
着	丈		56	62
衿			30	33

種類

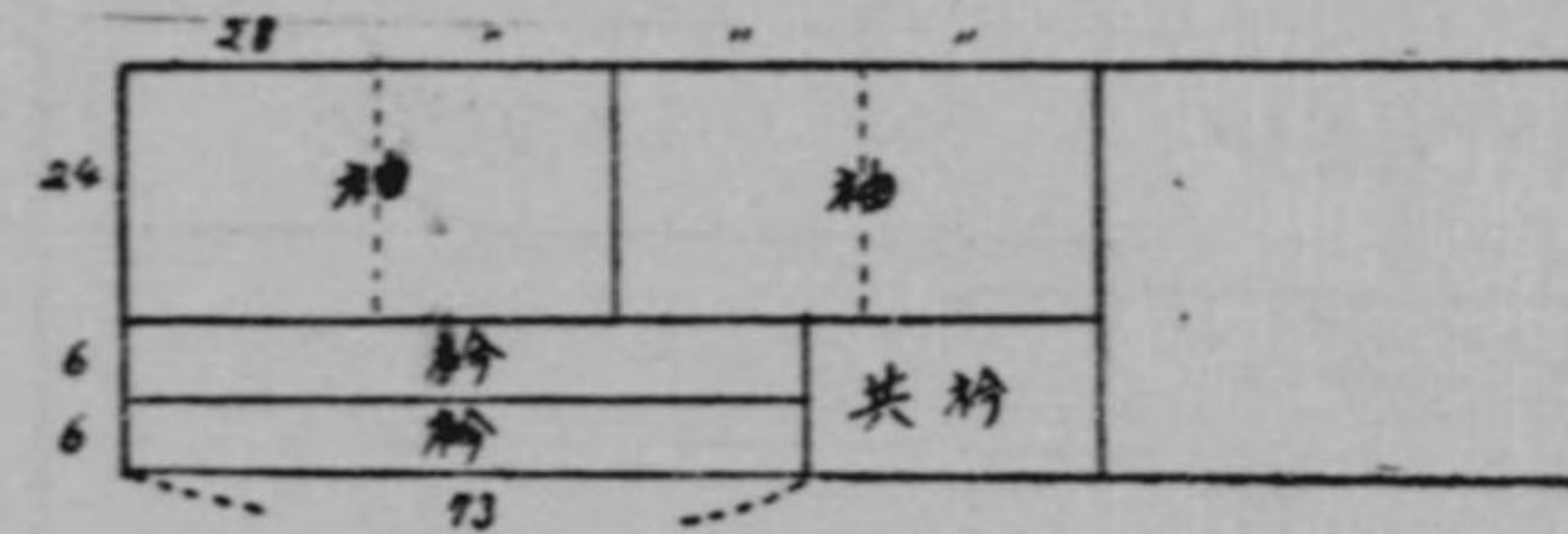
- 一つ身 初生兒より3・4歳位迄
- 二つ身 3・4歳用
- 三つ身 3歳位より5歳位迄

一つ身の裁方

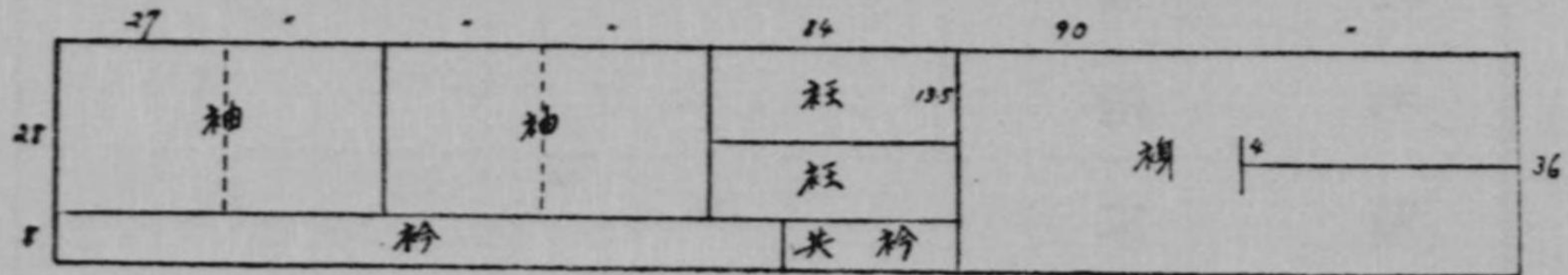
1 大一つ身(半幅衿)長袖の場合の裁方 (用布 485cm)



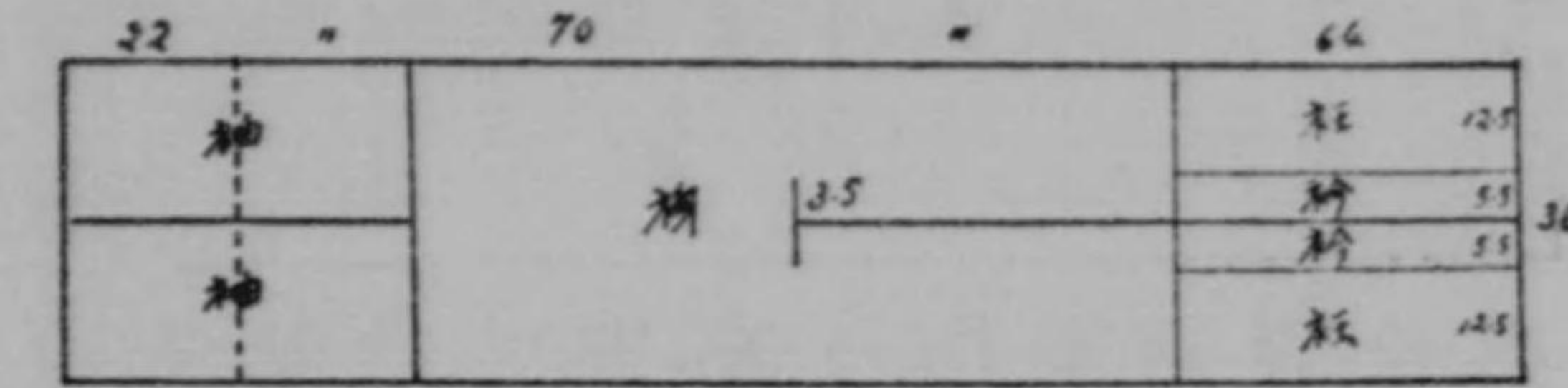
2 大一つ身 短袖の場合の裁方
(別に裏衿を必要とする)



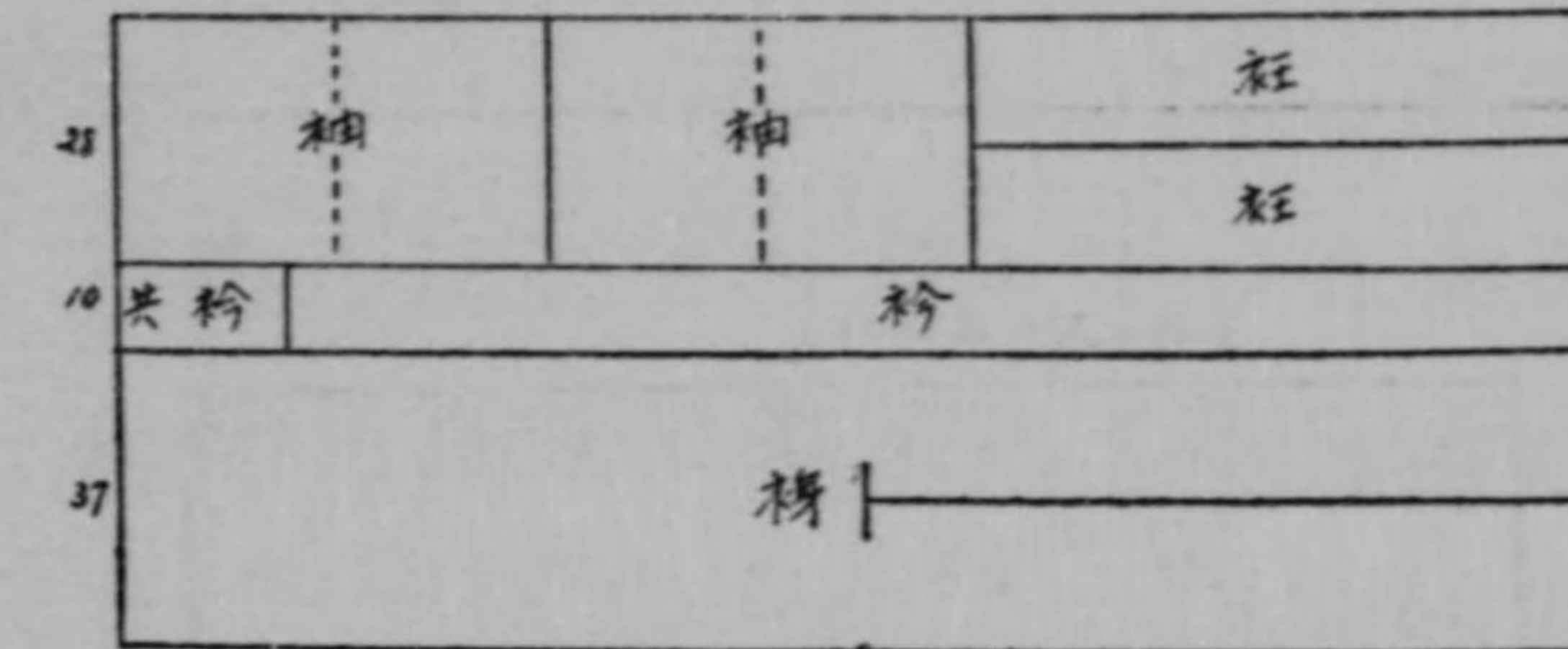
3 中一つ身の裁方 (短袖にて用布 372cm)



4 小一つ身の裁方 (用布 248cm)



5 廣幅物にて中一つ身の裁方 (短袖)



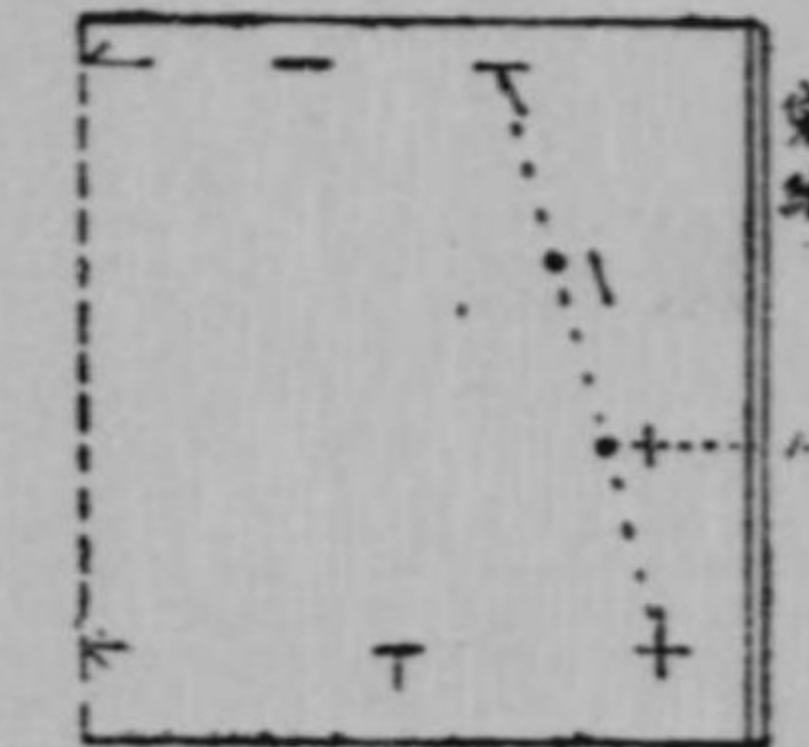
晴着用の潤袖の袖口には四割幅の共布又は別布を附ける場合がある。

附紐

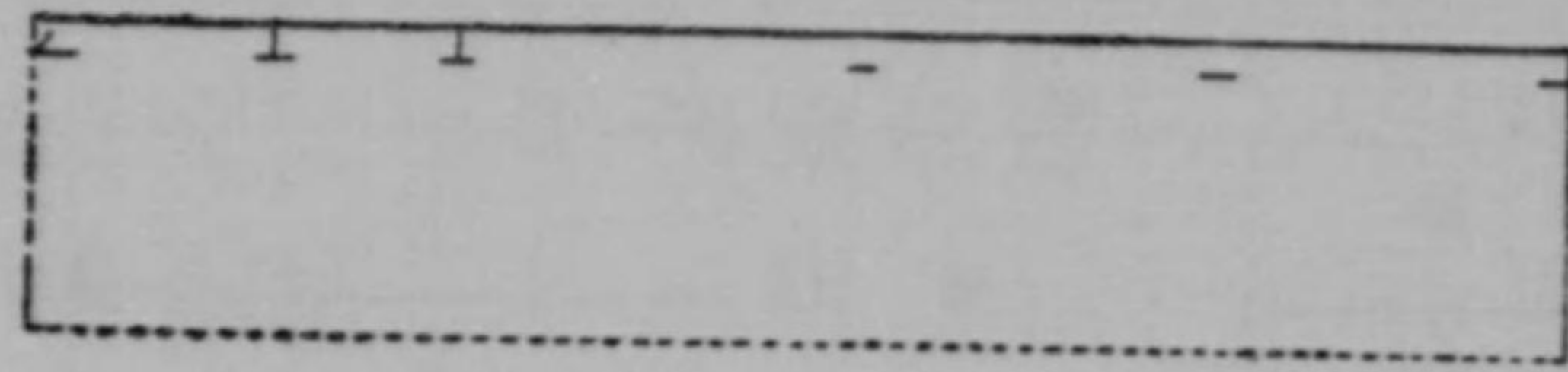
四つ身の附紐に同じ。半幅を用ふる時は、丈を80cm位とし、祝着用は丈を95cm位とする。

標 附 方

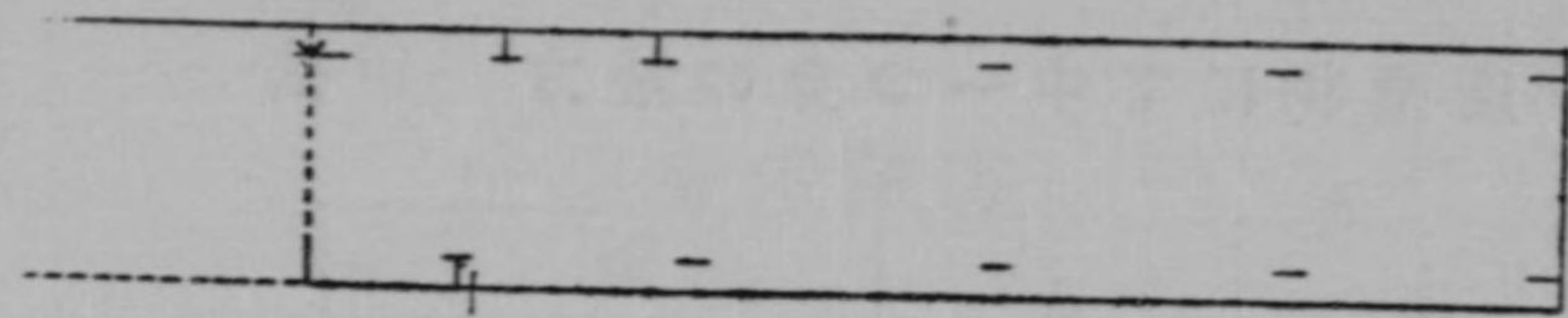
袖 (薙刀袖)



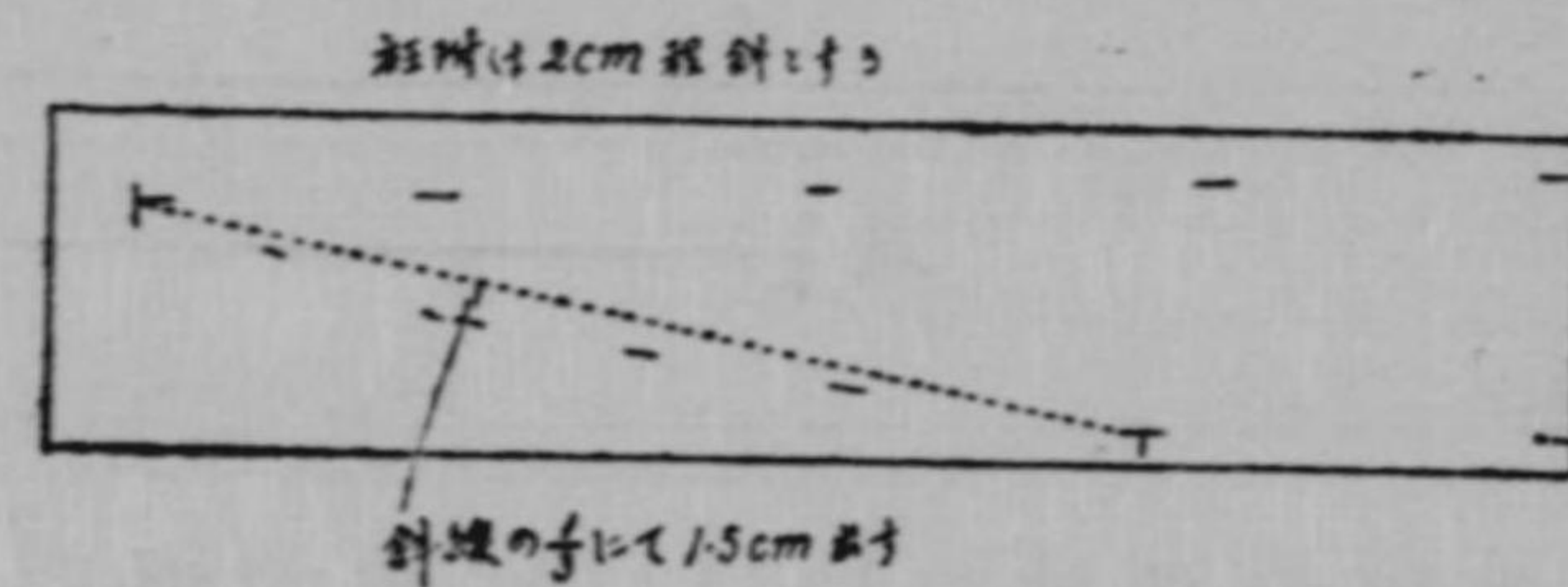
後袖



前袖



衿



縫方

大裁と異なる点のみを記す。他は大裁に準ず。

袖

袖口を三折衿とす。幅の縫代多き時は袖口の三折幅を太くする。

袖口布を付ける時は袖口を毛抜合に仕立てる。

衿附

縫目は袋縫とするか又は裁目を膝る。

居敷當

用ひぬ。

肩揚・腰揚

初生兒には揚をしない。

附紐

紐を縫ひ、二目落しの両面襷を掛けて紐附の處には、しつかりした布を入れ、二本糸にて紐飾をなし、紐を付ける。

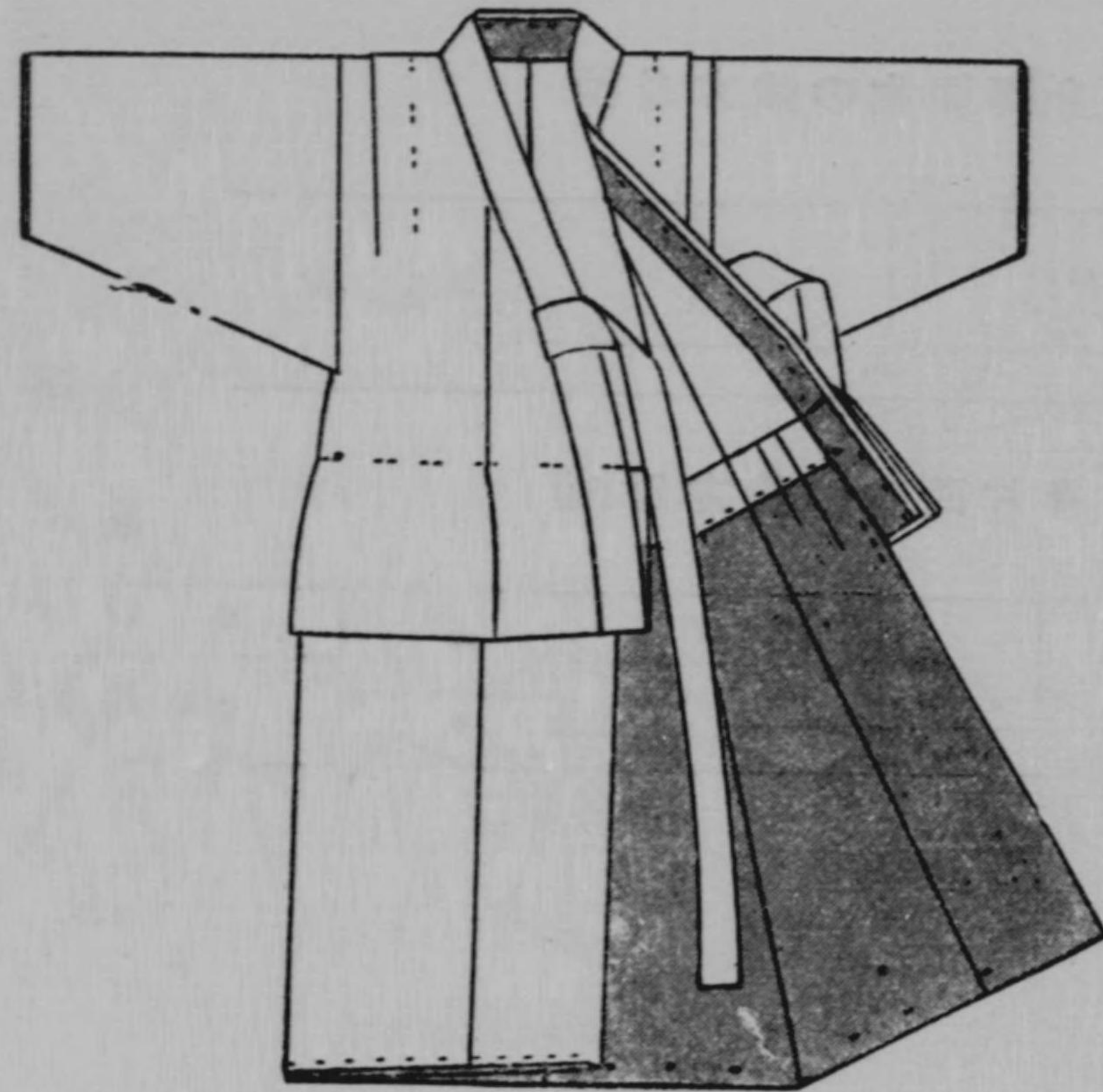
背守

衿附の縫目より 3cm 下つた處から下に、紅白又は配色良き二本糸にて背守をする。

第十章

中裁 袴

出来上圖



仕立上寸法

中裁單衣に同じ。

袖口衤 0.2cm 裾口衤 0.4cm

裁方

表

單衣と同様

裏

通し裏

身丈は表丈より出衤の2倍長くし、其他は表と同様に裁つ。

裾廻附

裾廻丈は身丈の約三分の一とし、普通は45cm内外であるが、衤下寸法に5cm位加へたものを最少限度とする。

裾廻の裁方

1

45			
後裾	後裾	前裾	前裾
袖口	袖口	雙袴	雙袴
7.5			

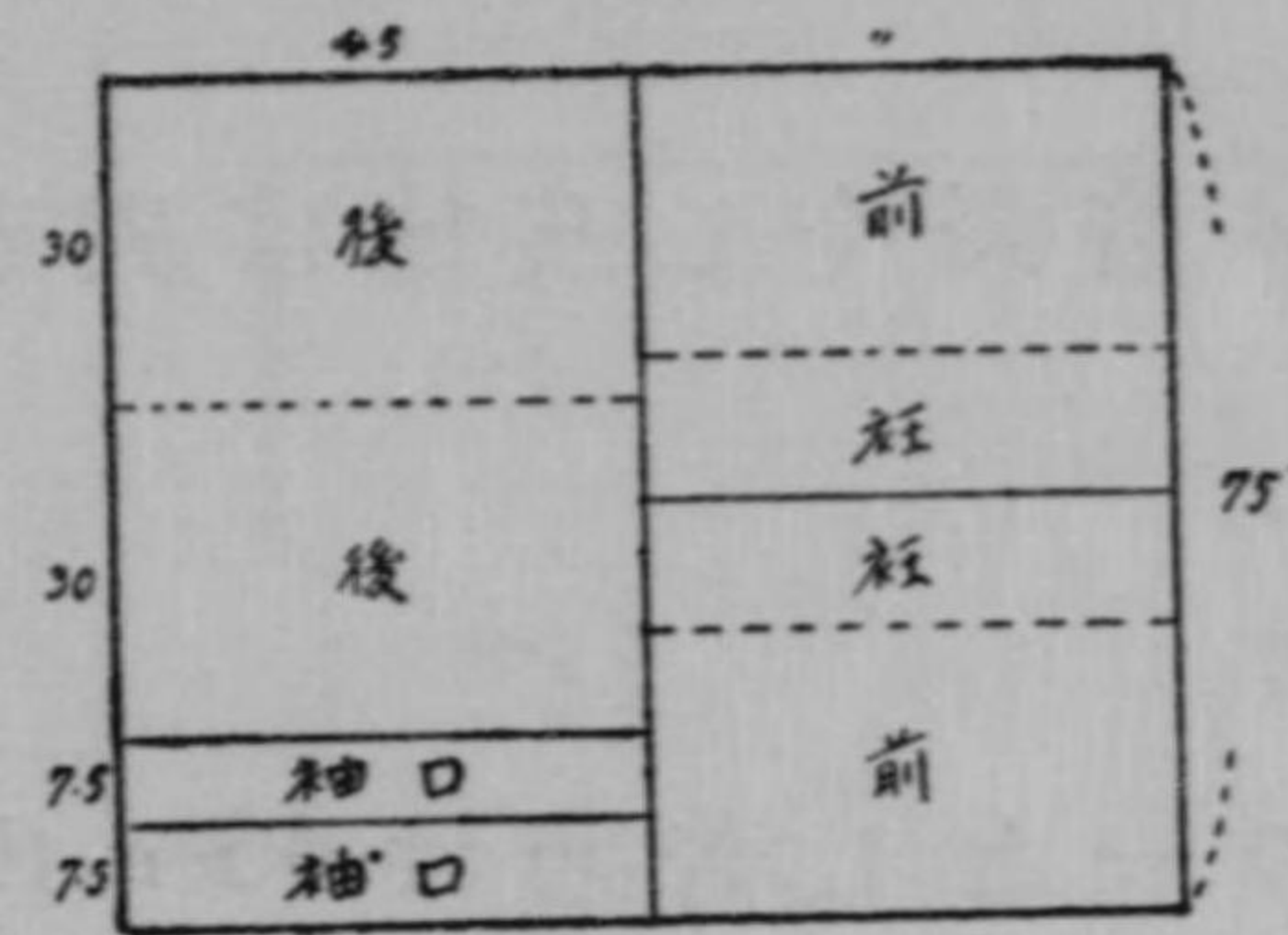
用布の短い時は後を前よりも短く裁つ。

2 横布の裾廻裁方

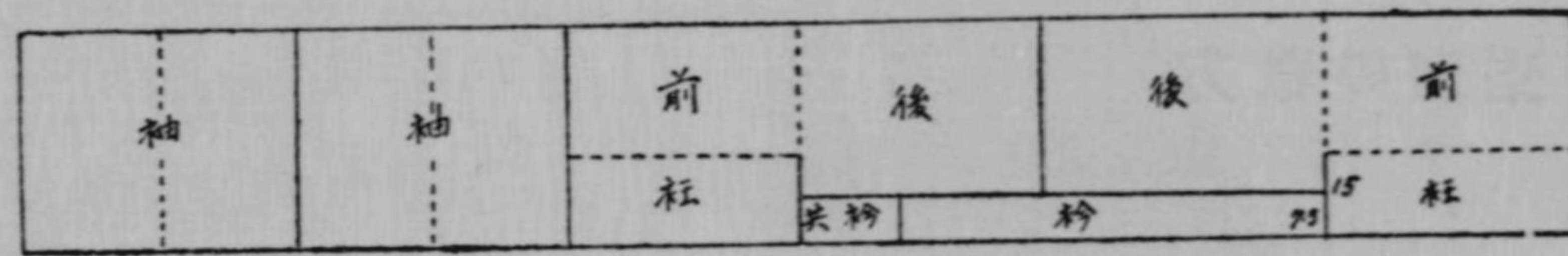
袖口布は別布にて取る。用布は128cm内外であるが、表身幅に合わせて定める。



3 廣幅物にて裾廻裁方



胴裏の裁方



積方

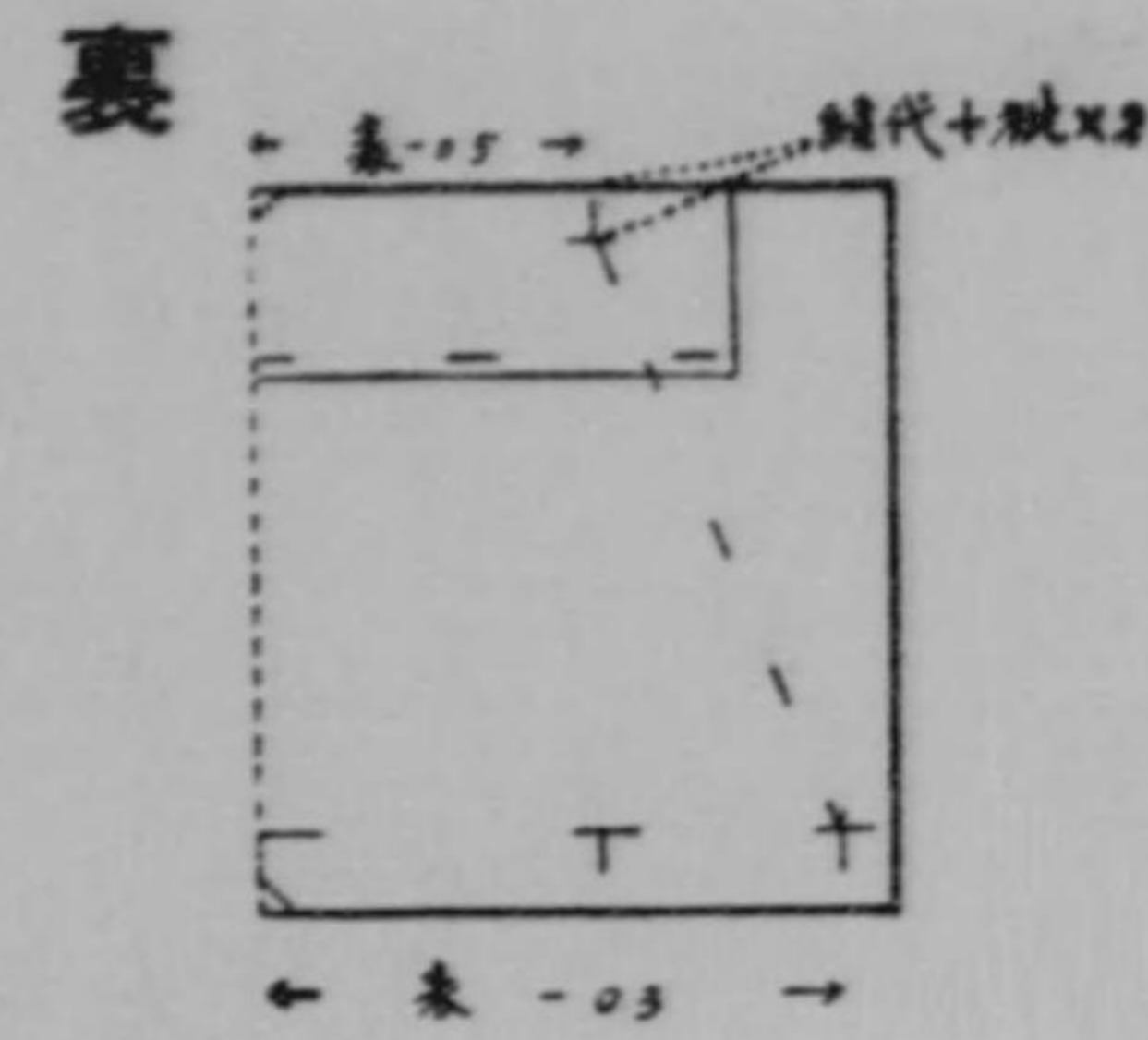
表身丈 - 裾廻丈 + 10cm = 胴裏丈 (10cmは衿 × 2 + 縫代)

(袖丈 + 胴裏丈) × 4 = 胴裏總用布

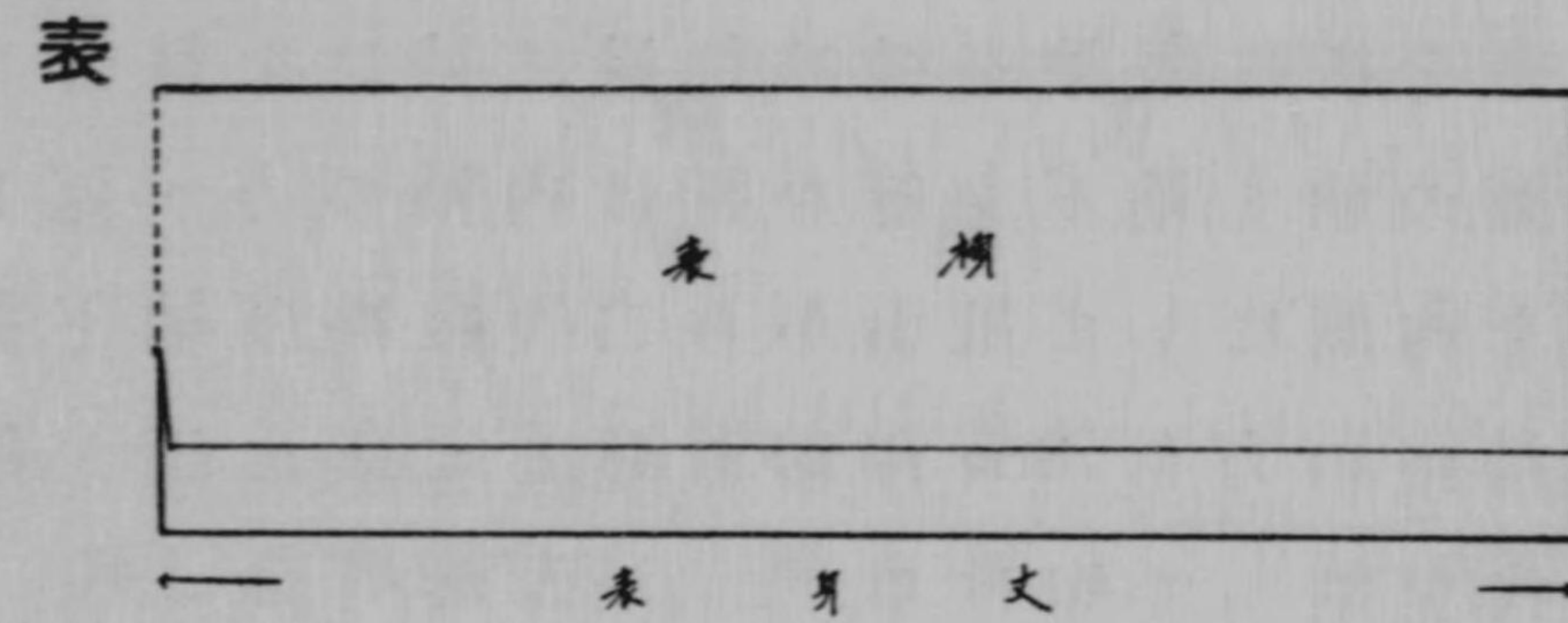
標 附 方

袖 (筒袖)

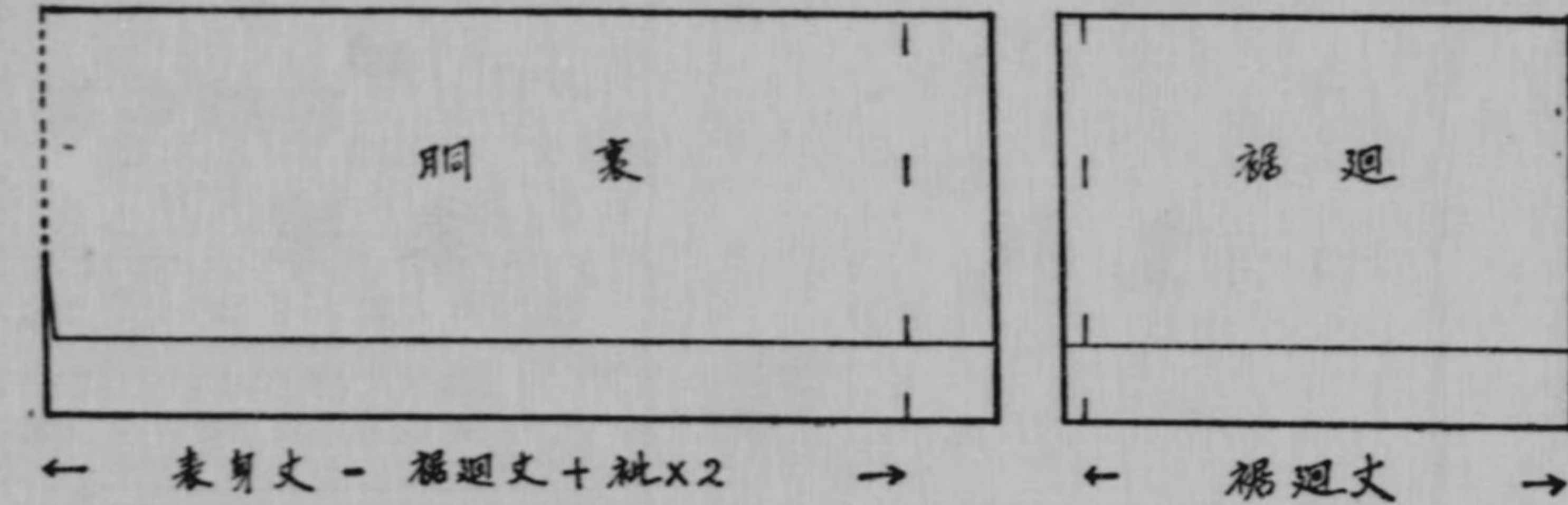
表 單衣に同じ。



衿



裏



裏の身丈を定めて胴裏と裾廻を重ね、其の上に表衿を重ねて單衣と同様に標附をなす。

衿

單衣に同じ。

縫方

縫方順序

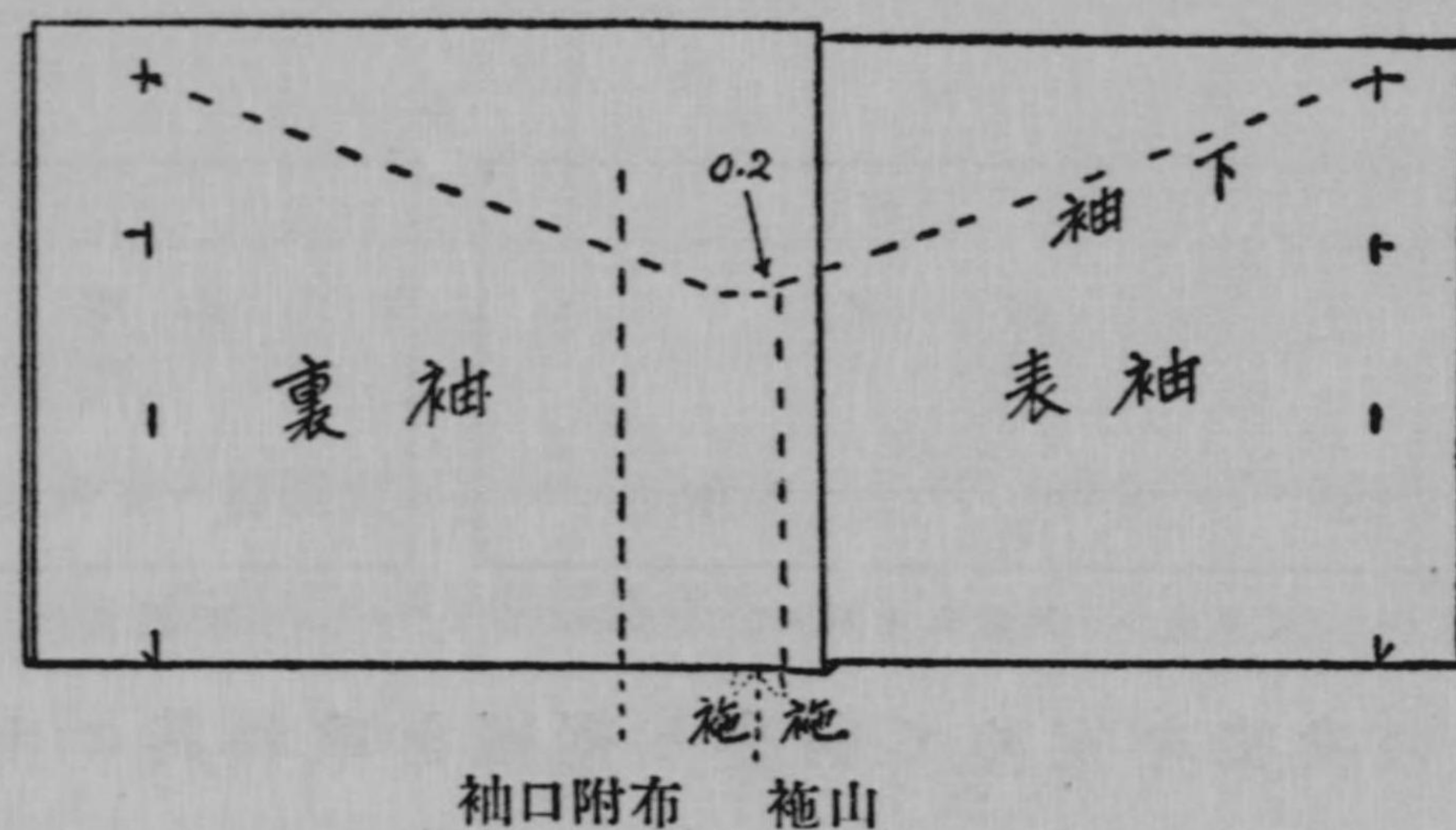
大裁と同様。

方法

大裁と異なる点のみを記す。

筒袖の縫方

袖口布を掛け、表袖を弛め加減に袖口を縫合せ、次に圖の如く袖下を縫ひ、折は内袖の方へ返し、外袖を内側にして衿山から二つに折り袖下を綴ぢ、袖附の方を 8cm 程綴ぢ残して表に返し、振の縫代を整へて締ける。



裾綴

裏に出す針数は前襦で 2 針、後襦で 3 針とす。

第十一章

小裁綿入

仕立上寸法

單衣に同じ。

袖口は 0.4cm。裾衿は 0.6cm~0.8cm。

裁方

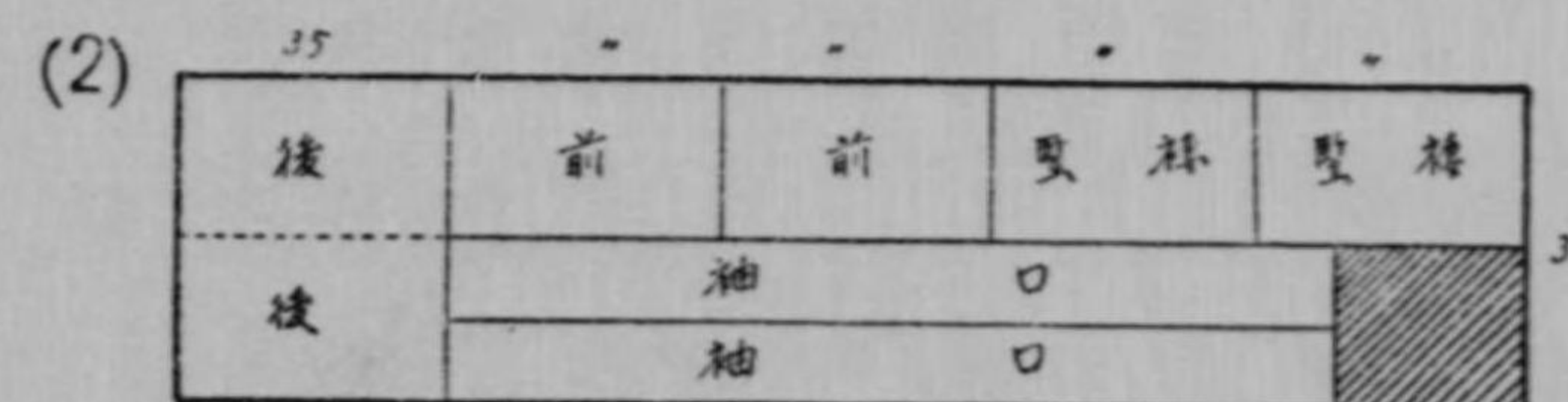
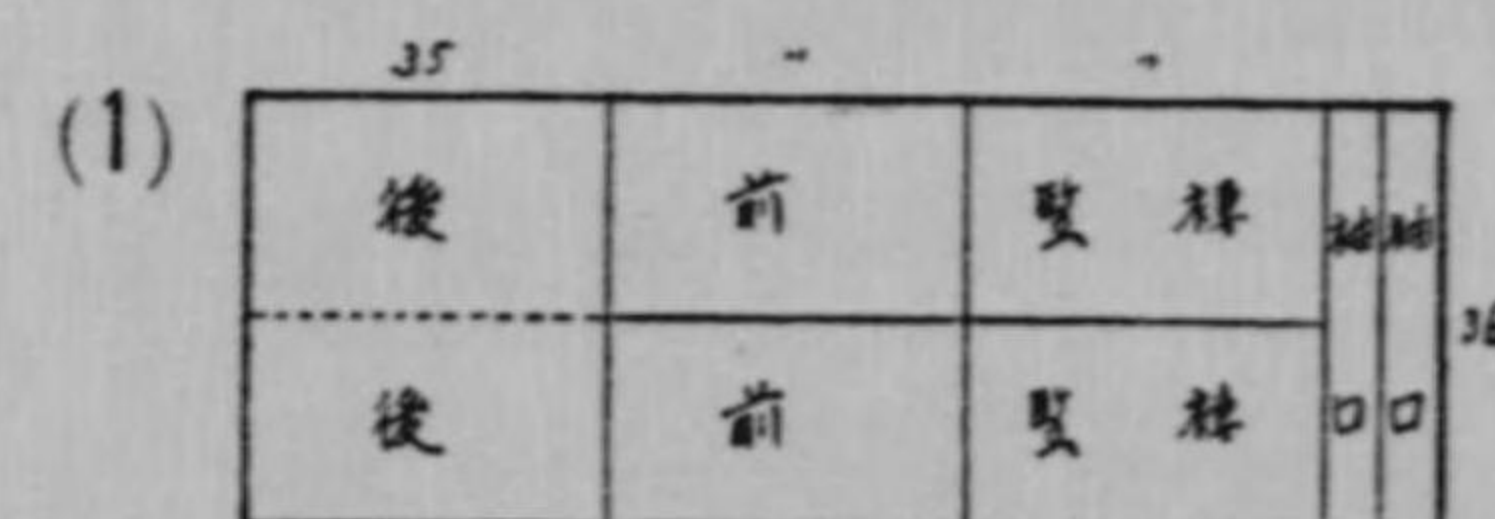
表 單衣に同じ。

裏 通し裏と裾廻附とがある。

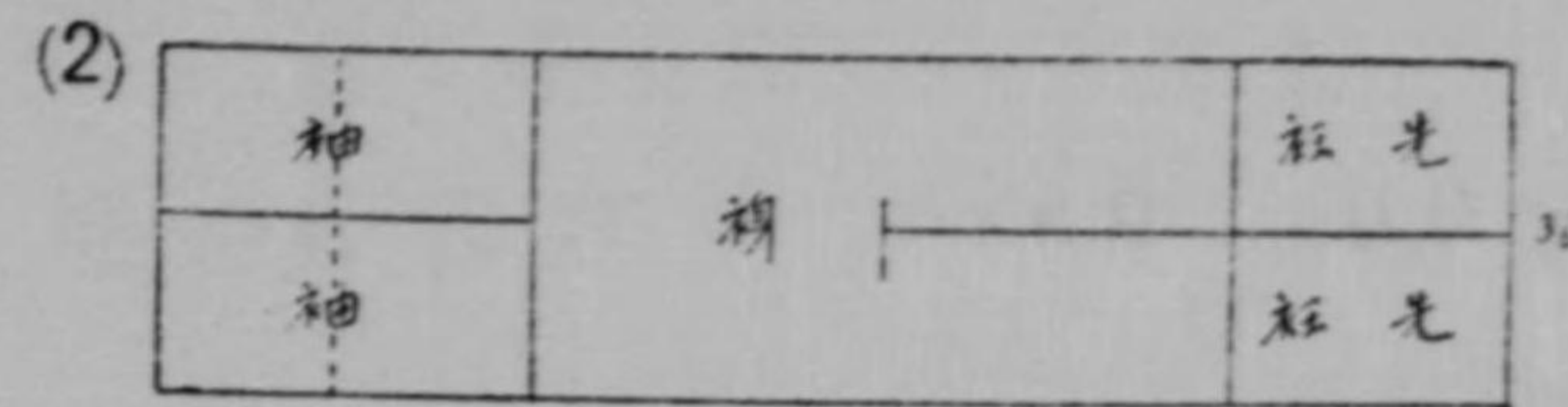
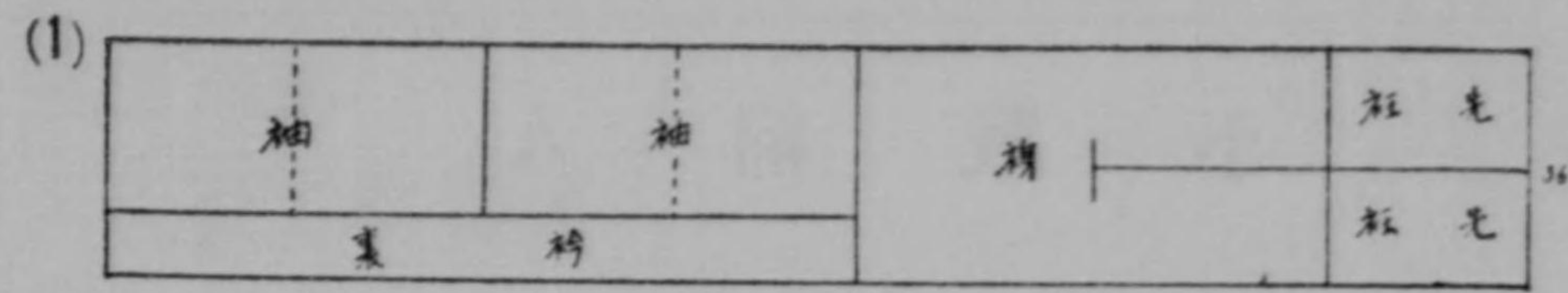
通し裏の裁方

身丈を表身丈より出衿の 2 倍長くするのみにて其他は表と同様。

裾廻の裁方



胴裏の裁方



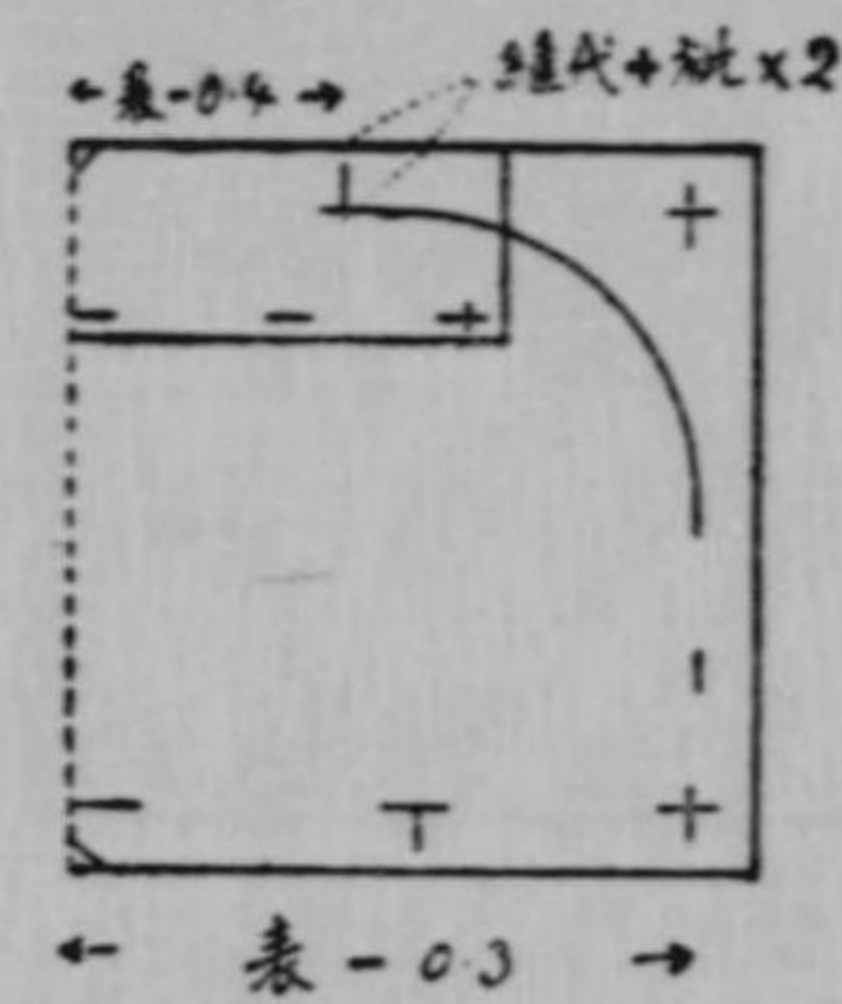
裏衿は別布にて取る。

標 附 方

袖 (元祿袖)

表 単衣に同じ。

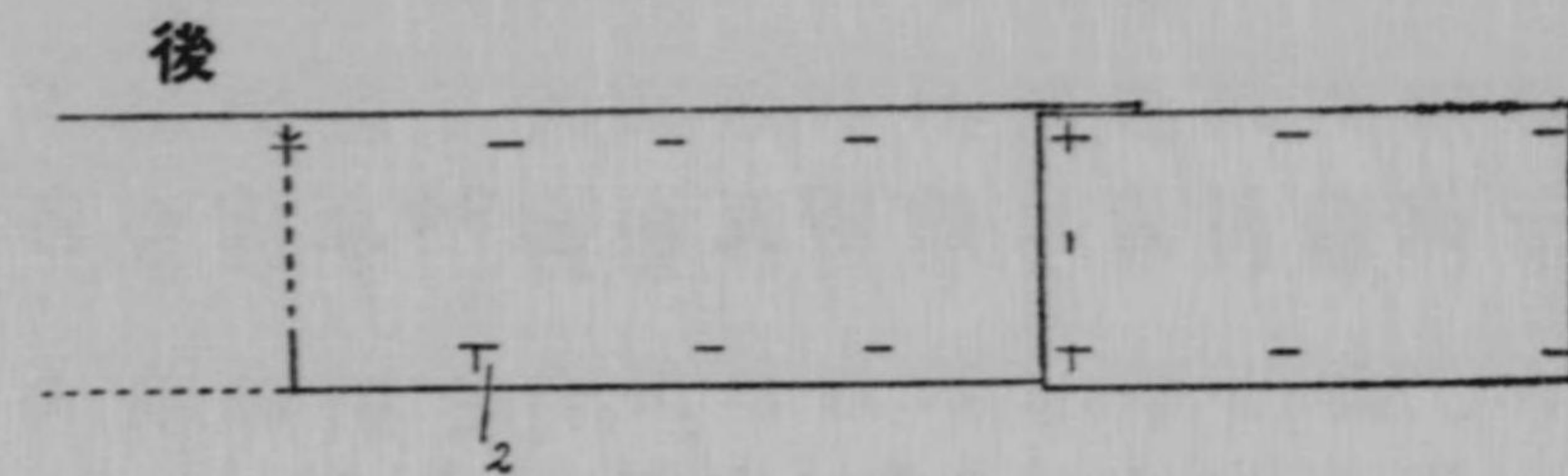
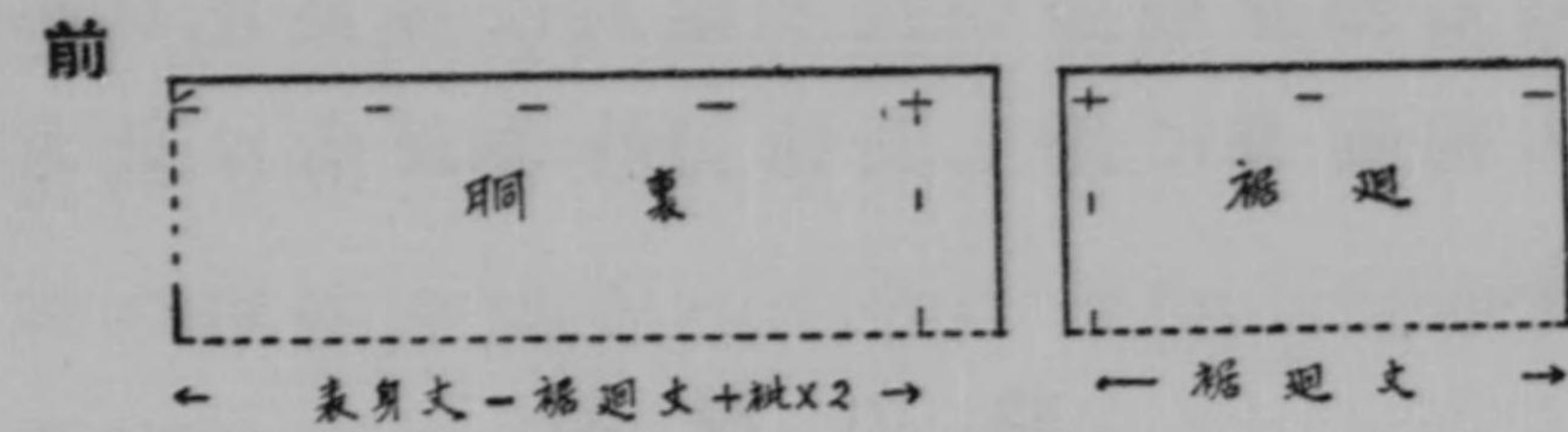
裏



衿

表 単衣に同じ。

裏



衿

裾口にて裏を衿の2倍だけ表より出して重ね、単衣と同様に標を付ける。

仕立方の種類

1 縫仕立

振と身八つ口を縫ひ、含め綿をしてのち全體に綿を入れ、袖口及び衿下を紵ける方法で綿を入れる際稍々困難であるが仕立が容易である。

2 紵仕立

表裏を別々に縫ひ、袖口、振、身八つ口に含め綿を

なし次に全體に綿を入れて拵合せの方法で、拵ける部分の多い代り綿入は容易な爲、小裁又は木綿物等に適し、其他男物の長着は此方法を用ふ。

綿の種類

眞綿

袋綿 一枚の目方は約19瓦から94瓦迄の各種がある。

角綿 一枚の目方は2.5瓦内外である。

吹止綿 膠液にて吹止を施し、着物一枚分の形に作られて居り、大人物一枚の目方は重目75瓦、輕目56瓦位である。

青梅綿

三枚で一包となつて居り、一包の目方は125瓦から300瓦迄の各種がある。

一枚の大きさは幅80cm、丈165cm位ある。

長着に入れる綿の分量

長着の種類	青梅綿の分量	敷綿の分量	眞綿のみを入れる場合の分量
大 裁	3枚	角眞綿 5枚内外	75gr~94gr 又は吹止眞綿一枚分
中 裁	2枚	角眞綿 4枚内外	56gr内外
小 裁	1枚餘	角眞綿 3枚内外	37gr内外

綿の取扱方

青梅綿

- 1 綿は全體に少し弛く入れる。
- 2 綿の纖維を成るべく縦に用ひ、二枚通り入れる時は綿を縦横交互に重ねる。
- 3 二枚通り入れる時は綿を折り重ねず、切つたものを二枚重ね段のつかぬ様にする。
- 4 綿の接ぎ合せ目は、端を薄く延した二枚の綿を重ね合せて平に接ぐ。
- 5 綿を切る際は鋏を用ひず手にて切る。
- 6 綿の切れ易き部分(膝の如き)は成るべく綿を接がず又眞綿を充分に引く。
- 7 綿屑を出さぬ様に注意する。

眞綿

- 1 眞綿の耳をよく解して後、之を適宜に剝いて用ふ。
- 2 眞綿のみを入れる時は眞綿を引いた後、此の上に紙を當てアイロンを掛けて落附かせる。
- 3 敷綿として用ふる時は青梅綿の兩側、又は片側に引く。
- 4 吹止綿は膠液のかかつてゐる方を表布に當

てる。

新 仕 立

縫方順序

- | | | |
|-----------|--------|-----------|
| 1 表袖 | 2 裏袖 | 3 表袴 |
| 4 裏袴 | 5 裾合 | 6 綿含 |
| 7 綿入 | 8 裾の假綴 | 9 縦綴 |
| 10 衿下拵 | 11 袖口拵 | 12 振身八つ口拵 |
| 13 衿綴及び衿拵 | 14 共衿掛 | 15 裾綴 |
| 16 紐附 | 17 仕上 | |

方法

1 表袖(元祿袖)

袖を縫ひ丸みを整へて表返し、袖口及び袖下に
襷を掛ける。(襷は一束に掛けぬこと)

2 裏袖

袖口布を掛け、袖口布のある間は袖口下を割つ
て表と同様に縫ふ。

3 表袴

脇衿附・衿附・袖附をなし、振に襷を掛けて置く。

4 裏袴

表と同様に縫ふ。裾廻附のものは脇縫の後、胴

接をなす。

5 裾合

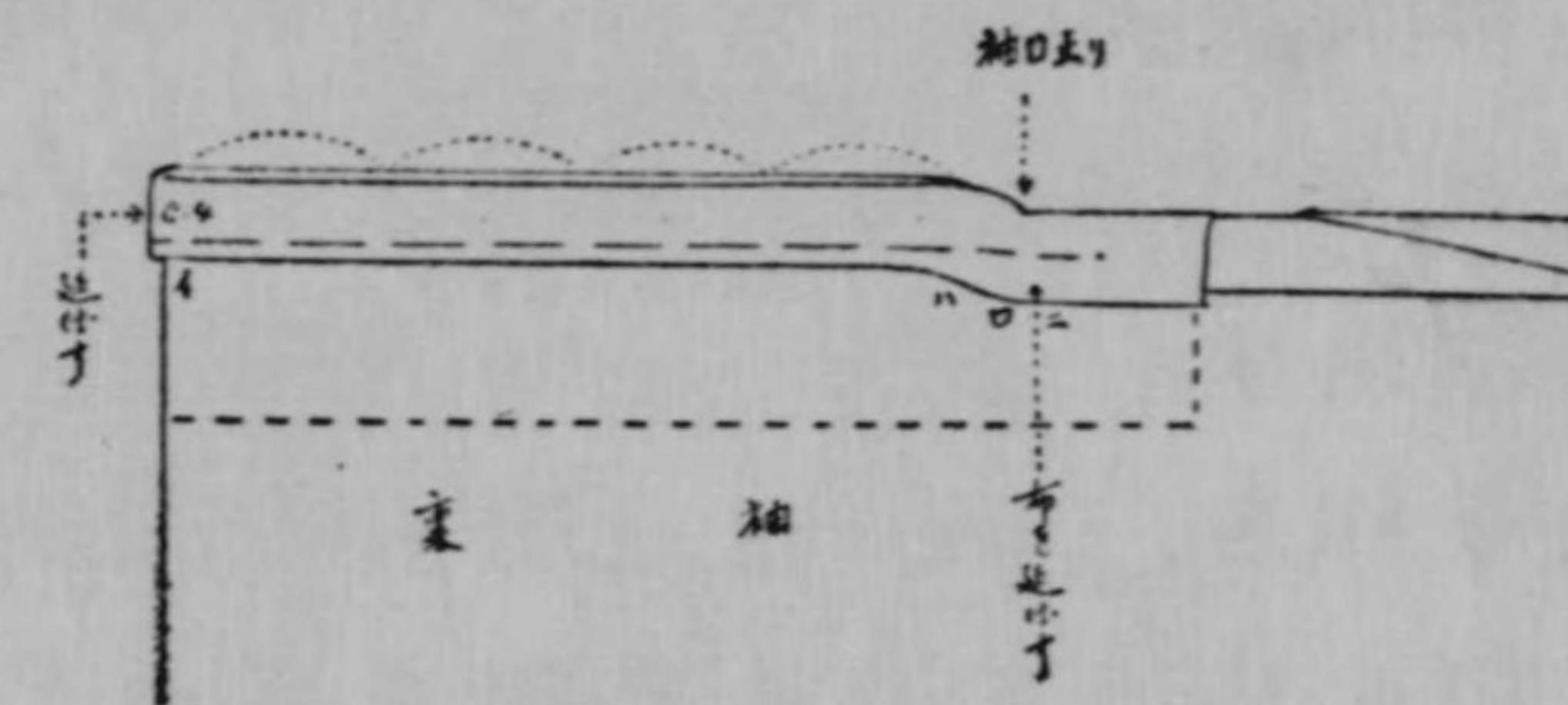
裾合をして襷を掛け、表衿下にも襷を掛ける。

6 綿含め

袖口の綿の含め方

幅を凡そ4cmと2cmに切つた二枚の綿を重ね、
之を四分六分に折られる様に袖口の衺山に
に弛いめに入れる。

袖口含み綿の綴方

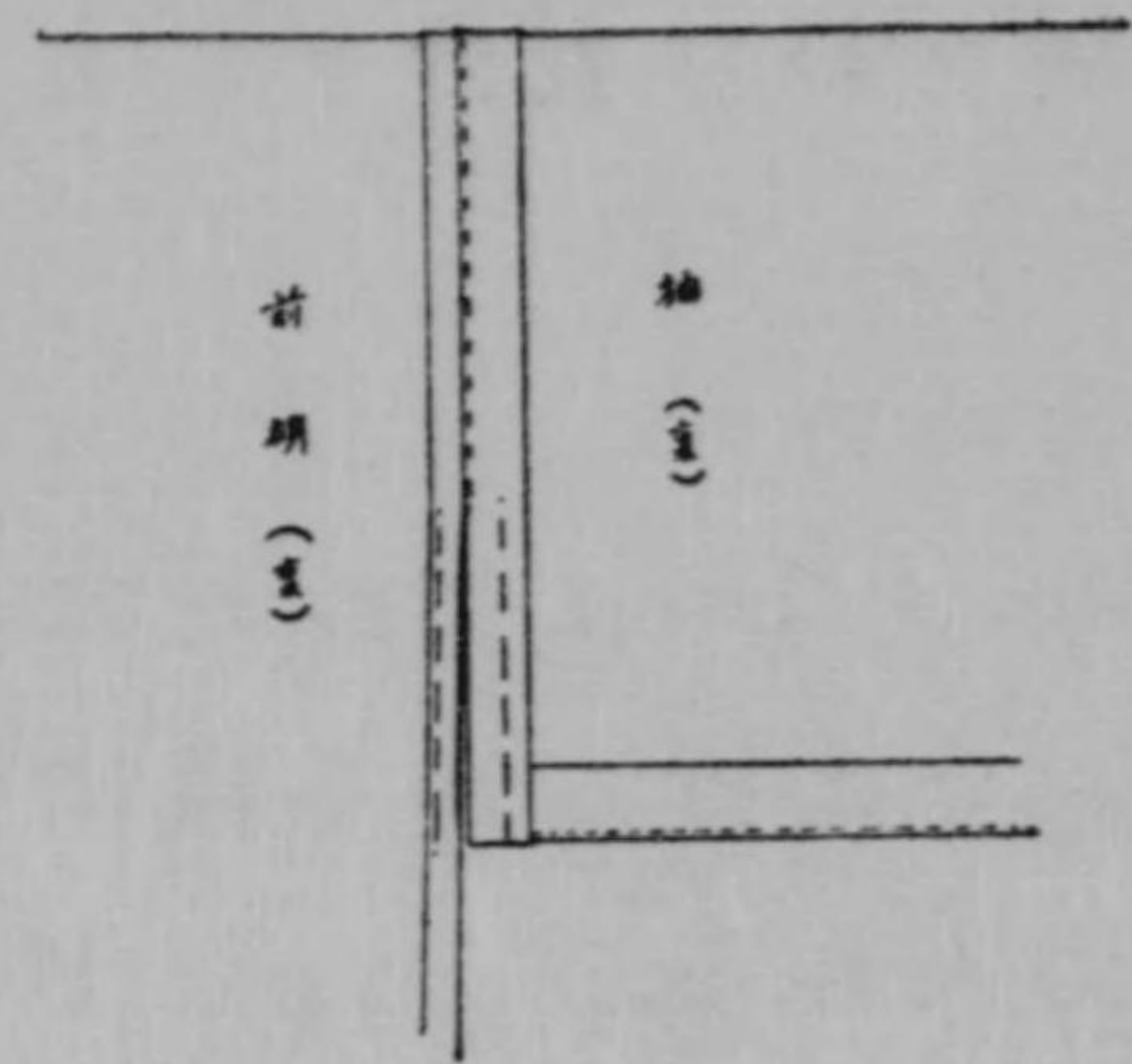


綴方は、口間を四等分して表に小針を出し、
其の間は袖口布に針を出さずに抄ひ、針を流
して糸のつれぬ様に綴ぢる。

振及び身八つ口の綿含め

幅4cmに切つた綿を裏振及び身八つ口の裏

にのせ、布と綿とを一緒に折つて襷を掛けて置く。



7 綿入

疊方

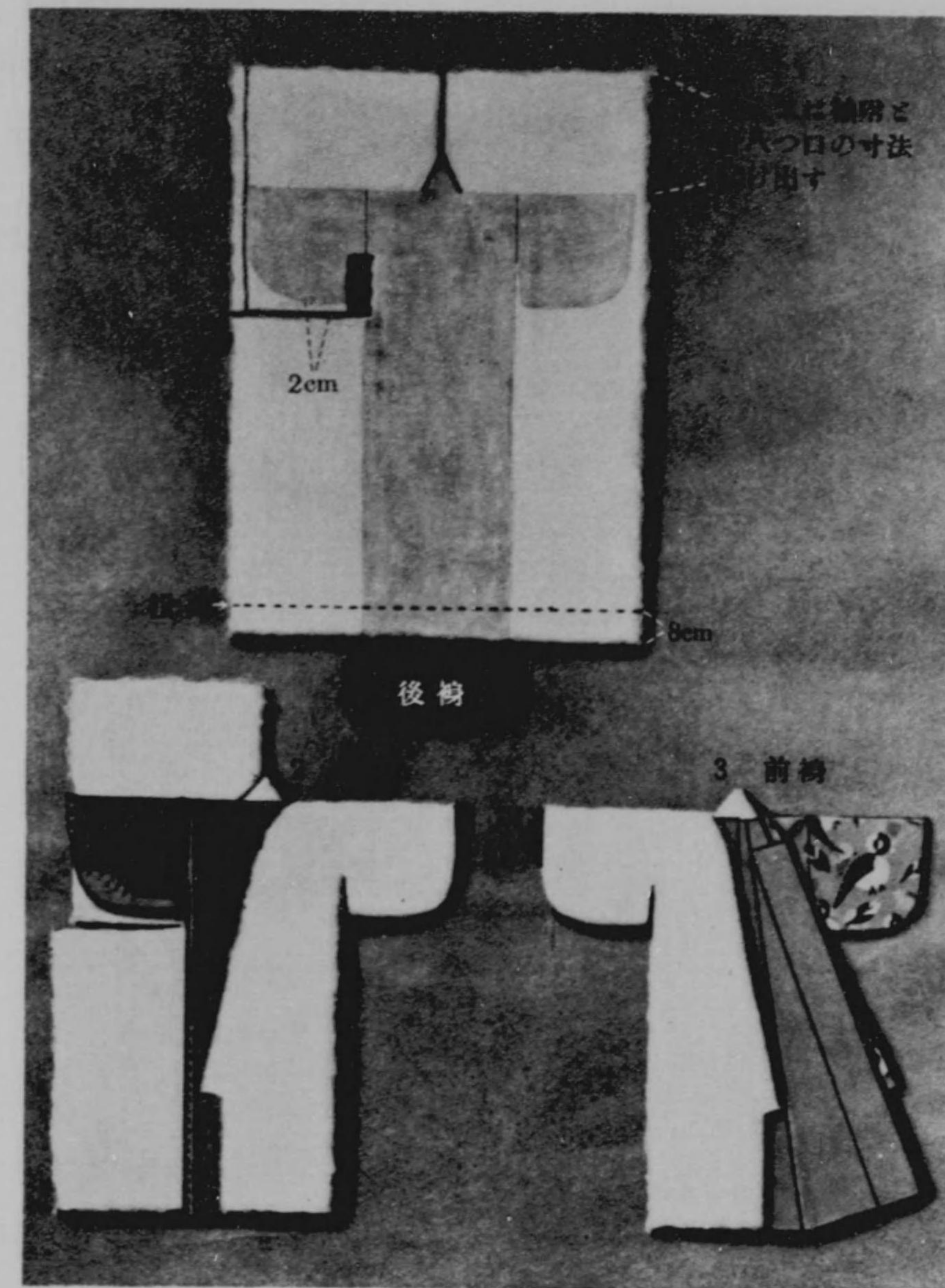
糸屑を拂ひ、裏返して縫目を正しく折つて夜着疊みとし(寫真一圖)の如く裏を疊み、表の後襷を上に出す。

裾の襷綿を作る。

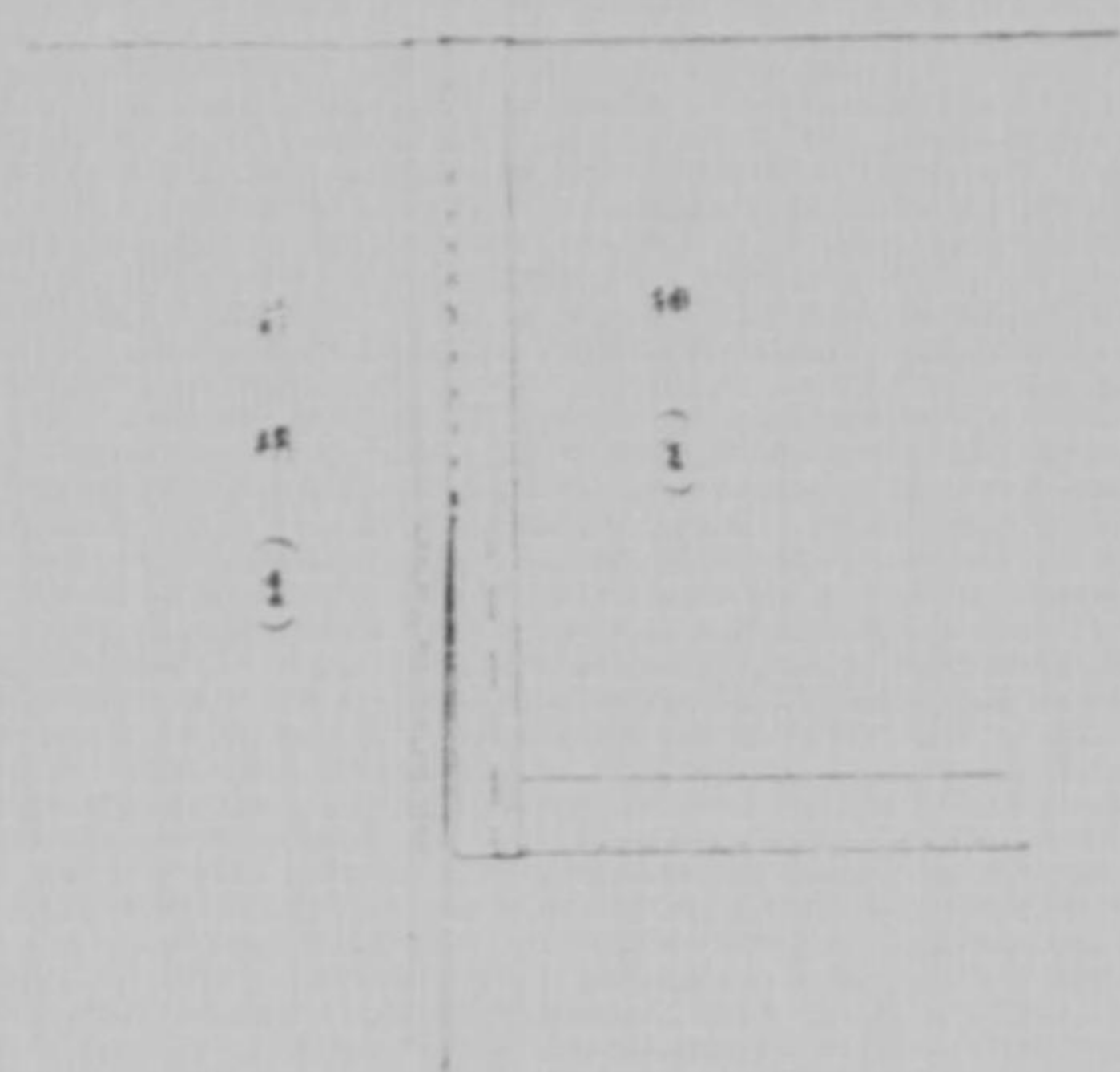
出襷と同じ位の太さの撚綿を作つて置く。

後襷の綿の入方

表襷の上に綿をのせ(寫真一圖)の如く綿に切込を入れ、裾襷山に襷綿をのせて、裾口より1cm程長いめに綿を折り返す。次に疊んである裏襷を此の上へのせる。(敷綿は全體にひく。)



にのせ、布と綿とを一緒に折つて襷を掛けて置く。



7 綿入

疊方

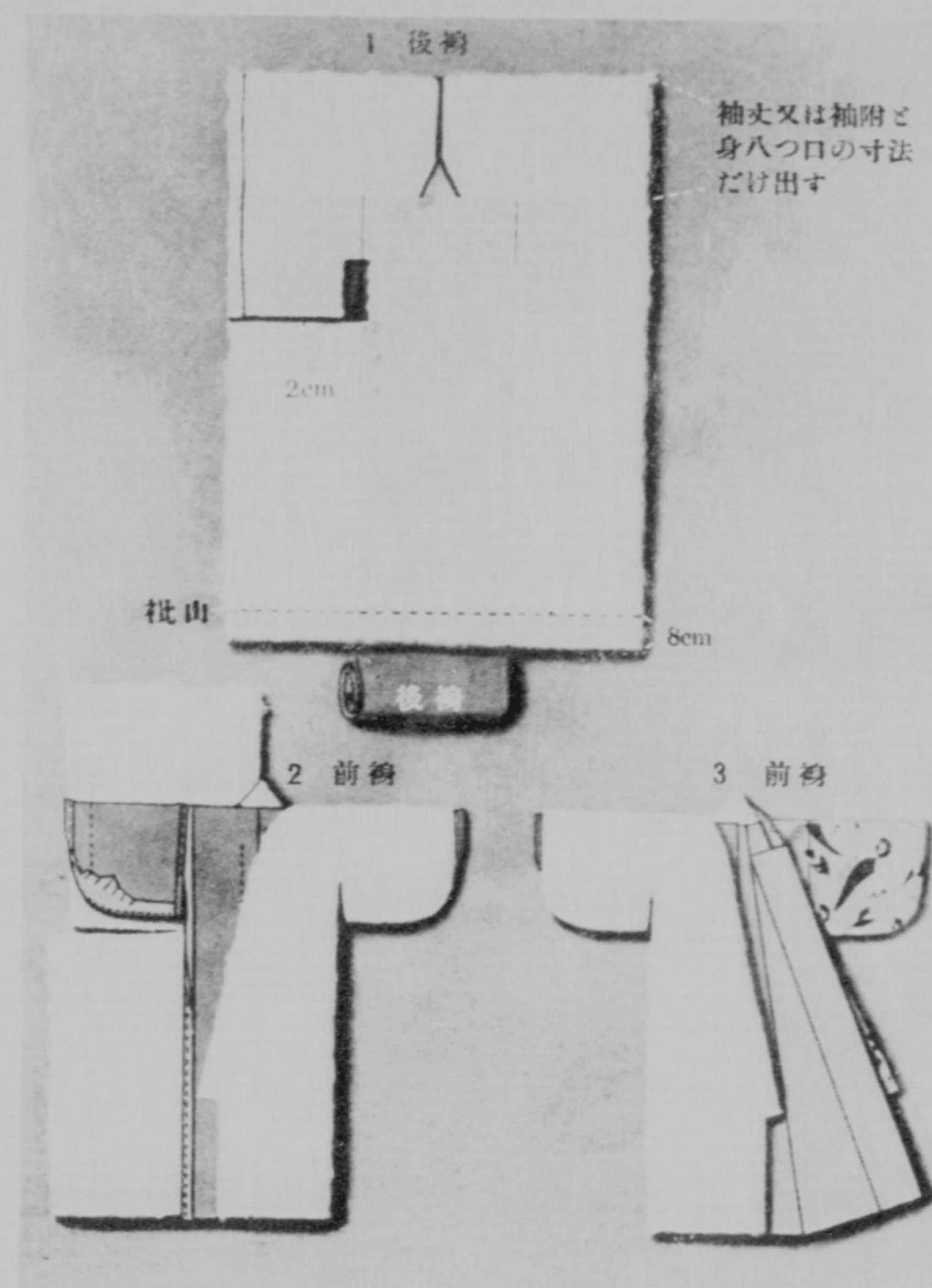
糸屑を拂ひ、裏返して縫目を正しく折つて夜着疊みとし、寫真一圖の如く裏を疊み、表の後袴を上に出す。

裾の襷綿を作る。

出襷と同じ位の太さの撚綿を作つて置く。

後袴の綿の入方

表袴の上に綿をのせ(寫真一圖)の如く綿に切込を入れ、裾襷山に襷綿をのせて、裾口より1cm程長いめに綿を折り返す。次に疊んである裏袴を此の上へのせる。(敷綿は全體にひく)



前衿の綿の入方

周囲の綿を裏の前衿の上に折り返して、片衿
づつ綿を入れ、表返して各縫目を合せ、引合せ
をなす。(写真二・三圖参照)

8 裾の假綴

綿をよく含せて出衦を整へ一束に躰を掛ける。

9 縦綴

脇・衿の縫目を裾口より丈の中央邊り迄綴ぢる。

10 衿下紵

衿先を整へて衿下の裏に綿を含ませ衿先止り
に三針留をなし、綿を抄はぬ様にして衿下を紵
ける。

11 袖口紵

袖口の釣合をとつて四つ留をなし綿を抄はぬ
様に紵け、其糸にて袖口下を綴合はせる。

12 振及び身八つ口紵**13 衿綴及び衿紵****14 共衿掛****15 裾綴****16 紐附****17 仕上**

縫仕立

縫方

衿仕立の様に表裏の袖を別々に縫ひ、振は衿の如く縫合せて置く。

裨は裾合の後、身八つ口及び袖附を衿と同様に縫ふ。

綿含

振、及び身八つ口の裏に含め綿をあて縫目の際に綴附ける。

綿の入方

裏返して前裨を中に、後裨を外にして疊み、裏の後裨を上に出して綿を入れ、引返して前裨の綿を入れる。

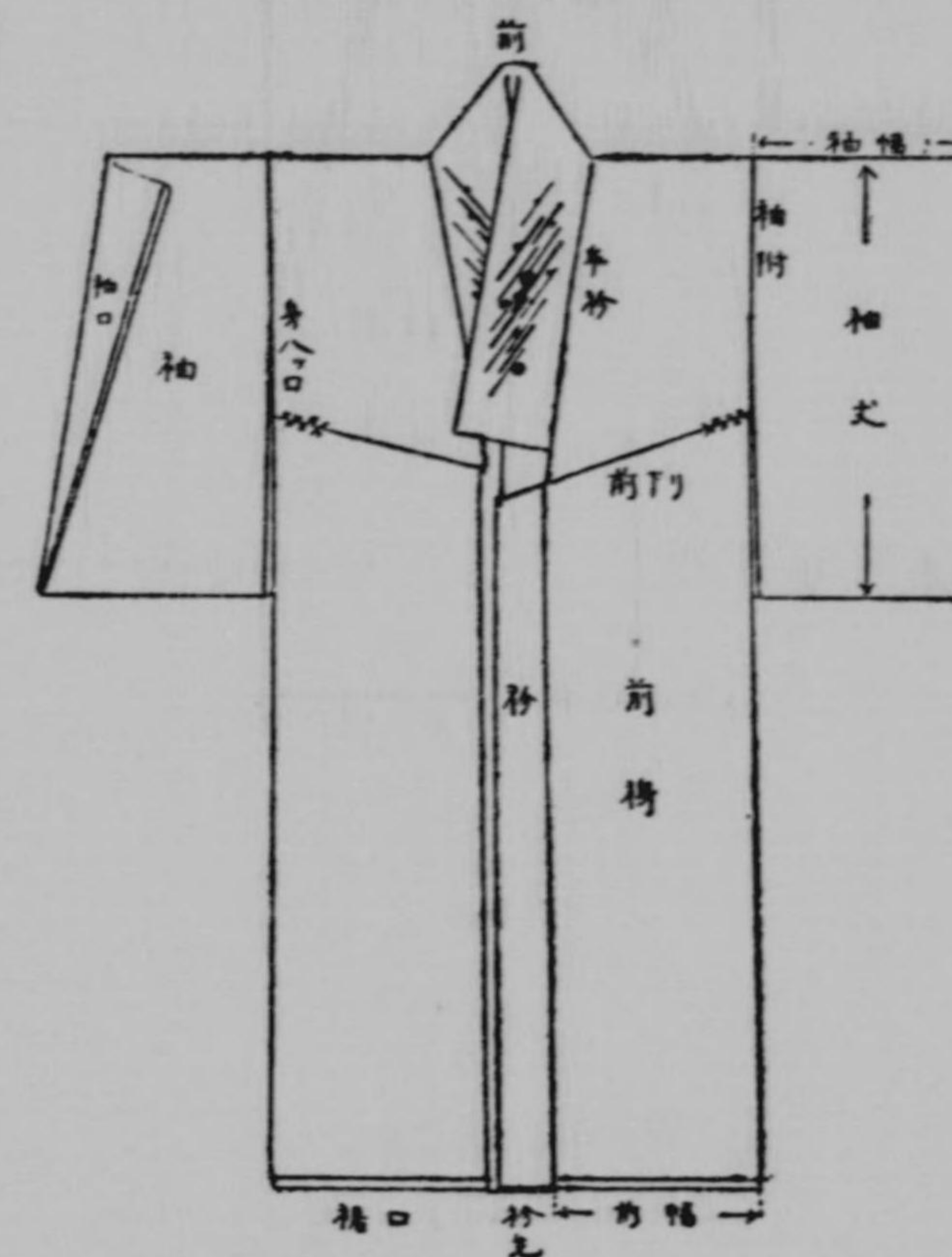
其他は衿仕立に同じ。

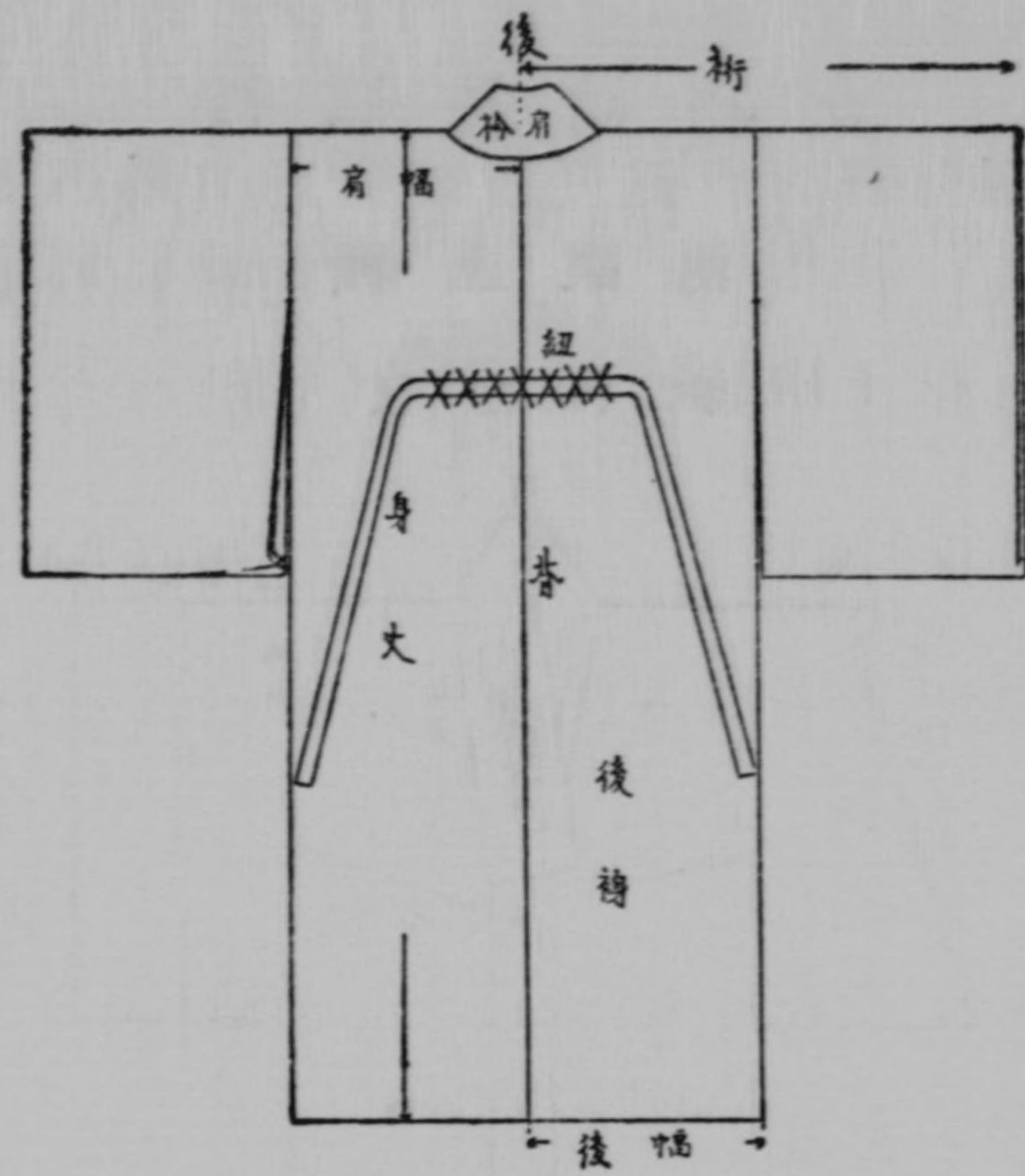
第十二章

女物 袷長襦袢

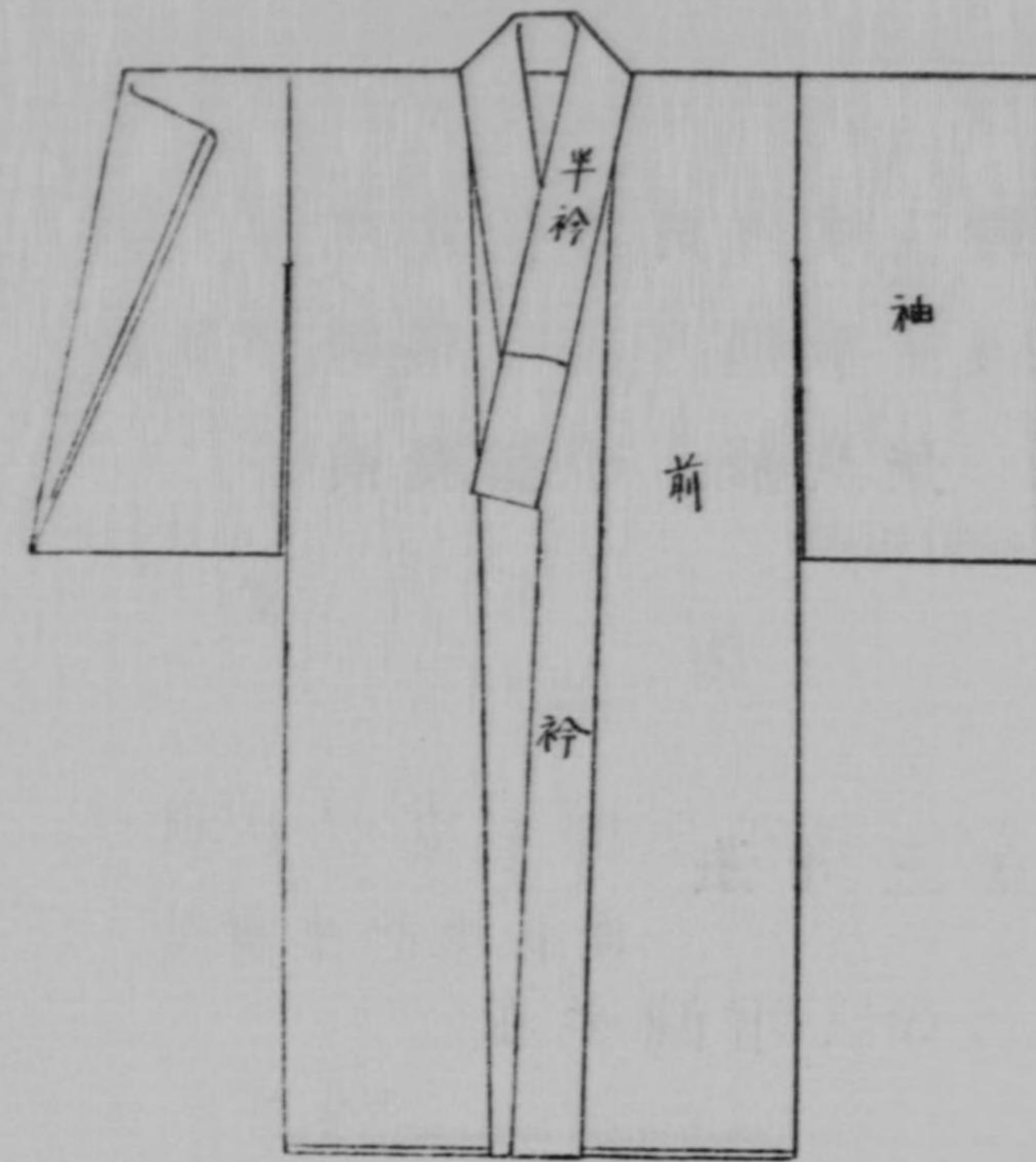
出来上圖

別衿立仕

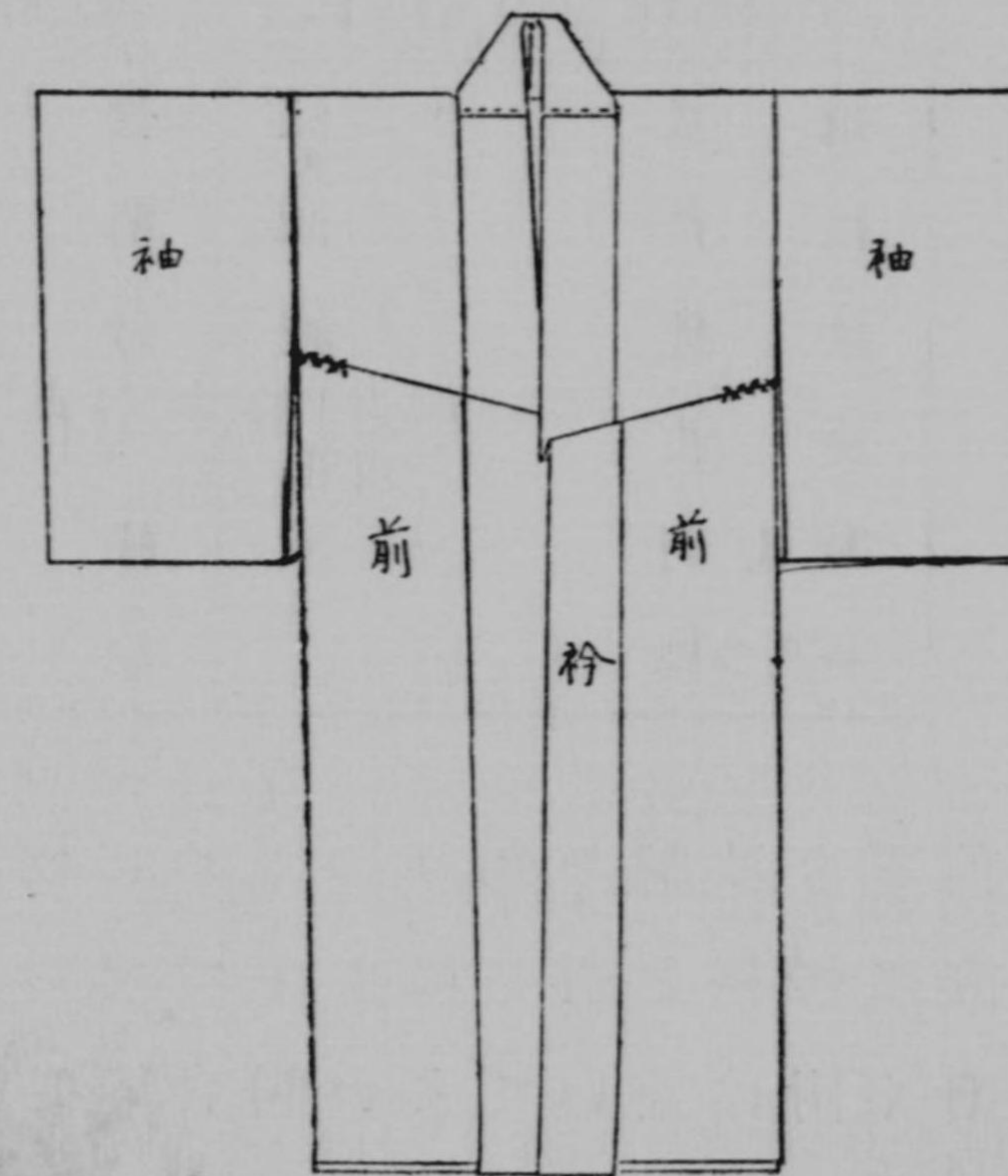




着物仕立



つまみ衿仕立



仕立方の種類

裊

別衿仕立, つまみ衿仕立, 着物仕立

袖

大名袖, 毛抜合袖, 無双袖, 半無双袖

裾

引かへし裾, 別裾

仕立上寸法

長着を標準として次の如く増減する。

単位cm			
名稱	寸法	名稱	寸法
袖 丈	0.8 減	後 幅	30
袖 附	0.4 減	前 幅	26~28
袖 幅	0.4 減	衿 幅	上 5.5 下 7.5
身 丈	着丈に同 (125内外)	衿	同
衿 肩 明	0.4 減	繰 越	同
身 八 っ 口	13	前 下	3~4

前下りは胸の弛みのために附けるものである。
故に體格と着方によりてその寸法は一定しない、
全く附けないでよい場合もある。

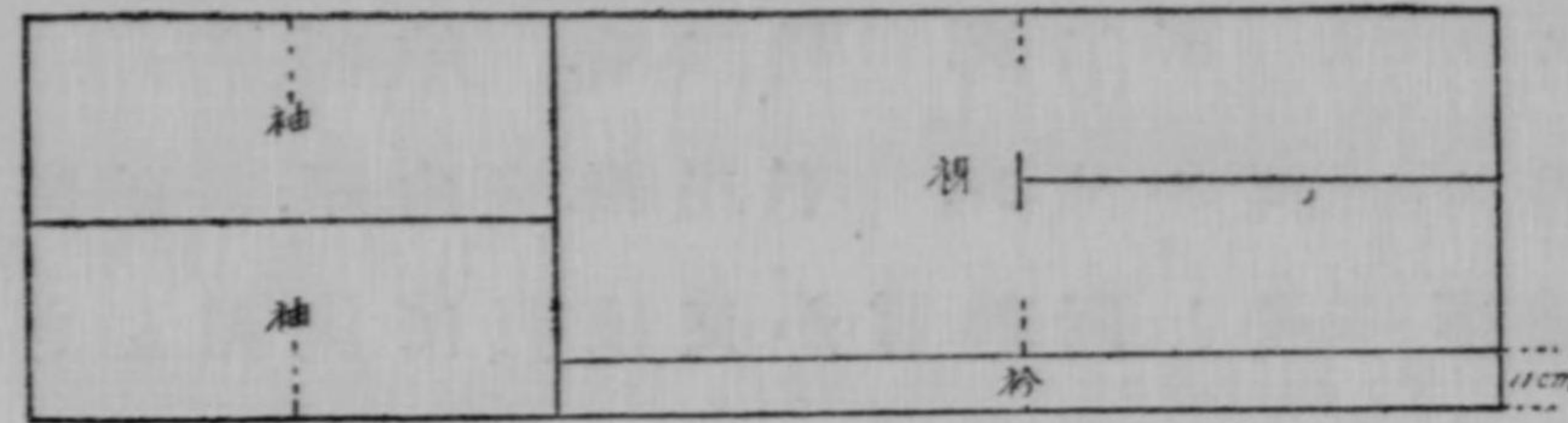
地 質

表 モスリン, 不二絹, 羽二重, 縮緬等
裏 新モス, モスリン, 不二絹, 白絹, 紅絹等
裾及び袖裏 表と同地質か又は表に調和よき別
布を用ふ。

裁 方

- 1 別衿仕立 (總用布 925cm 内外)
附圖第四圖参照
- 2 無双袖別衿仕立 (總用布 1180cm 内外) (一反)
附圖第五圖参照
- 3 半無双袖共裾別衿仕立(總用布 1160cm 内外)(一反)
附圖第六圖参照
- 4 無双袖引返し裾別衿仕立 (無双用長襦袢地)
(總用布 1164cm) (3丈6尺)
第七圖(附圖略)

5 廣幅物別衿仕立



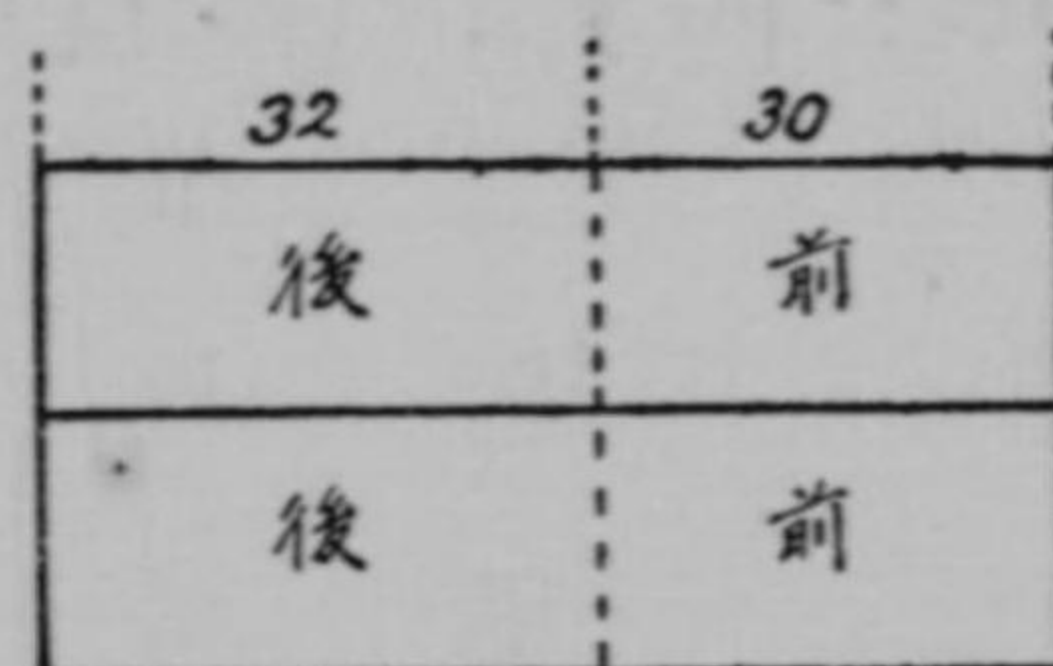
6 胴裏裁方

(表身丈 + 出衿 × 2) × 4 = 胴裏總用布

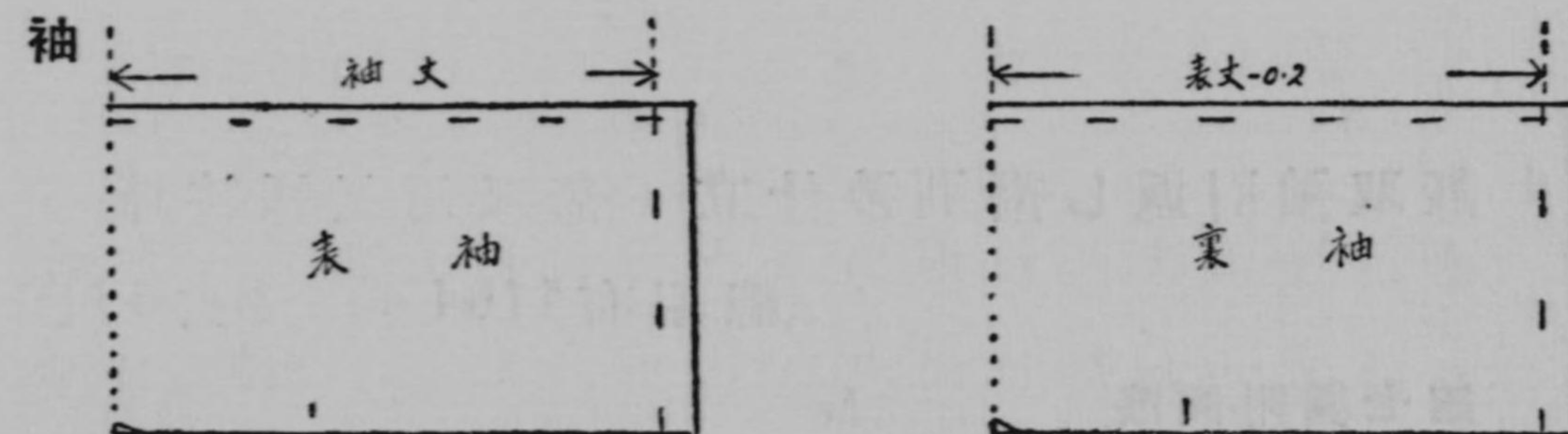
胴裏は普通身丈いつばいに裁ち、裾布は裾へ被せるのである。

7 裾布裁方

用布 並幅 丈 62cm

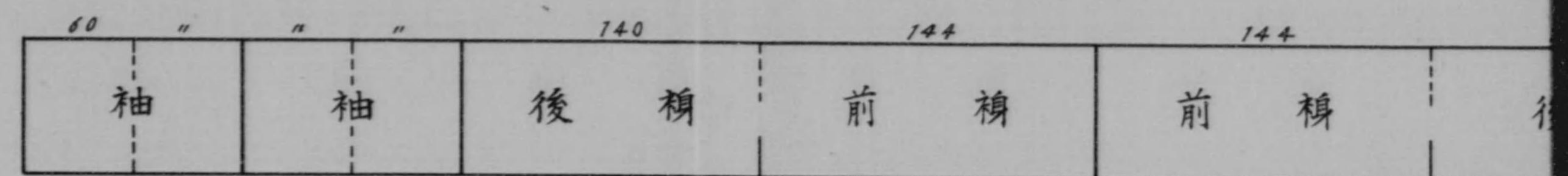


標 附 方

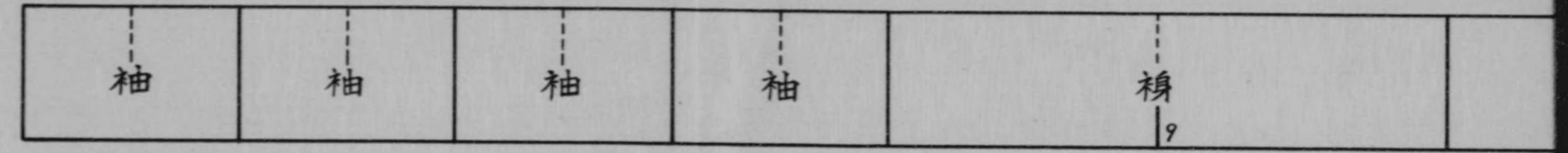


(幅標は袖縫方119頁参照)

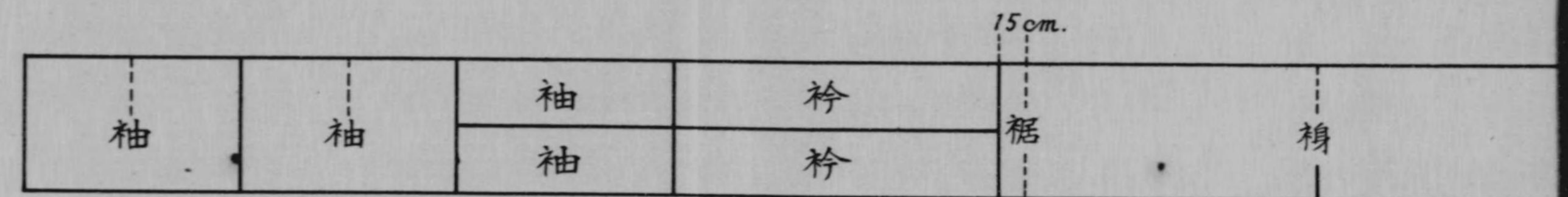
第四圖(1)別衿仕立裁方 (總用布 925cm 内外)



第五圖(2)無双袖別衿仕立裁方 (總用布 1180cm 内外) 一反



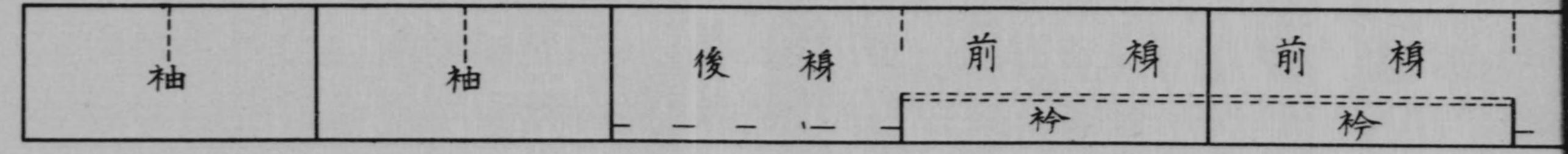
第六圖(3)半無双袖共裾別衿仕立裁方 (總用布 1160cm 内外)



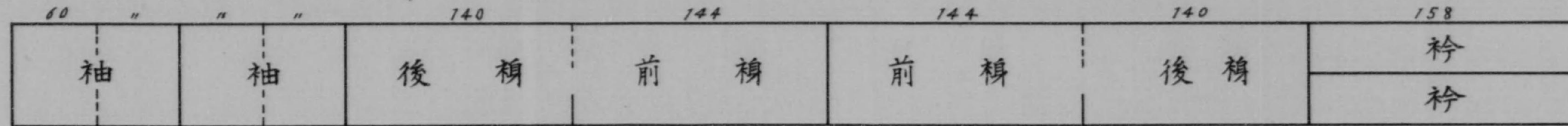
(裾の引通し寸法は普通 15cm 内外とす)

第七圖(4)(附圖略)無双袖引通し裾別衿仕立裁方 (總用布

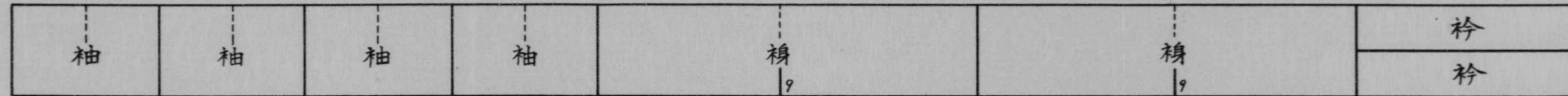
第八圖(5)摘衿仕立裁方 (總用布 800cm 内外)



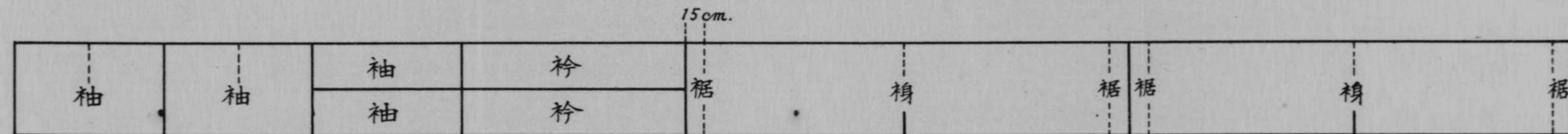
第四圖(1)別衿仕立裁方 (總用布 925cm 内外)



第五圖(2)無双袖別衿仕立裁方 (總用布 1180cm 内外) 一反



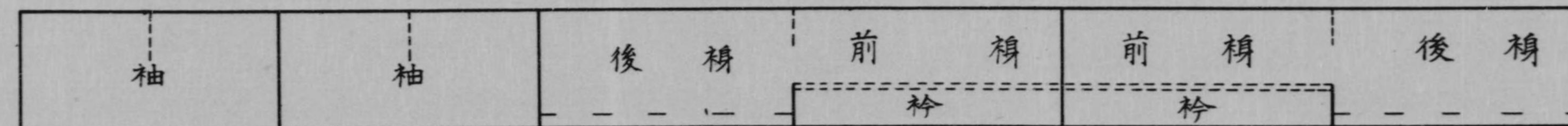
第六圖(3)半無双袖共裾別衿仕立裁方 (總用布 1160cm 内外) 一反

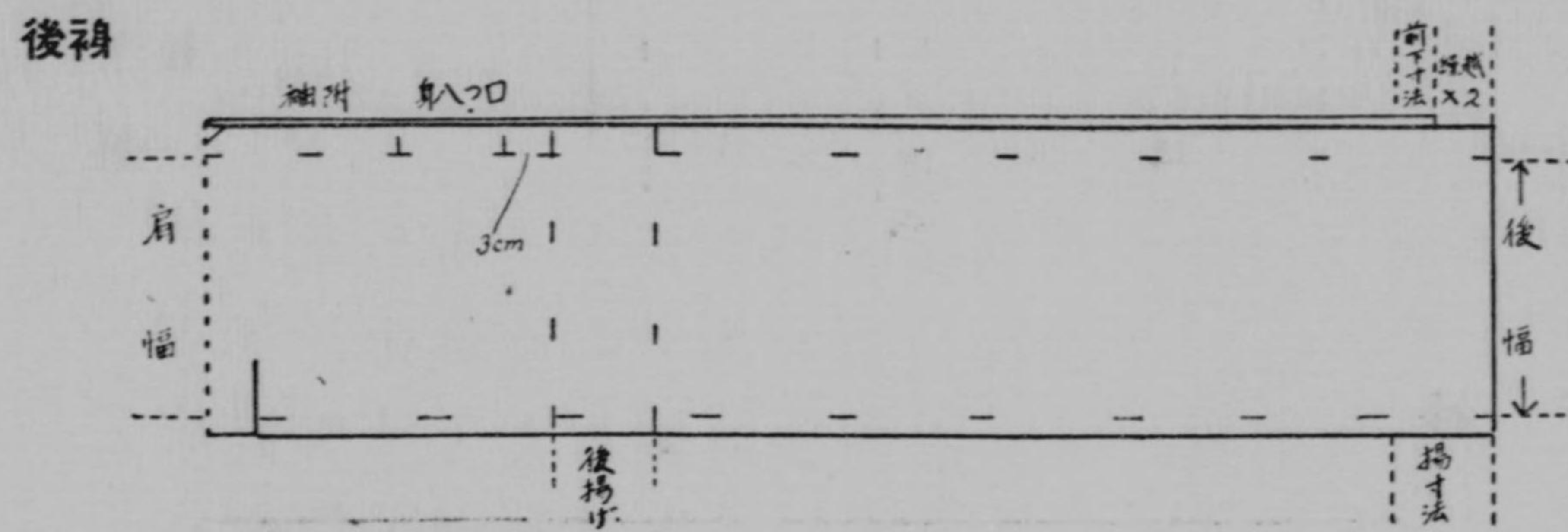
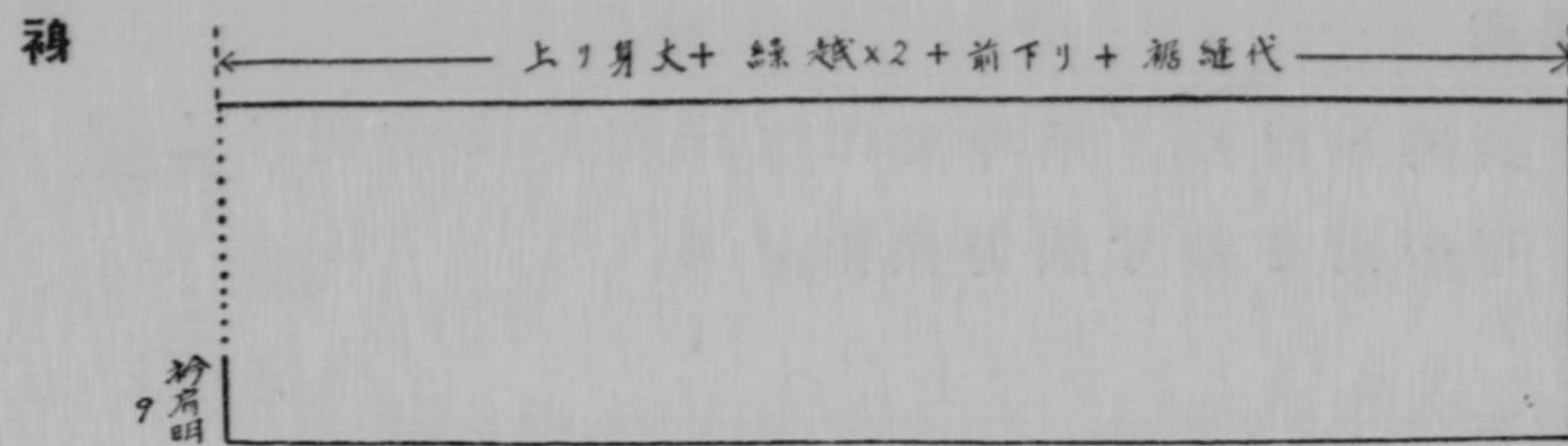


(裾の引通し寸法は普通 15cm 内外とす)

第七圖(4)(附圖略)無双袖引通し裾別衿仕立裁方 (總用布 1164cm) 3丈6尺

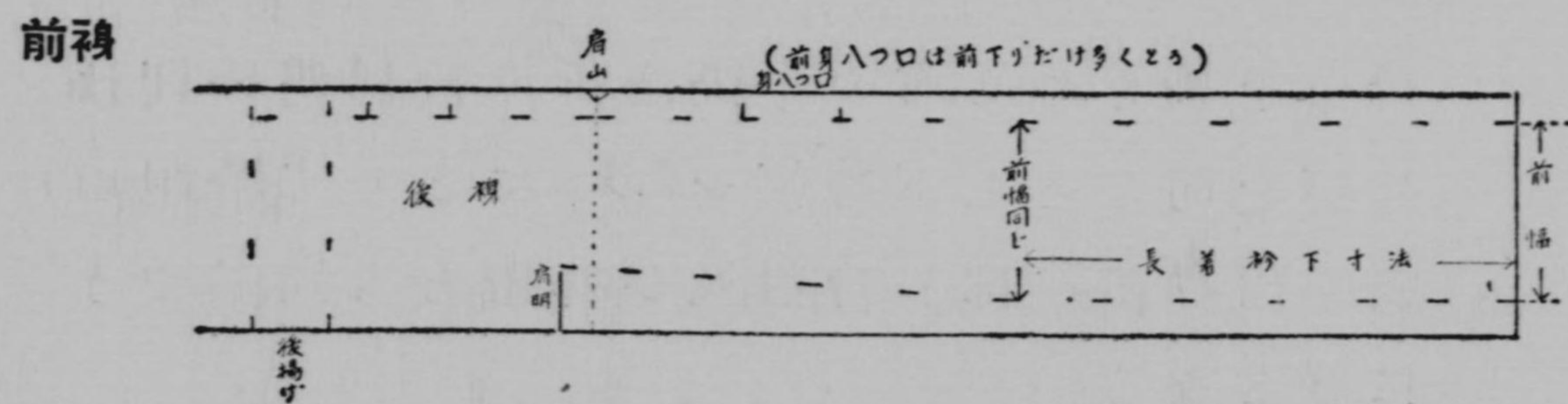
第八圖(5)摘衿仕立裁方 (總用布 800cm 内外)





後揚寸法 = 繰越 \times 2 + 前下

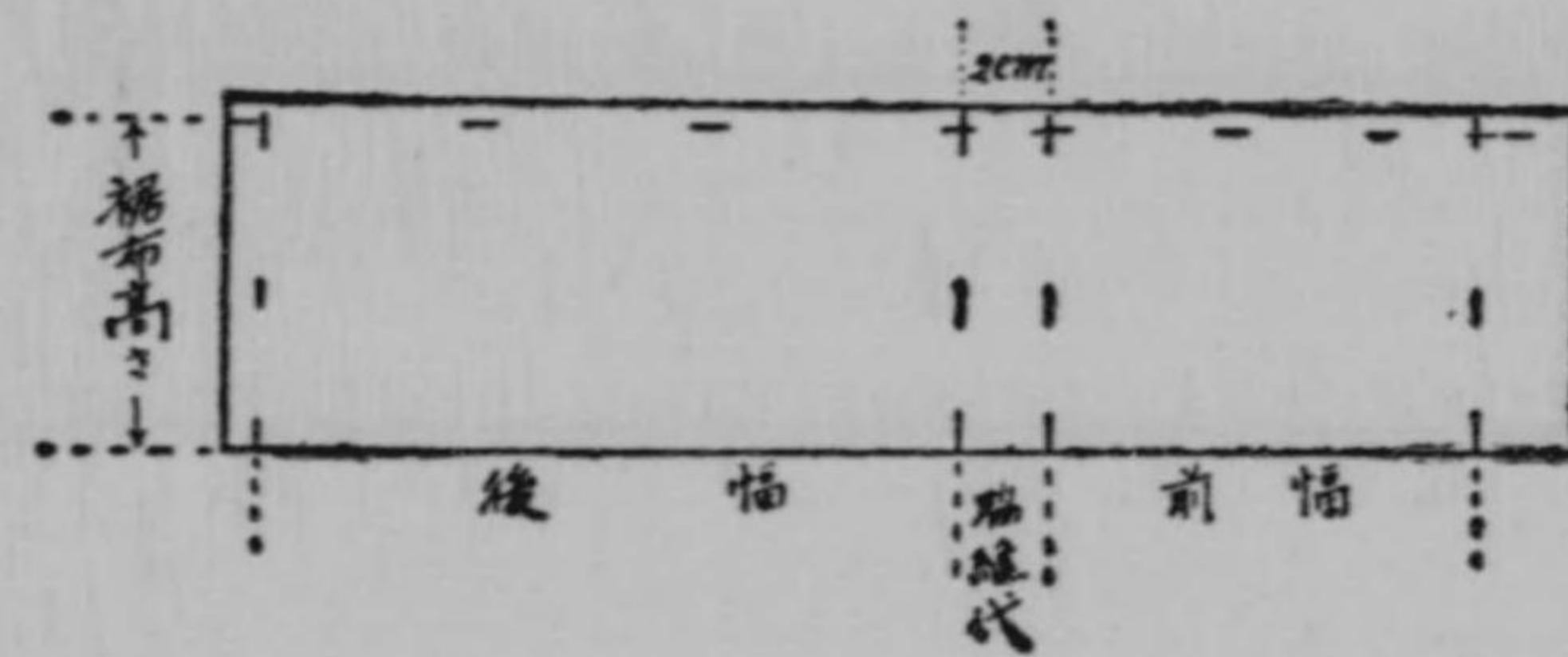
(裁切身丈の長さときは着丈を定めて前後に腰揚をなす)



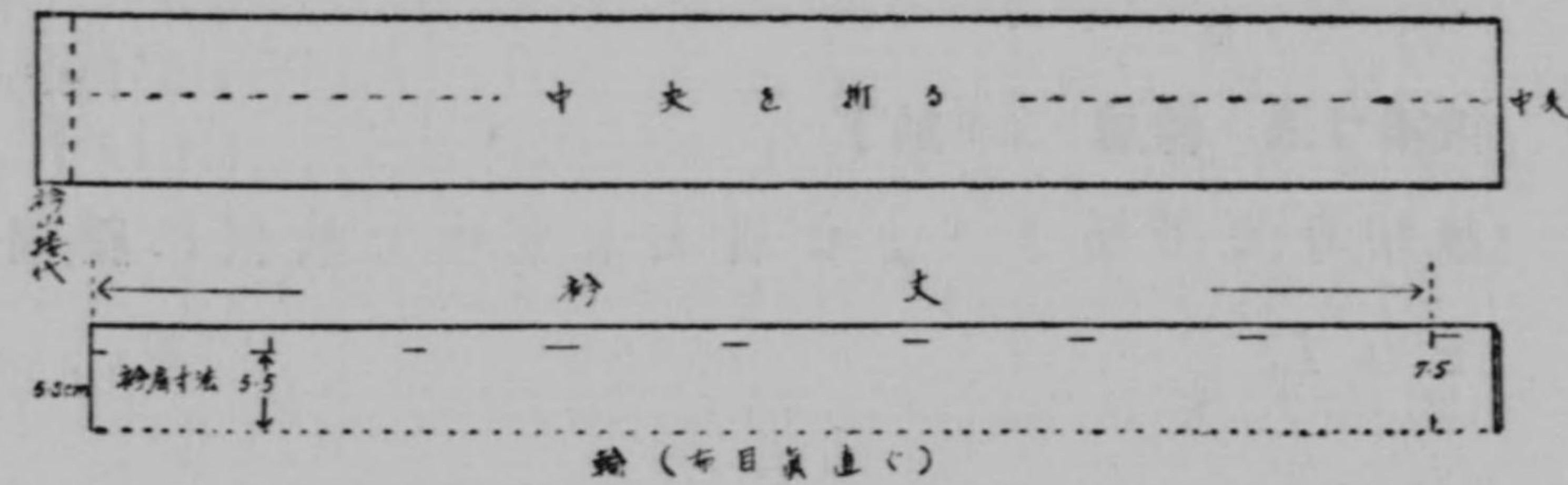
胴裏

表裄と同じ。但身丈にて出衽の2倍長くし、裾布の高さの寸法を標附ける。

裾布



衿



衿山を接ぎ合せ、布の中央を折り、衿肩明の間は衿幅を同じとし、下衿幅を7.5cmにとりて衿附の標を附ける。即ち衿附及び衿紵とも同じやうに斜となる。

縫方

順序

- | | | |
|---------|---------------|---------|
| 1 袖 | 2 裄表裏 | 3 裾布附 |
| 4 裾合 | 5 中綴及び身八つ口、袖附 | |
| 6 衿附 | 7 紐附 | 8 前下の仕末 |
| 9 臺衿の作方 | 10 仕上 | |

方法

袖

大名袖は、袖口を合せ、折を裏に掛けて、かくし躰をなし、表袖を2cm内外裏に引返す。毛抜合のときは縫代を表に返して、袖口を毛抜に揃へて幅標をなす。次に振を合せて縫代を裏に折り袖下を四つ縫とす。

裄

表裏の背脇を縫ふ。胴抜のときは胴接の着を裾布の方へ掛け、縮緬類には串躰を掛け、他のものはかくし躰とす。

裾布附

裾布の背、脇を縫ひ、胴裏の裾に被せるやうに縫ひ附ける、浅く着をかけて表から串躰をかけ、裾を揃へて躰で綴ちて置く。共裾引返しするとき

は裾に縫目を附ける。

裾合

女物衿と同じ。但裾綴は前4針、後5針とす。

中綴及び身八つ口・袖附

女物衿と同じ。

衿附

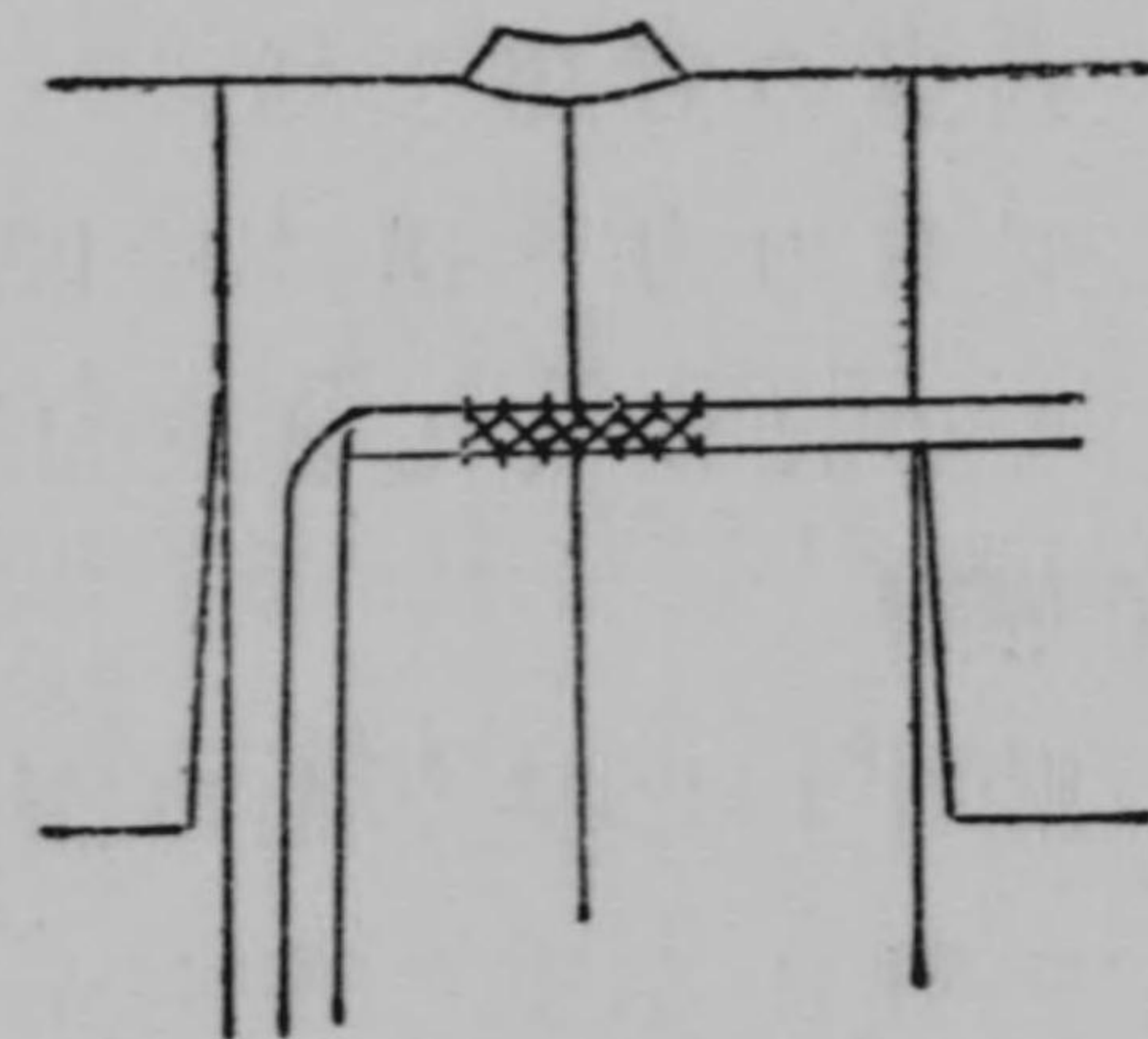
裨の衿附廻を合せて假綴をなす。

衿山の接ぎ目を細かく縫ひ、縫目を割る。衿薄きときは新モスを衿丈と同じに用意し、表衿の上につれぬやうに重ねて綴ぢ合せ、二枚一緒に裨につける。衿先を衿幅に定めて縫ひ、折は裏衿に返し、其上へ衿附の縫込を重ねて綴ぢ表返す。三つ衿芯を入れて衿幅の標通りに折りて紘け附ける。

紐附

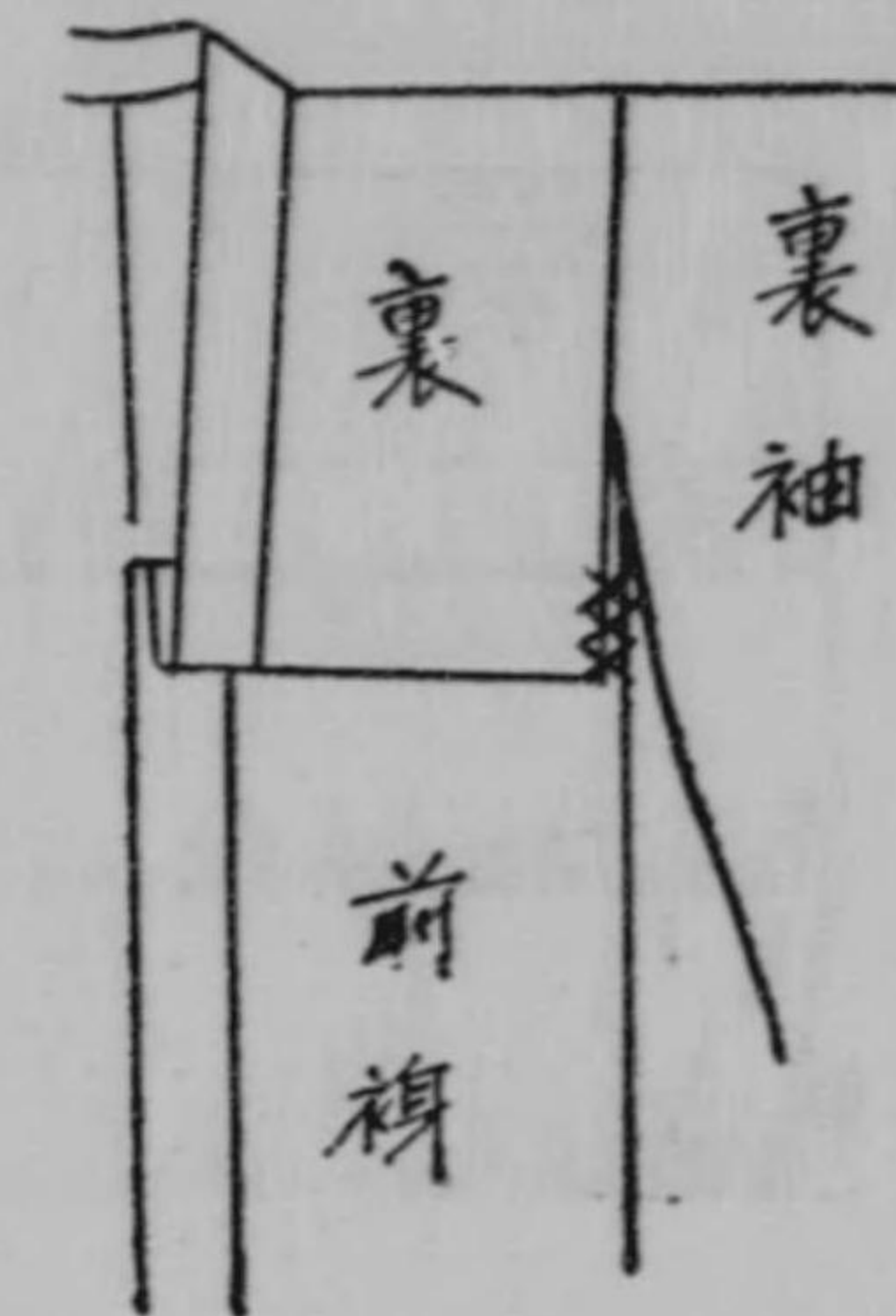
後紐 幅2.5cm 丈80cm

身八つ口の中央の位置を紐の高さとし、衿肩明と同寸に圖の如く附ける。



前下の始末

前身八つ口の長い寸法だけ身八つ口止りのところに裏から摘み、圖の如く脇縫に綴ぢ附ける。



臺衿の作方

新モス 二枚

晒木綿 一枚(芯布)

各半幅にて丈100cm,

表布に芯布を重ねて綴

ぢ裏布と縫合せ、折を裏に掛け、かくし襷を掛けて表を0.4cm見返して衿幅の標を附け、圖の如く

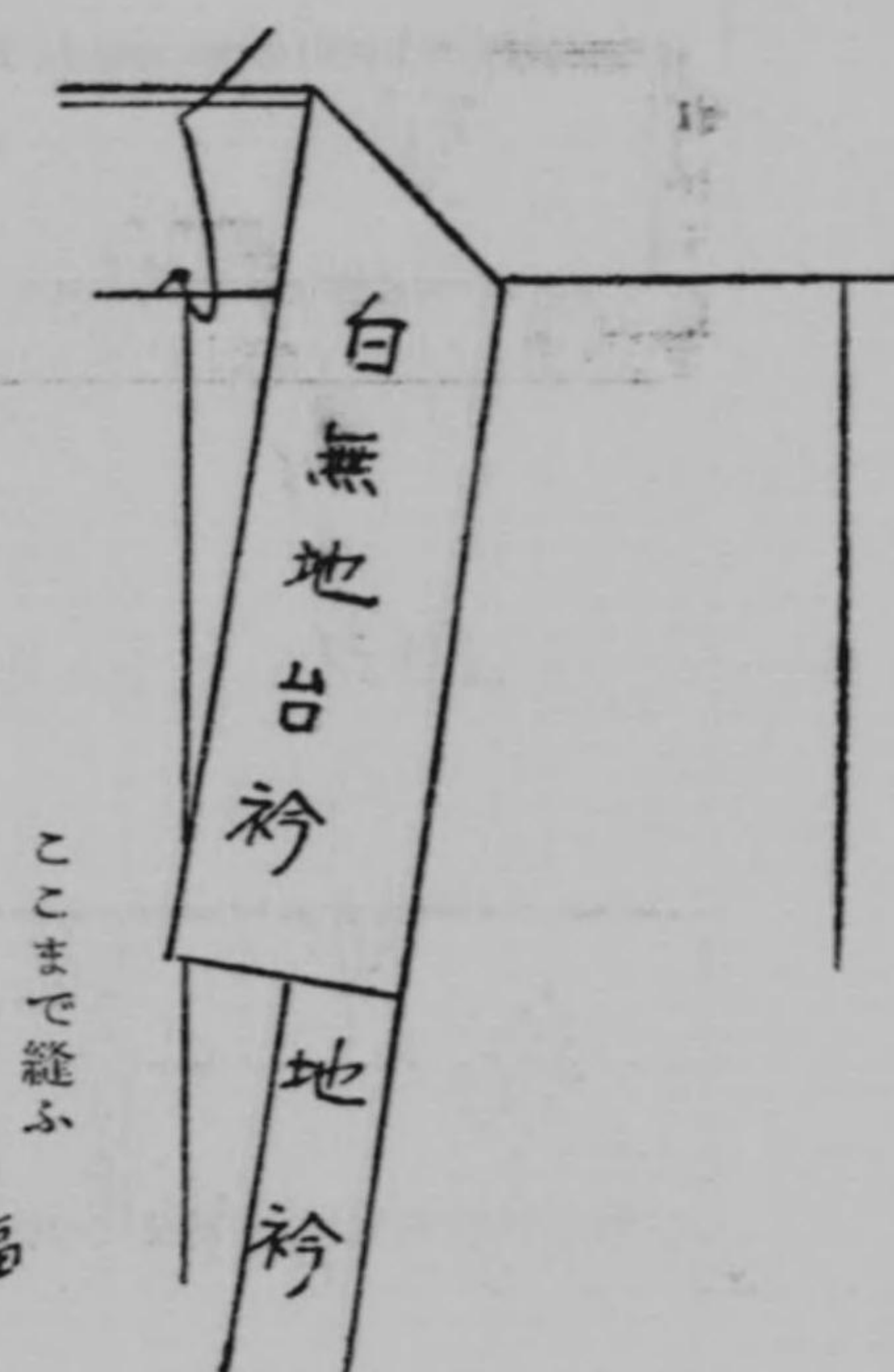
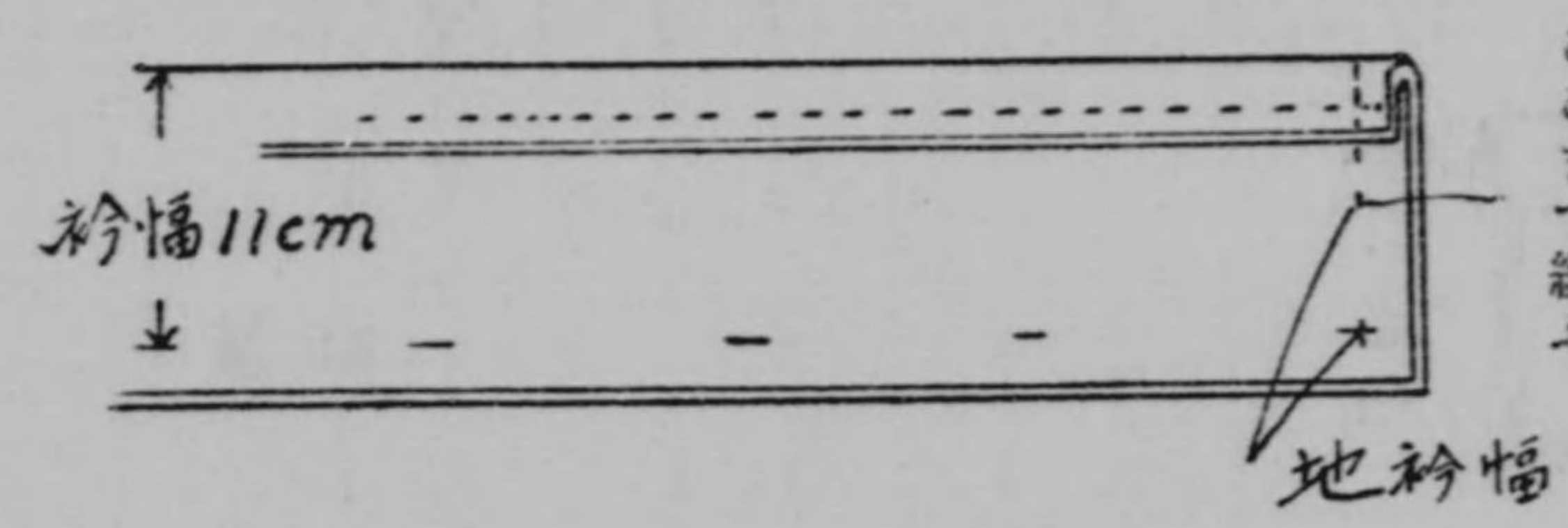
両端を地衿の幅だけ縫

残して表返し、幅標を折

り地衿を挟むて表裏を

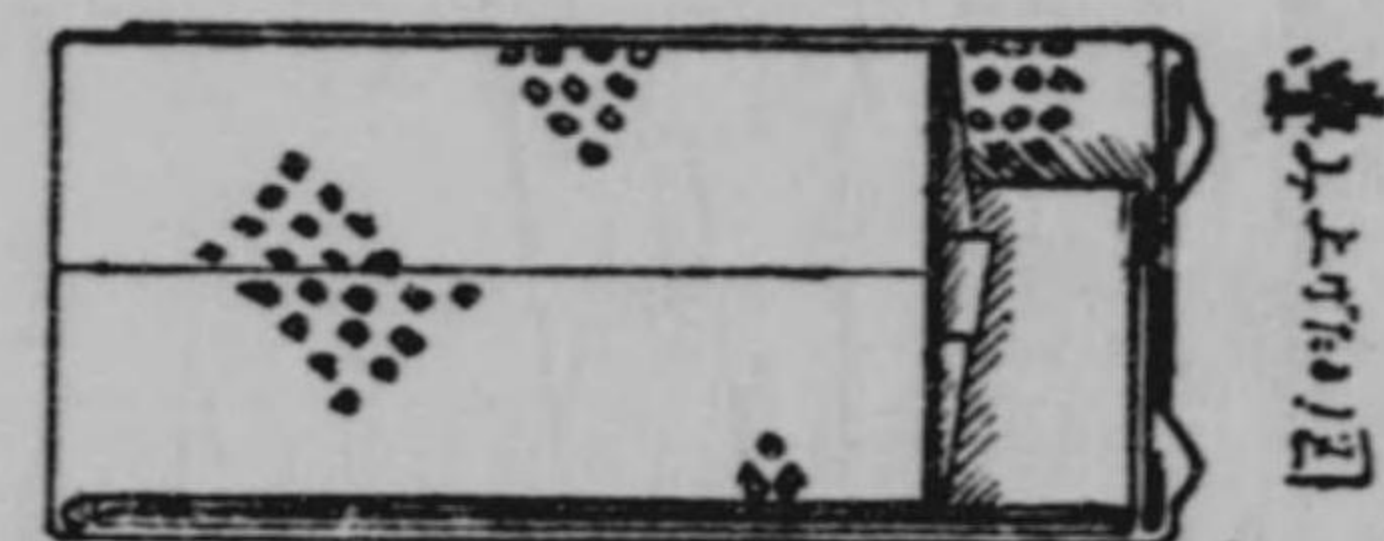
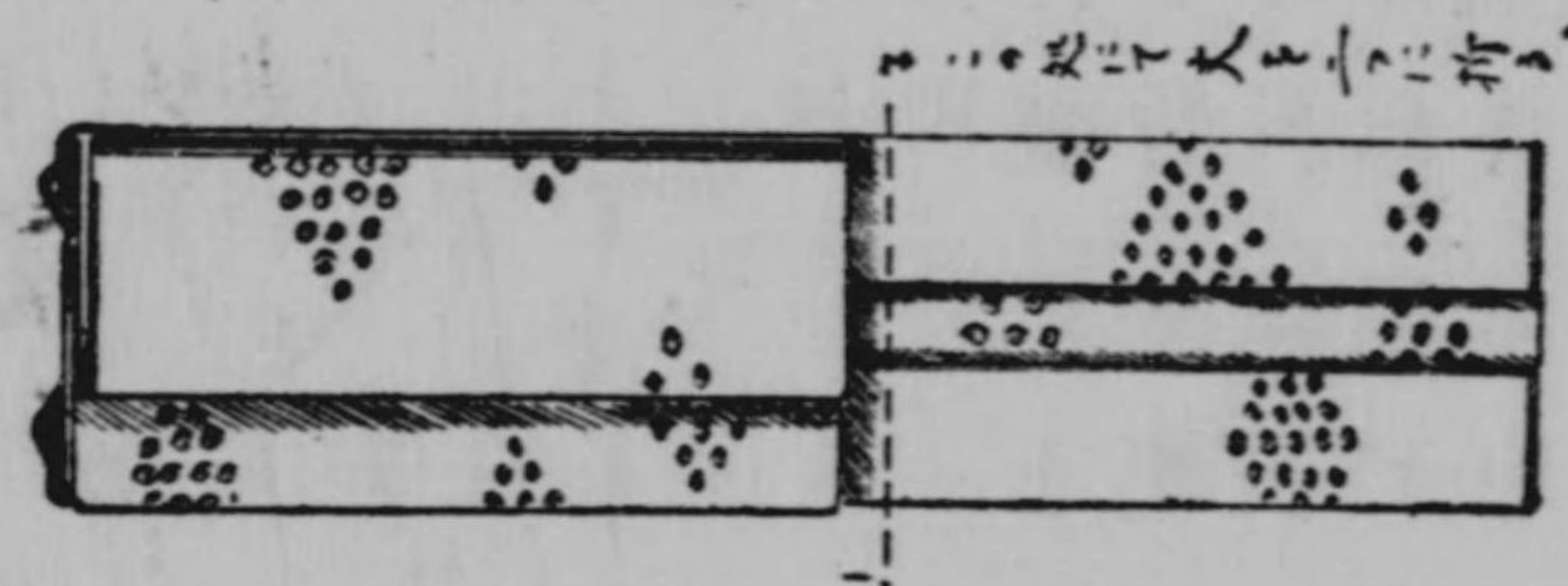
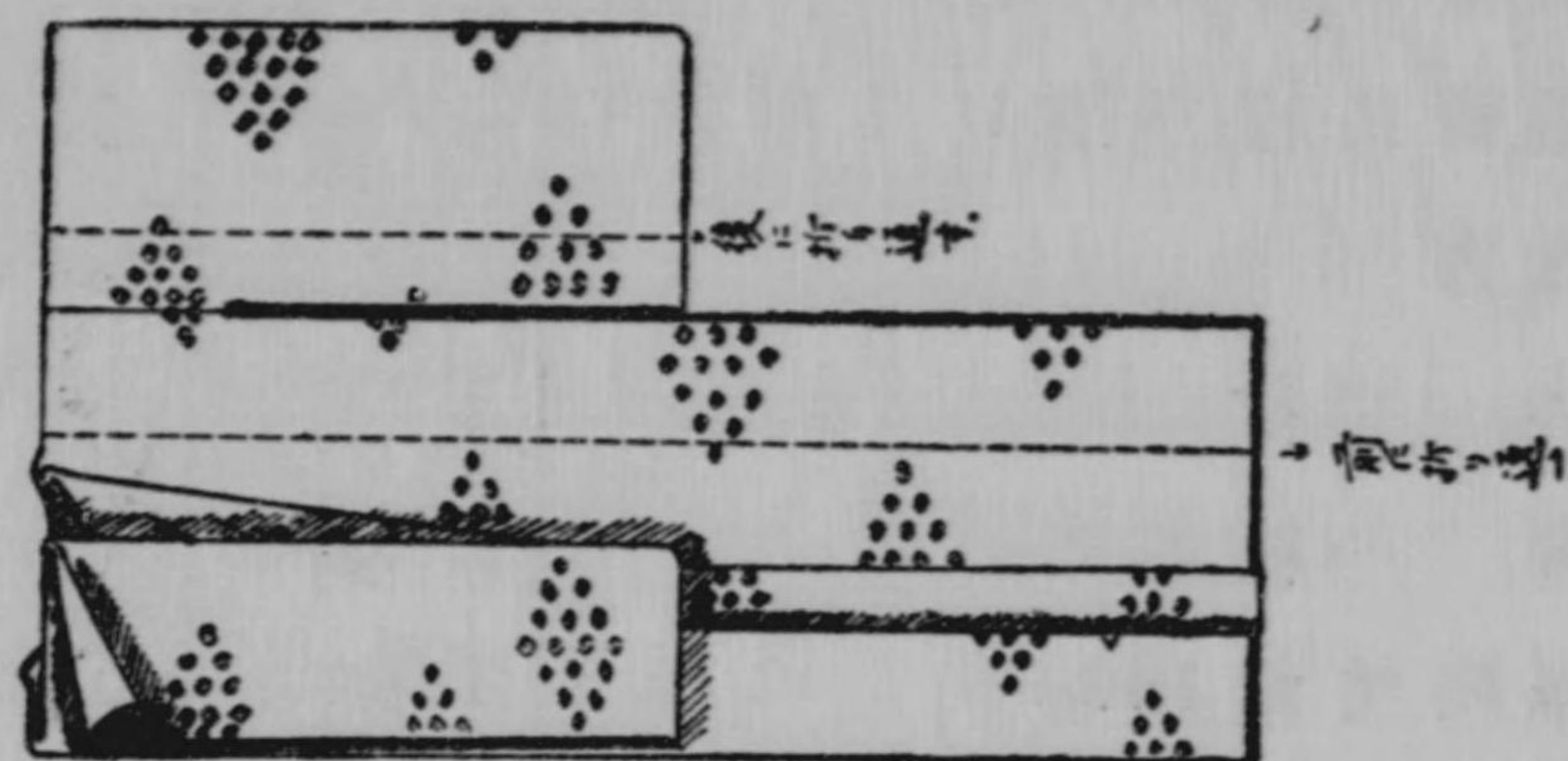
衿附に紘け附ける。三

つ衿に引糸を附ける。



仕上

仕上をなして圖の如く疊む。



摘 衿 仕 立

裁方

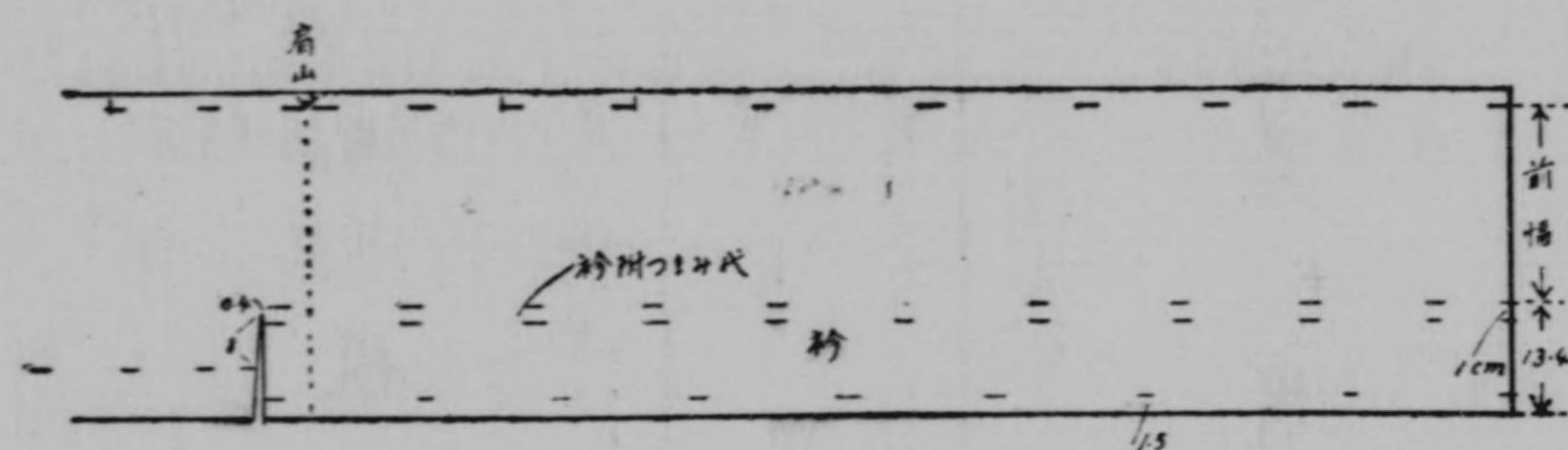
(總用布 800cm 内外)

附圖第八圖参照

標 附 方

表 衿

布の置方、丈の寸法のとおり方別衿仕立と同じ。



衿肩明は普通 13cm とす。但布幅と肩幅の寸法を度つて見なければならぬ。

後衿の標附 出來上り衿肩明の寸法を度りて背縫代を定め、他は別衿仕立に同じ。但裾縫代は 2cm とす。

裏 衿

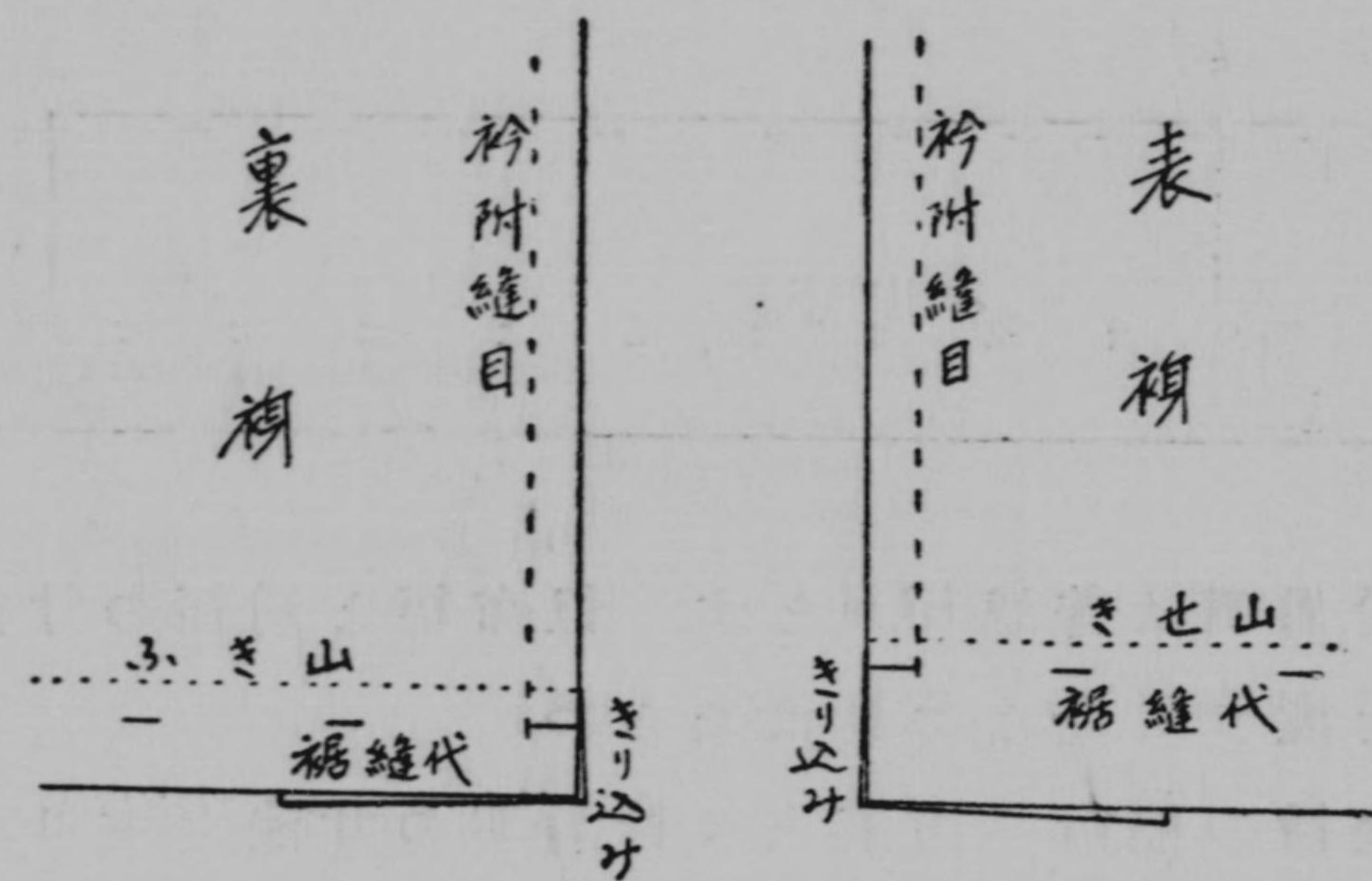
表衿より衹の 2 倍だけ長くして裾の縫代は 1cm となし、其他表衿に同じ。

縫方

(別衿仕立と異なるところのみ挙げる)

衿の摘方

標を合せて衿附を摘む。上部を3cm位縫残し
 圖の如く表は裾の丈標より被代だけ手前まで
 裏は衾山まで縫ひ、切込みを入れる。

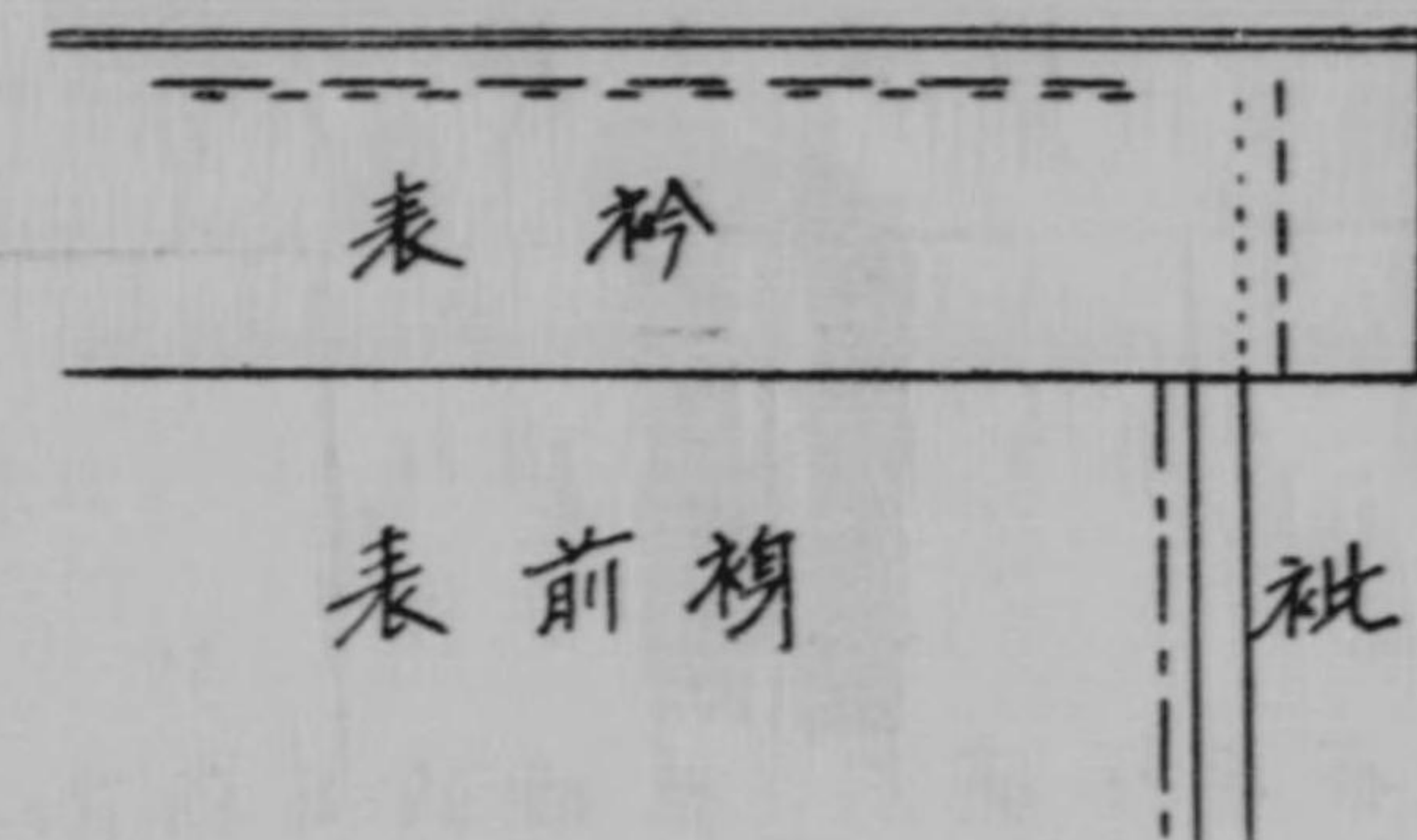


三つ衿接方

衿の上部に三つ衿布を接ぎ合せ、縫残りの上部
 の衿附に續けて衿肩廻りを縫ふ。

衿紵

裏表の衿附を綴ぢ合せ、圖の如く衿先を縫ひ、縫
 代を裏に折つてしつかりと留め、表返して衿幅

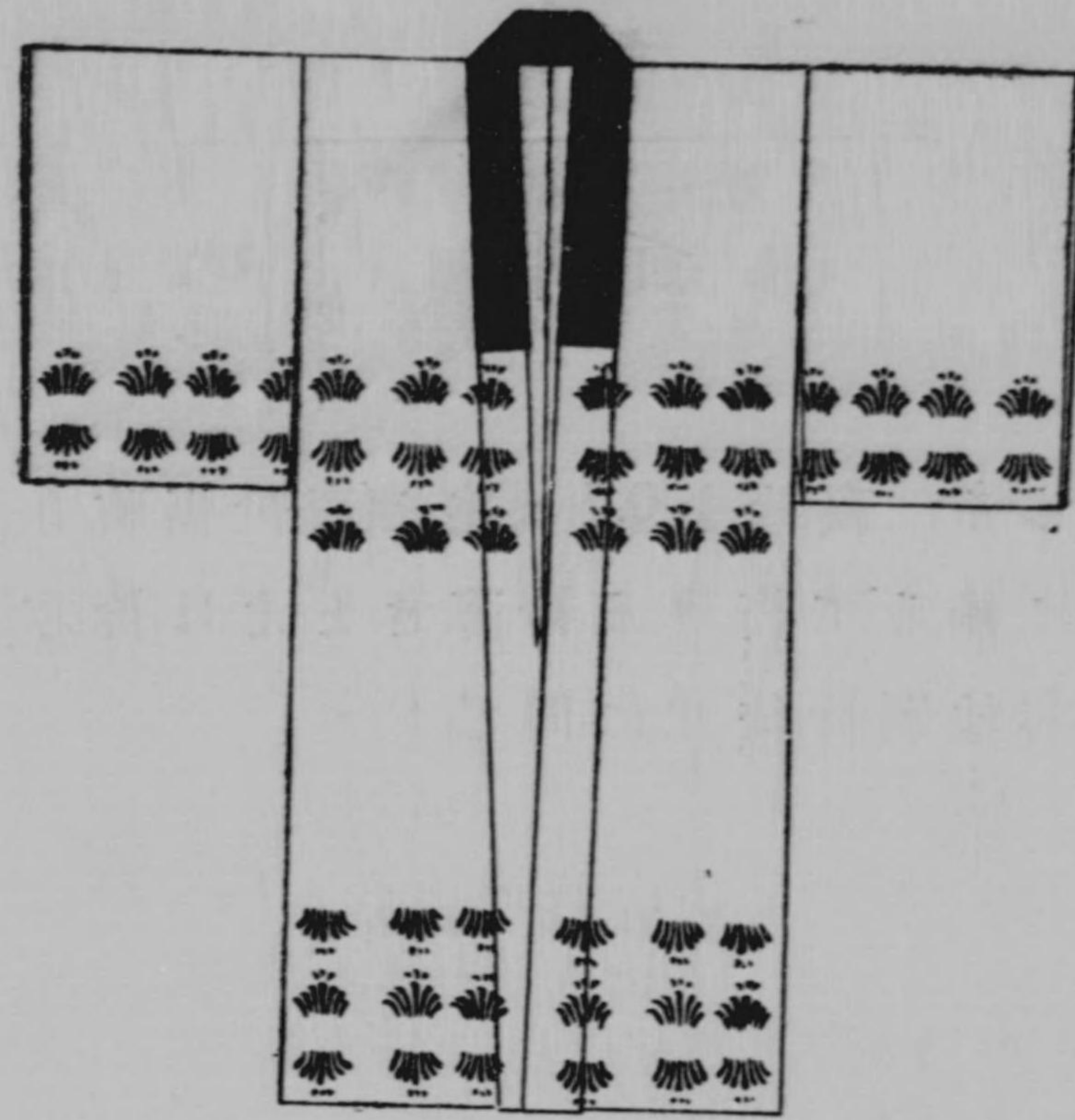


を定める。裏衿を0.5cm控え(表衿幅狭きときは
 毛抜に揃る)て紵ける、衿薄きときは衿芯を入
 れる。其他別衿仕立に同じ。

第十三章

男物 袷長襦袢

出来上圖



仕立上寸法

(着物を標準として寸法を定む)

単位cm

名稱	寸法	名稱	寸法
袖丈	1 減	後幅	着物に同じ
袖附	1 減	前幅	27
袖幅	0.4 減	衿幅	5.5
身丈	着丈-4 (132内外)	衿	同じ

仕立方

大體女物に同じであるが相違點を擧ぐ。

前下及び繰越はつけぬ。

裾を共裾引返しに裁ち、裾の縫目を附けぬ事が多い。

衿幅は5.5cmとして裾まで同じ幅とす。

袖附は袖丈短い時は全部つけ、長い時は人形を作る。

半衿の地質、羽二重、八丈等

色、黒、ネズミ、薄茶等

第十四章

腹合帯

腹合帯は晝夜帯、鯨帯の名稱がある。
 帯の兩側は表裏の名稱でなくして、兩側互に調和されて美しい帯となるものである。其地質・色・柄等すべてよく調和されたものを選ばなければならない。また用ひる目的から見ても單に帯のみとして見ず、服装の上に重大な調和をもつものであるから常に長着に對して兩側を選ばなければならぬ。

地質

兩側取合せの普通の例を擧ぐ。

モスリンと縹子

羽二重と縹子又は壁羽二重

縮緬と縹子

縹珍と絲錦

紹縮緬と紗縹珍

紹と縹子

其他同地質のものを取合せの事もある。

仕立上寸法

幅 28cm 乃至 32cm

丈 350cm 乃至 400cm 内外

年齢又は體格によりて多少の相違あり。

地直

帯を仕立てるには兩側の地直が最も大切である。耳のつれてあるものは兩耳を鋏で伸し、地厚のもので鋏のみにては伸びないものは斜に鉄を入れて伸す、伸し加減は縫縮みのすることも考へてゆるみ加減に伸し、緯糸と經糸とが正しく直角になるやうに全體にアイロンをかけながらしつかりと卷棒に巻いておく。

特殊な材料の地直

1 人絹織物

人絹織物は耳を伸す程度にして徒らに手を入れない方がよい。

2 博多織

近來の博多織は非常に伸び易く、模様や獨鉗の織出しが平らでない事が多いから充分にアイロンをかけて布全體を平らに地直をなす、又水

氣を與へると汚點を生じ易いから特に注意を要す。

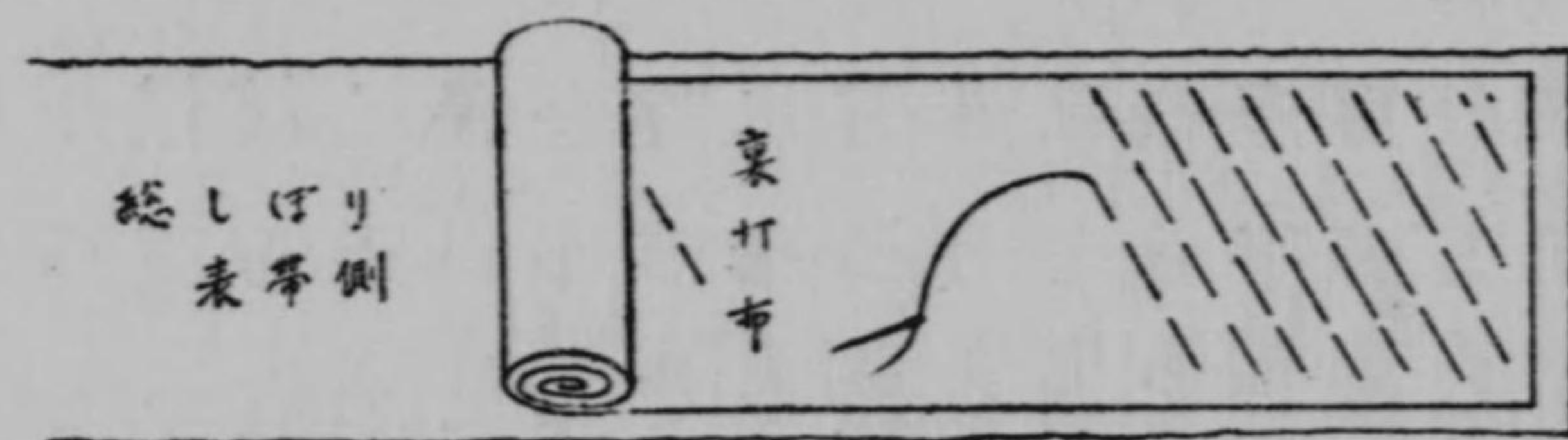
3 縹子

縹子の糊氣の強いものは布を斜に引いて糊氣を落す。又此の織物は伸び難いものであるからよく伸し緯の布目を眞直にしてアイロンを掛け卷棒にしつかり巻いておく。

4 絞り羽二重

絞りはその味を失はないやうにすることが必要である。絞りには總絞りと飛絞りとあり。何れの場合にても絞りの處へ裏から布をあて薄く霧を吹き其の上から軽く火熨斗をあてて絞りを伸し三時間位其のままになし置き、丁度よい工合に絞が戻つた時に仕立る。また飛絞りの處だけ特に薄い布で裏打をすることもあ

る。總絞のものは裏打布の丈幅を定めて全體に圖の如く裏打をなして後仕立てる。裏打の仕方



は裏打布を帶側の裏に重ねて表と同色の羽二重糸にて絞りの山に掛ぬ様に極く小さく針目を出して綴ぢ附ける。綴糸は一幅ごとに糸を切り決して續けてはいけない。

芯地

種類 三河木綿 ゴム帶芯(一枚芯)
眞岡木綿 天竺木綿(二枚芯)

地直

三河木綿は水に浸すか又は全體にむらなく霧を吹いて地詰めをなし、よく乾かして後再び霧を吹きアイロンをかけて卷棒にしつかりと巻いて置く。

ゴム帶芯・眞岡木綿・天竺木綿は折り皺を伸しそのまま用ふ。

縫方

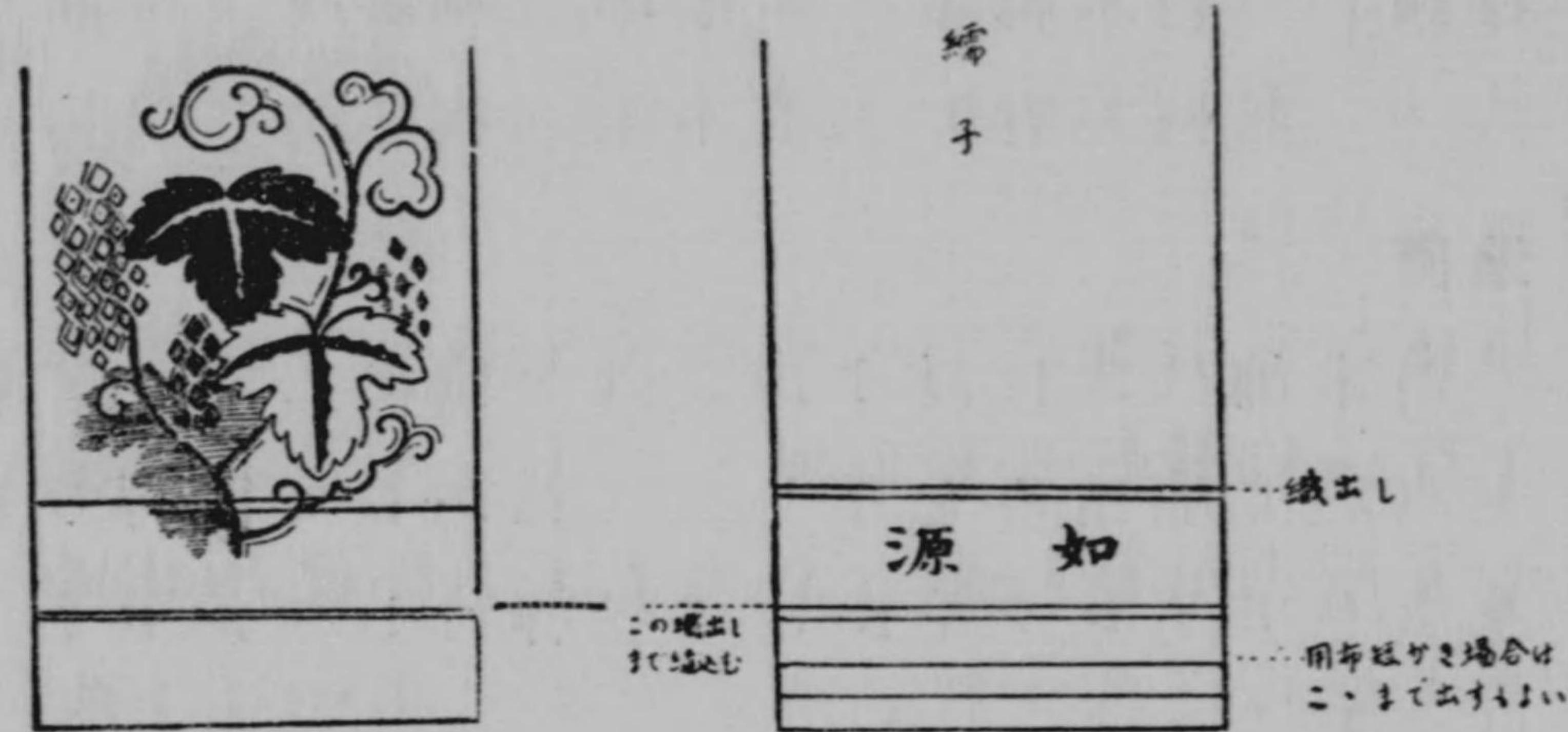
順序

- 1 兩側合及び假綴
- 2 標附及び縫方
- 3 芯拵へ
- 4 芯の釣合及び芯綴
- 5 引返方及び躰の掛方
- 6 仕上

方法

垂と手の寸法の定め方

垂も手も織出しから10cm位出して其他の織出しは縫込むのを普通とす。羽二重等の如く捺染したものは織出しの代りに染出してある。

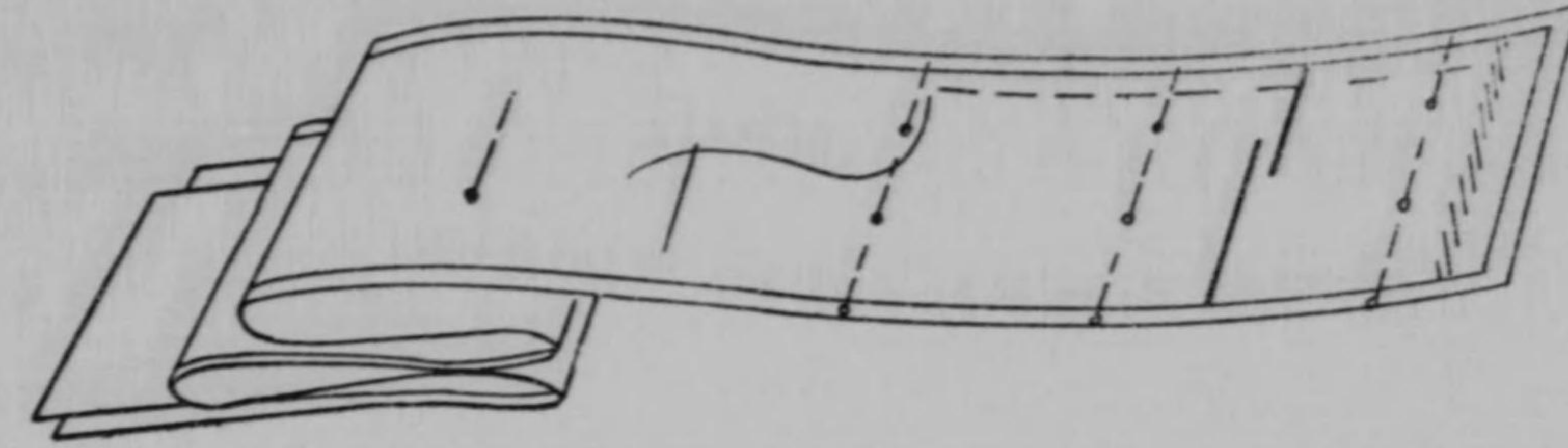


両側の合せ方

厚地を下に薄地を上、また布幅廣き方を下にして両側の垂の縫代を合せて幅の中央に待針を打ち、両側を平らな釣合にとりて50cmおき位に待針を打ち両面より軽くなでながら釣合を平に見る。

假縫

中央の待針を中心にして緯の布目を通して幅の兩耳に圖の如く待針を打ち假綴をする。



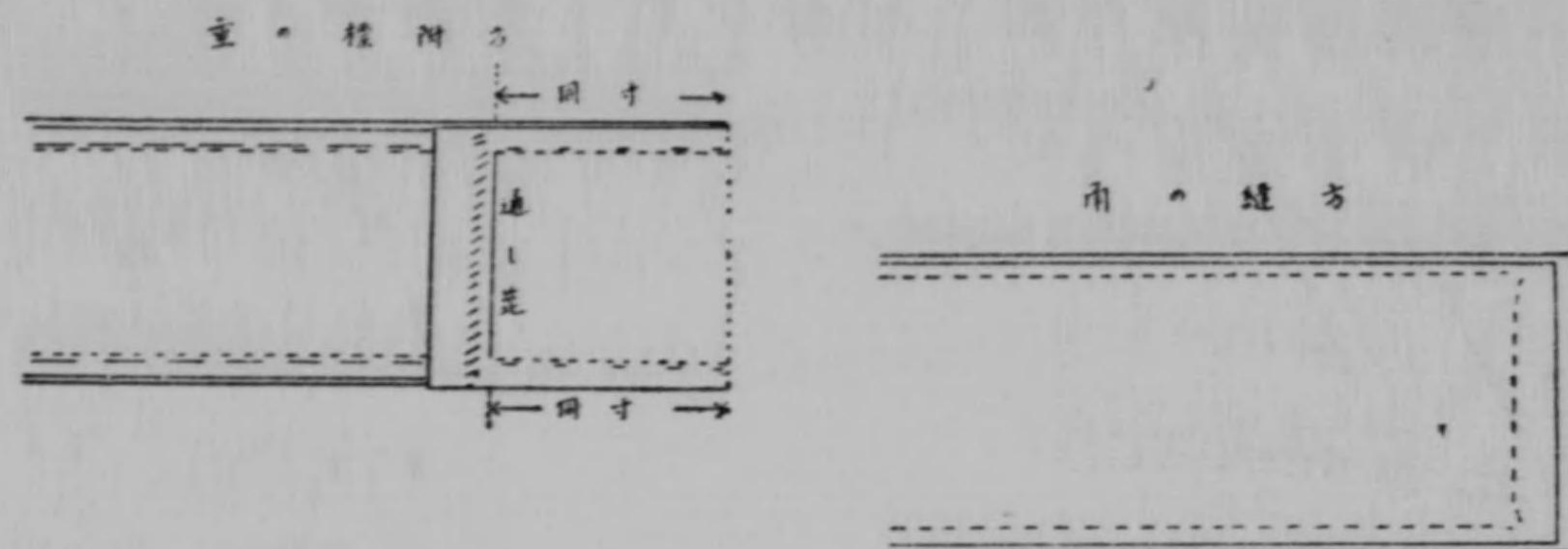
標附及び縫方

模様的位置と帯の幅の寸法を豫め度つて置いて一方の縫代に軽く通し篋をして端より10cm位の間返し縫に、他は針目細かく串縫にする。次に帯幅の標をなす。上り幅に0.4cm加へて通標をなし、初め縫つたと同じやうに縫ふ。但この時は帯の中央より手の方へよつて帯幅より10cm位多く縫残す、この縫残しの兩端は少し斜に縫出して糸を切つたままにして置く方がよい。

横の縫方

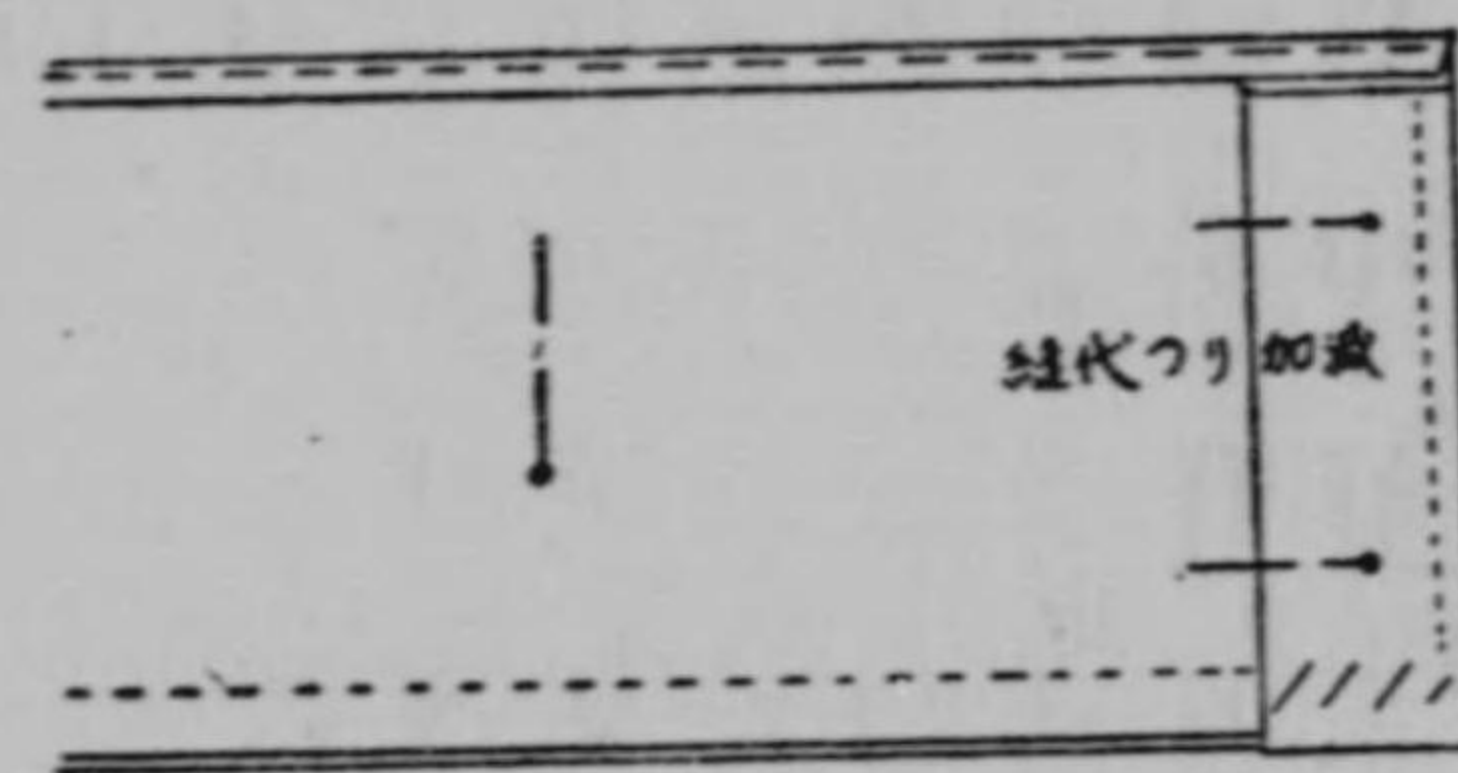
角が直角になるやうに圖の如く折りて標附けをなし、全部返し縫ひとし、角は一針縫残して置く、帯の角は表返して正しく直角にならなければ

ばいけない。そのためには四角を標より0.2cm位浅く縫出すと良い。



縫代の折方

縫目に平鋏を掛ける。横を先に0.4cmの着で折り、縫代を釣加減に縫目に副つてしつかりと綴ち付ける。両耳の縫目は0.2cmの着に手にて軽く折を付ける。



總べて地厚物と地薄物とを合す時は薄地の方へ又同地質のときは色の薄い方へ芯を入れる。従つて折は其の反對に折る。

芯拵

地直した芯布は最初耳の方を眞直に裁落し垂

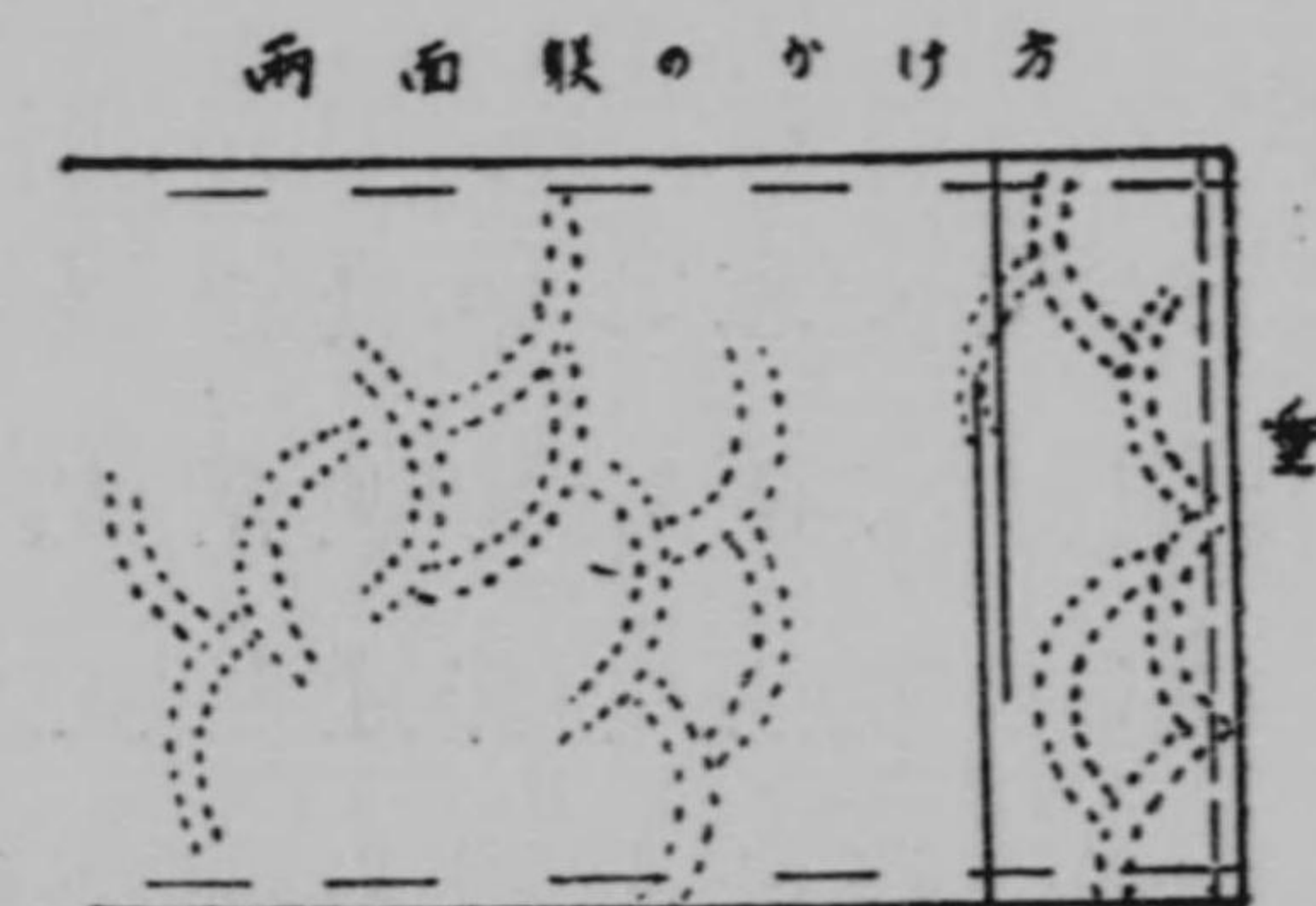
の方を直角に裁ち上り幅より0.2cm位狭く裁切り片側に眞綿を薄く引いて置く。

芯綴

眞綿を引いた方を帯地の上に据えて垂の端に揃へて重ね、幅の中央に待針を打ち芯を弛る目に釣合を取りて中央に50cm置き位に待針をなし、帯側の方からなで、ゆるまぬやうに釣合を調べ2.5cm位の針目にて周圍を躰糸にて綴ち附け眞綿を薄く引く。

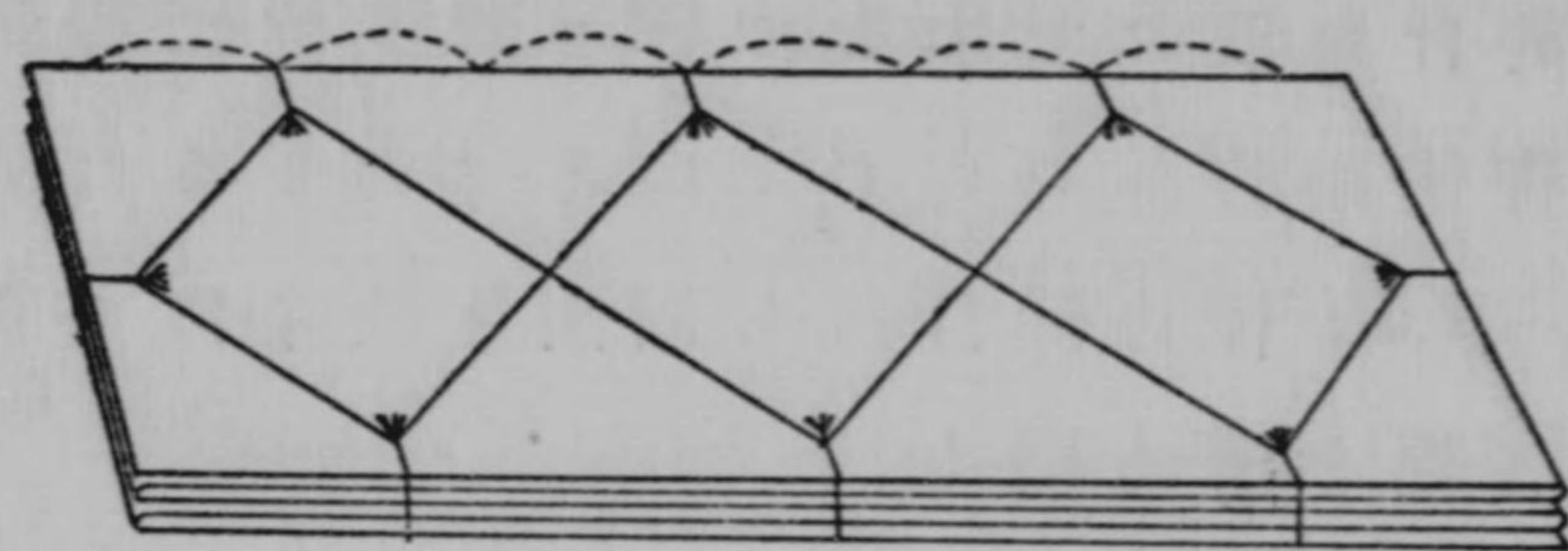
引返方及び躰の掛方

裏から角を良く折り込み置き、返し口から手を入れて兩角をもつて次第に引返す。左右返し終つたならば全體の釣合を良く整へ縫目を正して周圍に針目3.5cm位の兩面躰を掛け、引返し口を紘ける。垂及び手には白絹丸糸にて兩面躰を掛ける。



仕上

當布の上からアイロンを掛け適當に折りて壓をなす。模様を折らないやうに注意して丈を適當に梯子疊に折り圖の如く紅白の二本絹糸にて飾綴をなす。



薄物帯の仕立方

片側薄物にして羽二重又は縹子等と合せる場合は普通仕立にしてよろしい。

兩側とも透く織物の場合は芯は天竺又は眞岡木綿の二枚芯を用ふ。

布の地直、假綴の仕方は普通仕立に同じ。

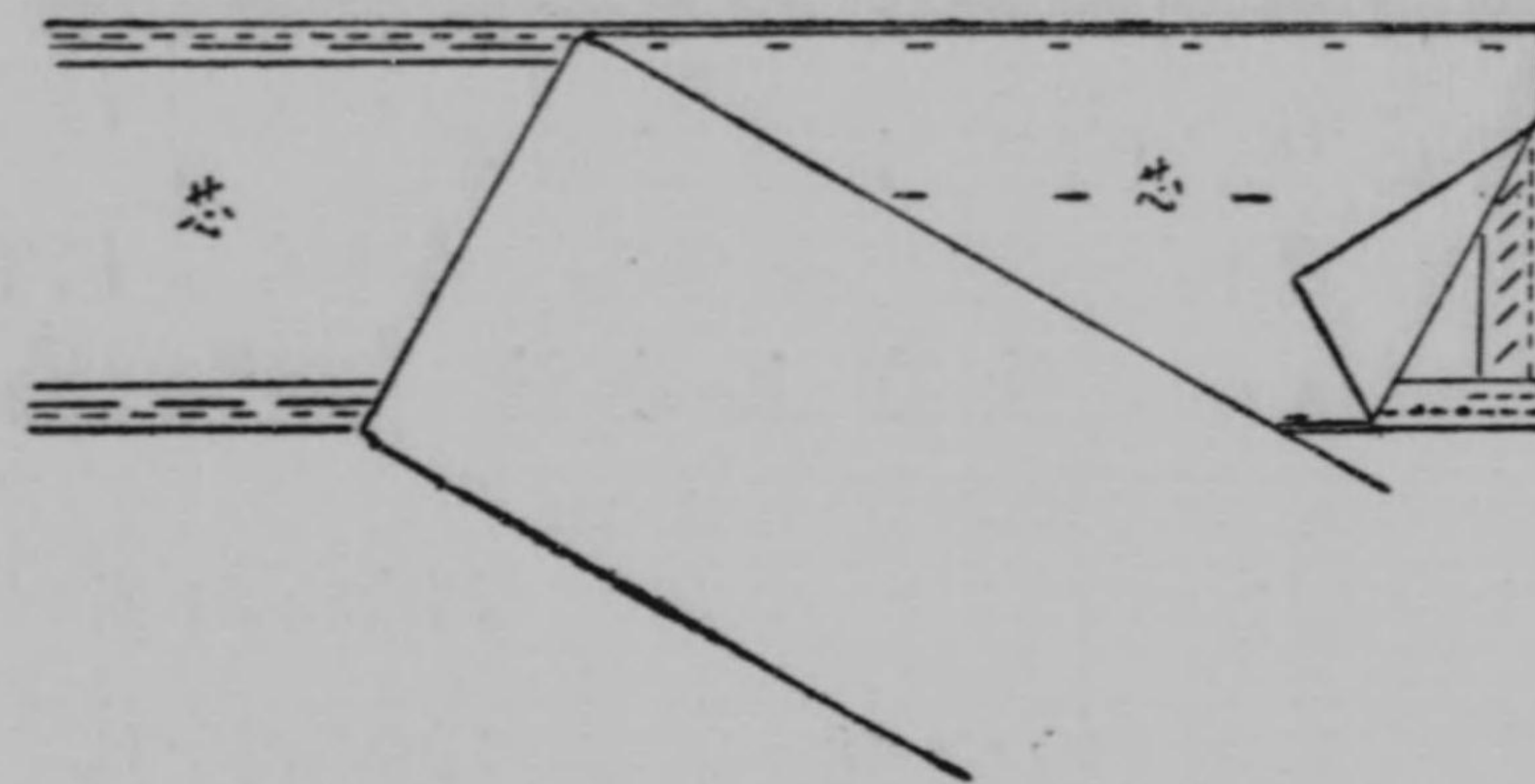
二枚芯の入方

芯の裁方 二枚の芯の中央を綴ちて一枚の如くなし幅を定めて兩端を裁落す。

芯の入方 芯と帯側を普通仕立のやうに釣合をとりて中央に待針を打ち、帯の縫込を二枚の

芯にて狭む、先づ下の芯を帯の縫込の下に入れて縫込の上から綴ち付け、全部綴ち終つたならば上の芯を縫込の上に重ねて周圍を針目小さく出して綴ち付ける。中央の假綴を取りて糸屑等きれいに取り去り引き返す。

其他普通仕立に同じ。



第十五章

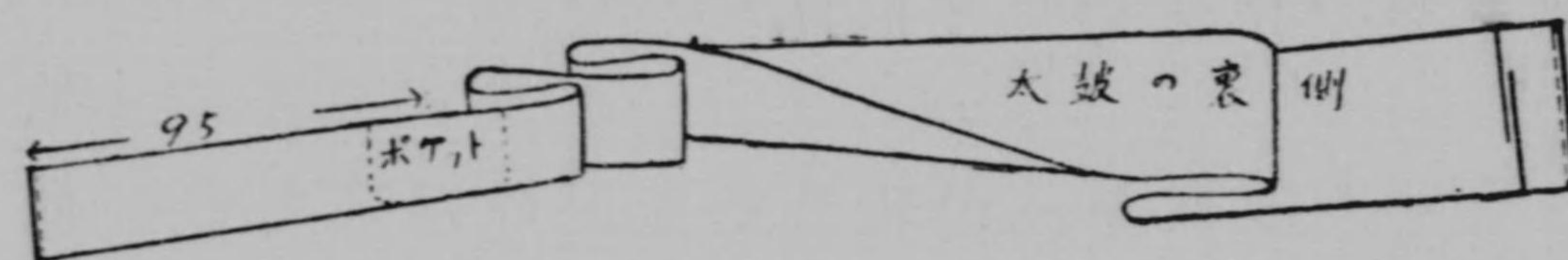
名古屋帯

近來輕裝帶又は文化帶の名稱のもとに種々工夫されてゐるが其内て最も廣く使用されてゐるものは名古屋帯である。

名古屋帯はお太鼓のところを腹合帯に仕立て他は半幅帯に仕立てたものである。

仕立上寸法

胴廻りの方		210cm 内外
お太鼓の方	一重太鼓	120cm 内外
	二重太鼓	170cm 内外



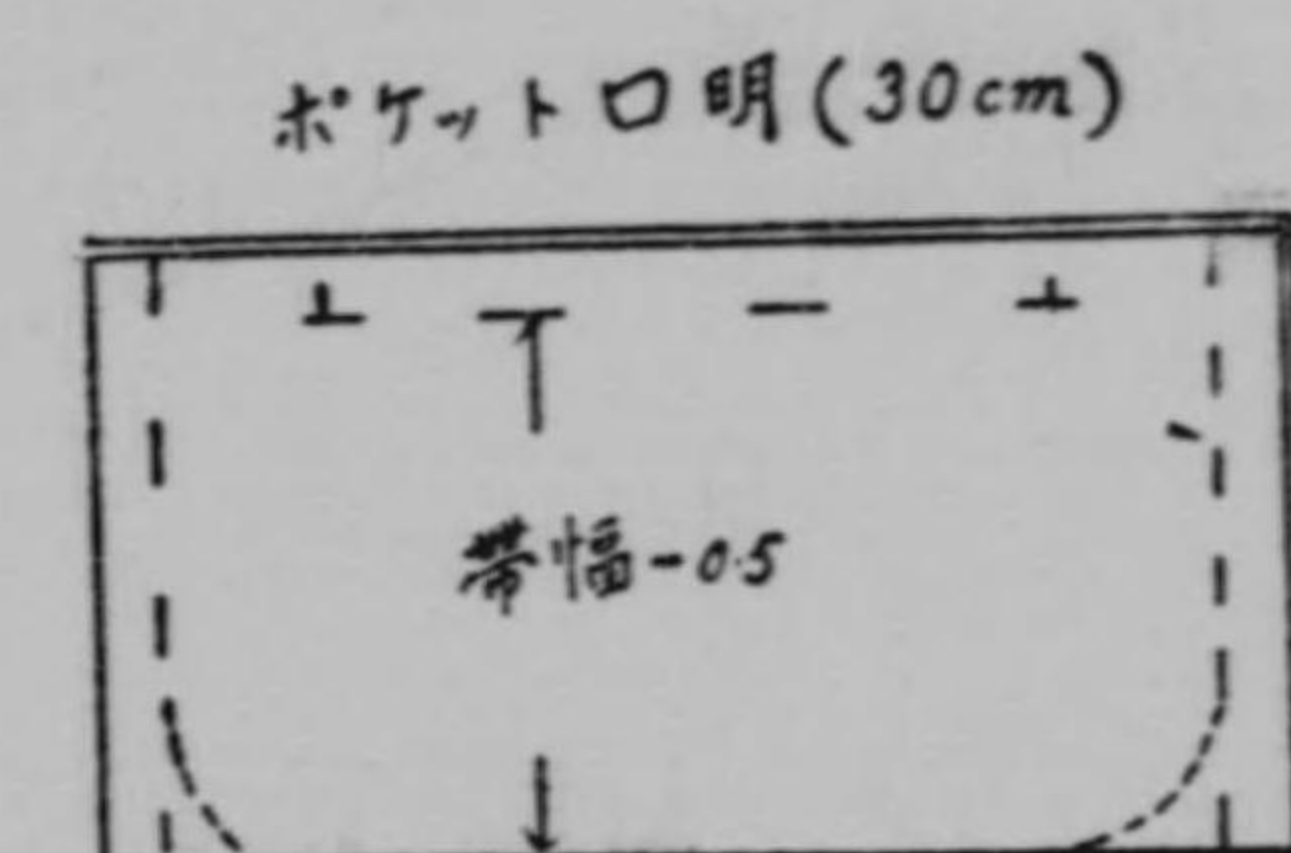
仕立方

- 1 お太鼓の處は腹合帯と同じ寸法にて縫ひ、折は丈短き方に折る。
- 2 胴廻りの方(幅狭き方)は幅を二つに折りて両側の

釣合を平らに取りて假綴をなし、帯幅の標を附ける。幅標はお太鼓の幅の二分の一を普通とすれ共、又それより廣くすることもある。

手の方より90cm内外(着用者の肥瘦によりて異なる)の所へポケット口を30cm縫残し置きて引返し口の止りまで縫ひ、平鋏を當てて折を掛ける。引返し口はお太鼓の止りより15cmとす。

- 3 圖の如くポケット布に標をなす、口明の處を帯の縫目より0.5cm外をポケット口を合せて縫ひ、折はポケット布の方へ返し、口明を揃へて兩端を縫ふ。



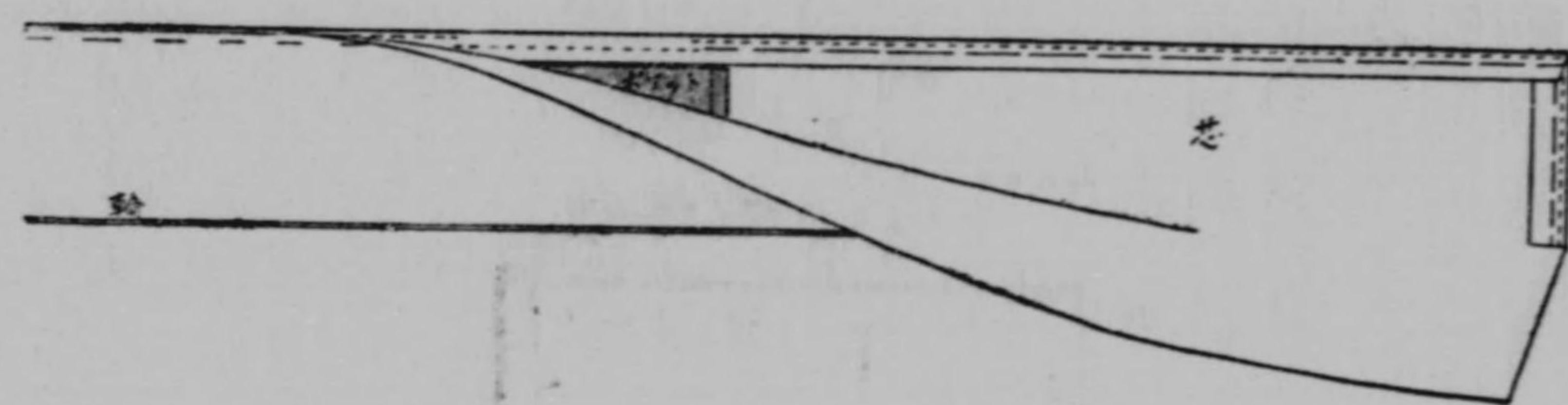
4 芯の入方

胴廻りの幅がお太鼓の幅の二分の一のときは全部同じ幅に裁切るがそれより廣いときは引返し口明の處で幅を斜にする。先づお太鼓の處へ腹合帯と同じやうに釣合をとりて芯を綴ぢ

付け、表返して躰を掛ける。上部の端を芯に綴ち付ける。

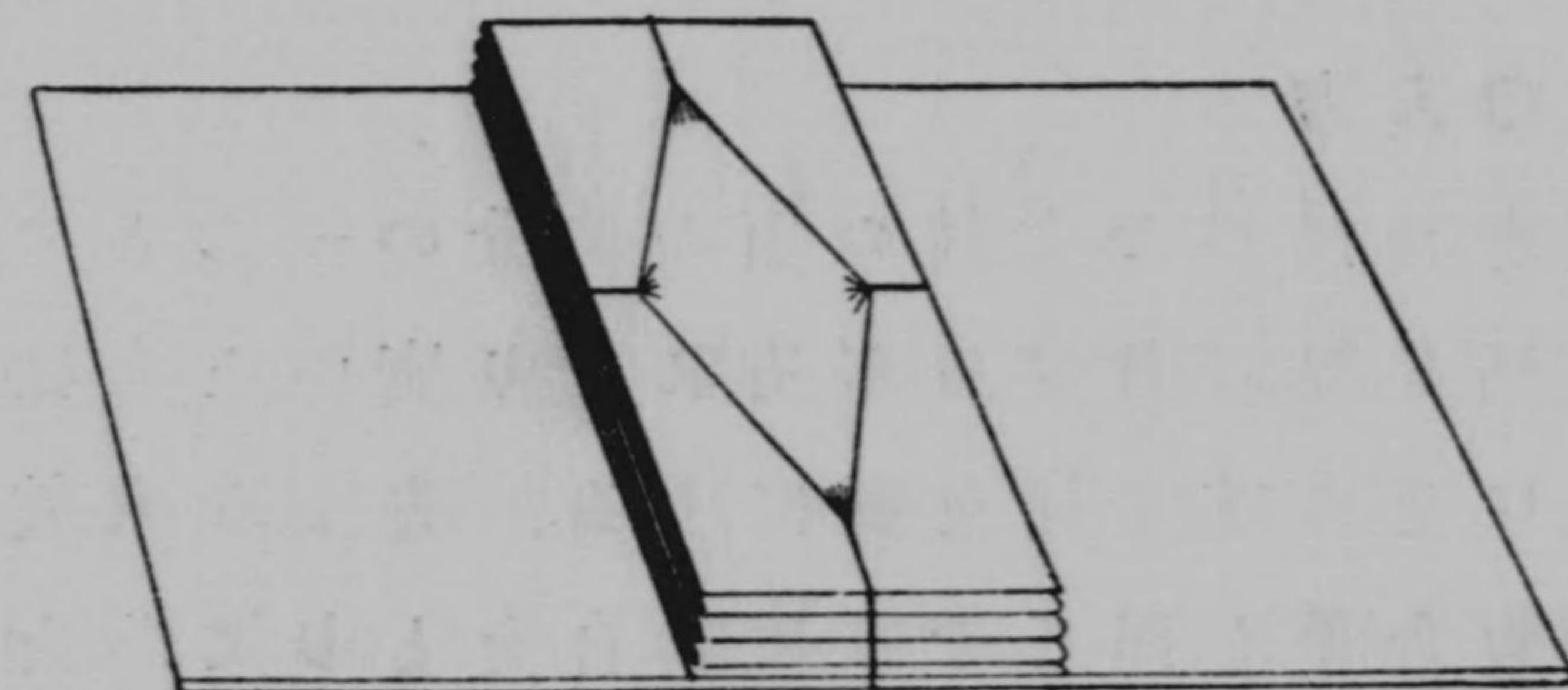
帯側の引返し口の寸法を度りて芯に合標を付けて置く。芯布をねぢれないやうに幅を二つに折りて引返し口止りの合標を合せて待針を打ち、順次釣合をと取ながら胴廻の方へ芯布を重ねて待針を打つ。圖の如く芯布で縫代及びポケットを狭むて綴ち付ける。表返して躰を掛けて引返し口を紘ける。

明廻りの芯の入れ方



5 仕上

腹合帯と同じにして圖のやうに疊む。



第十六章

丸 帶

丸帯は幅廣き織物を二つ折りにして仕立てたものである。

従來は女子の禮服用として用ひられたものであるが近來は訪問着用としても用ひられる。

地 質

厚板、唐織、綴織、糸錦、糯珍、羽二重、鹽瀬紵、紗等

一般に厚地織物は禮裝用として用ひ、染模様の如きものは主に訪問着に用ひられる。

仕 立 方

地直

地直の仕方は大體腹合帯と同じで良いが、丸帯は廣幅織物であるから品によつては片側伸び又は縮みて兩方平になつていない場合があるが、其の時は伸びて居る方に裏から少し濕氣を與へてアイロンを掛けて縮め、縮んで居るものは伸ばして同じやうに平らに地直をなす。

金銀糸を用ひてある品は變色することがあるから高熱を加へないやうに注意する。

假綴

織出しを良く合せて布のぞれぬやうに釣合を取りて待針を打ち、しつかりと躰糸にて綴ぢる。

標附

上り幅に0.4cm加へて幅標をなし(互に太い糸の織込んであるものは裁ち落す)

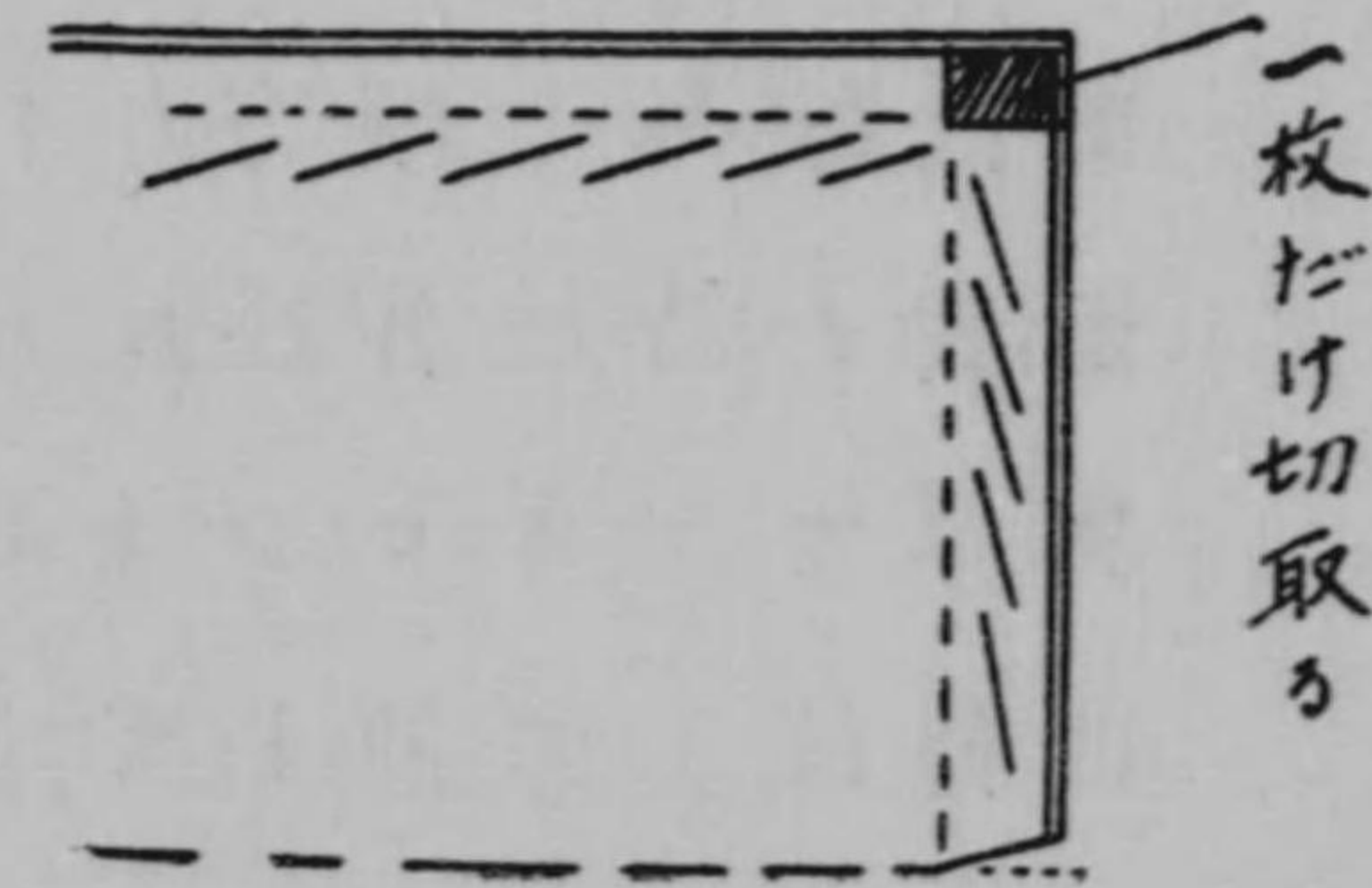
垂と手の織出しは大體同寸法にして丈の標をなす。

縫方 (普通仕立)

横及び丈の兩端20cm位は半返し縫とし、残りは非常に地厚物の場合は全部半返し縫とす。中央にて帶幅だけ縫ひ残すことは腹合帯に同じ。垂の角は一針手前で抄留をし、其の糸で幅の方も角から一針入つた處を抄留をして續けて半返しす

角の折方

特に地厚物の場合は角の縫込を、下になる方一枚だけ圖の様に切り落



して垂の方を折り、角をしつかり綴ぢ附けて置く、輪の方も帶幅より出ないやうに圖の如く浅く切つてもよい。

芯の入方、引返し、仕上とも凡て腹合帯に同じ。

上仕立

(割仕立)

地厚のものにて丁寧仕立てる時は割仕立とする。地直布の合せ方等普通仕立と同じ。

縫目を割つて仕立てるから割仕立とも云ふ。

次に普通仕立と異なる點のみを挙げる。

縫方

細目の絹縫糸にて極めて針目小さく半返し縫にし、縫目に良く平鋸を掛けて縫目を割る。垂も同じやうに縫ひ、折りは0.3cmの着せを掛けて片返しに折り角を整へる。角で縫込の厚くなる時は圖の如く又は極地厚の物は三角に切り取つて額縁に整へて躰にて綴ぢ置く。

芯の綴方

芯幅は出来上り幅に裁ち切り、割目に芯の入るやう縫込に綴ぢ附ける。釣合の取り方等其の他普通仕立に同じ。

第十七章

補綴

衣服を扱ふ上に布の不足を補ひ、又損じた處を繕ふと云ふ事は只經濟上必要であるばかりでなく節約利用の良い習慣を養ふものである。故に之に就て各種の方法を習得し、實際生活に當つて廢物を少くし衣服の保存を長くするやうに工夫して衣服の再生を計らなければならぬ。損所はなるべく小さい時に繕つて置くのが最良く其の品も一層永く使用に堪える、又洋服類は適當な補接によりて新らしいものと見られるやうになる。

補綴の注意

- 1 布の不足を補ふ接方と損所を繕ふ繼方とあり、何れも目立たぬ様にしなければならぬが實用を缺いてはいけぬ。
- 2 針と糸
 - 針 絹布 絹繼針又は絹針
 - 木綿 木綿繼針又は紬針

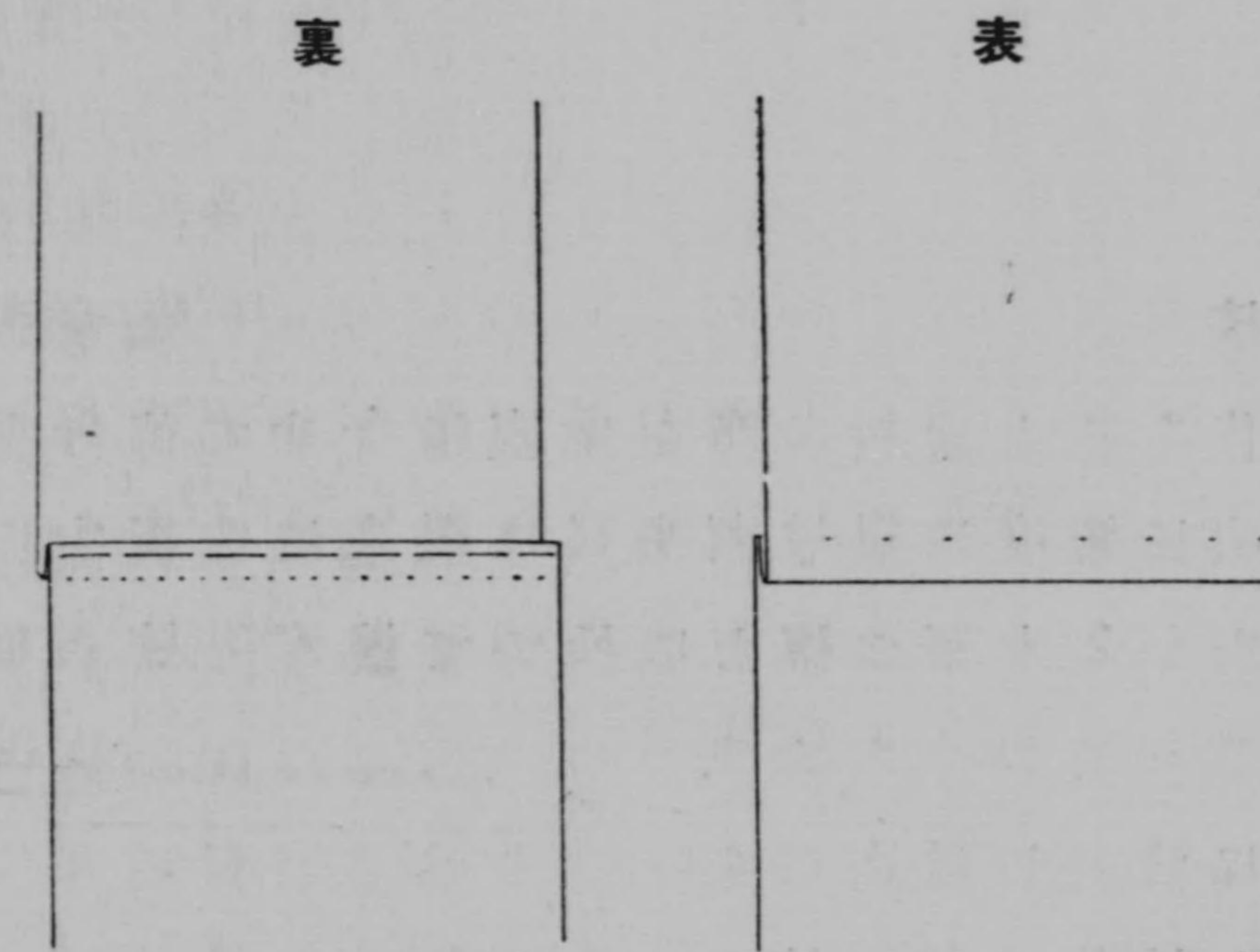
糸 絹布 羽二重又は共布の解(ほつ)し糸
木綿 繼糸

繼ぎ方には大體以上のものを用ふるが、接ぎ合せる場合は其の地質と部分とによりて適當に丈夫な糸を用ひなければならぬ。

接方

1 片返接 (裏地類)

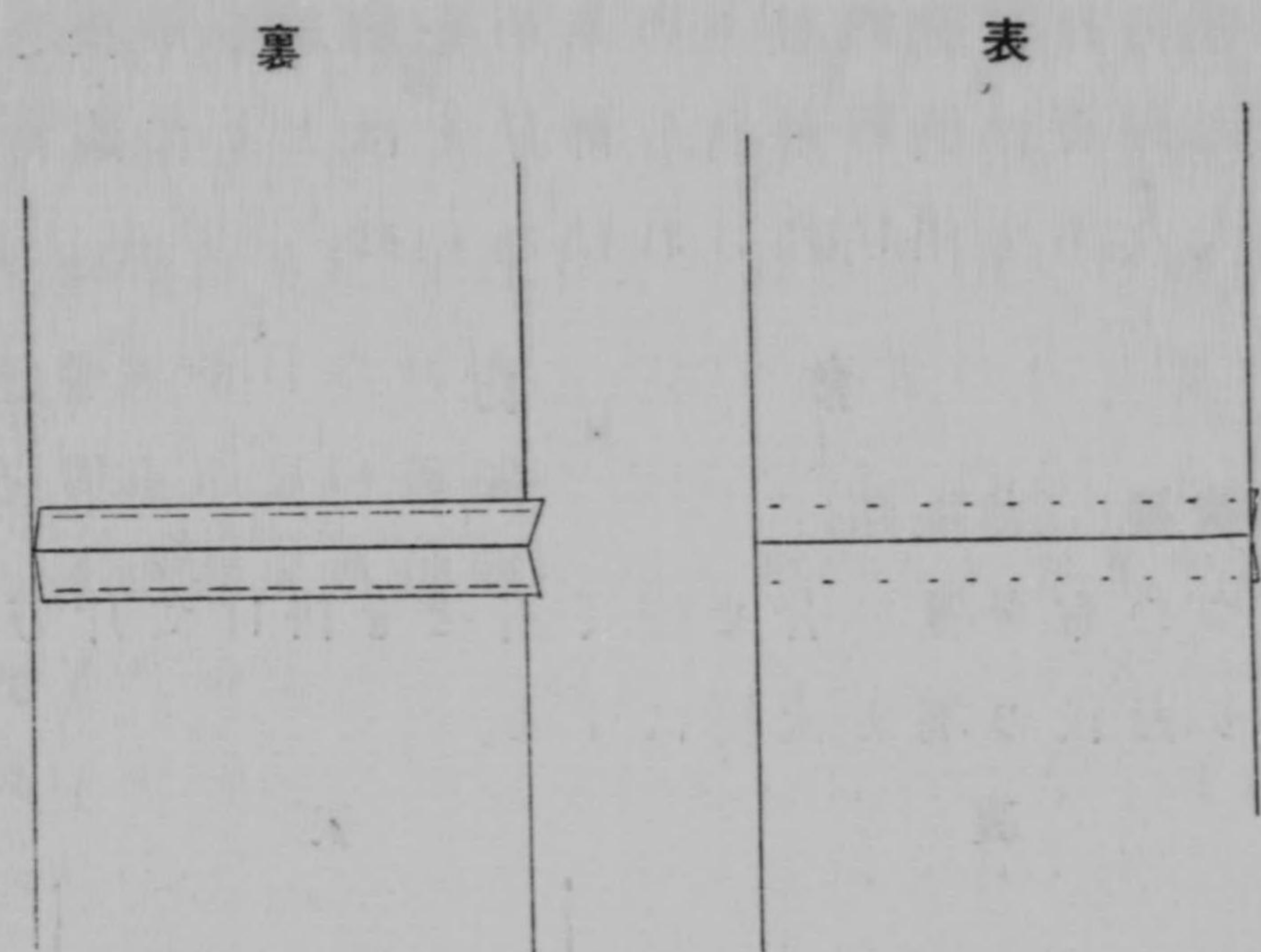
二つの布を縫ひ合せ浅く着せを掛けて片方に折り、縫代の端を伏縫にする。



2 割接

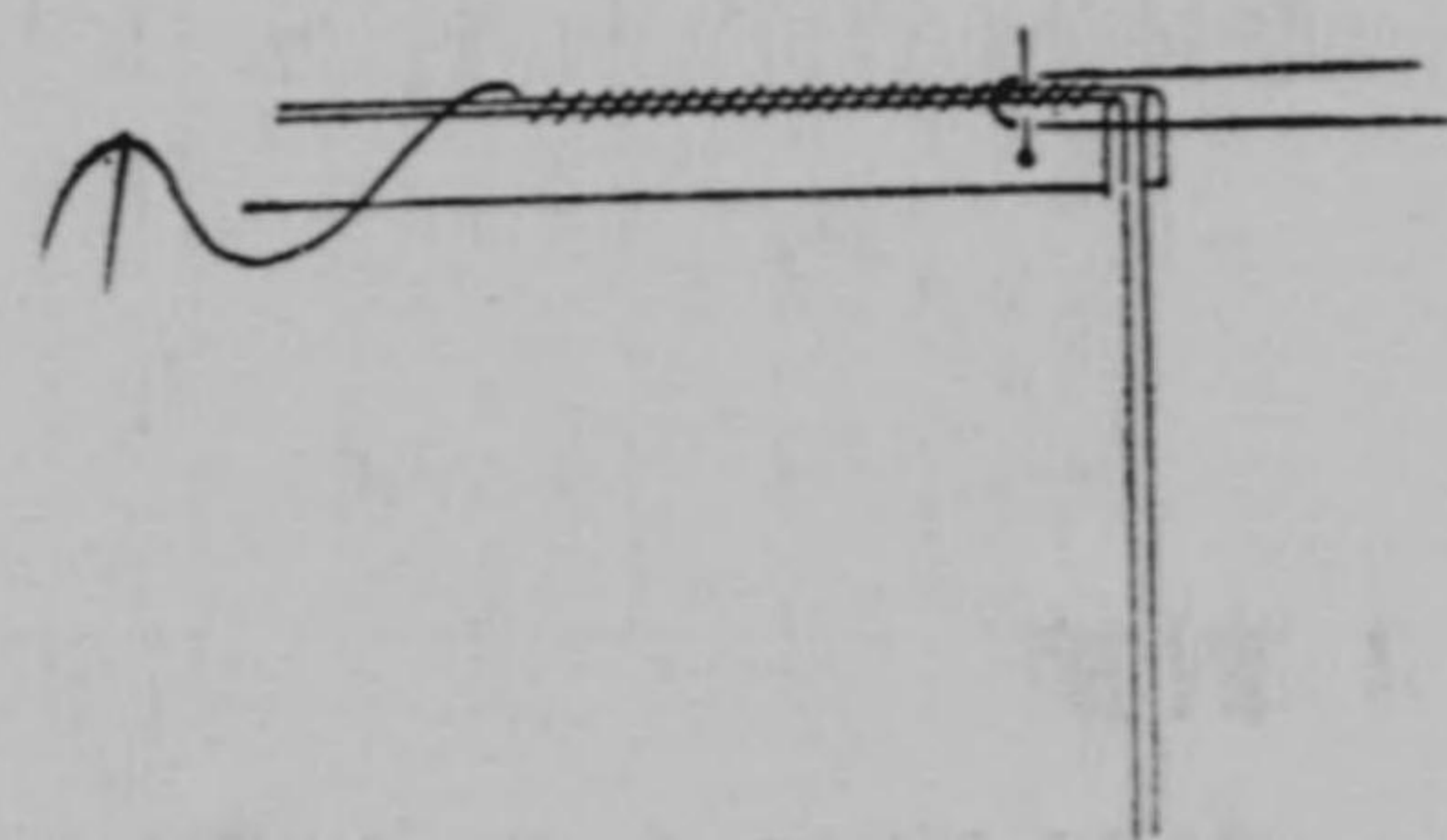
布目縞目を良く合せて、針目細かく縫ひ合せ、縫

目を割りて鋏を掛ける。裏地の場合は圖の如く縫代を伏縫にする。

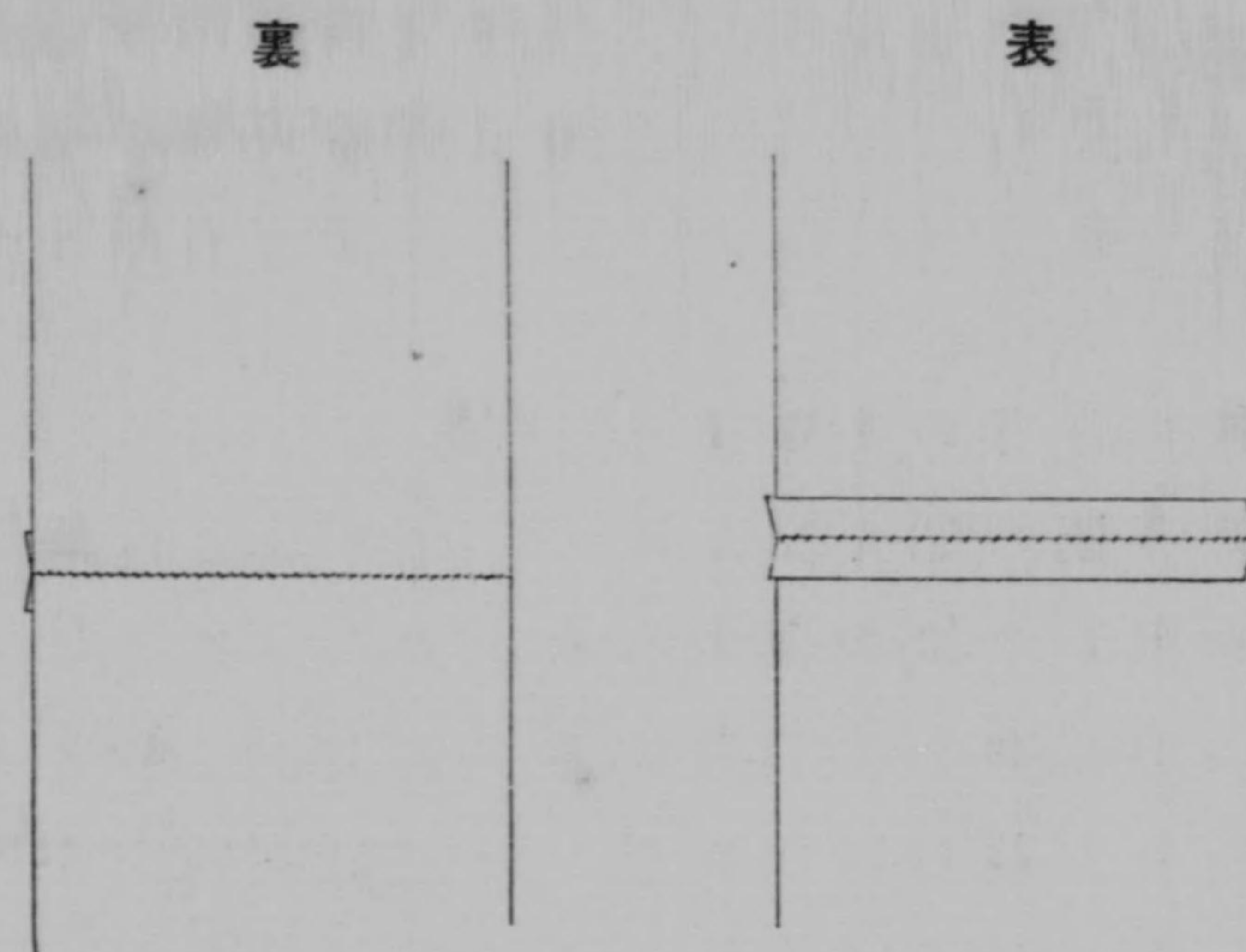


3 掛接

縫代を正しく折り、布を中表に合せて待針を打ち、次に紵臺に掛け、割糸又は繼糸にて折山の布目を1, 2本ずつ細かに抄つて接ぐ。接ぎ目をなるべく目立たぬやうにするには布目を通し、縞物は其の縞の際、又太糸の交つてゐる場合は太糸の處で



接ぐと良い、此接方は紐類の如く引張られるものを接ぎ合わせる時にする方法である。

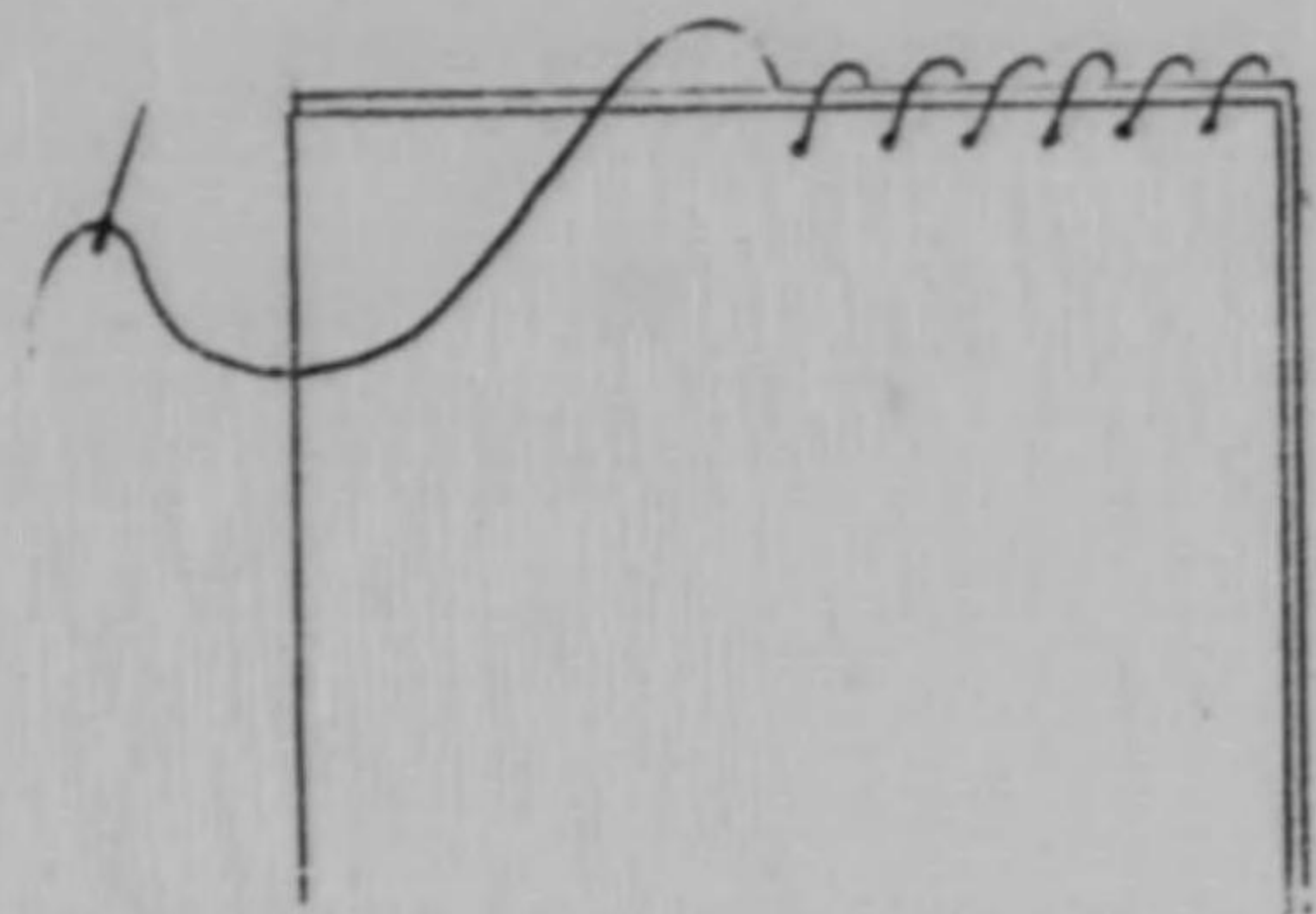


4 突合接

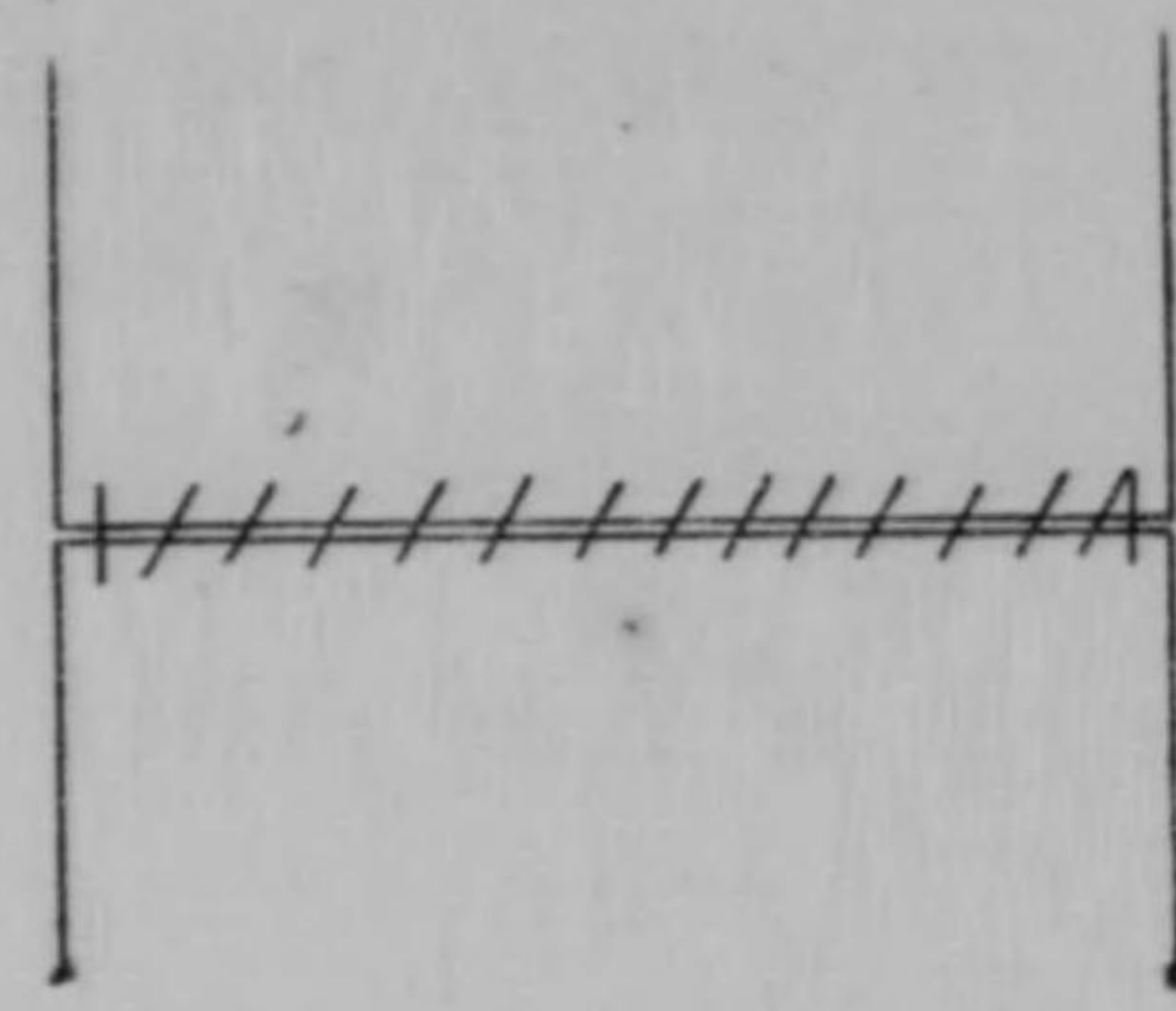
此方法は多く帯芯或は紐芯の様な地厚の布を接ぐ場合と、厚地の毛織物を接ぐ場合とに用ひられる。芯地を接ぐ場合糸の掛け方に二つの仕方がある。

(1) 布の裁目を合せて0.4cmの深さに、針目を0.4cmの間隔を置いて圖の如く糸を緩めて巻縫と同じやうになす、布を開くと2圖のやうに突き合せとなる。

1 圖



2 圖 (布を開いた處)

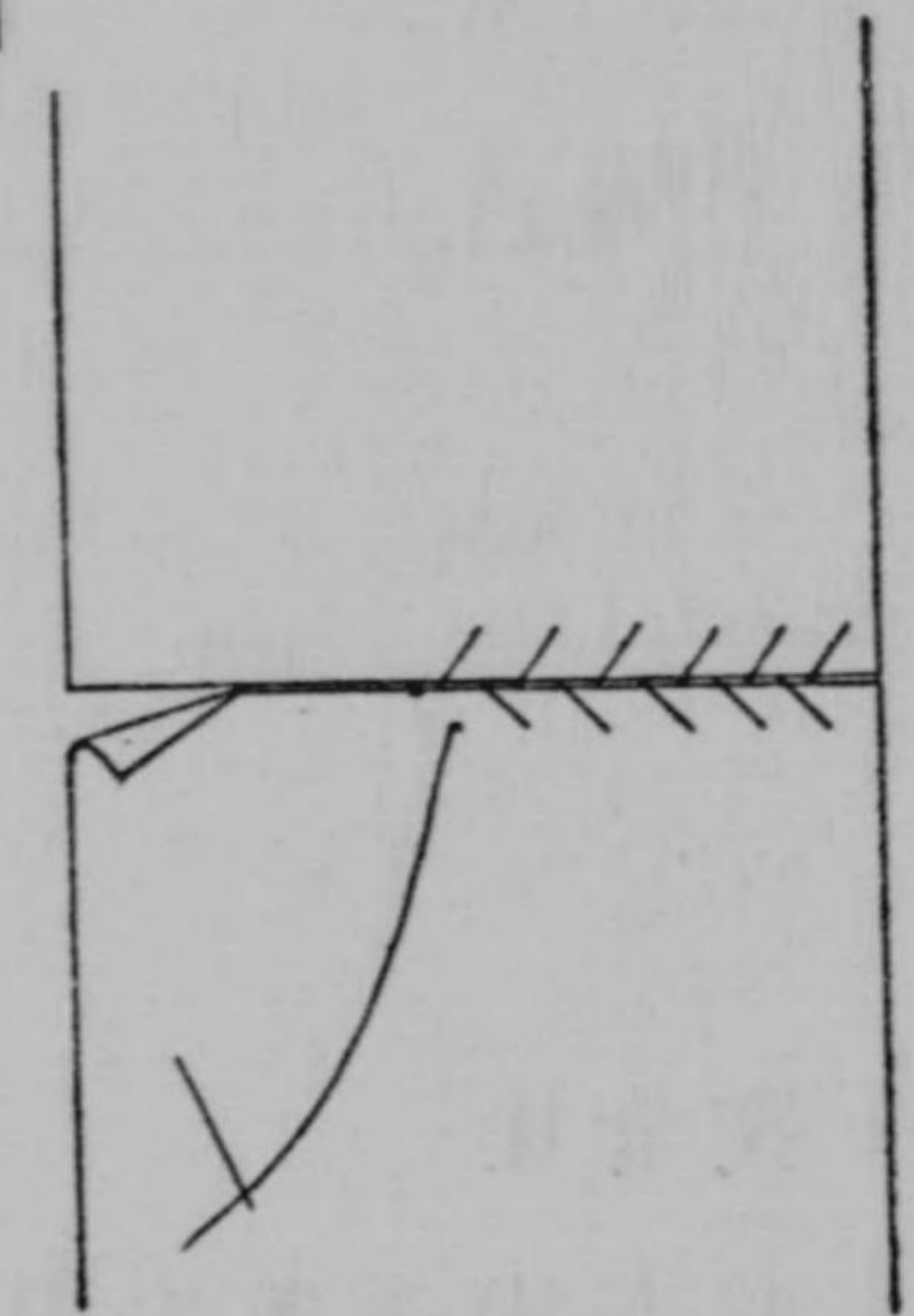


(2)裁目を其のまま突き合せ、3 圖の如く交互に針を出して接ぎ合す。

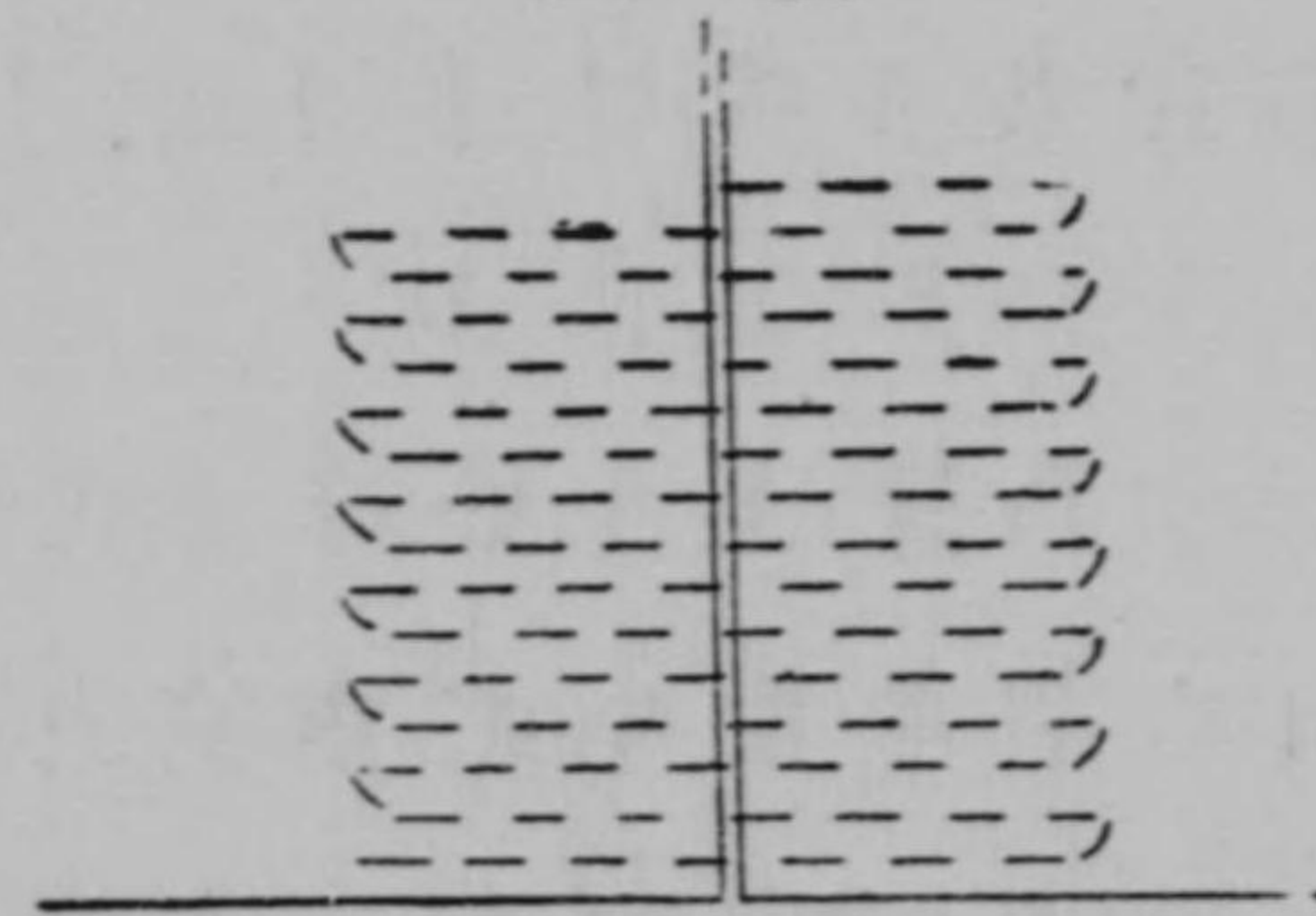
厚地の毛織物を接ぐ場合、布を正しく裁ち切り、突き合せて、裏から 4 圖の如く刺す、地が厚いから針目を表に出さぬやうに布の厚

みの中を抄ふ。合せ目は圖のやうに糸を掛ける。

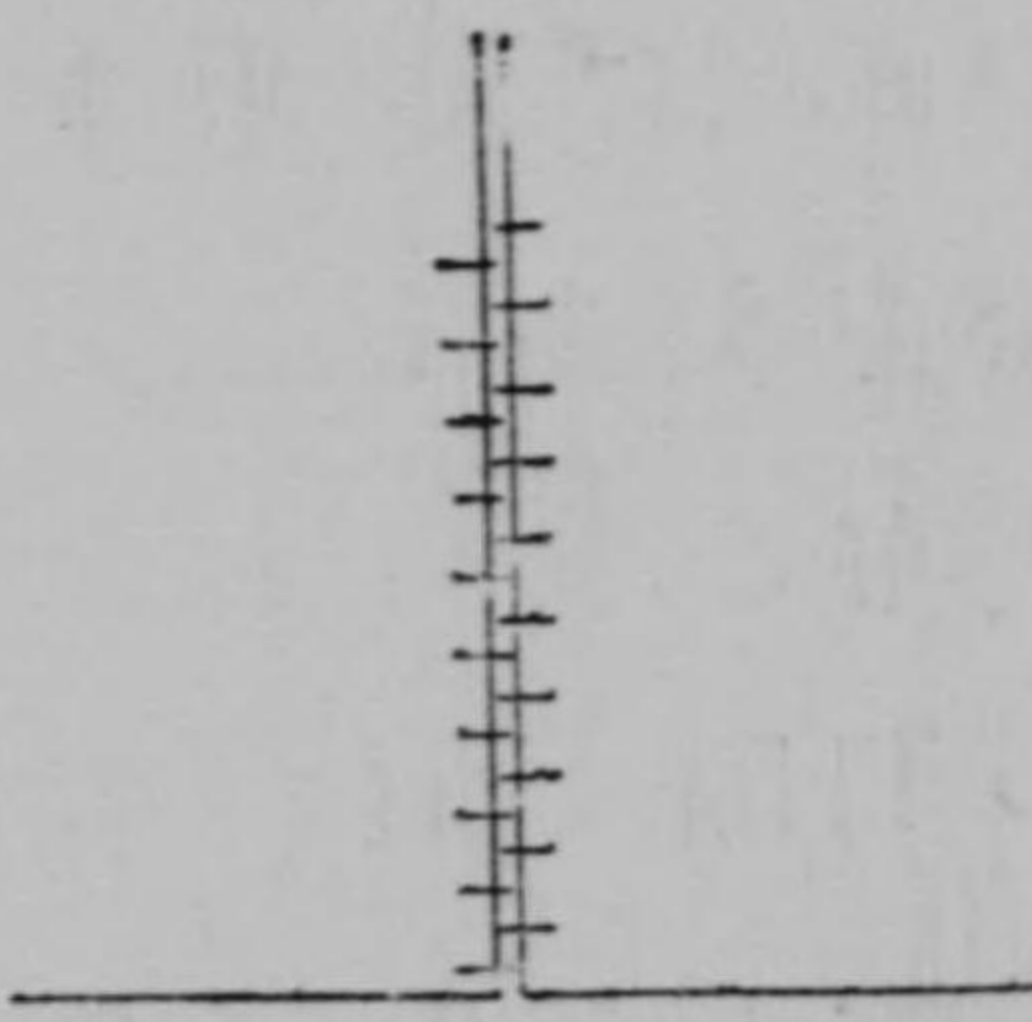
3 圖



4 圖 (裏)



4 圖 (表)

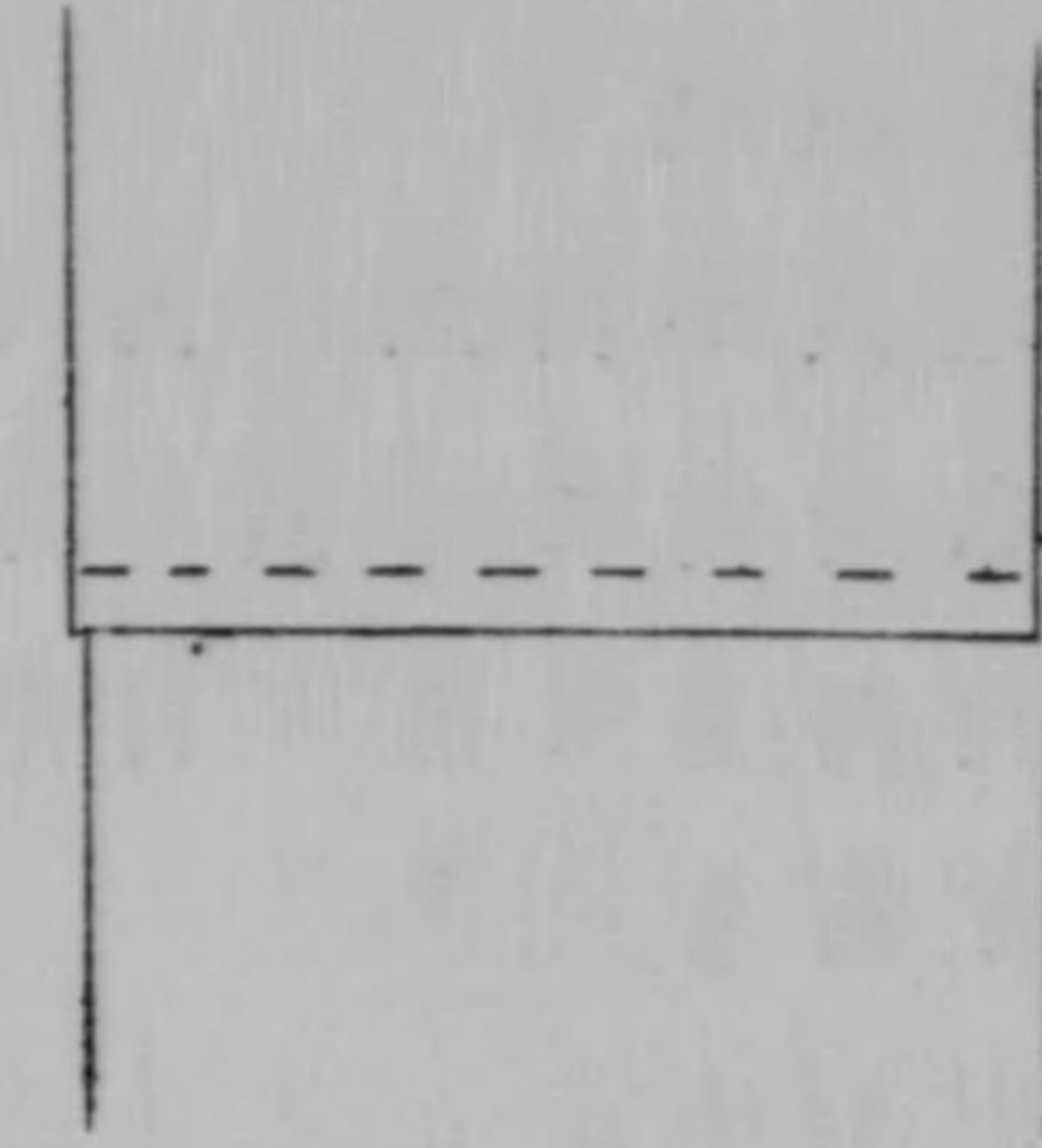


合せ目の糸のかけ方

尙此の接ぎ方は裏地衿肩明の裂けた處にも用ふ。

5 重接

裁目を其のまま 1cm 位重ねて串縫にする。用ひる場合は突合接芯地の場合と同じ。

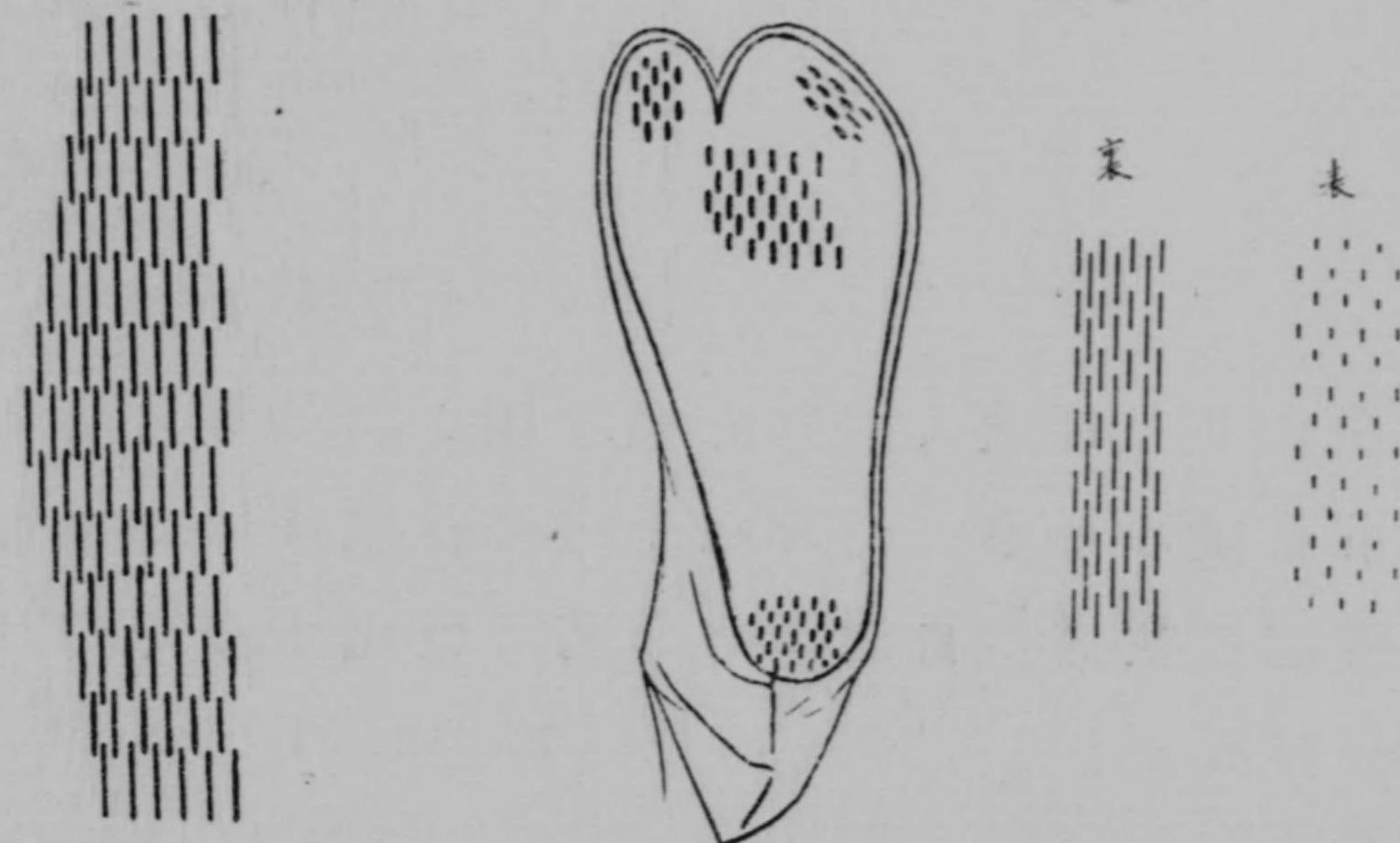


縫 方

1 刺縫

布がまだ孔にならない程度に弱つた處を其のまま刺して丈夫にする方法である。

刺方は經糸に副つて裏表同じ針目に交互に出して刺す時と、裏に大きく表に小針を出して刺す方法とがある。足袋の縫方には多く前者を用ふ。



裏表同じ

2 色紙繼

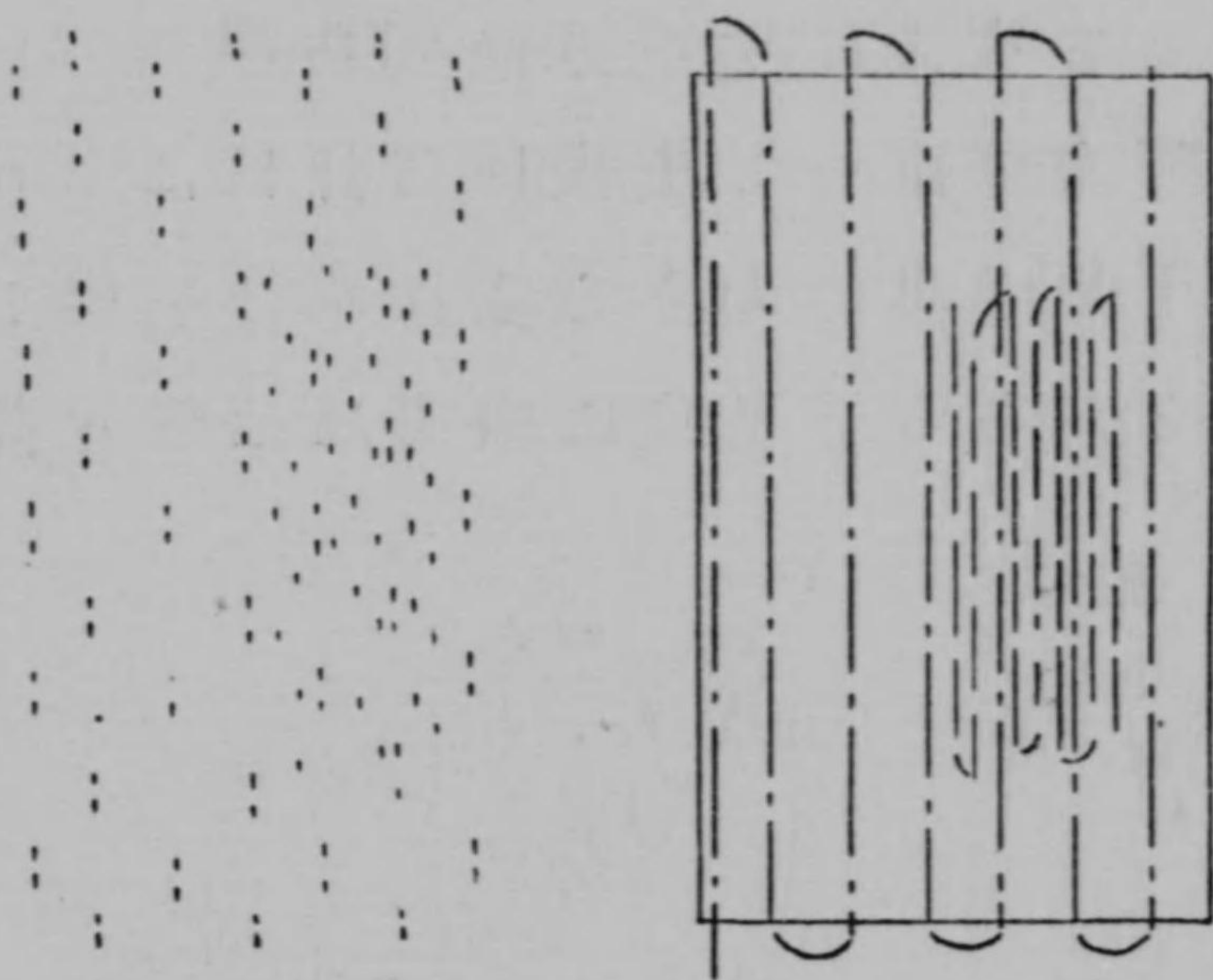
地質が自然に薄くなつて弱つた處に裏から當布を當てて損じ方の多少に依りて二目落し・三目落し又は一目落しに刺して丈夫にする方法である。

當布は表と共布或は同色で薄地の布を損じた部分より大きく當てて假縫をする。

糸の掛け方は經糸に並行に(裏)圖の如く當布の

表

裏

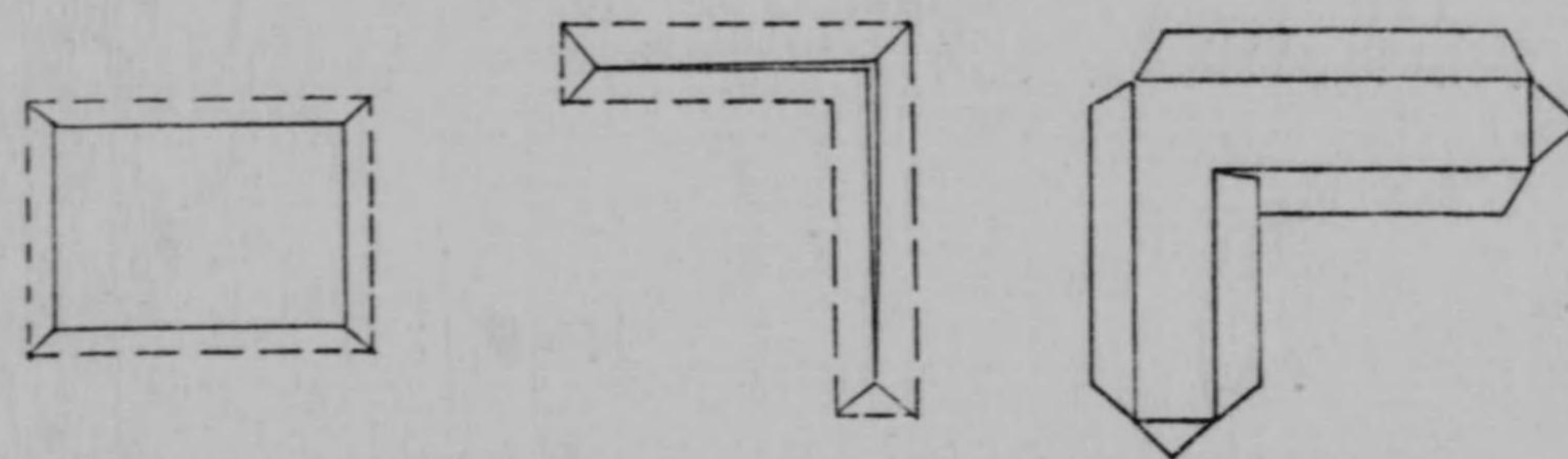


端にて一針渡して押え、順次刺し、行の變る毎に糸を緩めて糸のつれぬやうに注意する。袖形、膝頭、居敷等の自然に布の弱つた處に多く用ひられる。

3 穴繼

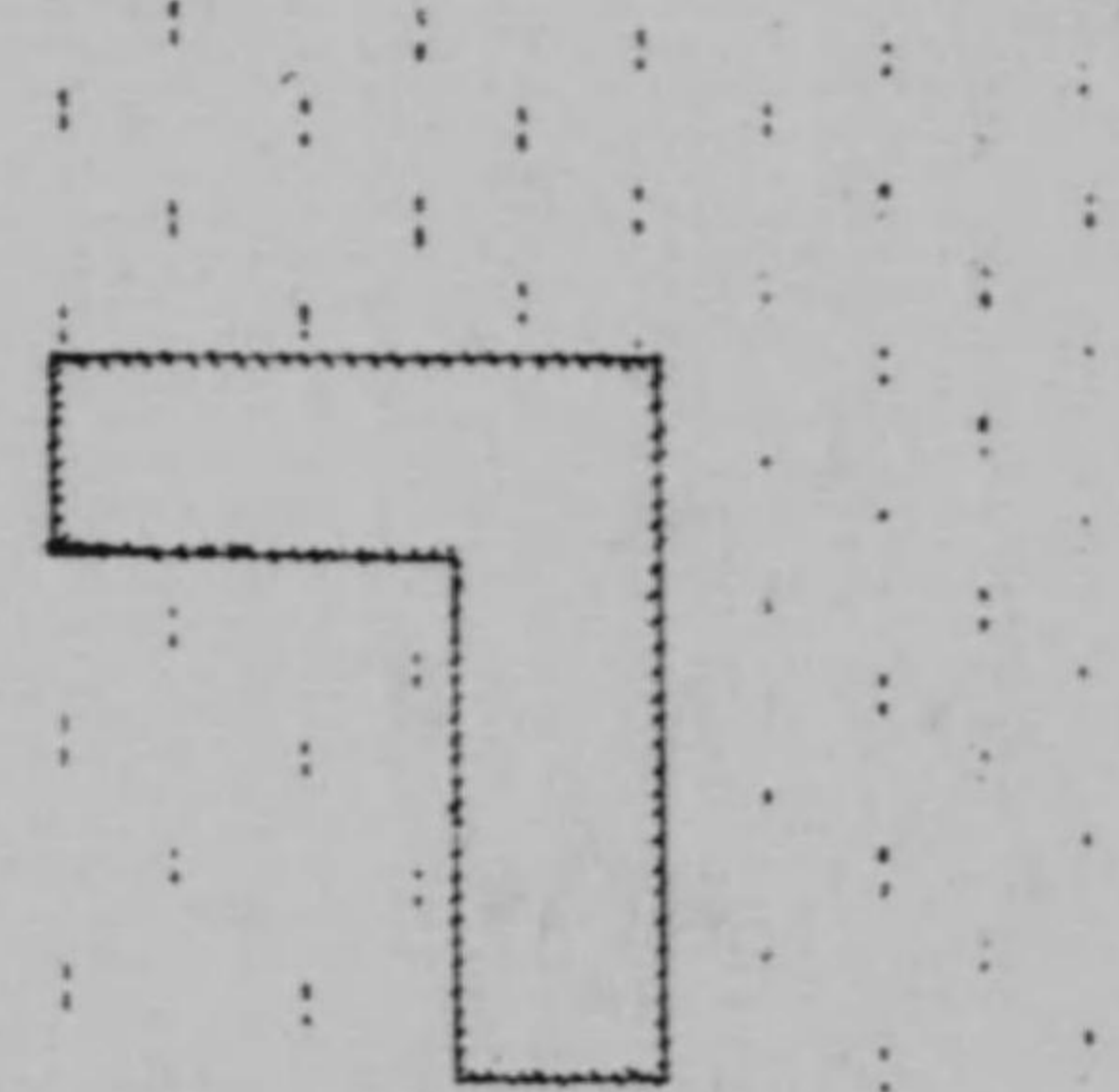
穴の明いた時に繕ふ方法で其の形は損じ様に依りて角形・鉤形・圓形等種々の形となるが何れも目立たぬやうに繕はなければならない。

角形・鉤形は比較的に目立たないが圓形に繼ぐことは布目が合せ難く且目立ち易いから特に注意しなくてはならぬ。繼ぐ方法は先づ穴の明いた部分に切込を入れて端を折り、適宜に形を整へて裏から釧を掛けて置く。



當布は損じ方の多少に依りて相違する。即周圍の弱りしものは相當大きく裁ちて、布目や縞目を合せて躰で押えて置く。絹布ならば羽二重糸、木綿ならば繼糸にて表より穴の周圍を細かに經

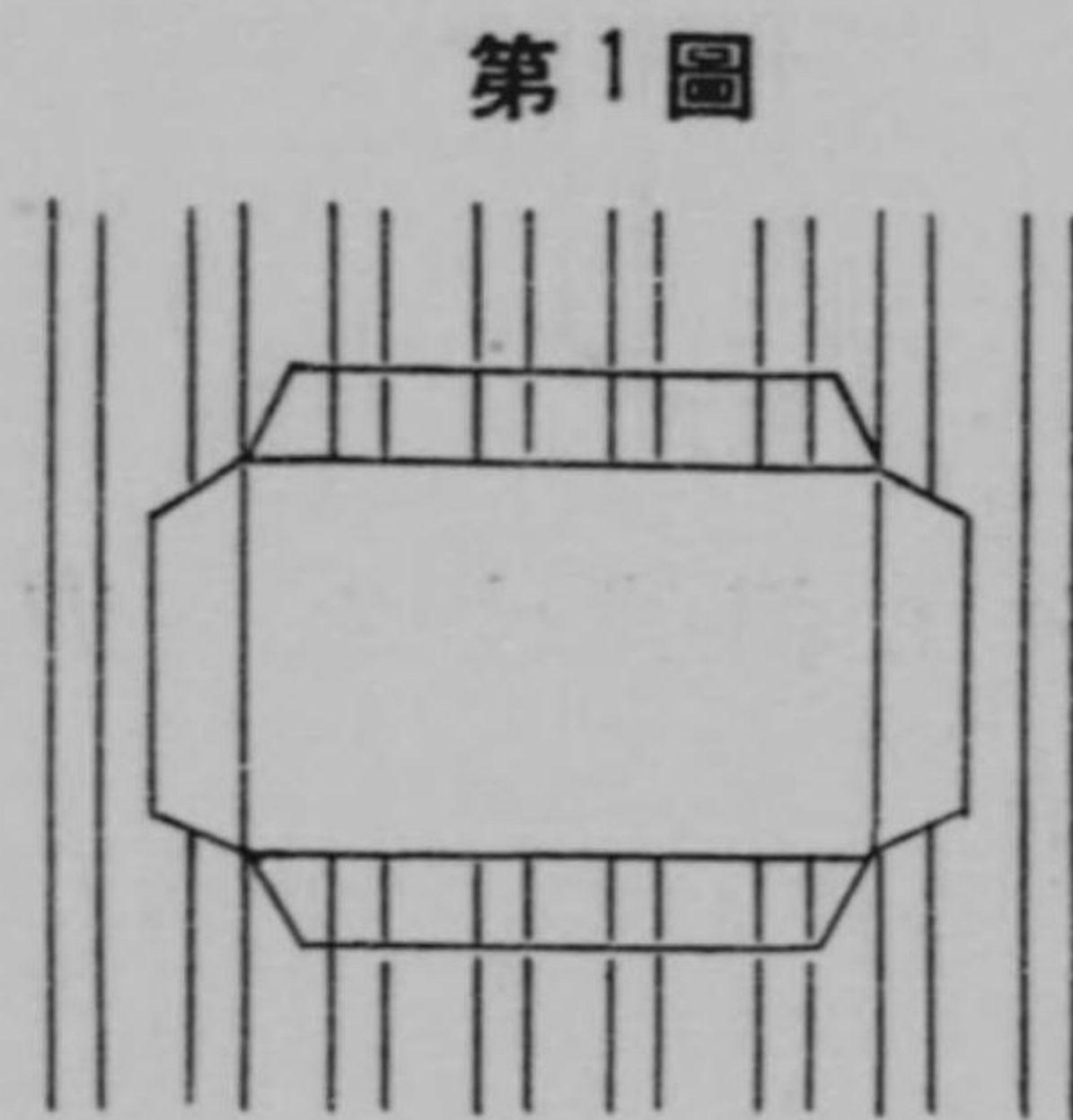
表



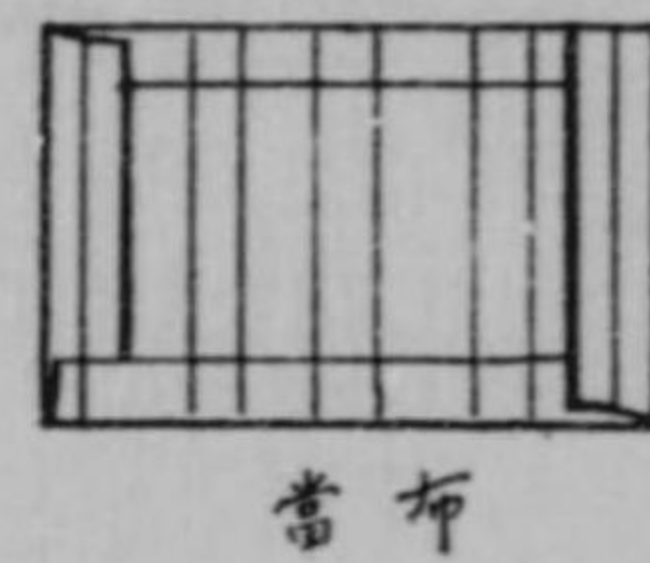
り付ける。當布の周圍を圖の如く色紙繼に刺す。燒穴・鉤裂の如きは當布の周圍を表に小針を出して綴ち附けて置く。

4 罫入繼

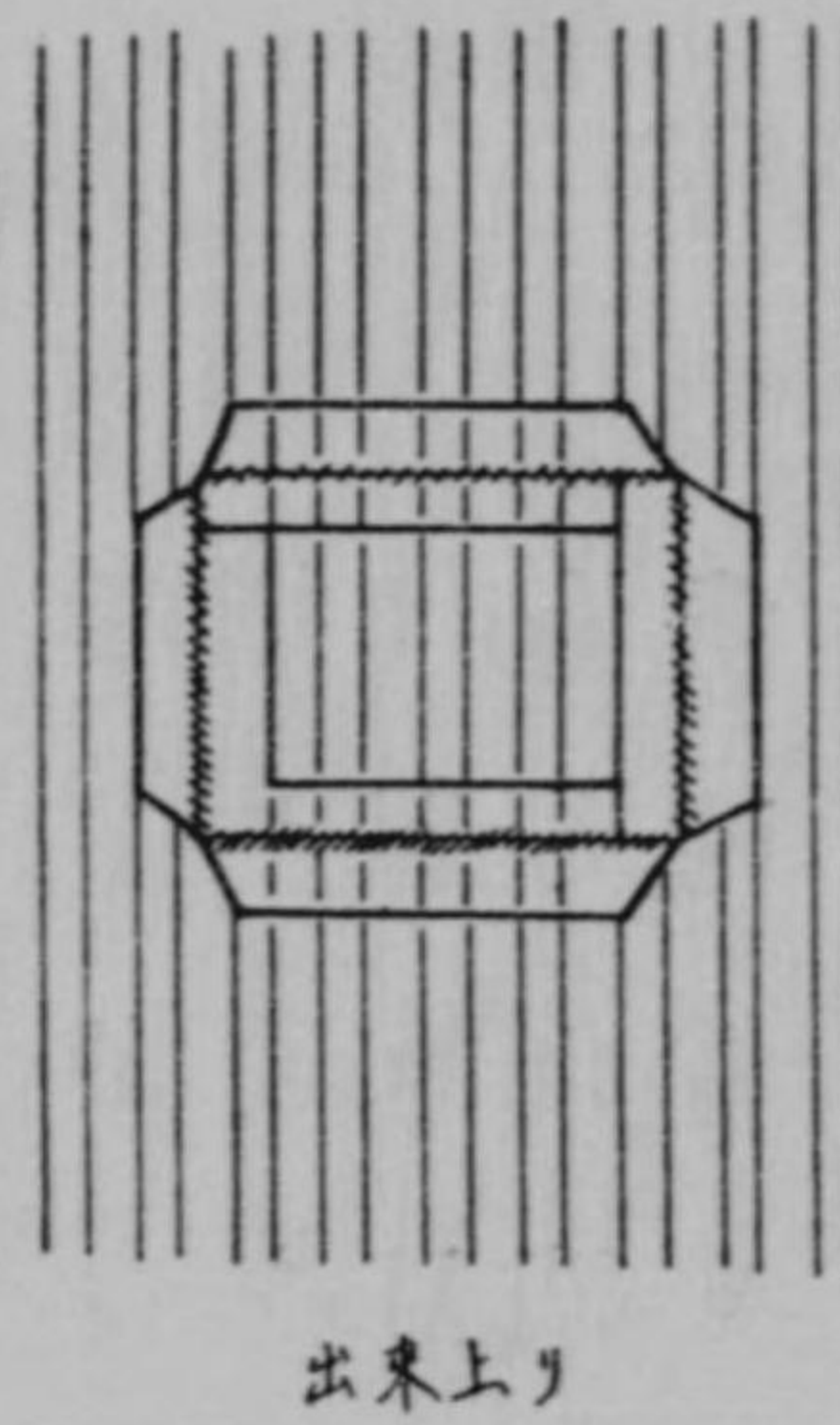
穴繼の如く燒穴或は鉤裂等を四角に切り取り、同布の布目及び縞目を合せたるものを角形の大きさに繼代を加へて用布を裁ち、第1圖の如く裏より乗せて鋏にて抑へ、掛接の方法にて周圍を出來上圖の如く繼ぎ合はす方法である。



第2圖



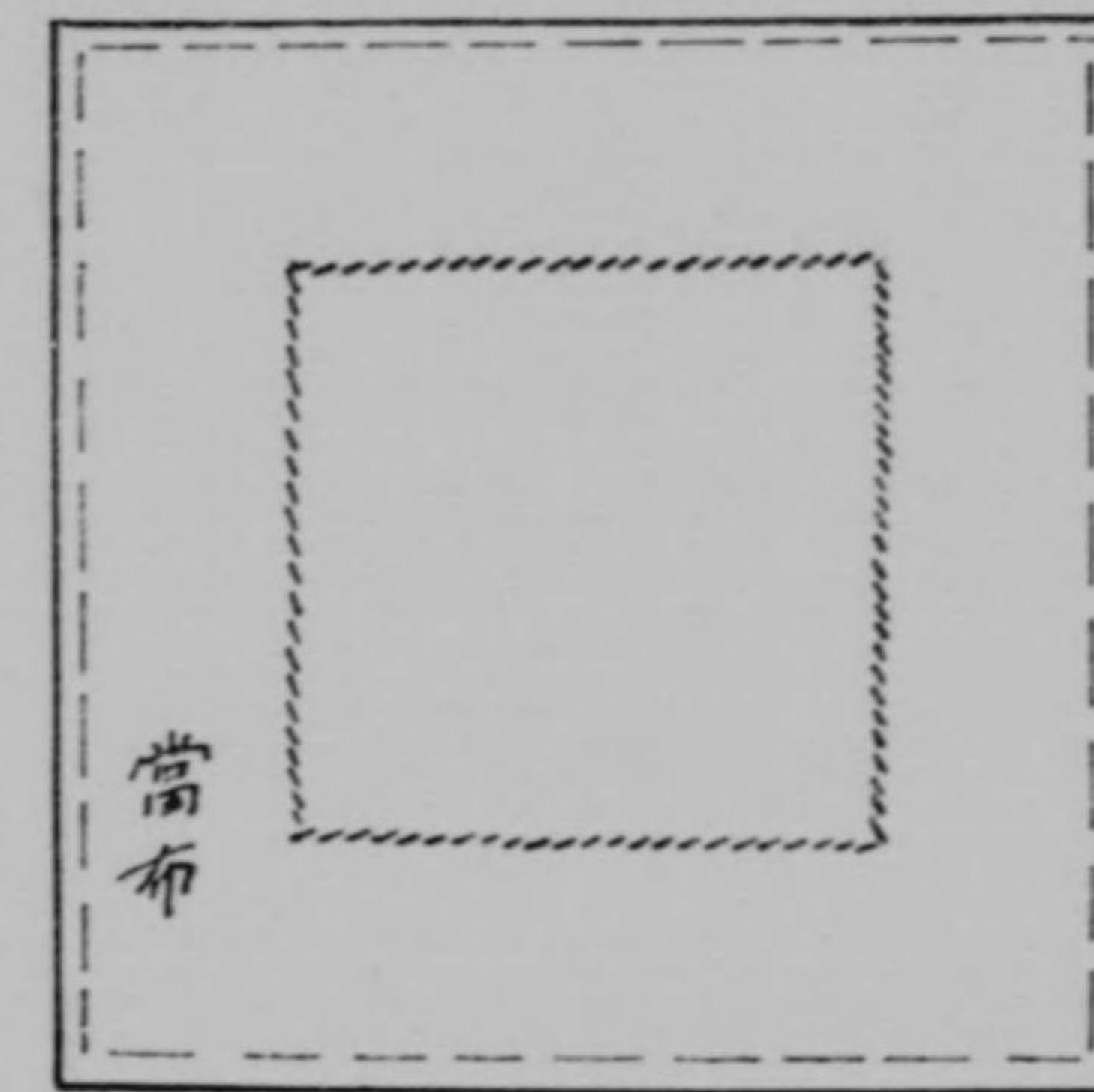
第3圖



5 被繼

表から當布を被せて損所を覆ふ方法である。先づ當布の廻りを縫代だけ折りて、表の損所に當て、廻りを紵け附ける。主に絹布裏身八つ口、振り布、袖附等裏布の繼ぎ方に用ふ。

裏



昭和十二年六月五日 印刷

昭和十二年六月十日 發行

中等學校用
裁縫要義 上卷

定價 金一圓五十錢

著者 渡邊女學校裁縫研究會
東京女子專門學校

發行者 東京市本郷區湯島六丁目廿一番地
渡邊女學校出版部
代表者 渡邊 滋

印刷者 東京市澁橋區西大久保三ノ一〇六番地
山口 誠 造

印刷所 東京市澁橋區西大久保三ノ一〇六番地
大和屋活版印刷所

東京市本郷區湯島

發行所 渡邊女學校出版部

電話小石川(85) { 八〇五二番
八〇五三番
八〇五四番
振替口座東京一九八二〇番

Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several lines and appears to be a list or a series of entries.

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several lines and appears to be a list or a series of entries.

